㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第231集

# 下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡

北陸新幹線地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

1998

群馬県教育委員会
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第231集

# 下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡

しもしばてんじんいせき　しもしばかみたやいせき

北陸新幹線地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

1998

群馬県教育委員会
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

下芝天神遺跡３区器物集積遺構

同上　３群中央部分

下芝天神遺跡３区ＦＡ下畠と泥流下畠

同　ＦＡをすき込んだ畠

# 序

北陸新幹線建設事業は、平成９年10月１日、長野行新幹線として東京―長野間に開通しました。本報告書では、この建設工事に伴う事前の埋蔵文化財調査として、平成５～６年の間、県教育委員会からの委託を受けて、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した下芝天神遺跡（旧名：下芝五反田Ⅱ、Ⅲ遺跡）と下芝上田屋遺跡（旧名：下芝五反田Ⅳ遺跡）について報告致します。

調査の特徴は、榛名山の南麓に厚く堆積する泥流層下で、幅12㍍に限定された狭い軌道敷地内の深所調査と出水対策とにあり、発掘中にはＨ鋼による掘削面の崩落対策など、専門的なコンサルタントによる安全対策が必要となり、当事業団としてもかつてない万全の体制で臨んだことにあります。

このように、火山県という特有の地理的難条件を克服したその苦心に呼応するかのように、調査で明らかになった成果には、泥流によって被われた目を見張るばかりの保存状態のよい器物集積があり、調査は報いられたのであります。

これはひとえに、日本鉄道建設公団、県教育委員会文化財保護課、箕郷町教育委員会の尽力の御賜であり、本書の刊行し際し、深甚の謝意を表し、本書がいくばくかでも、地域の歴史理解の一助となることを念じつつ、報告書の序とするものです。

平成10年３月25日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小寺弘之

例言

1　本書は、北陸新幹線建設に伴う事前調査として、平成５年度から平成６年度にかけて実施した下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡の発掘調査報告書である。なお、下芝天神遺跡は従来下芝五反田Ⅱ遺跡及び下芝五反田Ⅲ遺跡、下芝上田屋遺跡は下芝五反田Ⅳ遺跡としていたものに当たる。
遺跡名変更の経緯については、本書Ⅰ－１を参照されたい。

2　遺跡の所在地は以下の通りである
下芝天神遺跡　　群馬県群馬郡箕郷町大字下芝字天神・五反田・薬師
下芝上田屋遺跡　群馬県群馬郡箕郷町大字下芝字上田屋・東龍ノ宮・西龍ノ宮

3　発掘調査は、北陸新幹線建設に伴う事前調査として、群馬県教育委員会を通じ、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が日本鉄道建設公団の委託を受けて実施した。

4　発掘調査期間は、平成５年７月１日～平成６年３月31日・平成６年７月１日～同年11月30日（下芝天神遺跡）及び平成５年10月16日～平成５年12月24日（下芝上田屋遺跡）である。

5　発掘調査にかかる事業組織は以下の通りである。
事務担当　中村英一　近藤　功　佐藤　勉　蜂巣　実　神保侑史　斉藤俊一　真下高幸　小渕　淳　国定　均　笠原秀樹　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏　船津　茂　高橋定義　松下　登　大沢友次　吉田恵子　並木綾子　今井とも子　角田みづほ　松井美智子　塩浦ひろみ　内山俊子　星野美智子　羽鳥京子　菅原淑子　若田　誠
発掘担当　下芝天神遺跡　　松田猛　　神谷佳明　関根慎二　山本光明　横山千晶
下芝上田屋遺跡　木津博明　飯森康広　橋本　淳

6　資料の整理及び報告書の刊行は、群馬県教育委員会の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

7　整理及び報告書作成期間は平成７年４月１日～平成10年３月31日である。

8　整理及び報告書刊行にかかる事業組織は以下の通りである。
事務担当　中村英一　菅野　清　近藤　功　原田恒弘　蜂巣　実　渡辺　健　赤山容造　神保侑史　真下高幸　小渕　淳　国定　均　笠原秀樹　井上　剛　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏　宮崎忠司　岡島伸昌　大沢友次　吉田恵子　並木綾子　今井とも子　松井美智子　内山俊子　星野美智子　羽鳥京子　菅原淑子　若田　誠　山口陽子　佐藤美佐子　本間久美子　北原かおり　安藤友美　狩野真子
整理担当　山本光明　洞口正史
整理補助　鹿沼敏子　手塚ふみ江　嶋崎しづ子　阿部準恵　松岡陽子　小渕トモ子　新井雅子

9　本書に掲載された写真のうち、遺構写真については発掘調査担当者が、遺物写真については佐藤元彦が撮影した。

10　特殊遺物保存処理は岡　邦一・土橋まりり・小村浩一・小沼恵子が行った。

11　遺構測図の一部及び空中写真撮影については技研測量株式会社・ＩＣ技研株式会社、図面トレースについては株式会社測研に委託した。

12　本文の執筆は下記により分担して行った。
Ⅰ－１　真下高幸・洞口正史・横山千晶　　－２　山本光明・洞口正史　　－３　洞口正史
Ⅱ－１～３　山本光明・洞口正史　　－４　洞口正史
Ⅲ・Ⅳ　　洞口正史
Ⅴ－１～３　洞口正史　　４　坂口　一
Ⅵ　古墳研究所

13　本遺跡にかかる出土遺物・実測図面・写真等の資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

14　本遺跡の発掘調査・整理事業及び本書の作成にあたって、当事業団の同僚諸氏及び下記の諸氏、諸機関よりご助言、ご協力を頂いた。
記して感謝の意を表したい。
奈良国立文化財研究所　群馬県教育委員会　高崎市教育委員会　箕郷町教育委員会　松本市教育委員会
頭永光一　五十嵐信　石井克己　石川克博　石川正之助　石野博信　梅沢重昭　大塚昌彦　鬼形芳夫　神戸聖諦　加部二生　小林三郎
近藤義雄　早田　勉　田口一郎　外山政子　土生田純生　早川由紀夫　前原　豊　三浦京子　森田秀策　若狭　徹

15　本書の編集は洞口が行った。

凡例

1　調査区・遺構の名称は、原則として発掘調査時の名称を継承したが、整理作業過程で改称あるいは新たに名称を付したものがある。

2　本調査においては、北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査事業関連遺跡で統一的に用いた調査区及び区画呼称を使用している。この詳細については、『行力春名社遺跡　北陸新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集　御経塚県埋蔵文化財調査事業団調査報告第183集』（以下『行力春名社遺跡報告書』）第1章第2節－2を参照されたい。

3　遺物番号については、整理作業において全てつけなおした。

4　遺構図中の方位は国土座標の北を示す。

5　縮尺は以下を原則とし、例外については図中に縮尺を記した。

遺構　竪穴住居・掘立柱建物　1：60　土坑　1：40　溝　1：60

遺物　土器・石器　1：3・1：4・1：6　石製模造品等　1：1・1：2

6　土層断面図の記載における土色は『新版標準土色帖』（農水省農林水産技術会議事務局監修1980）に基づく。

7　遺物写真については1：3を原則とし、例外については縮尺を付記した。

8　本書中で使用した地図は以下の通りである

建設省国土地理院発行　25000分の1　下宝田　50000分の1　宇都宮・長野

9　本書の編集及び本文の記載は、以下の点に留意して行った。

編集　テフラ及び洪水堆積物等の鍵層を基準とした調査面を単位とし、複数の調査面が直接に歴史的な継起性を示す場合には、これを総合して扱うこととした。基本的記載、記述は、上層から下層へ、調査面順に行った。例叙的な構成であるが、最大7面に及ぶ調査面に示される本遺跡の内容理解のためにはこれが適切であると考えたところによる。遺物は、その帰属する遺構の記載との併載を基本としたが、下芝天神遺跡の器物集積遺構出土遺物については別にまとめた。写真図版は巻末にまとめた。

遺構　遺構については原則的に位置、方位、重複関係、規模、面積、特徴を記載した。規模は、住居・土坑等について、遺構確認面または確認面における上端線での規模として記載した。重複関係については、重複する遺構とその新旧関係を記載した。形状や構造、遺物の出土状況等の観察結果のうち特記すべきと考えられるものを記述した。住居の竈については、規模、方位、それぞれの住居内における位置、遺存状況及び形状や構造の特徴を記載した。水田、畠、道等については統一的な記載形態がとれないため、個々に観察の結果を記述した。

遺物　土器については原則的に遺物観察表中に種別、器形、法量、胎土、色調、特徴をまとめて記載した。法量は口径・器高及び器形によっては最大径・底径等を記載した。破片資料については復元値または残存最大値をもってこれに代えた。胎土は粗密及び砂粒や鉱物粒の含有状況を記載した。色調はその個体において主体を占める色調について『新版標準土色帖』に照らして記載したが、色相・明度・彩度を示す数値は省略した。特徴については器形、成型形技法、焼成状況等についての観察結果のうち特記すべきと思われるものを記述した。石製品等については、器種、材質、法量等を対象に応じて遺物観察中に記載した。

# 目　　次

口絵

序

例言
凡例

挿図目次
写真図版目次

報告書抄録

I　下芝天神・下芝上田屋遺跡調査の経過

1　発掘調査の経過……1
(1)　調査に至る経過
(2)　発掘調査の経過
(3)　整理事業の経過
2　調査区画と調査の方法……4
(1)　調査区画
(2)　調査の方法
(3)　チ　フ　ラ
3　遺跡の位置と立地……5

II　下芝天神遺跡

1　基本土層と調査の概要……9
2　泥流上面までの調査……13
(1)　1区の調査
(2)　2～5区の調査
(3)　6区の調査
(4)　7～9区の調査
3　泥流下面の調査……38
(1)　畠
(2)　道
(3)　ピット・溝
(4)　住　　居
4　器物集積遺構……70
(1)　器物集積遺構の調査
(2)　器物集積遺構の位置
(3)　器物集積遺構の埋没過程
(4)　遺物の出土状況
(5)　遺物の概要と器種別出土状況

III　下芝上田屋遺跡

1　基本土層と調査の概要……201
2　1・2区の調査……207
3　3区の調査……209
(1)　第1面・2面の調査
(2)　第3面の調査
(3)　第4面の調査

IV　遺物観察表……219

V　調査の成果と課題

1　耕作具痕調査の視点……271
2　泥流下畠とFA下畠……275
3　器物集積遺構の性格……278
4　集積遺構出土土器の検討……286

VI　自然科学分析

1　下芝天神遺跡の自然科学分析……291
2　下芝上田屋遺跡の自然科学分析……303

写真図版

# 挿 図 目 次


図 1　調査区画設置図 …… 4
図 2　下芝天神・下芝上田屋遺跡の位置 …… 6
図 3　群馬県中央部の地勢と下芝天神・下芝上田屋遺跡の位置 …… 7
図 4　下芝天神・下芝上田屋遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 8
図 5　下芝天神遺跡の調査区と周辺の地形 …… 10
図 6　下芝天神遺跡の調査区配置 …… 11
図 7　調査区内の標準土層 …… 12
図 8　調査区と確認面別主要遺構 …… 13
図 9　1区泥流上面までの遺構配置 …… 15
図 10　1区調査区北壁の土層① …… 15
図 11　1区調査区北壁の土層② …… 16
図 12　1区耕作具痕の広がり …… 17
図 13　1区 As-B 下水田 …… 18
図 14　1区溝群 …… 19
図 15　1区 As-B 下水田　耕土下出土遺物① …… 20
図 16　1区 As-B 下水田　耕土下出土遺物② …… 21
図 17　1区グリッド出土遺物 …… 21
図 18　3区泥流上面の遺構配置 …… 22
図 19　3区 As-B 下面出土遺物 …… 23
図 20　5区泥流上面 …… 23
図 21　5区1号溝 …… 23
図 22　5区1号溝出土遺物 …… 23
図 23　6区遺構配置概念図 …… 24
図 24　6区調査区北壁の土層 …… 24
図 25　6区遺構集中部遺構配置概念図 …… 24
図 26　6区1号住居と出土遺物 …… 25
図 27　6区2号住居と出土遺物 …… 26
図 28　6区3・4号住居 …… 27
図 29　6区3号住居出土遺物 …… 28
図 30　6区1～3号掘立柱建物 …… 29
図 31　6区1～5号土坑 …… 30
図 32　6区1・2号溝 …… 31
図 33　6区3号溝 …… 32
図 34　6区土坑出土遺物グリッド出土遺物 …… 33
図 35　表面採集遺物 …… 33
図 36　7区泥流上面の遺構配置 …… 34
図 37　7区耕作具痕の広がり …… 35
図 38　7区1号溝 …… 36
図 39　7区2号河川の土層 …… 36
図 40　7区1号河川 …… 37
図 41　7区1号河川の土層 …… 37
図 42　泥流層以下の土層と遺構 …… 38
図 43　3区泥流下面の遺構配置 …… 39
図 44　3区調査区北壁の土層 …… 40
図 45　3区調査区南壁の土層 …… 41
図 46　東島部 …… 43
図 47　南島部・北島部 …… 44
図 48　北島部　畝の土層① …… 44
図 49　北島部　畝の土層② …… 45
図 50　泥流下島と Hr-FA 島概念図 …… 46
図 51　北島部　畝の土層 …… 47
図 52　南島部　畝の土層 …… 48
図 53　洪水層上の島痕跡 …… 49
図 54　洪水層下・As-C 流土下の畝状起伏 …… 50
図 55　島畝のずれ …… 50
図 56　As-C 下の島 …… 51
図 57　As-C 下島の土層 …… 51
図 58　道の土層 …… 52
図 59　道と土層 …… 53
図 60　ピット群と溝 …… 54
図 61　畠・道・ピット・グリッド出土遺物① …… 55
図 62　畠・道・ピット・グリッド出土遺物② …… 56
図 63　4区試掘孔出土遺物 …… 56
図 64　住居の配置図 …… 57
図 65　1号住居 …… 58
図 66　1号住居の遺物出土位置 …… 59
図 67　1号住居の遺物 …… 60
図 68　2号住居 …… 61
図 69　2号住居の土層 …… 62
図 70　2号住居の遺物出土位置 …… 62
図 71　2号住居の竈 …… 63
図 72　2号住居の遺物① …… 63
図 73　2号住居の遺物② …… 64
図 74　3号住居と竈・貯蔵穴 …… 64
図 75　3号住居の遺物 …… 65
図 76　4号住居と遺物 …… 66
図 77　5号住居 …… 67
図 78　5号住居の遺物出土位置 …… 68
図 79　5号住居の遺物 …… 69
図 80　器物集積遺構平面図 …… 37
図 81　2群の土器の重なり …… 73
図 82　検出状況による集積群の区分 …… 74
図 83　遺物出土位置図 …… 75
図 84　器物集積遺構の土層断面 …… 76
図 85　器物集積遺構下面の高低 …… 77
図 86　遺地点間接合の例 …… 79
図 87　重なり合う土器・グループの位置 …… 81
図 88　重なり合う土器(1) …… 81
図 89　重なり合う土器(2) …… 82
図 90　重なり合う土器(3) …… 83
図 91　石製模造品・臼玉と土器の伴伴 …… 84
図 92　球A類の出土位置 …… 86
図 93　球B類の出土位置 …… 86
図 94　球C類の出土位置 …… 86
図 95　球D類の出土位置 …… 87
図 96　球E類の出土位置 …… 87
図 97　高杯A・E類の出土位置 …… 87
図 98　高杯B類の出土位置 …… 88
図 99　高杯C類の出土位置 …… 88
図100　高杯D類の出土位置 …… 88
図101　壺の出土位置 …… 89
図102　甕の出土位置 …… 89
図103　甕の出土位置 …… 89
図104　広口壺の出土位置 …… 90
図105　鉢の出土位置 …… 90
図106　甑・蓋・甑の出土位置 …… 90
図107　台付坏の出土位置 …… 91
図108　粗製坏の出土位置 …… 91
図109　小型土器の出土位置 …… 91
図110　石製模造品・臼玉の出土位置 …… 92
図111　各集積群の器種構成 …… 92
図112　球C類の群別量比 …… 92
図113　球D類の群別量比 …… 92
図114　球E類の群別量比 …… 92
図115　高杯C類の群別量比 …… 92
図116　高杯D類の群別量比 …… 92
図117～127　1群出土土器 …… 93
図128～180　2群出土土器 …… 103
図181～206　3群出土土器 …… 157

図207～208　4群出土土器 ……183
図209～213　5群出土土器 ……185
図214～215　東南部出土土器 ……190
図216～217　所属群不明土器 ……192
図218～219　石製模造品 ……194
図220～224　白玉 ……196
図225　下芝上田屋遺跡の調査区と周辺の地形……202
図226　下芝上田屋遺跡の調査区配置……203
図227　調査区内の標準土層……204
図228　下芝上田屋遺跡全体図（表土直下面）……205
図229　下芝上田屋遺跡全体図（泥流上面）……206
図230　2区溝群土層断面図……207
図231　1・2区　溝群……208
図232　3区の遺物……210
図233　3区耕作具痕の広がり……211
図234　3区溝群……212
図235　3区水田模式図……213
図236　3区　水田……214
図237　3区　畠 ……217
図238　耕作具痕の形成過程……271
図239　下芝天神遺跡7区標本①……272
図240　下芝天神遺跡7区標本②……272
図241　下芝天神遺跡7区標本№5の刃部先端縁と断面……272
図242　FA降下後の耕作活動 ……275
図243　最下位のレベルにある土器……279
図244　集積遺構の構造……282
図245　松本市高宮遺跡……283
図246　土の入った土器……284
図247　下芝天神遺跡集積遺構出土土器器種別構成比……286
図248　下芝天神遺跡集積遺構出土土器の模式的器種例図……287
図249　下芝天神遺跡集積遺構土師器坏の種類別度数分布図……288
図250　As-Bの層序……313
図251　As-B・As-KKと遺構 ……313
図252　1・3区資料の重鉱物組成ダイヤグラム……313
図253　3区東部（東島部）の土層……313
図254　下芝天神遺跡3区西部の土層……314
図255　E-17グリッドの重鉱物組成ダイヤグラム ……314
図256　下芝天神遺跡 As-B上下面の植物珪酸体 ……315
図257　下芝天神遺跡北島№1の植物珪酸体……315
図258　下芝天神遺跡3区北壁の植物珪酸体……315
図259　下芝天神遺跡南島の植物珪酸体……315
図260　下芝天神遺跡北島の植物珪酸体……315
図261　下芝天神遺跡北島№2の植物珪酸体……316
図262　下芝天神遺跡北島№3の植物珪酸体……316
図263　下芝天神遺跡南壁西隅の植物珪酸体……316
図264　下芝天神遺跡3区D-15グリッドの植物珪酸体 ……316
図265　下芝天神遺跡3区D-16グリッドの植物珪酸体 ……316
図266　下芝上田屋遺跡の地質柱状図……317
図267　下芝上田屋遺跡第1地点の地層と植物珪酸体……317
図268　下芝上田屋遺跡第6地点の地層と植物珪酸体……317
図269　下芝上田屋遺跡第7地点の地層と植物珪酸体……318
図270　下芝上田屋遺跡第6地点の主要花粉組成図……318
図271　下芝上田屋遺跡第7地点の主要花粉組成図……318

# 写真図版目次


| PL | |
|---|---|
| 1 | 下芝天神遺跡調査区全景 |
| 2 | 1区とその周辺 |
| 2 | 1区全景 |
| 3 | 1区　耕作具痕の広がり |
| 3 | 1区　耕作具痕　As-B除去前 |
| 3 | 1区　耕作具痕　As-B除去前 |
| 3 | 1区　耕作具痕　As-B除去後 |
| 4 | 1区　As-B下水田と土層 |
| 4 | 1区　南壁の土層 |
| 4 | 1区　南壁の土層 |
| 4 | 1区　As-Bの堆積 |
| 4 | 1区　As-Bの堆積 |
| 5 | 1区　As-B下水田 |
| 5 | 1区　As-B下水田　部分 |
| 5 | 1区　As-B下水田終端部 |
| 5 | 1区　As-B下面溝群 |
| 6 | 1区　1・2号溝 |
| 6 | 1区　北壁部の土層 |
| 6 | 1区　As-B下面溝群 |
| 6 | 2区　As-B下面 |
| 6 | 3区　As-B上面の溝・ピット状落ち込み |
| 6 | 3区　As-B上面の溝・ピット状落ち込み |
| 6 | 3区　As-B上面の溝・ピット状落ち込み |
| 7 | 3区　As-B上面の溝・ピット状落ち込み |
| 7 | 3区　1号溝 |
| 7 | 3区　4・5号溝 |
| 7 | 3区　As-B下面 |
| 7 | 3区　As-B下面の落ち込み |
| 7 | 3区　耕作具痕の部分調査 |
| 8 | 3区　As-Bと耕作具痕 |
| 8 | 4区　As-B下面全景 |
| 8 | 4区　泥流上面全景 |
| 8 | 5区　As-B下面全景 |
| 8 | 5区　泥流上面全景 |
| 8 | 6区　泥流上面全景 |
| 8 | 6区　泥流上面の遺構 |
| 8 | 6区　泥流上面の遺構 |
| 8 | 6区　1号住居 |
| 9 | 6区　1号住居の遺物 |
| 9 | 6区　1号住居の遺物 |
| 9 | 6区　1号住居貯蔵穴 |
| 9 | 6区　2号住居 |
| 9 | 6区　2号住居北西隅部 |
| 9 | 6区　2号住居竈 |
| 9 | 6区　3・4号住居 |
| 10 | 6区　3・4号住居の遺物 |
| 10 | 6区　3号住居の土層 |
| 10 | 6区　3・4号住居の土層 |
| 10 | 6区　1号掘立柱建物 PIT 1 |
| 10 | 6区　1号掘立柱建物 PIT 2 |
| 10 | 6区　1号掘立柱建物 PIT 3 |
| 10 | 6区　1号掘立柱建物 PIT 4 |
| 10 | 6区　2号掘立柱建物 PIT 1 |
| 10 | 6区　2号掘立柱建物 PIT 2 |
| 11 | 6区　2号掘立柱建物 PIT 3 |
| 11 | 6区　2号掘立柱建物 PIT 4 |
| 11 | 6区　2号掘立柱建物 PIT 5 |
| 11 | 6区　3号掘立柱建物 PIT 1 |
| 11 | 6区　3号掘立柱建物 PIT 2 |
| 11 | 6区　3号掘立柱建物 PIT 3 |

| PL | |
|---|---|
| 11 | 6区　3号掘立柱建物 PIT 4 |
| 11 | 6区　1号土坑 |
| 12 | 6区　2号土坑 |
| 12 | 6区　3号土坑 |
| 12 | 6区　4号土坑 |
| 12 | 6区　As-B下面での耕作具痕 |
| 12 | 6区　1・2号溝 |
| 12 | 6区　3号溝 |
| 13 | 7区　調査区全景 |
| 13 | 7区　耕作具痕　As-B除去前 |
| 13 | 7区　耕作具痕　As-B除去後 |
| 13 | 7区　耕作具痕の断面 |
| 13 | 7区　耕作具痕の調査 |
| 14 | 7区　泥流上面全景 |
| 14 | 7区　泥流上面全景 |
| 14 | 7区　旧河道部の土層 |
| 14 | 7区　旧河道部の土層 |
| 14 | 7区　旧河道部の土層 |
| 15 | 1区　As-B下面出土遺物 |
| 16 | 1区・3区 As-B下面出土遺物・6区1号住居出土遺物 |
| 17 | 6区　2・3号住居出土遺物・グリッド出土遺物・表面採集遺物 |
| 18 | 3区北壁北東部の土層 |
| 18 | 3区から榛名山を望む |
| 19 | 東畠部・廃物集積遺構 |
| 19 | 東畠部 |
| 19 | 東畠部 |
| 20 | 泥流下の北畠部・南畠部・道 |
| 20 | 泥流下の北畠部・南畠部・道 |
| 20 | 泥流下の北畠部・南畠部・道 |
| 21 | 南畠部（泥流下）の畝 |
| 21 | 南畠部（泥流下）の畝 |
| 21 | 南畠（手前）・道・北畠 |
| 21 | 南畠の土層 |
| 21 | 南畠の土層 |
| 22 | 北畠と泥流の堆積 |
| 22 | 北畠部 FA 下畠と泥流下畠 |
| 22 | 北畠部 FA 下畠と泥流下畠 |
| 22 | 北畠部 FA 下畠と泥流下畠 |
| 22 | 畝No 4 |
| 23 | 畝No 6・7 |
| 23 | 畝No 7 |
| 23 | 畝No 7・8 |
| 23 | 畝No27 |
| 23 | FA 下畠畝上の足跡 |
| 23 | 洪水層上の畠 |
| 23 | 洪水層上の畠　断面 |
| 24 | As-C 下畠全景 |
| 24 | As-C 下畠 |
| 24 | As-C 下畠 |
| 25 | As-C 下畠の土層 |
| 25 | As-C 下畠　畝の終端部 |
| 25 | As-C 下畠の耕作具痕？ |
| 25 | 泥流下畠・FA 下畠・As-C 下畠の重なり |
| 26 | 畠と道 |
| 26 | 道の側溝 |
| 26 | FA 直下の道 |
| 27 | 廃物集積遺構と道 |
| 27 | 道側溝の工具痕？ |
| 27 | 3層の道の断面 |

| PL | |
|---|---|
| 27 | As-C 混土上面　溝とピット |
| 28 | As-C 混土上面　ピット |
| 28 | As-C 混土上面　ピット |
| 28 | 3 区住居群全景 |
| 29 | 3 区 1 号住居 |
| 29 | 3 区 1 号住居の遺物 |
| 29 | 3 区 1 号住居　桃核の出土 |
| 29 | 3 区 1 号住居の竈 |
| 29 | 3 区 2 号住居 |
| 29 | 3 区 2 号住居の竈 |
| 30 | 3 区 3 号住居の竈 |
| 30 | 3 区 3 号住居　ピット内の遺物 |
| 30 | 3 区 4 号住居 |
| 30 | 3 区 5 号住居 |
| 30 | 3 区 5 号住居の礫群とピット |
| 30 | 3 区 5 号住居のピット |
| 31 | 3 区畠・道・グリッド出土遺物 |
| 32 | 3 区グリッド・4 区試掘孔出土遺物・3 区 1 号住居出土遺物 |
| 33 | 3 区 1 号住居・2 号住居出土遺物 |
| 34 | 3 区 2 号住居・3 号住居出土遺物 |
| 35 | 3 区 3 号・4 号・5 号住居出土遺物 |
| 36 | 器物集積遺構　2 群部分 |
| 36 | 器物集積遺構　2 群部分の調査 |
| 36 | 器物集積遺構　2 群部分の調査 |
| 37 | 器物集積遺構の堆積状態 |
| 37 | 土器内の堆積土層 |
| 37 | 土器の堆積状況 |
| 37 | 土器の堆積状況 |
| 37 | 1 群部分の調査 |
| 38 | 土器の出土状況 |
| 38 | 土器の出土状況 |
| 38 | 土器の出土状況 |
| 38 | 土器の出土状況 |
| 38 | 土器の出土状況 |
| 38 | 土器の出土状況 |
| 38 | 土器の出土状況 |
| 39 | 土器の出土状況 |
| 39 | 土器の出土状況 |
| 39 | 土器の出土状況 |
| 39 | 土器の出土状況 |
| 39 | 土器の出土状況 |
| 39 | 土器の出土状況 |
| 39 | 土器の出土状況 |
| 40 | 土器の出土状況 |
| 40 | 土器の出土状況 |
| 40 | 土器の出土状況 |

| PL | |
|---|---|
| 40 | 土器の出土状況 |
| 40 | 土器の出土状況 |
| 41 | 2 群北西辺　壺・甕の線状配列 |
| 42 | 2 群北西一南西辺　壺・甕の線状配列と取り上げ後の圧痕 |
| 42 | 2 群　南西隅部の土器 |
| 42 | 2 群　南西辺の土器 |
| 42 | 2 群北西一南西辺　壺・甕の線状配列と取り上げ後の圧痕 |
| 43 | 有孔円盤の出土状態 |
| 43 | 斧形模造品の出土状態 |
| 43 | 剣形模造品の出土状態 |
| 43 | 臼玉の出土状態 |
| 43 | 土器内の臼玉 |
| 43 | 土器内の臼玉 |
| 43 | 勾玉形模造品の出土状態 |
| 43 | 剣形模造品の出土状態 |
| 43 | 剣形模造品の出土状態 |
| 43 | 遺物取り上げ後の圧痕 |
| 44 | 遺物取り上げ後の圧痕 |
| 44 | 集積遺構調査風景 |
| 44 | 集積遺構調査風景 |
| 44 | 集積遺構調査風景 |
| 44 | 集積遺構調査風景 |
| 45～55 | 集積遺構出土遺物（1 群） |
| 56～119 | 集積遺構出土遺物（2 群） |
| 120～147 | 集積遺構出土遺物（3 群） |
| 148・149 | 集積遺構出土遺物（4 群） |
| 150～154 | 集積遺構出土遺物（5 群） |
| 155～157 | 集積遺構出土遺物（東南部出土土器・出土位置不明土器） |
| 158 | 集積遺構出土遺物（石製模造品・臼玉） |
| 159 | 下芝上田泉遺跡全景 |
| 159 | 下芝上田泉遺跡 1・2 区 |
| 160 | 1 区溝群 |
| 160 | 1 区 2・3 号溝（道か） |
| 160 | 2 区全景 |
| 160 | 6・7 号溝 |
| 161 | 3 区全景 |
| 161 | 3 区　第 1 面溝群 |
| 161 | 3 区　耕作具痕部の As-B の乱れ |
| 161 | 3 区　耕作具痕部分 |
| 162 | 3 区　耕作具痕の広がり |
| 162 | 3 区　第 3 面水田跡全景 |
| 162 | 3 区　第 3 面水田跡　部分 |
| 163 | 3 区　第 3 面水田畦畔　部分 |
| 163 | 3 区　第 3 面水田畦畔 |
| 163 | 3 区　第 3 面水田畦畔 |
| 163 | 3 区　第 4 面畠 |
| 164・165 | 検出されたプラントオパール |
| 166～168 | 検出された花粉・胞子 |

# Ⅰ　下芝天神・下芝上田屋遺跡調査の経過

## 1　発掘調査の経過

### （1）　調査に至る経過

北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成３年２月、高崎市行力遺跡から開始された。これに先立つ文化財保護と建設工事との調整過程等については、同遺跡の報告書(『行力春名社遺跡　北陸新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集』1994　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団　以下『行力春名社遺跡』)を参照されたい。同年６月、1998年冬季オリンピックの開催地が長野に決定されたことを受けて、これに照準を合わせて、発掘調査工程にも一層の拍車がかけられた。群馬郡箕郷町下芝地区においては、平成２年４月に群馬県教育委員会から日本鉄道建設公団高崎建設局に示された「北陸新幹線（群馬県内）地域埋蔵文化財一覧表」において、古墳時代から平安時代水田の存在が示され、下芝清水・下芝五反田Ⅰ～Ⅳの遺跡名のもとに発掘調査が行われることとなった。

本報告書所収の下芝天神遺跡が下芝五反田Ⅱ・Ⅲ遺跡に、下芝上田屋遺跡が下芝五反田Ⅳ遺跡に当たる。下芝五反田Ⅰ～Ⅳ遺跡については、下芝五反田Ⅰ遺跡が大字下芝字五反田、Ⅱ・Ⅲが大字下芝字天神、Ⅳが大字下芝字上田屋に所在する。当事業団では遺跡名称について、原則として遺跡所在地の大字名と小字名を採って命名することとしていた。しかしこれら四つの遺跡は、字が異なるとはいえ、面的な同一性を持つ、一連の遺跡として認識されていたため、「下芝五反田」を代表遺跡名として命名したものであった。ところが、調査の進行に伴い、遺跡の性格がそれぞれに異なること、また、古地形の復元により、各遺跡が同一地形面上のものとしては捉えられないことなどが明らかとなった。このため、整理段階において、原則に立ち戻って新たに遺跡名を付すこととした。

高崎市浜川町から箕郷町下芝地区にかけては、本章第４節で述べるとおり、榛名山の噴火に由来する泥流層が厚く堆積している。この下位に存在する遺構の調査に当たっては、激しい出水と泥流層の堆積構造に起因する崩落を防ぐための安全対策工事が不可欠となった。このため、行力春名社遺跡の調査実績をもとに、

安全対策を含む泥流下調査の基本的方針が出されている（『行力春名社遺跡』参照）。本遺跡においてはボーリング調査及び試掘調査によって、古地形の概要及び遺構の有無を確認し、遺構の存在が確認された部分についてはアイランド方式による防護壁の設置を行って、発掘調査を行うこととなった。

### （2） 発掘調査の経過

下芝天神遺跡は、平成５年７月～平成６年３月、同年７月～11月の２次にわたって調査を行った。このうち、７～９区に当たる下芝五反田Ⅲ遺跡部分については、平成５年７月～11月にかけて、１～６区の下芝五反田Ⅱ遺跡部分と並行して調査を行っている。下芝上田屋遺跡は、平成５年10月～12月に調査を行った。

下芝天神遺跡の平成５年度調査では、１・２・４・６区及び３区の泥流上面と下面の西半について調査を行った。平成６年度は３区東半と５区の調査を行っている。出水の激しい地帯における深所調査であり、加えて記録的な多雨の年に当たり、あるいは落雷によって排水用ポンプが停止して発掘区が数度に亘って水没するなど、調査は困難を極めた。特に平成６年度３区の調査においては、掘削中、扇状地伏流水の水みちに当たってしまい、大量湧水を見ることとなった。大型の水中ポンプを投入して排水を行ったが、まもなく、調査中の畠面に細かいひび割れを生じ、ここから水が湧くという状況が起こった。建設技術コンサルタントによると、いわゆる「盤ぶくれ（ヒービング）」現象で、放置すれば掘削底面が、浸透する水の流れにより、土砂が水を伴って噴き出す「ボイリング」をおこし、土止め壁が崩壊する危険があるとのことであった。いくつかの危険回避・防止策が示されたが、畠部分の調査を最優先で終了し、器物集積遺構部分を残して砕石を敷き、流水路を確保しながら埋め戻す方法を採用することとなった。器物集積遺構についても、写真測量を活用し、最大限に調査を急いだ。

**日誌抄**

平成５年７月１日　天神遺跡の調査を開始する。
　　天神１区・６区から着手し、次いで３区調査に入る。
　　天神６区：住居跡を確認。
８月　天神１区：水田・耕作痕の調査。
　　天神３区：As-B下面の調査。
　　天神４区：調査を開始。
９月　天神１区：泥流上面までの調査を終了。
　　一旦埋め戻した後、H鋼を打設し、泥流層の機械掘削に入る。
　　天神３区：西部As-B下面～泥流上面の調査を終了。重機による泥流掘削を開始。
　　天神４区：As-B下面～泥流上面を精査。
　　天神６区：泥流上面を精査。
10月　天神１区：泥流下面を河川跡と認定し、調査を終了。
　　天神３区：一部拡張し、耕作具痕の調査。
　　天神４・６区：泥流下面調査のため、10m×５mの試掘孔を設ける。
10月16日　下芝上田屋遺跡の調査を開始する。
11月　天神３・４区：土止め壁打設開始。

天神6区：現地表下7mまで試掘坑掘削。遺構がないことを確認し調査を終了する。

11月17日　天神7～9区（下芝五反田Ⅲ遺跡）の調査を終了。

12月　天神3区：FP泥流下面遺構確認。この面には遺構がないことを確認。

機械掘削中に土器片多数出土。FA泥流下面の遺構を確認、調査開始。

天神4区：FA泥流下面遺構確認。遺物の出土を見るが、遺構がないことを確認。

12月24日　下芝上田屋遺跡の調査を終了する。

平成6年1～2月　天神3区：FA泥流下面遺構、FA下遺構の調査。

器物集積遺構遺物取り上げ。洪水層下畠・As-C下面畠調査。

3月　天神2区：調査に着手。As-B上下面・泥流上面を精査し調査終了。

天神3区：東半部調査を開始。As-B下面まで調査を終了。

3月30日　下芝天神遺跡平成5年度の調査を終了する。

平成6年7月1日　平成6年度下芝天神遺跡調査を開始する。

3区：先年度調査残部分につき泥流上面まで調査。

土留壁打設及び機械掘削を開始。

8月　3区：器物集積遺構・東畠部調査。器物集積遺構が北側に広がることを確認。

9・10月　3区：器物集積遺構遺物取り上げ・写真測量。

10月28日　3区：器物集積遺構遺物取り上げ終了。

11月　3区：1号住居調査。器物集積遺構北壁部分遺物取り上げ。

6区：調査に着手。As-B下面、泥流上面を精査し、調査終了。

11月30日　下芝天神遺跡の調査を終了する。

### （3） 整理事業の経過

下芝五反田遺跡・下芝天神遺跡の整理・報告書刊行事業は、平成7～9年度に実施された。整理事業の主な流れは以下のとおりである。

平成7年度　図面・写真整理　図面台帳作成　遺物接合・実測・写真撮影

平成8年度　図面編集・トレース　遺物台帳・取り上げ台帳整備　遺物接合・実測・写真撮影・トレース

平成9年度　図面編集・トレース　遺物接合・実測・写真撮影・トレース　版下作成・原稿執筆

報告書総合編集・刊行　遺物・資料の収納

## 2　調査区画と調査の方法

### （1）　調査区画

北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査事業においては、高崎駅南東にあたる、国土座標X＝＋35,000.0, Y＝－73,000.0を基点として、1辺1kmの大区画(地区）を設定し、調査区画の基本としている。群馬県内の北陸新幹線路線部の調査対象地域に沿って25地区（1～24地区及び13地区の南に13-1地区を設定）が設定され、下芝天神遺跡はこの内の第12・13及び13-1地区にまたがり、下芝上田屋遺跡は13及び13-1地区に属する。地区は1辺100mの中区画に分けられ、さらにこれが1辺5mの小区画(グリッド）に分割される。グリッドは、東南隅を基点として東から西に向かってA～T、南から北に向かって1～20とした。その交点、A1～T20が各遺構の実際の調査に当たっての基本的位置を示す。

### （2）　調査の方法

発掘調査は、表土直下から土質境界に沿って面的に行った。特に顕著な鍵層となるテフラ・泥流・洪水堆積物の堆積層下面については特に留意した。表土及び調査面間の土層については、機械掘削によって効率化を図り、各調査面については人力により精査を行った。

測量においては、前述のグリッド及び国土座標を併用した。手実測を基本としたが、一部航空写真測量・写真測量を併用して迅速化を図った。

### （3）　テフラ

テフラの略称については、以下を用いる。

浅間山起源　As-A：浅間A軽石
　　As-KK：浅間柏川テフラ
　　As-B：浅間Bテフラ

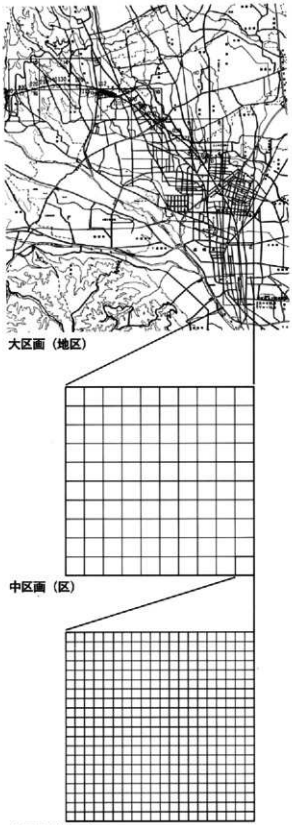



図1　調査区画設置図

As-C：浅間C軽石

榛名山起源　FP：榛名二ツ岳伊香保テフラ

FA：榛名二ツ岳渋川テフラ

Hr-AA：榛名一有馬火山灰

FA・FPについては、Hr-FA・Hr-FPが略号として定着しつつあるが、本遺跡では『行力春名社遺跡』に従いつつ、火砕流堆積物（FPF-1・FPF-2）が遺跡内に認められないこと、また、それぞれのテフラについてフォールユニット単位での把握が必ずしも必要とされなかったことなどをあわせて、従来発掘調査報告書上で一般的に使用されてきた略称に従うことにしたものである。

ただし、それぞれのテフラをもたらした噴火の呼称についてはHr-FAの噴火、Hr-FPの噴火とした。

火山泥流については、FA-FP間に認められるものについては、Hr-FAの噴火を起源とするものと考えて「FA泥流」とし、FPより上位のものについては、Hr-FPの噴火に起源するものとして「FP泥流」とした。なおHr-FAの噴火とFA泥流層の堆積開始までに時間差があることが本調査で判明し、堆積完了までの間にはさらに時間差がある。また、Hr-FPの噴火とFP泥流の堆積開始―完了までの間には、かなり大きな時間差が存在する。泥流層が一律の時間指標とはならないことに注意されたい。

## 3　遺跡の位置と立地

下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡は、群馬県群馬郡箕郷町大字下芝、上芝にまたがって所在する。箕郷町は高崎市の北、前橋市の西にあり、榛名山東南麓の南部を占める。山麓斜面に桑園を中心とする耕地が広がる、畠作を中心とする町であるが、大字下芝、上芝は箕郷町の南部の、比較的傾斜の緩い、水田の多い地域である。現況の土地利用状況で主体を占めるのは、圃場整備された水田である。

遺跡の西を流れる榛名白川は、榛名山鷹巣山近くに源を発し、箕郷町西松原近くまでは南東に流下、ここから南に向きを変えて、高崎市金井淵町で烏川に合流する。遺跡付近ではほぼ北から南へと流れている。榛名白川の西岸は、解析谷の発達した山麓台地地帯になる。一方、遺跡の東約1kmには、井野川が流れる。井野川は、相馬ヶ原扇状地の扇央部に源を発して東南に流下し、高崎市若宮町付近でやはり烏川に合流する。この二つの河川に挟まれた地域は、箕郷町西明屋の箕輪城跡近くを扇頂とする小規模な扇状地形を示し、白川扇状地と呼ばれる。6世紀に2回にわたって起こった、榛名山の噴火活動による泥流の堆積を成因とする、火山性の扇状地である。本調査は、この扇状地の、扇央部上位の西半を横断する形で行われたことになる。扇状地形成前の地形環境についての調査例は未だ少なく、十分な情報が得られていない。深沢は、行力春名社遺跡の報文中で、調査された各遺跡及びボーリング調査の結果から、FA下の旧地表面の標高データをまとめ、泥流の広がりを追跡するとともに、泥流下のこの地域が相馬ヶ原扇状地の一部として捉えられること、現地形がFA下の地形をほぼトレースしていることなどを示している。

泥流下は、基本的には西から東へ徐々に低くなる地形であるが、榛名白川の旧河道は、現早瀬川の位置近くに想定されるため、下芝上田屋遺跡3区は、旧榛名白川右岸の、十文字面に乗っていたことになる。遺構の検出された下芝天神遺跡3区は、この旧榛名白川と、下芝五反田遺跡から下芝天神遺跡2区にかけて認められる谷地に挟まれた台地の、東縁辺部にあたる。4区以西には、遺構の存在が認められておらず、居住域は確定できていないが、南北に延びる台地を想定すると、東側の谷を意識した集落立地であるものと考える

ことができる。

泥流下面以下の土層を見ても、洪水層の堆積が何層も認められる。この洪水層は、東の谷を流れた川からもたらされた可能性があろう。泥流以前においても、ここは洪水の常習地域であったようだ。

白川扇状地内及びその周辺地域の遺跡を特徴づけるのは、この扇状地形成の原因となった、榛名山の噴火に伴う堆積物の存在である。本遺跡を含む榛名山東南麓地域では、火山灰や軽石などの降下堆積物や火砕流堆積物は、北西麓の同期の遺跡である黒井峰遺跡や中筋遺跡ほど顕著ではない。降下堆積層としてのFA、FP層は比較的薄く、群馬町同道遺跡で好例が示されたように、FAの降下後まもなく、水田の区画が復旧されている。これに代わるように、火山泥流の分厚い堆積層が白川扇状地を覆い尽くした。まず、FA泥流がこの地を覆う。さらにFP泥流が、その20～30年ほど後に再びここを覆い尽くす。両泥流層の間には、下芝天神遺跡においても黒色土の堆積が認められ、やや落ち着いた時期があったものと考えられ、浜川地区の遺跡では水田跡も検出されているが、本遺跡や、行力春名社遺跡では生活の痕跡は認められない。こうした泥流堆積層

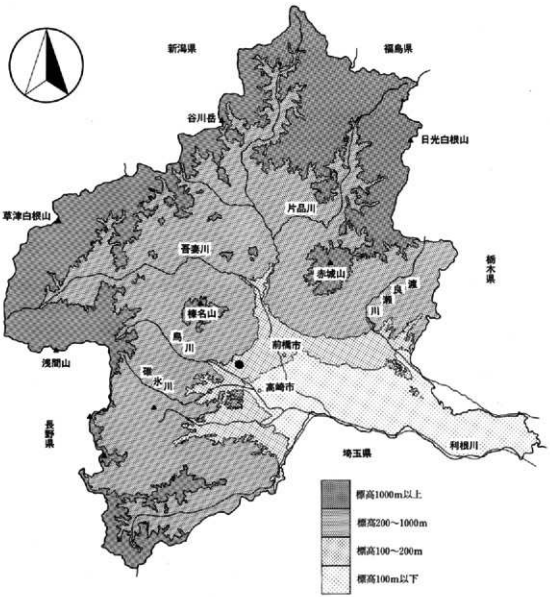



図2　下芝天神・下芝上田屋遺跡の位置

の存在のため、これ以下の遺構については、わずかな調査例しかない。箕郷町下芝谷ツ遺跡、下芝五反田遺跡、高崎市御布呂遺跡などのほかは、本遺跡を含む、北陸新幹線建設に伴う一連の発掘調査がなされているのみである。しかし、黒井峰・中筋など、降下堆積物下の遺跡と同じく、泥流下の遺跡も旧地表面が非常に良好な状態で保存されている。耕地遺構や集落・住居、古墳などが、泥流流下時点の状況を保って検出され、豊富な情報を提供している。また、下芝谷ツ古墳の飾履、下芝五反田遺跡の叩き目を有する土器など、調査例が少ない中にあって、特異な外来系文物の出土が目立つことも注目されている。FA下の、ほぼ並行する時期に、井野川の東には、群馬町保渡田古墳群、三ツ寺Ⅰ遺跡という、この地域の支配層に関わる遺跡があるが、FA降下以後はこれに続くような有力古墳、居館が認められない点も、この地域の歴史を考える上では示唆的である。

泥流堆積以後の遺跡としては、As-Bに埋没した水田跡の調査が注目される。高崎市長野北部遺跡群、菊池遺跡群、浜川地区の各遺跡などで広範囲の調査が行われている。この地域の再開発が、12世紀にはほぼ完了していたことがうかがえる。9～10世紀にかかる集落の調査例も多い。しかし、6世紀半ばとされるFP泥流によって、荒涼とした砂礫地と化したこの地域が、どのように開かれていったかを物語る遺構は少ない。浜川長町遺跡では、7世紀前半の竪穴住居が検出されており、これが、白川扇状地内のHr-FPの噴火以後においては、最も古い生活の痕跡と考えられる。この住居は、FP泥流層を掘り込んで構築され、同相を示す土で埋没している。また、下芝上田屋遺跡では、泥流層中から水田、畠が検出されている。出土土器が細片であるため、やや確証に欠けるが、8世紀頃の所産ではないかと考えられる。Hr-FPの噴火に起因する泥流の流下・堆積は、断続的に、かなりの長期間にわたって繰り返されたようである。


参考文献

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　『行力春名社遺跡』　1994

箕郷町教育委員会　『発行A・B遺跡』　1988

早田勉　『群馬県の風土と自然』　『群馬県史　通史編1』　群馬県史編纂委員会　1990

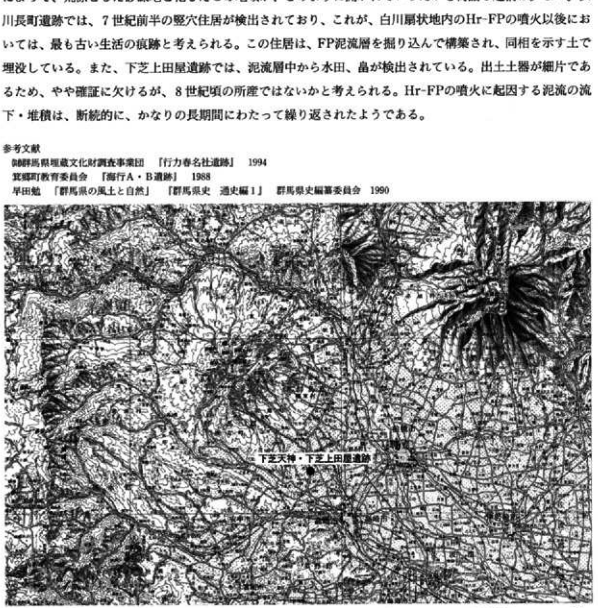




図3　群馬県中央部の地勢と下芝天神・下芝上田屋遺跡の位置

0　1：400000　20km

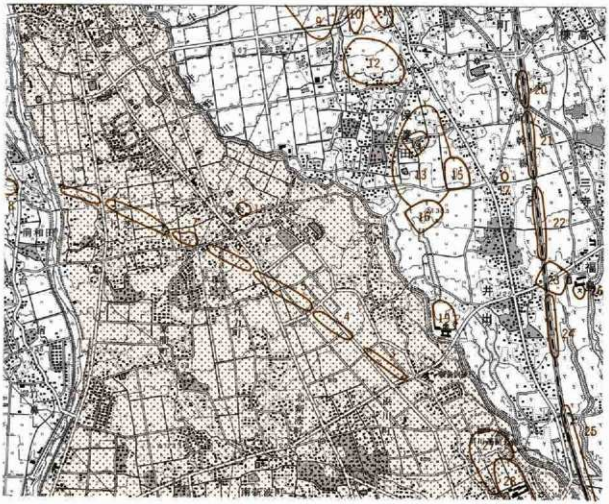


図4　下芝天神・下芝上田屋遺跡の立地と周辺の遺跡

1：下芝天神遺跡　2：下芝上田屋遺跡（本書所収）
3：浜川遺跡群　浜川艇遺跡　4：浜川遺跡群　浜川高田遺跡　5：浜川遺跡群　浜川長町遺跡（本年度報告書刊行予定）
6：行力春名社遺跡（『行力春名社遺跡』 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994）
7：下芝五反田遺跡（本年度報告書刊行予定）
8：和田山天神前遺跡（未報告　事業名和田山古墳群）
9：生原善龍寺前遺跡（『生原・善龍寺遺跡』 荒郷町教育委員会　1988）
10：海行B遺跡　11：海行A遺跡（『海行A・海行B遺跡』 荒郷町教育委員会　1988）
12：保渡田荒神前遺跡（『保渡田荒神前遺跡・皿掛遺跡』 群馬町教育委員会　1989）
13：保渡田VII遺跡（『保渡田VII遺跡VI』『同Ⅴ』 群馬町教育委員会　1989・1990）
14：保渡田薬師堂古墳　15：保渡田八幡塚古墳　16：井出二子山古墳（『群馬県史　資料編３』 群馬県史編纂委員会　1981）
17：上井出遺跡（清水　登『群馬町上井出遺跡出土の祭祀遺物』『群馬考古学手帳』vol.3　群馬土器粘会　1992）
18：下芝谷ツ遺跡（田口一郎『群馬県下芝・谷ツ古墳』『日本考古学年報』39　日本考古学協会　1996）
19：阿諏遺跡（『阿諏遺跡』 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983）
20：保渡田遺跡　21：三ツ寺II遺跡（『保渡田遺跡・三ツ寺II遺跡・中里天神塚古墳』 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984）
22：三ツ寺II遺跡（『三ツ寺II遺跡』 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991）
23：三ツ寺I遺跡（『三ツ寺I遺跡』 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988）
24：井出村東遺跡（『井出村東遺跡』 井出村東遺跡調査会　1983）
25：熊野堂遺跡（熊野堂遺跡(1)『熊野堂遺跡第三地区・雨壺遺跡』 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984　『熊野堂遺跡(2)』 同　1990）
26：中林遺跡（『中林遺跡』 群馬町教育委員会　1985）
27：御布呂遺跡（『矢島・御布呂遺跡』 高崎市教育委員会　1979　『御布呂遺跡』 同　1980）
28：芦田貝戸遺跡（『芦田貝戸遺跡』『芦田貝戸遺跡II』 高崎市教育委員会　1979・1980）

# II　下芝天神遺跡

## 1　基本土層と調査の概要

下芝天神遺跡は、現在の地名では群馬郡箕郷町大字下芝字薬師、天神、五反田にまたがる。一連の調査対象地を、その間に介在する道水路で、9つの調査区に分けて調査を行っている。このうち、1区が字五反田、2～4区と7・8区が字天神、5・6・9区が字薬師に所在する。三つの字のうち、本遺跡の最も中心的な内容を有するに至った、3区の所在する字天神を遺跡名に当てた。調査前の土地利用状況は、1区が畑地、3区の一部が宅地である以外は、圃場整備された水田であった。東の9区側が高く、西の1区に向かって徐々に低くなる地勢で、標高を比較すると、9区では154m、1区では147m程になっており、両区間には7m程の比高差がある。調査対象地内の土層は、現表土からFP泥流層までの上部と、これ以下の下部に大きく2分することができる。発掘調査においても、内容・工程の両面で上部の調査と下部の調査とに、大きく二分された。本書もこれに従って、泥流層上面までの記載と、これ以下の記載とに分けて構成する。なお、特に情報量の多い泥流下面の器物集積遺構については、節を改めた。

基本的な土層を図7に示す。堆積状況の良い部分では、3層内にAs-KK層が認められる場合がある。逆に5層あるいは6層まで、圃場整備工事に伴う削平を受けている部分もある。上部の調査における遺構確認面は、4層下面及び6層上面である。2区では4層以下が河川性の砂礫層となり、7区の東部では、覆土中に4層が堆積する河川跡が検出されている。泥流層以下の、下部での遺構検出は3区のみであった。4区では土器の出土を見たが、遺構は確認されず、これより西に泥流下の遺跡が広がらないことが確認された。

遺構が認められるのは9層下から16層上面までである。6層・9層はそれぞれほぼ2mの厚さがある。両泥流層の中間に8層が形成されているが、本遺跡の範囲内ではこれにかかる遺構は認められていない。10―11層間には、Hr-FAの噴火に伴う、あるいはその直前に想定される洪水堆積層が、部分的に認められる。12層はHr-AAに相当すると考えられる火山灰を多く含む洪水堆積層である。11層と13層は12層の洪水砂ないし火山灰が含まれるか否かで分層されるが、明確でない場合も多く、以下の文中ではAs-C混土層として一括して

図5　下芝天神遺跡の調査区と周辺の地形

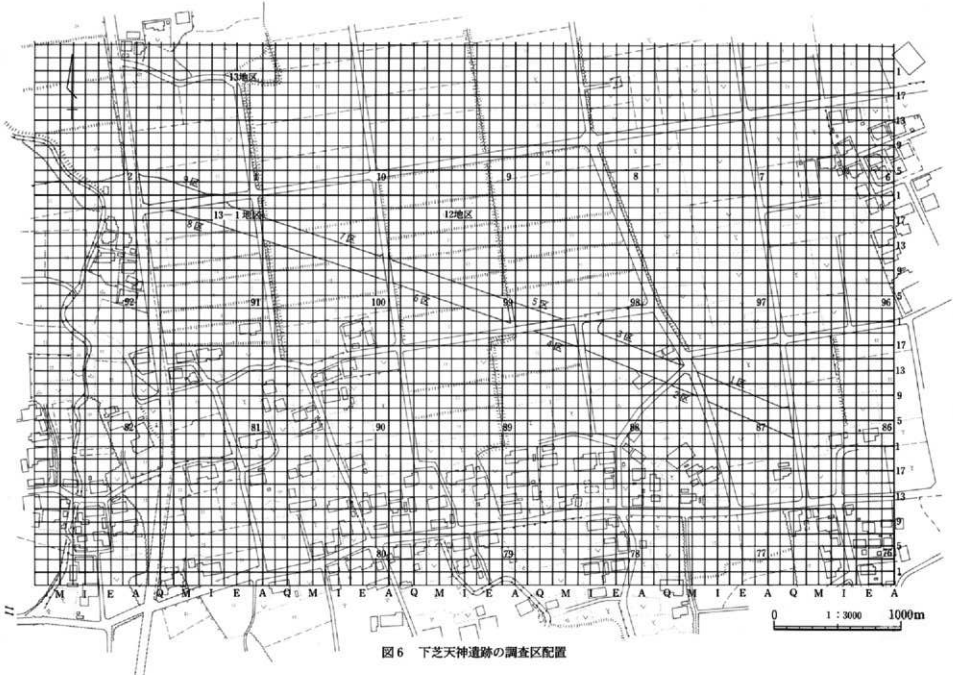



図6　下芝天神遺跡の調査区配置

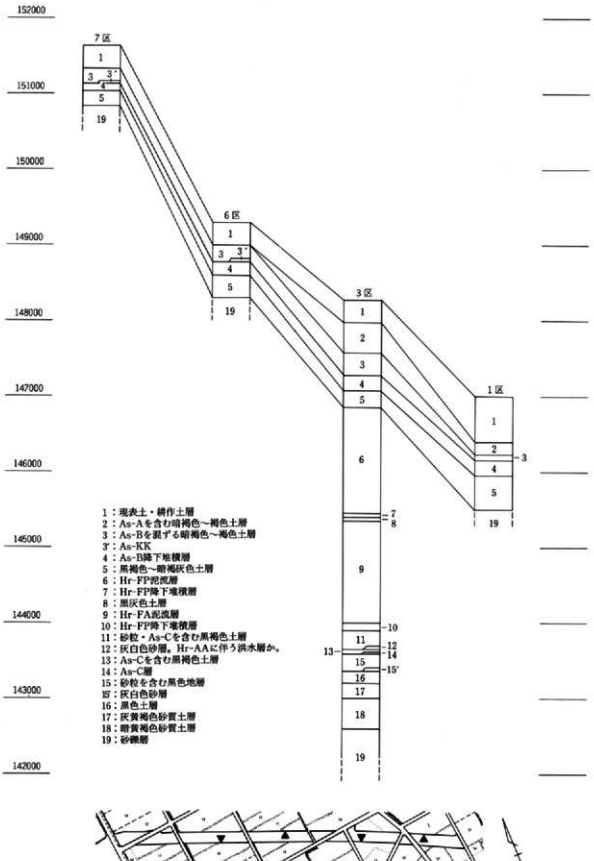



図7　調査区内の標準土層

扱う場合が多い。14層としたAs-C層は13層中にも部分的に認められる。15—16層間には灰白色の砂層が認められる部分があり、これも洪水堆積物と考えられる。なお、1・5区は7層以下が河川跡と思われる砂礫層となる。

図5に各調査区ごとの検出遺構を確認面別にまとめた。2・8・9区では上部、下部ともに遺構が検出されなかった。泥流層以下では3区で多様な遺構が検出され、4区で遺物が出土したが、その他の調査区では遺構、遺物ともに認められない。

遺構に伴わない遺物として、縄文・弥生土器の細片や石棒片などを得ているが、確実な遺構としては古墳時代以後に限られる。また、泥流層堆積以後は、空白期があり、遺物では8世紀代にあたると思われるものもあるが、9世紀代の住居が最も古い遺構となっている。泥流による災害からの復興が、いかに困難であったかを物語るものであろう。

## 2　泥流上面までの調査

**概　要**　泥流上面までの、遺跡上部の調査では、2区のAs-B層下面で河川性の砂層、7区では同じくAs-Bに埋没する旧河道を検出しており、古地形がかなり起伏に富んだものであったことがわかった。遺構は必ずしも多くないが、泥流以後のこの地域の開発、土地利用の解明に資するものが多い。多くの調査区でAs-B層上面から掘り込まれた耕作具の痕跡を検出している。広範囲で集中的な耕作が行われたことを示すものであろう。この上位にAs-KKが認められる部分があり、この耕作の年代をかなり絞り込むことができる点でも貴重な成果である。本遺跡の東には広い範囲でAs-Bに直接埋没した水田が検出されているが、1区ではこの末端部にあたると思われる水田を検出している。3・5・7区では溝が検出されている。3区の溝はその形態から道に伴うものである可能性が考えられる。居住域にかかる遺構は6区の竪穴住居、掘立柱建物のみであった。9～10世紀の所産と考えられるもので、表面採取遺物でも、6区周辺で竪穴住居とほぼ同時期の遺物を得ており、この周辺に居住域が設定されていたことを窺わせる。

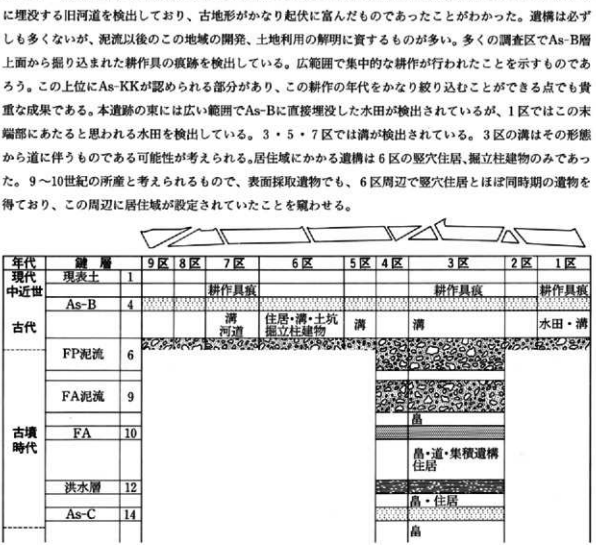



図8　調査区と確認面別主要遺構

### （1） 1区の調査

**概　要**　1区ではAs-B層上面から加えられた耕作の痕跡が調査区のほぼ全面にわたって検出されたほか、As-Bに直接埋没した水田跡及び溝群が検出された。また、帰属遺構は明確でないものの、墨書を有する土師質の高台付境や灰釉の耳皿をはじめとする平安時代の土器類、緑泥片岩製の石棒片などがこの水田の耕土下から出土している。現地表面からAs-B上面までの深度はほぼ100cm、As-Bの層厚は20cmほどある。As-B下は黒色～褐色土層（標準土層５層）となる。

**耕作具痕**

調査区のほぼ全面で検出されるが、１区東端部（R・S3～５グリッド）で特に顕著に認められた。As-B直下の地表面が切削された痕跡の群集である。同様の痕跡は前橋市・高崎市周辺の遺跡で確認され、耕作具痕と判断されている。

それぞれの痕跡は、直線的に耕作具に切られた部分を弦部、崩れた部分を弧とする半円形から三日月形を呈する。弦部の長さ７～20cmほど、As-B下面からの深度３～５cmほどの大きさである。直接の確認面は、As-B下面であり、図12はこの面における平面分布図である。

耕作具痕の平面分布からは、これが溝状の空白域により数単位に区分されるように見える。しかしこの空白域は、後述するAs-B下面の溝群の上部に当たる。As-Bの上から加えられた一定深度に至る人工が溝底部まで及ばなかったことによって形成されたもので、有意な存在ではない。全体としては、弦部が北または北西に向くような並びが認められる。当該耕作具が鋤様の物であれば南から北へ、鍬様の物であれば北から南へと向かう動作の産物であることが考えられる。弦部方向のそろい方を見ると、ほぼ1.5m四方でまとまりを持つことが観察される。耕作具痕同士が切り合うものはごく少ない。反復された行動の累積ではなく、一回性の行動の所産である可能性が高いものと考えられる。耕作具痕は、As-B層下面では、ほとんど乱れのないAs-Bに充塡されているかに見え、調査当初はAs-B降下直前の耕作の痕跡ではないかと考えられた。しかしフォールユニット単位の観察により、耕作具痕を充塡するAs-Bではユニットが乱れ、反転あるいは横転していることが認められ、As-B上面から加えられた人工によるものと判断された。耕作具痕はAs-B上面では明確にその形状をとらえることはできず、フォールユニットの乱れが見られるのみである。As-Bの断面では、As-Bに特徴的な小豆色の火山灰層がブロック化し、攪乱された状態として認められる。なお、薄層のため土層断面図には表記されていないが、部分的に上位のAs-KK層が残存しており、これがAs-B層の乱れを被覆していること、及び耕作具痕がAs-B層直上の褐色土を切っていることが観察されている。これにより、この耕作具痕はAs-B降下（1108年）からAs-KK降下（1128年）までの間で、As-B降下後の褐色土壌の形成以後に残されたものと判断される（本書Ⅳ－１参照）。

**水田**

１区のほぼ中央において、As-Bで被覆された水田畦畔が検出された。水田跡の東方はやや低い谷状を呈していて、畦畔は検出されず、東端近くから後述の溝群が設けられている。東南端も同様にやや低くなり、畦畔は認められない。西部ではAs-B下面の黒褐色土がごく薄く、すぐに泥流上面が確認される状態で、畦畔等は認められない。水田16枚が数えられるが、１枚の水田面全面を確認できたものは少ない。田面はほぼ平坦で、畦畔は幅40～60cm、高さ８～10cmで、大きな規模差はなく、いわゆる大畦に相当するものは認められない。各区画には水口が設けられるが、中央部の区画ではこれが明確でない。西部の南北に並ぶ列は方形を基

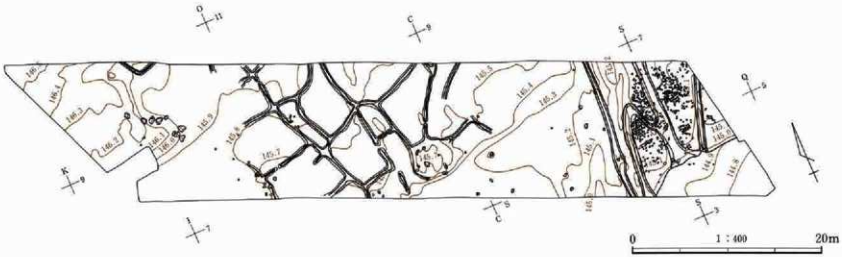



図9　1区泥流上面までの遺構配置

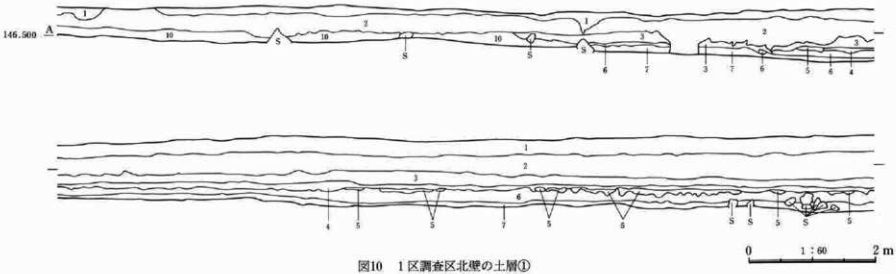
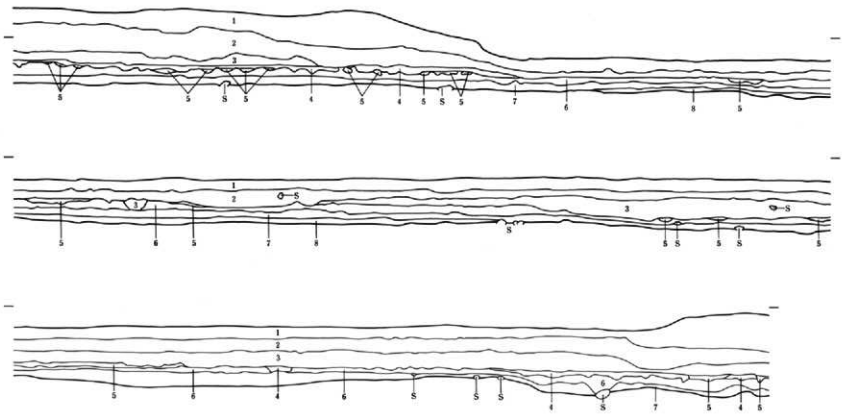
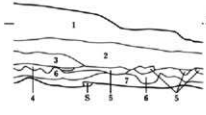



図10　1区調査区北壁の土層①






1：表土（耕作土）　1′：表土よりやや締まった褐色土
2：褐色土・鉄分が沈着した締まった赤褐色部分あり　2′：褐色土・鉄分沈着が見られない
3：締まって粘性のある黒色土・黄褐色の軽石を混入
4：As-B混入土・黒褐色又は赤褐色でさらさらしている
5：As-Bの小豆色火出灰のうち、耕作具によって動かされた部分
6：As-B・フォールユニットが明瞭に確認できる
7：粘性のある黒褐色土・As-B下の水田・畠耕土
8：暗褐灰色土・小礫を混入する
9：粒子の細かい野色土
10：褐色土・泥流層の上部にあたり礫を混入する

0　1：60　2 m

図11　1区調査区北壁の土層②

本的に志向していると判断され、南北方向畦も比較的直線を意識して構築されたものと思われる。面積を確定できるものはないが、広さもほぼそろう印象を受ける。東部では畦が蛇行し、方向を相互に違える。それぞれの水田面の形は大きく崩れ、広狭様々で面積も一定していない。

水田に直接伴うものではないが、耕土下から須恵器の坏、高台付塊などが出土し、墨書を有するものもある。近隣のグリッドからも須恵器、灰釉陶器の坏・埦類や甕、羽釜片などが出土している。一部8世紀にかかるかと思われるが、主体的には9～10世紀の遺物である。比較的狭い範囲の、かつ水田域の調査としては、遺物量が多いように思われる。この水田は、東方からつながる一連の水田遺跡の東端部に当たる可能性があり、調査範囲内には居住の痕跡は認められないものの、近接して集落が存在する可能性が考えられる。形状の崩れた水田形態も、次項の溝群と共に水田耕地域終端近くの土地利用の様相を示すものであろう。

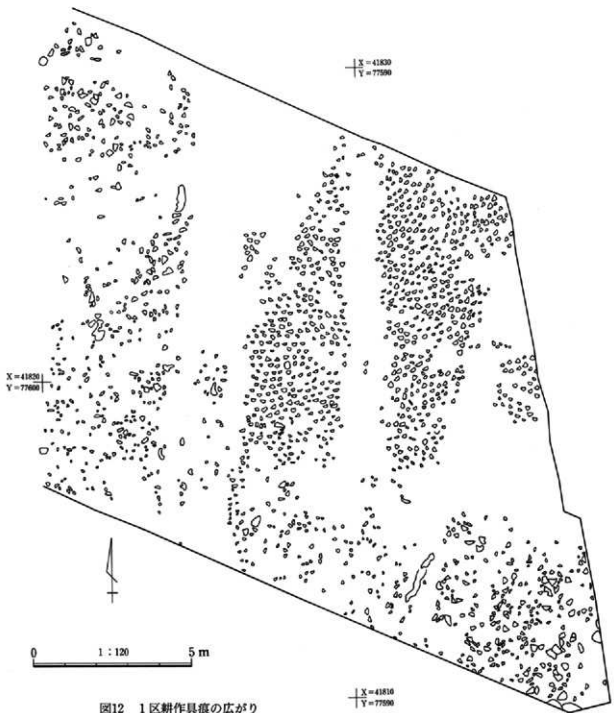



図12　1区耕作具痕の広がり

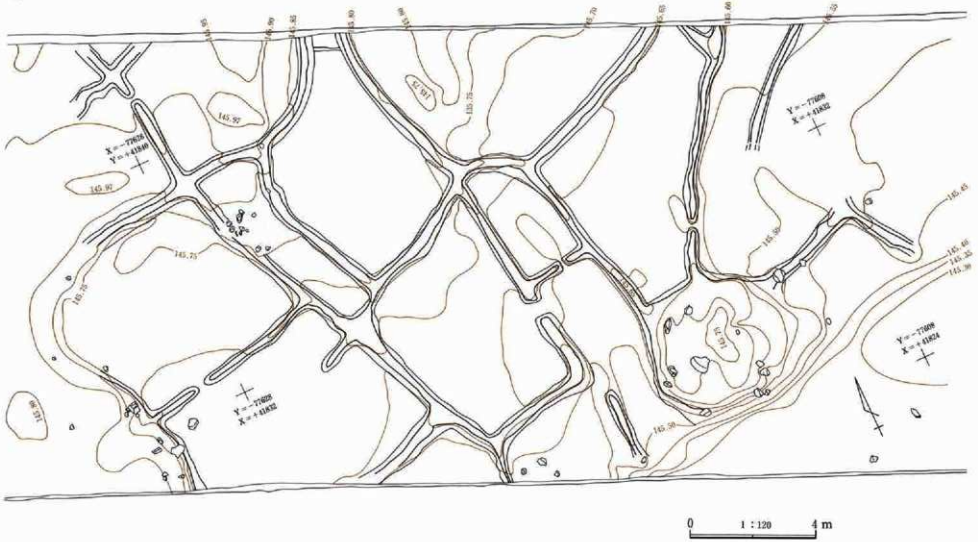



図13　1区 As-B 下水田

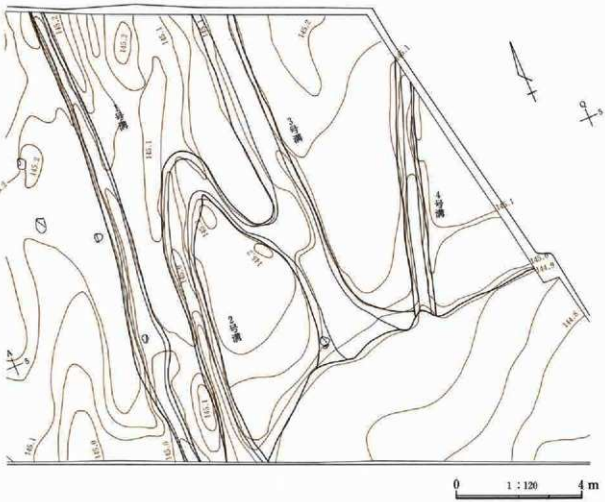



図14　1区溝群

**溝群**

1区の東端部に4条の溝がある。西から1～4号溝とする。ともに北から南への傾斜に沿っての走向を有する。断面形状は浅いU字形で明確な掘り形をもたない。南部で谷状地形に切られるため、終端は不明である。1・3号溝はほぼ平行する。2号溝は3号溝の中程からU字状に派生している。なお、上面の耕作具痕は2号溝から4号溝までの間に顕著である。この溝群に確実に伴う遺物はない。

**1号溝**　ほぼ南北の走行で南に下る。上端幅45～120cm、下端幅30～78cm、深さ25～30cm、検出長15m。

**2号溝**　全体的な走向はほぼ南北方向で南に下がる。3号溝から変則的なU字状に派生し、U字部の頂点は幅広になる。上端幅155cm、下端幅108cm、深さ23cm。直線的に延びる部分は南にやや広がり、上端幅95～140cm、下端幅35～100cm、深さ25～30cmとなる。検出長13.8m。

**3号溝**　ほぼ南北方向の走行で南に下り、1号溝とほぼ平行する。上端幅100cm、下端幅50cmほどであるが、南に向かうにつれて広くなり、南端では上端幅350cm、下端幅260cmとなる。深さ10～20cm。2号溝を派生する。検出長12m。

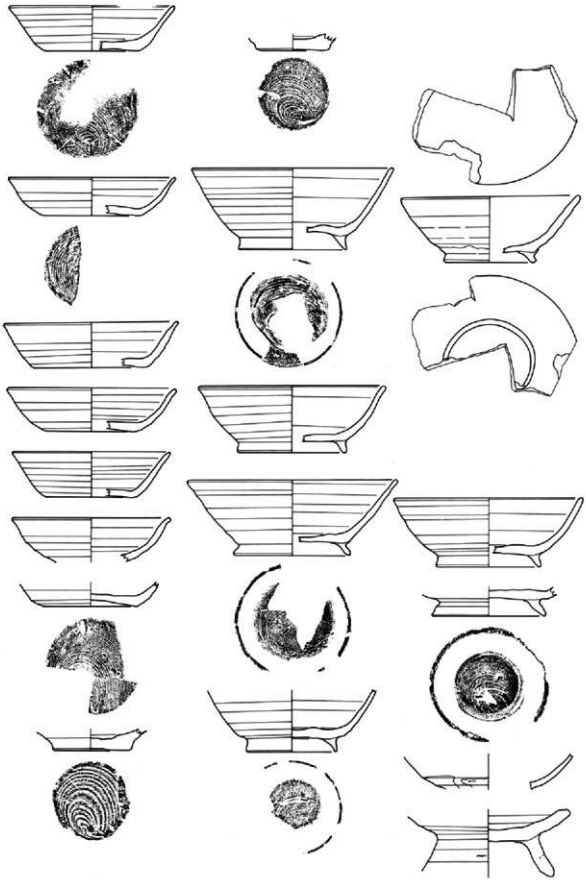


図15　1区 As-B 下水田　耕土下出土遺物①

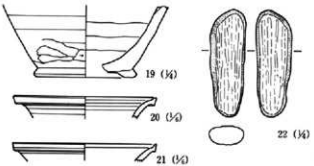



図16　1区 As-B 下水田　耕土下出土遺物②

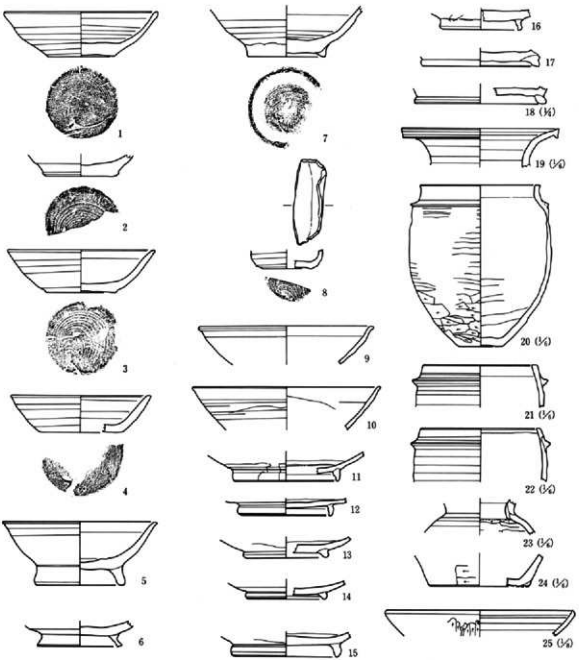



図17　1区グリッド出土遺物

**4号溝**　やや東に振れた走行で、南に下るが、1～3号溝とはやや方向を違えている。南の終端部では3号溝を切る。上端幅60～72cm、下端幅30～35cm、深さ10～15cm。検出長8.2m。

### （2）　2～5区の調査

**概　要**　2区では、遺構は検出されていない。As-B層下は旧河道と思われる砂層となっている。

3区では、As-B上面の耕作具痕を検出している。As-B下面では9～10世紀にかけての高台付埦、羽釜片、灰釉長頸壺等が出土しているが、遺構は確認されていない。泥流上面では溝5条を検出した。土層断面では、表土下にAs-B及びAs-Aの軽石を含む茶褐色土があり、次いで成層するAs-B層がある。層厚は20cmほどである。この下は粘性の強い、しまった茶褐色土で、漸移的に泥流層に至る。遺構確認面は、茶褐色土の上面である。

4区では、As-B上面の耕作具痕の存在を確認しているが、その他の遺構は認められない。As-Bは、下半部が残り、その下に黒褐色土層、暗褐灰色土層が認められる。しかし、水田畦畔は認められず、As-B降下時点での水田はこの地点では作られていないものと判断された。

5区では、As-B下面の遺構は認められない。泥流上面でも溝一条を検出しているのみである。

**3区1号溝**　発掘区の東端にあり、南北方向からやや西に振れた走行で、東に膨らみながら南に下る。上端幅3～4.2m、下端幅1～1.8m、深さ10～30cm、検出長12m。遺物はない。

**2・3号溝**　南西一北東方向で南に下がる。2号溝は上端幅40～50cm、下端幅20～35cm、深さ10～15cm。検出長13m。3号溝は上端幅40～50cm、下端幅20～30cm、深さ10～15cm。検出長14m。2号溝とほぼ平行して延び、規模も相同である。2号溝との間隔は0.8～1m。両者を併せて、道の側

図18　3区泥流上面の遺構配置

溝的な機能を有する可能性があろう。これにともなう遺物はない。

**4・5号溝**　4号溝は北西―南東方向の走行を有する。上端幅40～60cm、下端幅30～40cm、深さ20～30cm。検出長14.2m。5号溝は東半で4号溝と並行するが、中途でほぼ直角に屈曲し、北東―南西方向の走行に変わる。上端幅20～40cm、下端幅15～20cm、深さ20～30cm。検出長27m。4号溝との間隔は0.8～1.1m。規模も4号溝とほぼ相同である。2・3号溝と同じく側溝的な機能が想定される。遺物はない。

**5区1号溝**　南北方向にS字状に蛇行し、南部ではさらに西に屈曲する。上端幅40～100cm、下端幅20～70cm、深さ8～10cm。検出長13.5m。覆土中から須恵器の高台付埦底部片が出土している。

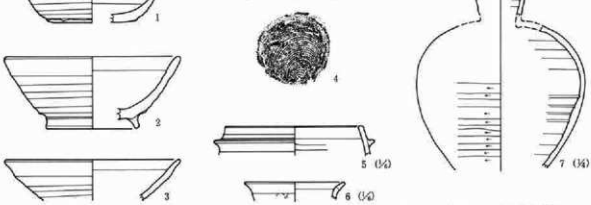



図19　3区As-B下面出土遺物

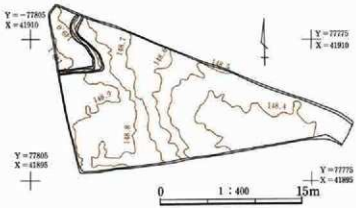



図20　5区泥流上面

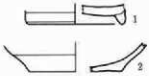



図22　5区1号溝出土遺物

図21　5区1号溝

### （3） 6区の調査

**概　要**　調査区の大半が泥流層上部まで削平を受けており、遺構は部分的にしか残存していない。平安時代の竪穴住居４棟、掘立柱建物３棟、溝、土坑を検出している。特定の遺構に帰属しない遺物も、検出された住居と同じく９～10世紀前半にかけてのものが多い。泥流層上面の居住域にかかる遺構の検出は本区のみである。部分的に残存するAs-B層下には畦畔等による高まりは認められず、土壌の堆積状況観察とも合わせて、As-B層下の水田はないものと判断された。表土下にAs-B及びAs-Aの軽石を混ずる茶褐色土があり、この下位に部分的にAs-KKが認められる。As-Bの層厚は20cmほどである。この下は粘性の強い黒色土であるが、先述のとおり水田畦畔は認められない。調査区内の大部分は黒色土下の泥流堆積層との漸移層である淡茶褐色土上面まで削り込まれており、この上面が遺構確認面となっているため、残存した遺構も上部はかなり失われている。

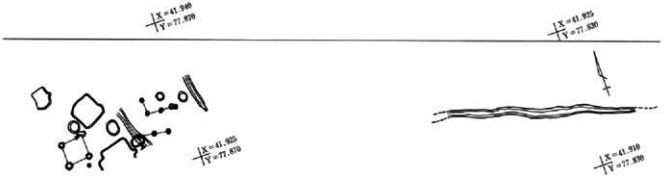
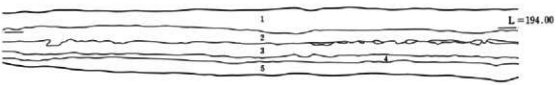



図23　6区遺構配置概念図

0　1：400　20m




1：表土（耕作土）
2：As-Bを含む茶褐色土。サラサラした土で、径２～３㎜の赤褐色土粒、５ミリほどの軽石粒を混入する。この下層に部分的にＡＳ-ＫＫが残る
3：As-B純堆積層。フォールユニットの成層が見られる。
4：黒色土。粘性が強い。水田畦等は検出されない。
5：淡茶褐色土：泥流層への漸移層。粘性が強く、軽石、小石を混入する。

0　1：60　2m

図24　6区調査区北壁の土層

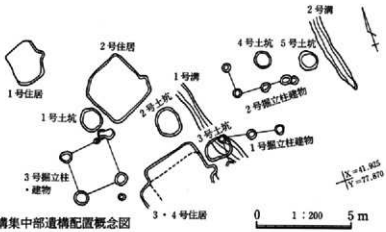



図25　6区遺構集中部遺構配置概念図

0　1：200　5m

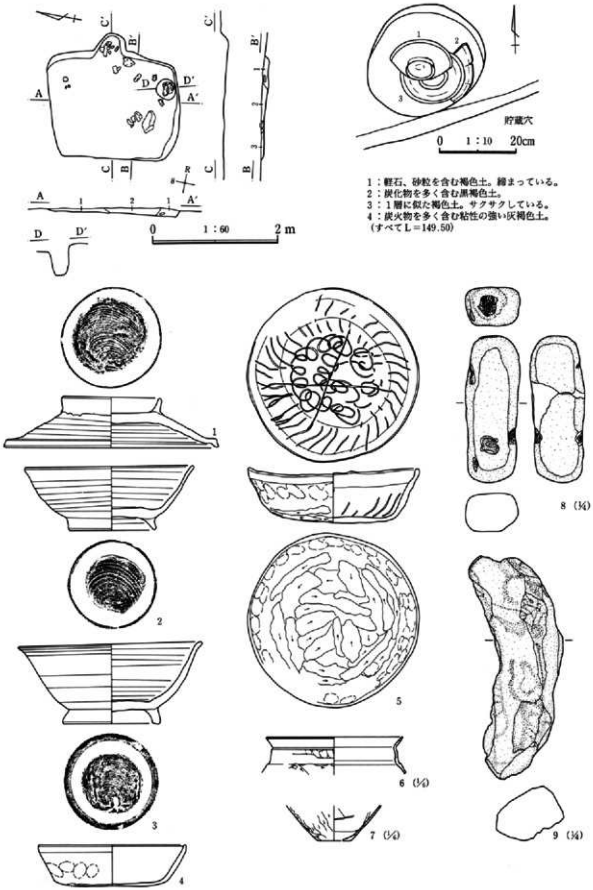



図26　6区1号住居と出土遺物

**住　居**

**1号住居**　主軸方位N-78°-Eで、推定長軸長2.1m、短軸長1.6mを測る。南北に長い隅丸長方形を呈する。北西部の1/4程が削平されており、残存部分の壁高も10cm程しかない。覆土は基本的に炭化物及び砂粒を多く含む暗褐灰色土である。床面は東から西へわずかに傾斜を有するがほぼ平坦で、締まりはさほど強くない。部分的に下位の泥流層の砂礫が見られる。残存する壁は70°～90°の急傾斜で立ち上がる。東壁中央に竈を設けるが、これも削平を受けており、詳細な構造の把握はできない。わずかに焼土がみられ、土器片がやや集中した状況で認められ、壁が30cmほど外側へ張り出していることが観察される。袖石かと思われる石も見られる。貯蔵穴は南東隅からやや西よりの部分に1基設けられている。直径30cm程の円形で、深さ約35cmある。上部から須恵器高台付埦・蓋が一括して出土している。これらは貯蔵穴覆土の上位にあたり、住居跡の第一次覆土下層から出土しており、貯蔵穴埋設後に置かれたものかとの所見が得られている。柱穴・周溝等は確認されていない。北東部及び北西部に炭化物が認められ、南西部には比較的大きな石が認められた。遺物は竈から貯蔵穴にかけての東南部分に集中する。先述の須恵器の他、土師器坏、甕がある。遺物の特徴から9世紀前半から中葉にかけてのものと考えられる。覆土中からは、土師器埦、羽釜、須恵器高台付埦、長頸壺、天目碗片などが出土している。

**2号住居**　主軸方位N-64°-Eで、推定長軸長2.9m、短軸長2.8mを測る。ほぼ正方形を呈するが、北西隅がやや内側に崩れたような様相で、この一隅のみ隅切り状になる。他の三隅はあまり丸みを持たずに屈曲する。やはり上部を削平されており、下部のみ残存する。残存壁高は10cmほどであるが、70°～90°の急傾斜で立ち上がる。覆土は鉄分の多い黒褐色土が上層に、下層に砂粒を混入する水性堆積と思われる黒色土層が堆積する。床面は東から西へわずかに傾斜する。しまりは強くない。東壁南端近くに竈を設けている。幅40cm、煙道方向へ50cmほどの規模で中央部がやや窪む。削平のため、詳細な構造は把握できない。壁が30cmほど張

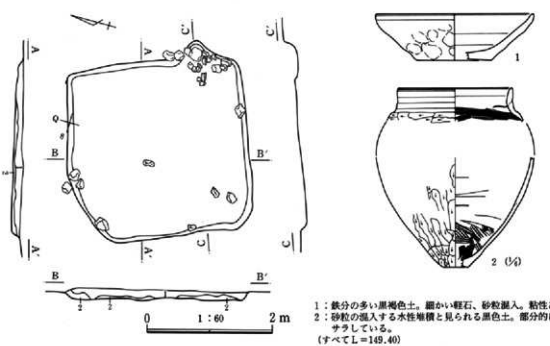



図27　6区2号住居と出土遺物

り出し、袖石などにあたると思われる礫がならび、土器片も集中する。灰黄褐色の粘土も認められる。竈内には、わずかに焼土が認められ、炭化物が集中する。竈手前右に、浅い窪みがあるが、貯蔵穴は認められない。壁周溝、柱穴も認められない。

遺物は竈周辺に集中し、土師器甕、高台付埦、羽釜などがあるが、図示したもの以外はいずれも細片である。坏は厚手で調整が粗く、砂底である。10世紀前半の所産であろう。覆土から土師器甕、坏、土師質の高台付埦、羽釜が出土している。

**3・4号住居**　4号住居の南に、その大半を切って3号住居が造られている。ともに、南部は圃場整備によって削られている。3号住居は、主軸方位N-77°-Eで、東西壁長3.9m。竈の位置から見て、おそらく縦長の隅丸長方形を呈したものと考えられる。覆土は、下層にしまりの弱い暗黄褐色土層があり、上層にしまりのある暗褐色土層が認められる。下層には炭化物が目立つ。残存壁高は30cmほどあり、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平で、平坦である。暗褐色土で床を貼っているが、しまりはさほど強くなく、明確にはとらえられない。東壁に竈を設けている。壁が40cmほど張り出し、その中にわずかに焼土が認められる。この手前側には、径40cm、深さ15～20cmの窪みがある。この中にも少量の焼土があり、土器が集中している。袖石などの用材や粘土は認められない。柱穴、貯蔵穴は認められない。4号住居はその大部分を3号住居に切られ、北壁部のみが検出された。北壁の方位は、N-75°-Eである。北西隅部の残存が良く、ほぼ30cmの高さで垂直に立ち上がっている。土層断面（図28b-b'）では壁の外周に高まりが認められ、周堤状の存在として認識されている。覆土の観察できた部分は少ないが、最下層は壁際の暗黄褐色土で、炭化物を多く含む黄褐色土層が部分的にこれを覆っている。床面は3号住居と同レベルにあると思われるが明確ではない。

遺物は、3号住居に属するものとして土師器坏・埦、甕、台付甕、須恵器甕、羽釜がある。10世紀前半の所産であろう。確実に4号住居に伴う遺物はない。覆土から土師器埦、甕、高台付埦、鉄滓（？）が出土している。

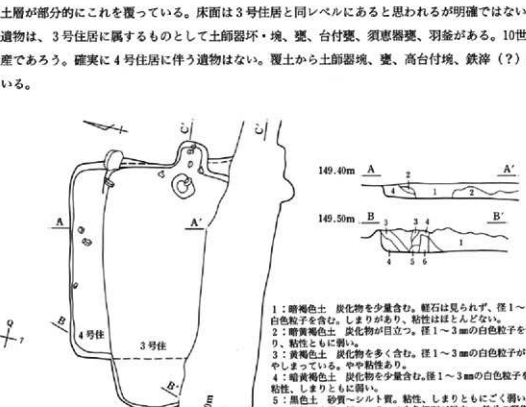



図28　6区3・4号住居

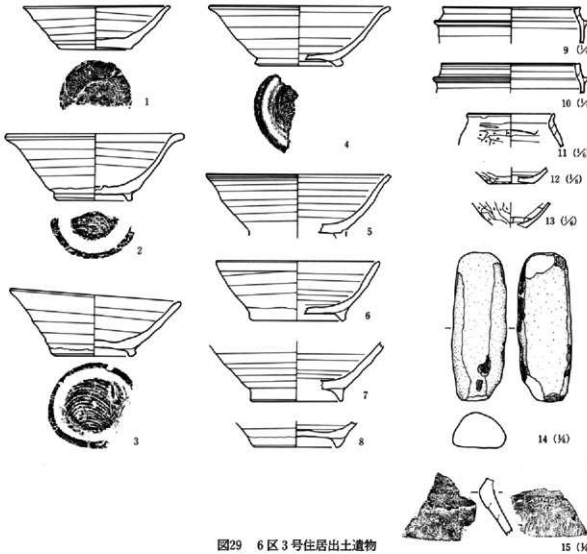



図29　6区3号住居出土遺物

**掘立柱建物**

3棟の掘立柱建物を検出した。泥流上面を確認面とする。3号掘立柱建物以外は圃場整備工事による削平を受けて、全容をうかがうことはできず、出土遺物もごくわずかで時期確定の資料に乏しい。3棟ともにほぼ軸線をそろえて作られており、覆土も共通するため、相互に近い時期につくられたものと考えられる。1・2号掘立柱建物の柱穴内出土遺物および、覆土中にAs-Bテフラを含まないことから見ると、平安時代に属するものであろう。

**1号掘立柱建物**　東西2間、南北1間であるが、計4本の柱穴のみが残されていた。南部が削平されているため、全体の規模、形状は不明。東西方向の辺は、N-97°-Eを示す。掘り方は浅く、最も深いPit 4で10cm弱ほどである。柱痕は明確ではない。覆土は、各柱穴とも共通して軽石粒、炭化物粒を含む暗灰褐色土であるが、しまりは弱く、粘性にも乏しい。柱抜取り後の埋没土であろう。Pit 2から羽釜破片が出土している。

**2号掘立柱建物**　東西2間、南北1間として認定した。北の柱穴（Pit 4）の南西及び東端柱穴（Pit 3）の東にもピットがある。北部は削平されているため、全体の形状、規模は不明。東西方向の辺は、N-94°-Eを示す。掘り方は深さ10～20cmほどで、泥流層中の礫が底部に当たるものもある（Pit 1・4）。柱痕は明確ではない。覆土は、各柱穴とも共通して軽石粒、炭化物粒を含む暗灰褐色土であるが、しまりは弱く、粘性にも

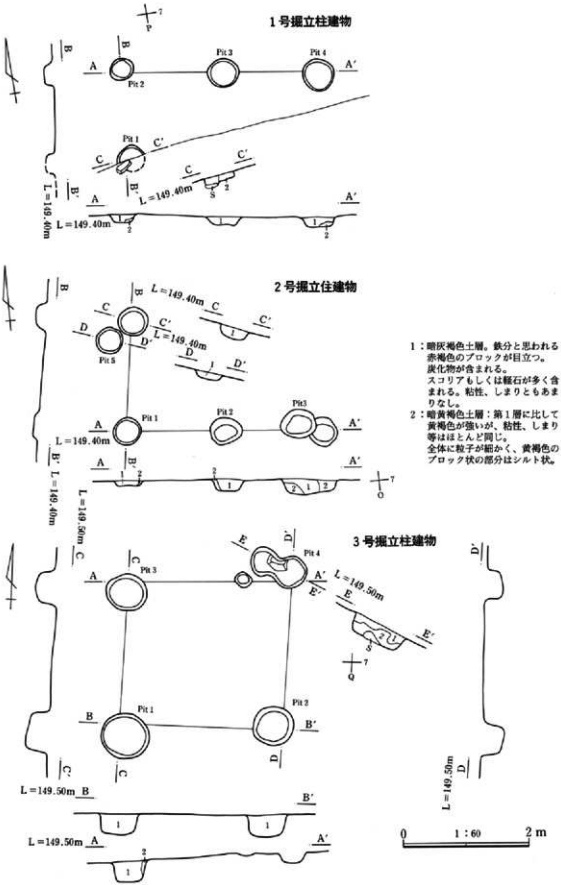
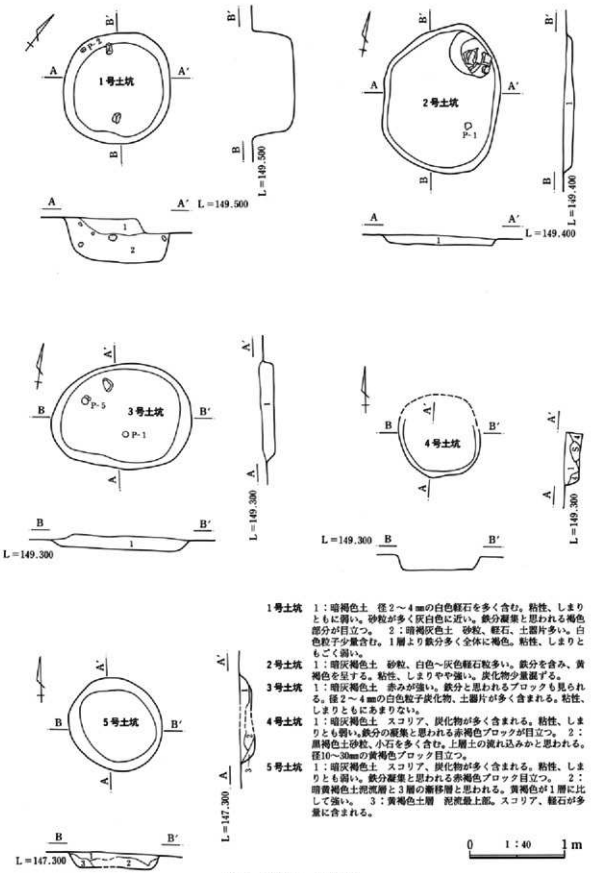



図30　6区1～3号掘立柱建物




**1号土坑**　1：暗褐色土　径2～4㎜の白色軽石を多く含む。粘性、しまりともに弱い。砂粒が多く灰白色に近い。鉄分凝集と思われる褐色部分が目立つ。　2：暗褐灰色土　砂粒、軽石、土器片多い。白色粒子少量含む。1層より鉄分多く全体に褐色。粘性、しまりともごく弱い。

**2号土坑**　1：暗灰褐色土　砂粒、白色～灰色軽石粒多い。鉄分を含み、黄褐色を呈する。粘性、しまりやや強い。炭化物少量混ずる。

**3号土坑**　1：暗灰褐色土　赤みが強い。鉄分と思われるブロックも見られる。径2～4㎜の白色粒子炭化物、土器片が多く含まれる。粘性、しまりともにあまりない。

**4号土坑**　1：暗灰褐色土　スコリア、炭化物が多く含まれる。粘性、しまりとも弱い。鉄分の凝集と思われる赤褐色ブロックが目立つ。　2：黒褐色土砂粒、小石を多く含む。上層土の流れ込みかと思われる。径10～30㎜の黄褐色ブロック目立つ。

**5号土坑**　1：暗灰褐色土　スコリア、炭化物が多く含まれる。粘性、しまりとも弱い。鉄分凝集と思われる赤褐色ブロック目立つ。　2：暗黄褐色土 挹流層と3層の漸移層と思われる。黄褐色が1層に比して強い。　3：黄褐色土層　挹流最上部。スコリア、軽石が多量に含まれる。

図31　6区1～5号土坑

乏しい。柱抜取り後の埋没土であろう。Pit 1から奈良時代と思われる甕破片、Pit 3から須恵質の羽釜破片が出土している。

**3号掘立柱建物**　東西南北共に1間の、東西方向にやや長い建物として認定した。4柱穴であるが、北西隅の柱穴（Pit 3）はやや南にずれる。また、北東隅の柱穴（Pit 4）周辺にもピットがある。Pit 1—Pit 2はN-90°-E。掘り方は18～30cmほどと、3棟の中では最も深いが、柱痕は明確ではない。覆土は、各柱穴とも共通して軽石粒、炭化物粒を含む暗灰褐色土であるが、しまりは弱く、粘性にも乏しい。柱抜取り後の埋没土であろう。遺物は認められない。

**土坑**

**1号土坑**　径1.2m程の円形で、確認面からの深さは40cmほどである。覆土は暗灰褐色土が上層に、暗褐灰色土が下層にあり、両層の境界近くで灰釉陶器高台付埦片、土師器甕片などが出土している。底面は泥流上面に置かれ、特に硬化した状況はみられない。底面から土師器甕片が出土している。

**2号土坑**　南北に長い隅丸方形ないし楕円形を呈し、底面での長軸長1.46m、短軸長1.08m。上部はかなり削平されており、壁高は10cmほどしかない。北東隅に小ピットを伴う。径40cmほどの円形で深さ10.5cm、この部分に礫が集中している。覆土は暗褐灰色土で、底面は泥流中にあり、ほぼ水平に作られる。特に硬化した状況はみられない。底面から土師質の羽釜片が出土している。

**3号土坑**　東西にやや長い長円形を呈し、底面での長軸長1.2m、短軸長0.9m。東半は1号溝に切られる。上部はかなり削平されており、壁高は10cmほどしかない。覆土は暗褐灰色土で、底面は泥流中にあり、ほぼ

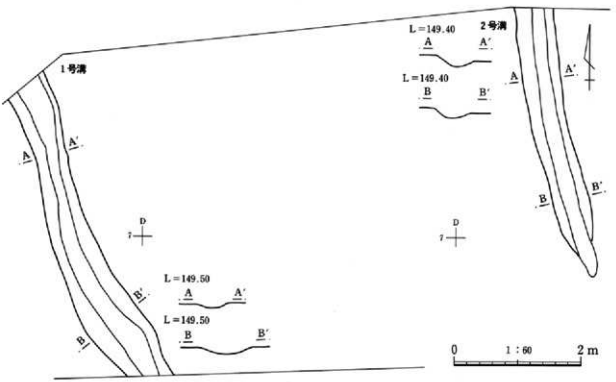



図32　6区1・2号溝

水平に作られる。特に硬化した状況はみられない。底面から土師質の羽釜片、高台付埦片が出土している。また、覆土から土師器坏片かと思われる小片が出土している。

**4号土坑**　底面での径74cmほどの円形と思われるが、北半は確認できず、南半は1号溝に切られる。残存部分での最大壁高は14cmほどである。覆土は、炭化物を多く含む暗灰褐色土で、底面は泥流中にあり、礫が目立つ。底面から須恵器埦片、覆土から高台付埦、土師器甕片が出土している。

**5号土坑**　底面での径79cmほどの円形を呈する。残存壁高18cm。覆土は、下層が暗黄褐色土、上層が暗灰褐色土となっている。底面は泥流中にあり、ほぼ水平に作られる。出土遺物はみられなかった。

**溝**

**1・2号溝**　1号溝は、泥流上面で確認された溝である。N-12°-Wで南に下る。確認長は5m、幅40～120cm、深さ4～6cmほどである。遺物は認められない。2号溝は、1号溝とほぼ平行する。同じく泥流上面で確認された溝である。N-21°-Wで南に下る。確認長は4.5m、幅60～70cm、深さ6cmほどである。ともにごく浅く、壁も明確ではない。自然流路である可能性もある。出土遺物は見られなかった。

**3号溝**　泥流上面で確認され、As-Bに覆われた溝であるが、湧水のためAs-Bが降下堆積層かどうか確認できていない。N-66°-Wで西北西から東南東に向けてゆるやかに下る。確認長は約10m、幅40～100cm、深さ10cmほどである。遺物は認められない。

### (4)　7～9区の調査

**概　要**　7区では、As-B上面で耕作具痕及び2条の旧河川跡が検出され、As-B下面からは溝が検出された。また、地震によると思われる地割れを観察している。8・9区では遺構は認められない。標準的な土層は、圃場整備に伴う客土を含む現在の耕作土、および圃場整備以前の耕作土が45～60cmほどの厚さで認められ、この下に成層するAs-Bが堆積する。

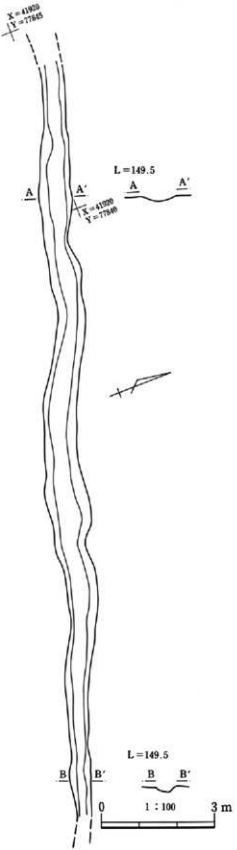


図33　6区3号溝

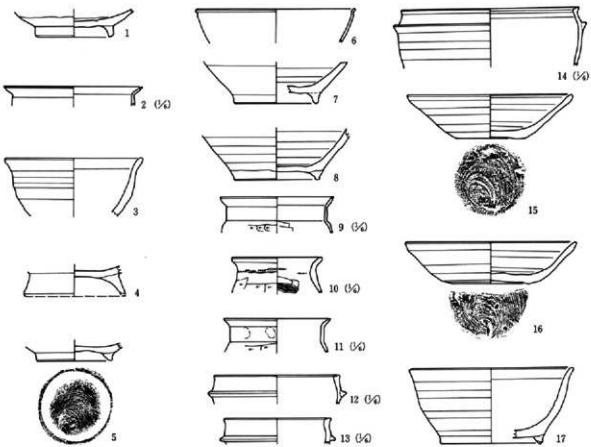



図34　6区土坑出土遺物（1～5）グリッド出土遺物（6～7）

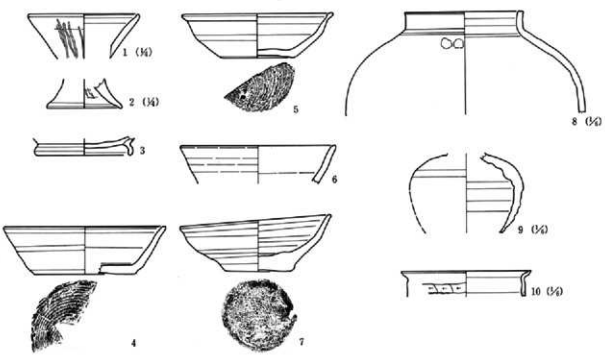



図35　表面採集遺物（1～3：3区　4～10：6区）

15cmほどの厚さがあり、上部には桃色の細粒火山灰層が顕著である。耕作具痕がこの層を切るが、全体的には乱れの少ない堆積状況が観察される。河川跡では堆積土の中位よりやや下にこの層が観察され、地震による地割れはこの層を切っていない。As-B層下には径5～50mmほどの軽石を含む黒色土層があり、以下は河川性の砂礫層となる。

**耕作具痕**

調査区のほぼ中央、1号河川跡の西側に集中的に認められる。特に、H11グリッドからH13グリッドにかけて2群の密集部分が見られる。As-B直下の地表面が半円形に切削された痕跡の群集である。1区で検出された耕作具痕と同様、As-B層下面ではAs-Bに充填されているかにみえるが、この層の上から行われた耕作行動の痕跡である。7区ではAs-KKとの関係は把握できず、1区のそれほど年代を絞り込むことができない。それぞれの痕跡は、直線的に耕作具に切られた部分を弦部、崩れた部分を弧とする、半円形から三日月形を呈する。弦部の長さ14～18cmほど、As-B下面からの深度5.5～9cmほどの大きさである。顕著な集中群のうち、北部の群は弦部を東方向に向けた、比較的直線的な傾向を示す並びが認められ、東西方向へ移動しながら行われた行動の痕跡であることが想定される。南部の群は基本的には北方向に弦部を向けた並びが認められるが、ややばらつきがあり、北の群に見られるような直線性は弱い。弦部が南に向くもの、東に向くものも介在する。周辺部に散在する耕作具痕は東、または北方向に弦部を向ける。密集部にあっても切り合いのあるものはごく少ない。反復された行動の累積ではなく、一回性の行動の所産である可能性が高いものと考えられる。

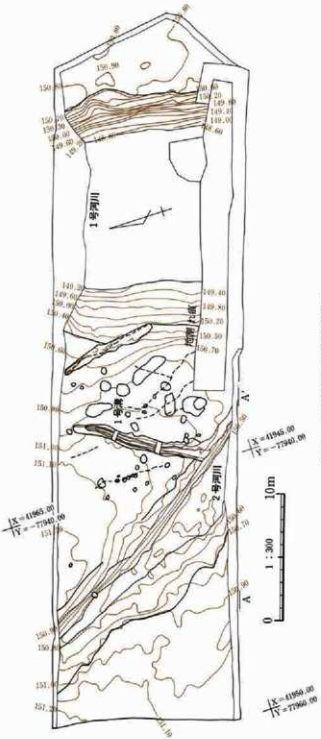



図36　7区粘土上面の遺構配置

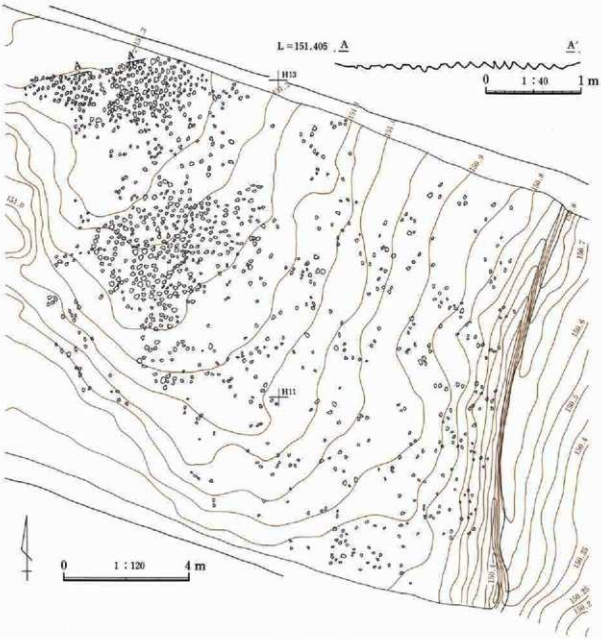



図37　7区耕作具痕の広がり

**溝**

**1号溝**　調査区のほぼ中央に北東から南西方向に向かって、わずかに蛇行しながらのびる。南端は2号河川跡にとりつく。北に向かって浅くなりながら調査区北壁の手前で終端となる。幅1m、深さは20～35cmほどで、調査長は11.5mである。径5～50mmほどの経石を含む黒色土層で埋没するが、As-B降下時点においても幅の狭い窪みとして痕跡を残していたものらしく、覆土の上位にはAs-Bが堆積する。遺物はない。

**河川跡**

**1号河川跡**　調査区の東端を南北に横断する。上端幅18～20m、深さ1.6mの河道である。As-Bは河床か

ら厚さ20cmほどの間層を挟んで30cmほどの厚さで堆積している。

覆土から土師器・須恵器の甕片、須恵器の坏片が出土している。

**2号河川跡**　調査区の北西端から中央やや西にかけて斜めに横断する。上端幅18～20m、深さ1.6mの河道である。As-Bは河床から厚さ20cmほどの間層を挟んで堆積している。厚さ30cmある。

覆土から土師器・須恵器の甕片、須恵器の坏片が出土している。

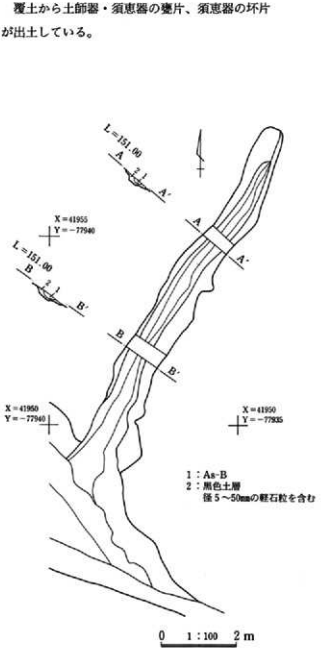



図38　7区1号溝

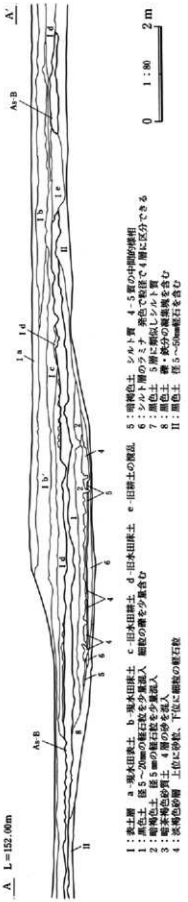



図39　7区2号河川の土層（図36A－A'部）

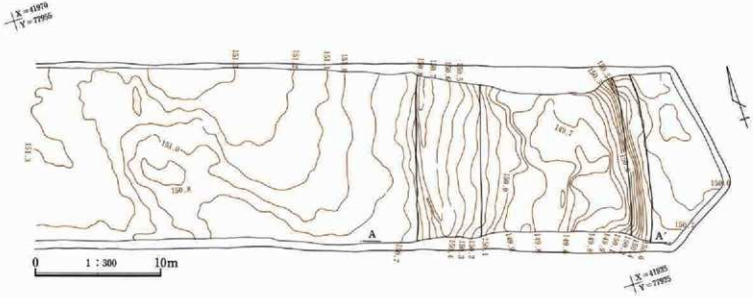



図40　7区1号河川

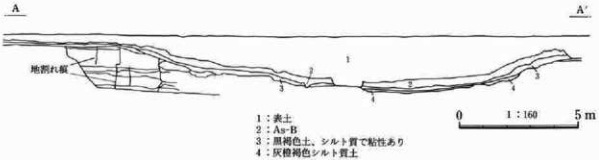



図41　7区1号河川の土層

# 3　泥流下面の調査

**概　要**　泥流下の遺構は3区のみで認められた。4区では試掘坑から遺物を得ているが、遺構は認められていない。この地域の古墳時代遺跡を特徴づけるのが、榛名山の噴火に伴う泥流堆積物の存在である。標準土層に示したとおり、泥流層は、Hr-FPの噴火に伴うもの（6層）とHr-FAの噴火に伴うもの（9層）との2層が、降下したFP層（7層）及び若干の間層（8層）をおいて重なっており、これらを併せた厚さは4mを超える。泥流層の下にはFA層（10層）がある。9層下及び10層下に畠が認められ、降下したFAにより被災した10層下畠の復旧行動の結果が9層下畠であることが想定されている。これは、FAの降下と泥流の到達との間に時間差があったことを示すものである。10層下には基本的にはAs-C降下以後に形成された、この軽石を含む黒色土層（11・13層）が堆積しているが、中に数枚の洪水堆積層を挟む。FA層直下で、部分的に認められる洪水層については、Hr-FAの噴火に直接伴うものであるのか、やや先行するものであるのか判断しがたい。Hr-AAと考えられる火山灰を多量に含む洪水層（12層）も部分的に残存し、この上下に住居が造られ、畠と思われる痕跡も残されている。As-C（14層）はやや変則的な堆積を示す。基本的にはAs-Cを混入する黒色土層（13層）の下、これを含まない黒色土層（15・16層）の上に堆積するが、As-Cを畝間に堆積する畠では、畝の構成土中にAs-C軽石粒や一部12層までもが含まれる。13・14層中にAs-C層が介在する部分も観察されており、この遺跡で認められるAs-Cがすべて降下堆積層であるかどうかについては疑問が残る。13層と15層の境界でも畠の可能性を示す土層断面が観察されている。遺物としては縄文時代前期、後期の土器が出土しているが、細片であり、数もごく少ないため、このころの具体的な生活の痕跡を追うことはできない。遺構の上で最古の存在としては、13層―15層間の畠と考えられる痕跡があるが、確実なものとしてはAs-Cに埋もれた畠が最も古い。この畠がいつの時点で拓かれたかについては情報が少ないが、住居覆土から出土している赤井戸式、樽式土器やS字状口縁台付甕の小片がこれを示唆するものであろうか。

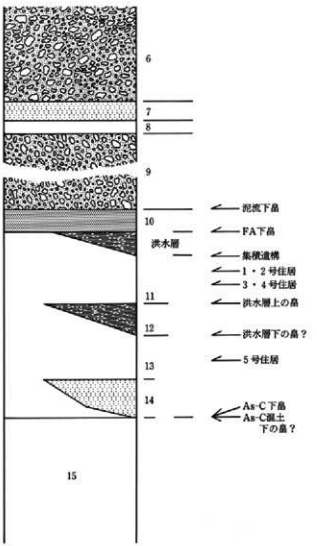



図42　泥流層以下の土層と遺構

## （1）畠

**概　要**　泥流下からは平面的に4面の畠が検出された。また、土層断面の観察から畠と想定され

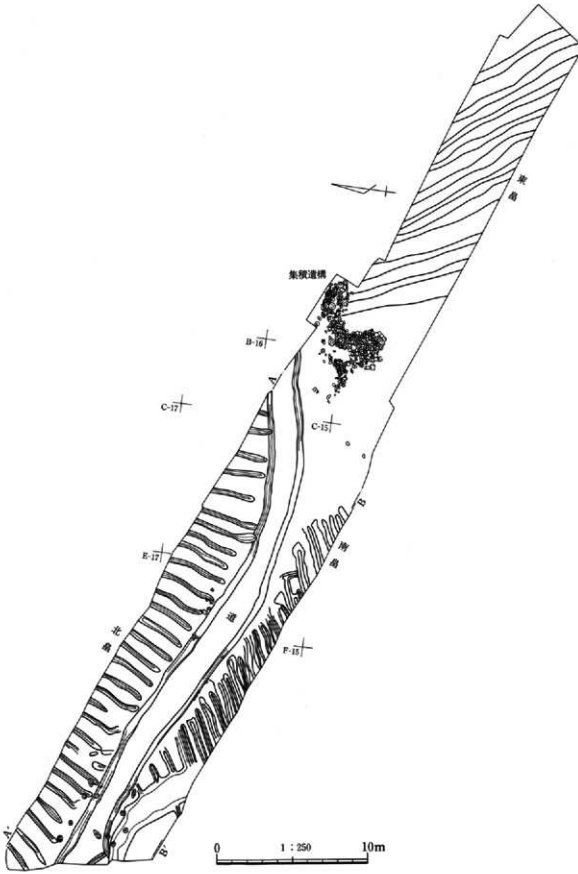



図43　3区泥流下面の遺構配置

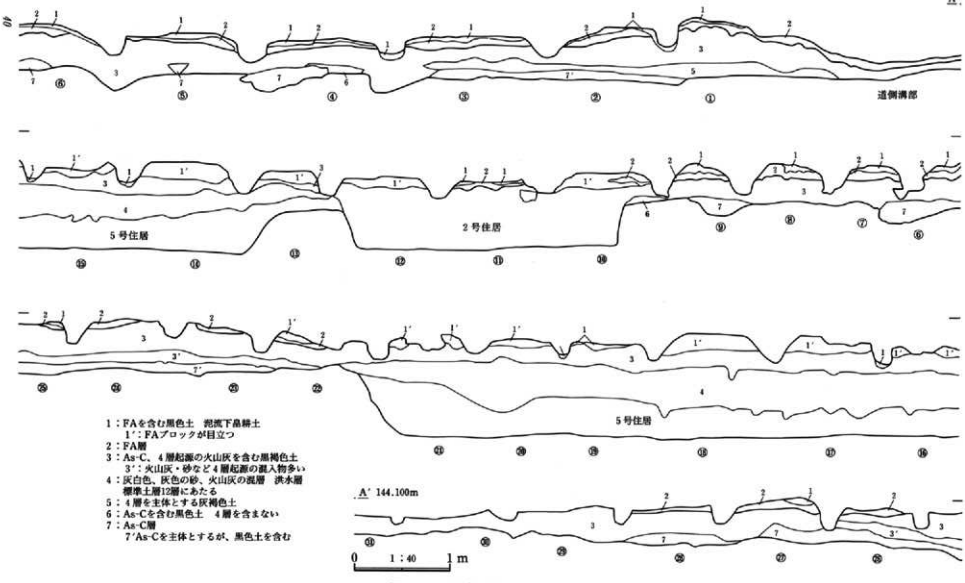
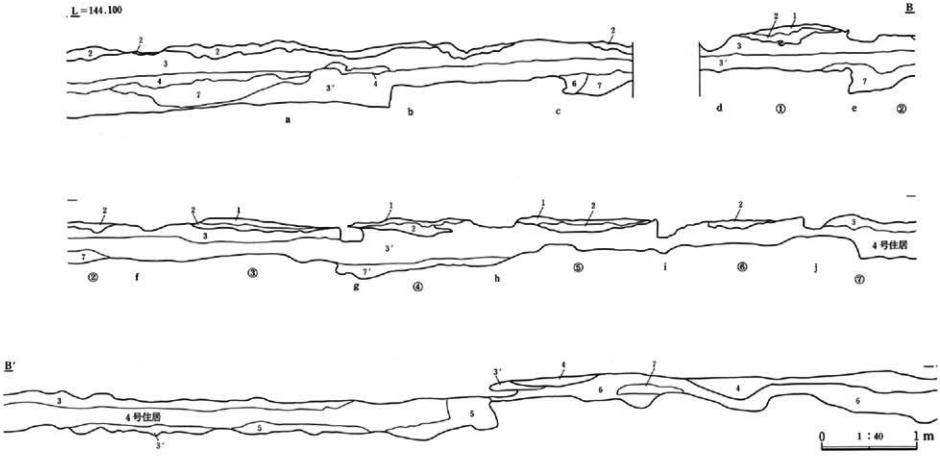



図44　3区調査区北壁の土層




1：FAを含む黒色土　泥流下畠耕土
2：FA層
3：As-C、4層起源の火山灰を含む黒褐色土　　3'：火山灰・砂など4層起源の混入物多い
4：灰白色、灰色の砂、火山灰の混層　洪水層　標準土層12層にあたる
5：3層中に4層がブロック状に混入
6：As-Cを含む黒色土　4層を含まない
7：As-C層　　7'：As-Cを主体とするが、黒色土を含む

図45　3区調査区南壁の土層

る、畝状の起伏も2面認められる。

確認面毎に整理すると、上位から、

泥流下畠：FA泥流層（9層）で埋没した畠

FA下畠：FA層（10層）で埋没した畠

洪水層上の畠：12層上に痕跡的に認められる畠

洪水層下の畠：12層下で、土層断面から想定される畠

As-C下畠：As-C層（14層）に覆われた畠

As-C混土下の畠：黒色土層（16層）上で土層断面から想定される畠

である。

泥流下畠とFA下畠については、従来、これが区分されるような事象は観察されていなかった。降灰と泥流はほぼ時間差なしに、引き続いて生じたものであるとの理解が一般的であった。しかし、調査区西部の畠において、畠耕土の土層断面中にFA層が認められ、この地点においては、両者が時間差をもってつくられた、区分されるべき存在であることが判明した。

泥流下畠は、調査区のほぼ全面に広がっているが、器物集積遺構周辺を境に、大きく東部と西部に二分される。また、西部の畠は、その中央を東西に走る道により南北に二分されるため、合わせて3つの部分に分けることができる。東の畠を東畠部、西の畠のうち、道以北を北畠部、道以南の部分を南畠部とする。3か所の畠は、それぞれに異なった様相を示している。東部畠はFA降下時点では耕作が行われておらず、FA降下後も耕作されていない。北畠部、南畠部はFA降下時点での耕作が想定され、FA降下後には南畠部と北畠部とで異なる方式をもって耕作が再開されている。これが泥流災害からの復旧行為にあたるものではないかとの想定もなされている。

**FA下畠と泥流下畠**

**東畠部**　調査区の東部に展開する。北西部では、器物集積遺構がこの畠上に設けられる。畝は低平で、畝間溝はごく浅く、畝の凹凸がごく不明瞭な状態で検出された。As-C混土を耕土とし、降下したFAに覆われ、この上を直接泥流が覆っている。北壁近くではFA下の洪水層に覆われている部分もある。畝は調査区内に9条が認められ、北西ー南東の方向を示す。それぞれの畝は調査区内ではとぎれない。また、ほぼ等間隔で並び、この中での単位等を析出することはできない。80～100cmの幅で、高さは10cm以下のものが多い。畝間溝は9条認められ、畝の頂部から頂部までの幅は1mほどである。畝・畝間の溝が明瞭ではないこと、器物集積遺構が畠をつぶす形で設けられていることなどから、FA降下時点では既に耕作が行われていない、南畠部・北畠部に比して、幾分古い畠の跡と判断された。植物珪酸体分析の結果によってもこれは裏付けられ、FA直下層ではヨシ属が圧倒的に卓越した、湿地的な環境が復元されている。

**南畠部**　調査区の西部南半に展開する。直接の遺構確認面は、泥流直下面である。西端部では地形的にやや高まっていたらしく、この部分を泥流によって削られており、畝が不明瞭となる。東部でも上部が泥流によって削り取られている部分が多い。中間部では、畝及び畝間の溝が比較的明確にとらえられる。泥流下畠は、畝9条分が認められた。総体的には東北ー西南の方向を示している。各畝はこの畠の北を東西に走る道のやや手前で北方向の終端となる。畝の北端は、西部では道の南側線にそろうが、東側では道から離れ、北西ー南東方向にのびる。必ずしも道に沿った区画をなしてはおらず、かえって、畝の終端を直線的に構成しようとする意識がうかがわれる。各畝共にほぼ等間隔で並び、この中での単位等を析出することはできない。

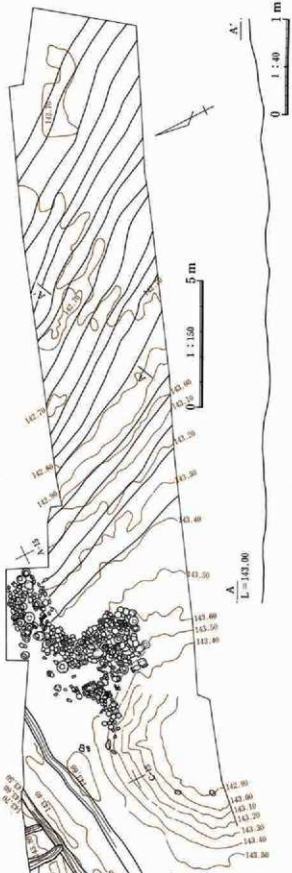



図46 東 畠 部

畝は上部を泥流に削られるものが多い。断面形も明瞭さを欠く。畝間溝の断面は逆台形状を呈する。

畝から畝間溝への肩部や、畝間溝の壁はさほど崩れていない。このことから、掘削から埋没までの時間が、さほど長くなかったことが示唆される。畝の基部は地山のAs-C混土で、畝中央部がやや窪む。この窪みにはFAが堆積するが、この窪みがFA下畠の畝間溝にあたる。畝1では、この窪みに堆積したFAの上に、薄い黒色土を挟んで、やや汚れたFAが載り、さらにその上層にFAを含む黒褐色土が載る。この状態は畝3・4・5でもよく観察される。畝間溝周辺には、FAの降下堆積層が認められないことが多いが、畝4の東畝間溝はFAを切る。このことから、泥流下畠は、FA降下後に、この火山灰を掘り上げて畝間溝を作り、降下したFAの上に直接、掘りあげた火山灰や、これの混じった土を盛ることによって、畝を作ったものと考えられる。泥流下畠の畝間溝とFA下畠のそれは、ほぼ50cmほどの間隔を置いて交互に現れる。FA下畠の畝の中央近くに、泥流下畠の畝間溝が掘られていることになる。FA下畠は泥流下畠とほぼ同じ方向で作られ、畝16条分が認められる。FA下畠に比して北方向が道際近くまで延び、道を意識したものであろうことが示唆される。南は調査区外に延びる。各畝共にほぼ等間隔で並び、この中での単位等を析出することはできない。東部では、泥流下畠が調査区外にあたって認められず、FA下畠のみ認められる部分がある。畝a～dの部分では、畝、畝間溝が、なだらかな起伏をなしていることが観察される。畝間溝は比較的浅く、皿状の断面形で、泥流下畠ほど溝としての形態を明瞭に示さない。底部はやや波打つ。耕土はAs-C混土である。植物珪酸体分析結果を参照すると、泥流下、FA下両方の層準で、密度は低いものの、イネのプラントオパールを析出している。さらに、その多くが苗の段階に特有の、小

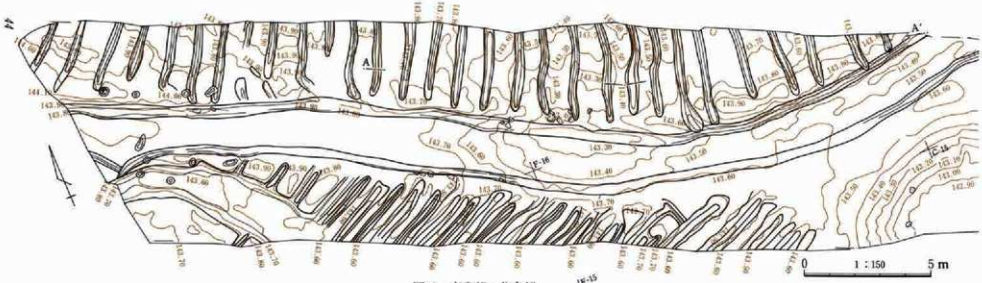



図47　南畠部・北畠部

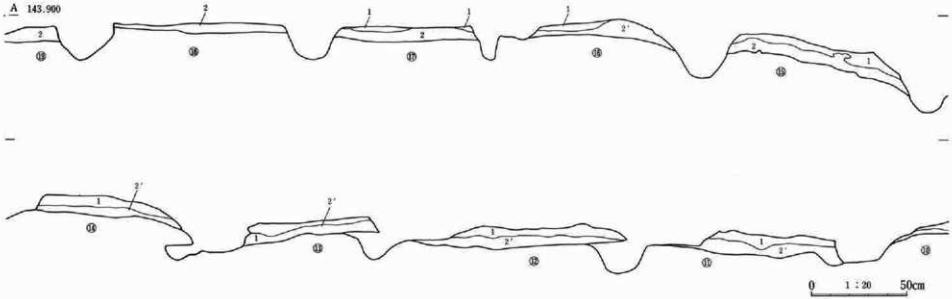



図48　北畠部　畝の土層①

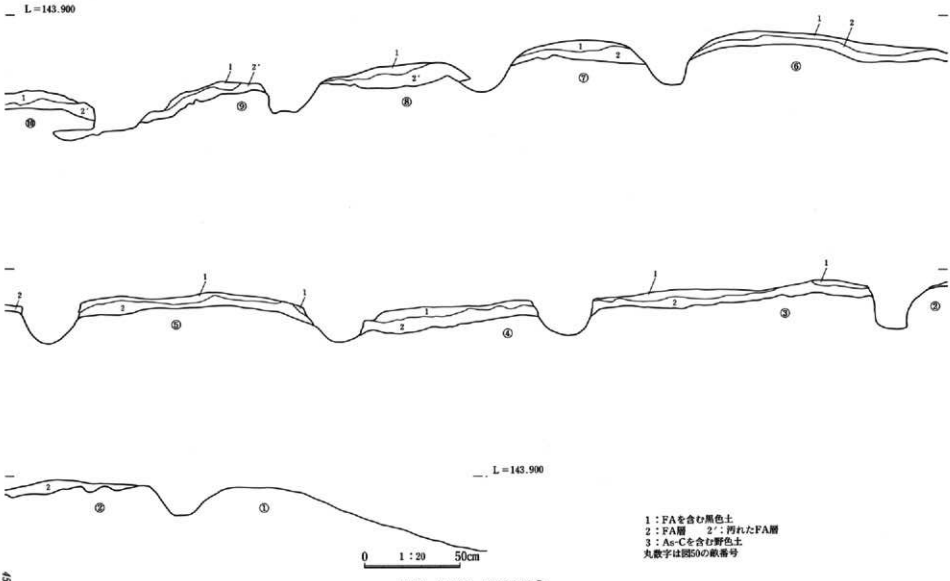



図49　北畠部　畝の土層②

型のものであること、籾殻に由来するプラントオパールも試料から見いだされていることも報告されている。

**北畠部**　調査区の西部北半に展開する畠である。直接の遺構確認面は泥流直下面である。畝及び畝間の溝が明確にとらえられる。畝31条、畝間の溝30条分が認められた。総体的には北東一南西の方向を示すが、東部では徐々にその向きを変え、東端近くではほぼ南北方向になる。これは、道が東部で北方向にカーブするため、これに規制されたものと思われる。各畝はこの道際で南方向の終端を形成し、北方向は調査区外に延びる。ほぼ等間隔で並び、この中での単位等を析出することはできない。畝は70～80cm幅のものが多く、狭いものは60cmほど、広いものは120cmほどある。西部では比較的幅がそろうが、道の屈曲部近くでややばらつきが認められる。畝間溝底部からの高さは20cm程度のものが多い。断面形は台形から蒲鉾状にやや高く盛り上げられるものが多い。畝間溝の断面は上端の開くU字形を呈している。畝から畝間溝への肩部や畝間溝の壁は、こちらもさほど崩れていない。

調査区北壁部の土層断面（図44・45）では、畝間溝が、FA層を切っていることが観察される。畝１・２などでは、基部が地山のAs-C混土で、この上に降下堆積層、あるいはこれがやや乱された状態のFAが載る。この上位、畝の最上層土は、FAを含んだ黒色土である。従ってこの部分では、南畠部と同様、FA降下後に、この火山灰を掘り上げて畝間溝を作り、火山灰の上に掘りあげた火山灰混じりの土を盛って、畝を作っているものと考えられる。畝12～21では、異なった様相が見られる。上記の畝における中層土に当たるFA層が、畝中に認められず、これがブロック状に、畝の上位部構成土中に含まれている。畝13・14、17・18の例を図52に示したが、ここでは成層状態のFAは全くなく、特に畝13では畝全体が、As-C混土中にFAブロックが含まれる状態の土で形成されている。この部分では、降下したFAをすき込むような、耕起的な作業を行った後に、畝間溝を掘り、畝を盛り上げているようである。畝８・９では上記二者の中間的な様相が見られる。

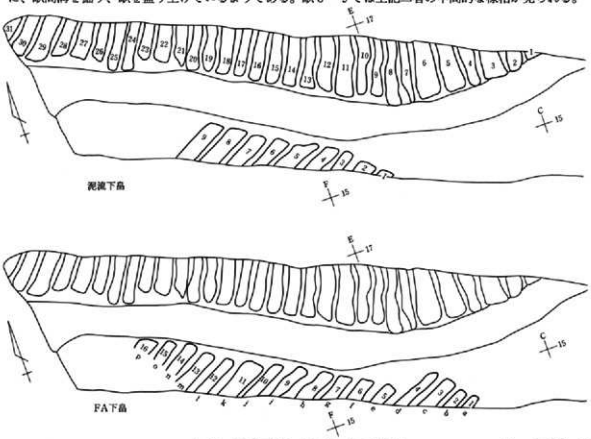



図50　泥流下畠とHr-FA畠の概念図　0　1：250　5 m

FA下畠は、火山灰に充塡された明瞭な畝間溝がなく、遺構として明確にとらえることができない。しかし、畝23—24では、畝23の東及び畝24の西にFAが傾斜をもって堆積しており、両畝間の畝間溝を中央においた畝状の高まりを示している。この起伏がFA下畠の畝にあたるとすれば、南畠と同様に、古い畝の中央近くに新たな畝間溝を設ける意図があったものと考えられるだろう。As-C混土上面のこうした起伏は畝25以西でも認められるが、この部分はやや地形的に高まり、泥流によると思われる削剝が激しい部分でもある。FA下面がどの程度旧状を保っているのか確認できないため、遺構として認定することはできなかった。

植物珪酸体分析結果を参照すると、FA下からは、オオムギ族のプラントオパールが析出され、泥流下、FA下両方の層準で、イネのプラントオパールが析出されている。苗、あるいは籾殻由来のプラントオパールも、

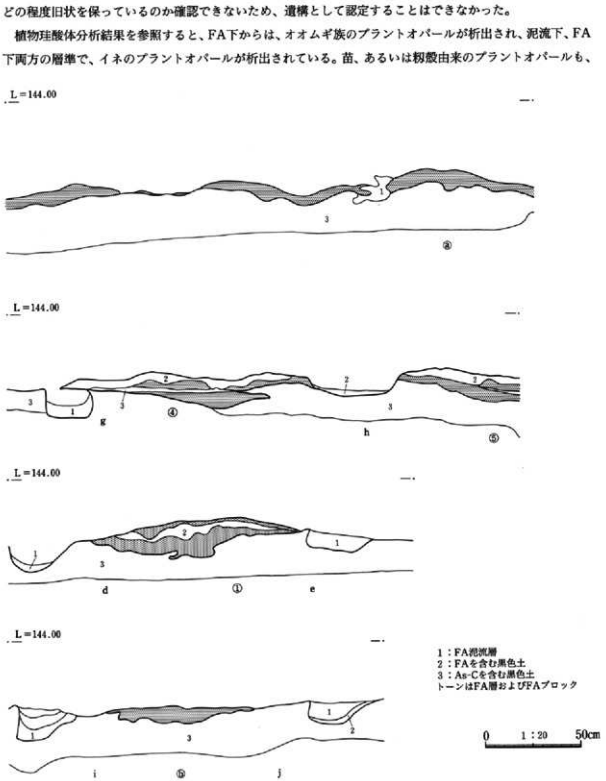



図51　北畠部　畝の土層

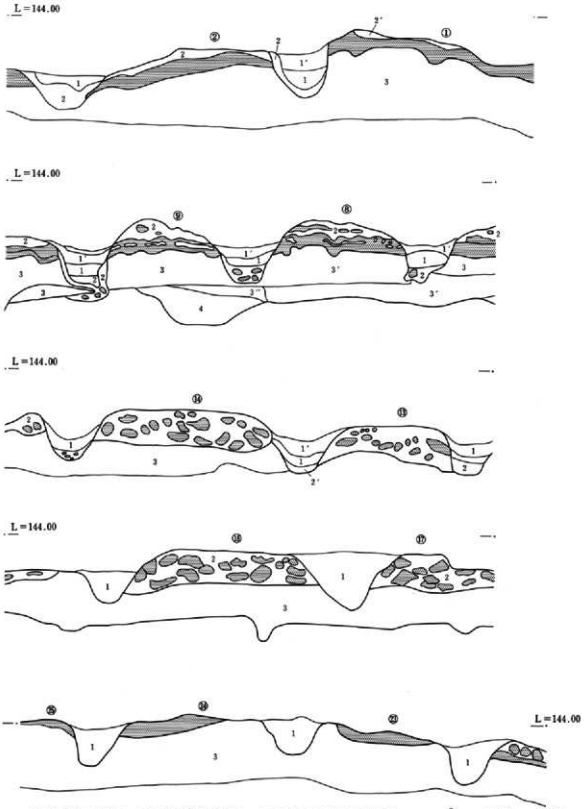

L=144.00
L=144.00
L=144.00
L=144.00
L=144.00
1：FA泥流層（砂層）　1'：FA泥流層（粘土層）　2：FAを含む黒色～黒褐色土層
3：As-Cを含む黒色土層　3'：標準土層12層中の灰を含む　3''：12層の混入度が高い
4：As-C層　（丸数字は図50の帖番号に対応、トーンはFA及びFAのブロック）
0　1：20　50cm

図52　南畠部　帖の土層

南畠部同様の存在形態を示している。

### 洪水層上下の畠

Hr-AAを含む洪水層（12層）上の畠が、D-14～15グリッドにかけてごく部分的に認められる。12層上面を確認面とし、これを掘り込む溝状の痕跡として検出された。北西一南東方向に弧状に延びる、ほぼ並行する3条と、東側の2条を繋ぐように直行する1条、計4条の溝が確認された。3条の溝がほぼ並行すること、上位のFA下畠と同じく、道に規制されたように、道の手前で溝の北端が閉じることなどから、これを畠の畝間溝と想定する。4条ともに上端幅14cm、下端幅10cm程度で、12層上面からの深さは、2～3cmほどしかない。底部には工具痕と思われる凹凸が残されている。上位のFA下畠の畝とは異なる方向を有し、下位のAs-C下畠とも異なる。

調査区南壁の西端部土層断面では、12層下に畝状の起伏が認められている。畝2条分にあたるが、平面的には確認できない。As-C混土を耕土とし、12層で埋没する。12層下の土壌からは、密度は低いものの、イネのプラントオパールが検出されている。また、5号住居断面でも、12層下面が大きく波打つ状態が観察され、これも畠である可能性があるのではないだろうか。

### As-C下畠・As-C混土下畠

As-Cは調査区の西半部で認められ、これに埋もれた畠の畝間溝が検出された。この溝はグリッドFライン付近で2分される。東側の畠はほぼ東西に近い方向で延び、Fライン近くで畝間溝が西の終端を形成する。西側の畠はごく一部しか検出されないが、東側とほぼ同じ方向を示し、Fライン近くで畝間溝の東の終端が認められた。Fライン近くは地形的に少し高まっている。畝の上面は削られており、溝の深さは5cmほどしか確認されない。溝の断面形は上部の開いたU字形を呈す。畝幅は80～100cmほどである。畝の基部はAs-Cを含まない黒色土で、その上にAs-C混土が載る。この上位には、12層中の火山灰や砂を含むAs-C混土の堆

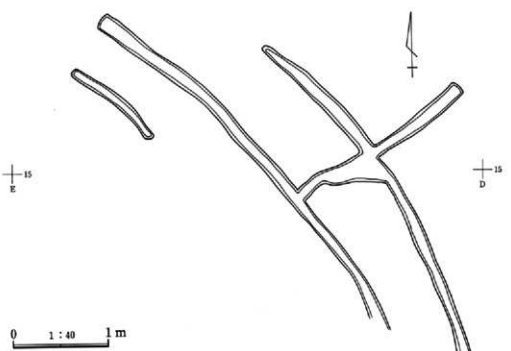



図53　洪水層上の畠痕跡

積層があるが、畝間溝は一部ではこれを切り、一部ではこれに埋没する状態が記録されている。As-C層下の土壌から、密度は低いものの、イネのプラントオパールが検出されている。

また、調査区の南壁土層断面西端部では、As-Cを含まない黒色土が、畝状に波打つ状態が観察できる。ここでは、これを覆うAs-C混土層中にAs-Cのまとまった堆積があり、畠であるとすれば、上記の畠より古い段階の所産であることが示唆される。

**土層断面に見られるずれ**

北畠部畝6～14の間、南畠畝E付近で、土層の顕著なずれが認められる。北畠部の、特に畝6－7間の溝底部は大きく西にずれる。畝13－14間、10－9間に同様のずれが見られるとともに、畝13・12はAs-C混土とFA層との間でずれが生じて、FA層とその上位の畝構成土が、泥流層で埋没された畝間溝を半ばふさぐような形で乗り上げている。南畠部でも、畝4が東の畝間溝を半ばふさぐような形でずれている。また、泥流到達以前は、地形的にやや高まっていたと考えられる、南畠部畝7以西では、FA層が削り取られ、調査区の西端近くでは標準土層12層の洪水層下底近くにずれの面がある。

As-C混土中、あるいは、これとFA層との境を滑り面として、上層が東へずれていることになる。こうした水平方向のずれは、土層断面の各所で観察される。畝13－14間の溝では、西に残された底部に、細かい軽石粒を混入した灰色砂質土が堆積しており、東にずれた溝上部には、ややオレンジがかった灰色砂質土が堆積していることが観察された。また、これを覆うピンク色の粘質土はずれを生じていない。灰色砂質土を伴

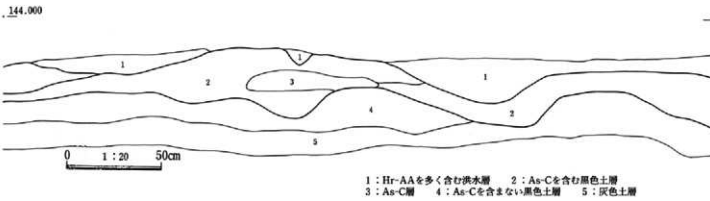



図54　洪水層下・As-C混土下の畝状起伏

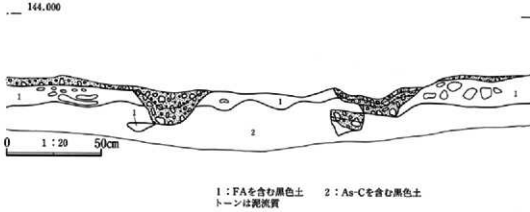



図55　畠畝のずれ

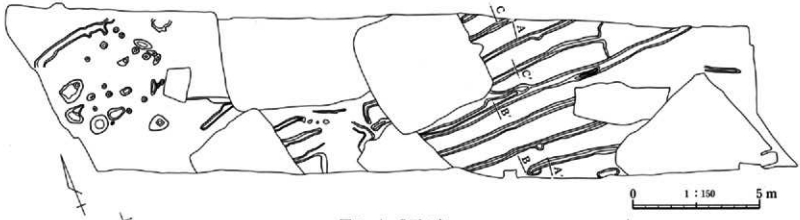



図56　As-C 下の畠

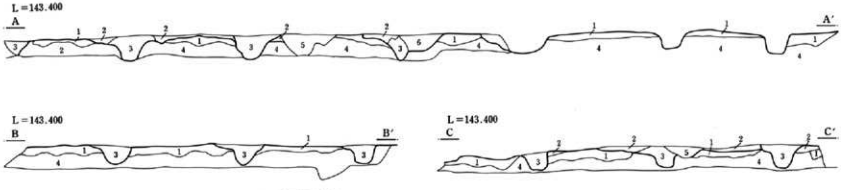



図57　As-C 下畠の土層

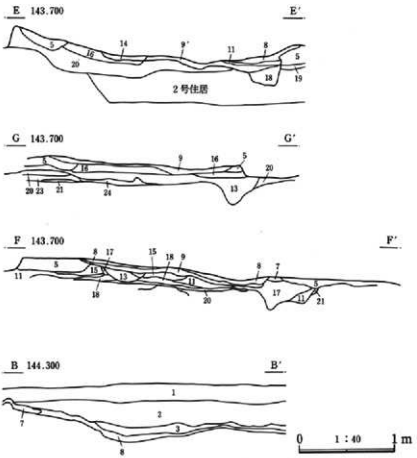
う泥流がこのズレを生じさせたものと見ることができる。泥流は、後述する器物集積遺構に積み上げられた土器群には、これほど大きな営力は加えていない。このような変形や削剝が、調査区西部で特に顕著である点から見て、泥流の力が何らかの条件によって部分的に強まり、こうした変形をもたらしたものであろう。

### （2） 道

**概　要**　３区西部の中央を、東西に貫くように道が延びる。１号住居の西で緩やかに北にカーブし、調査区北壁に至る。土層断面からは３枚の明確な硬化面が認められた。最上位はFA直上のもので、次いでFA直下、最下位はAs-C混土上のものである。当初As-C混土上に造られた道が、ほぼトレースされる形で、泥流層堆積時まで使用され続けたものと考えられる。下層２面の硬化面に伴って、両側に側溝が作られる。F16グリッド周辺などで河原石が集中する部分があるが、構造を持つものとは認められない。２・５号住居の上に最下層の道の側溝が作られている。畠に伴う道と考えてよいだろう。

**FA直上の道**

泥流直下を確認面とする。硬化面の表層にはわずかに黒色土の堆積が見られ、その下にFAが強く圧縮されている状態が認められる。硬化部の幅は30～50cmほどである。北部では両側に幅80～100cm、深さ10cmほどの緩やかな溝状の部分が認められるが、これは下層の側溝の名残であって、意識的に側溝を掘り直してはいない。FA降下後の畠耕作にあたって、以前からの道上につもった火山灰が踏み締められ、硬化したものであろ




1：砂を主体とする泥流層
2：径２～３cmの軽石を主体とする泥流層
3：灰を主体とし、径１cmほどの軽石を含む泥流層
4：黒色土　ごく薄い FA上面の道にあたる
5：黒色土　FAブロックを含む 畠耕作土
6：上位に４層を伴うFA層
7：乱れたFA層
8：FA層
9：黒色土　As-Cを含む 固く締まる FA下面の道の表層に当たる
10：黒色土　細粒の白色軽石含む
11：黒色土　As-C・洪水層含む
12：黒色土　洪水層含む　ぱさつく
13：黒灰色土　洪水層含む ぱさつく
14：褐色土　As-Cを多量を含む
15：灰黒色土　細かい洪水層含む パサパサしている
16：黒色土　As-C、洪水層含む
17：22層に焼土、土器片含む
18：標準土層12層相当の洪水層
19：黒色土　As-C、灰を含む
20：黒色土　As-Cを含む
21：As-C層
23：黒灰色土　As-Cを含まない
24：黒色土　As-Cを含まない

図58　道の土層

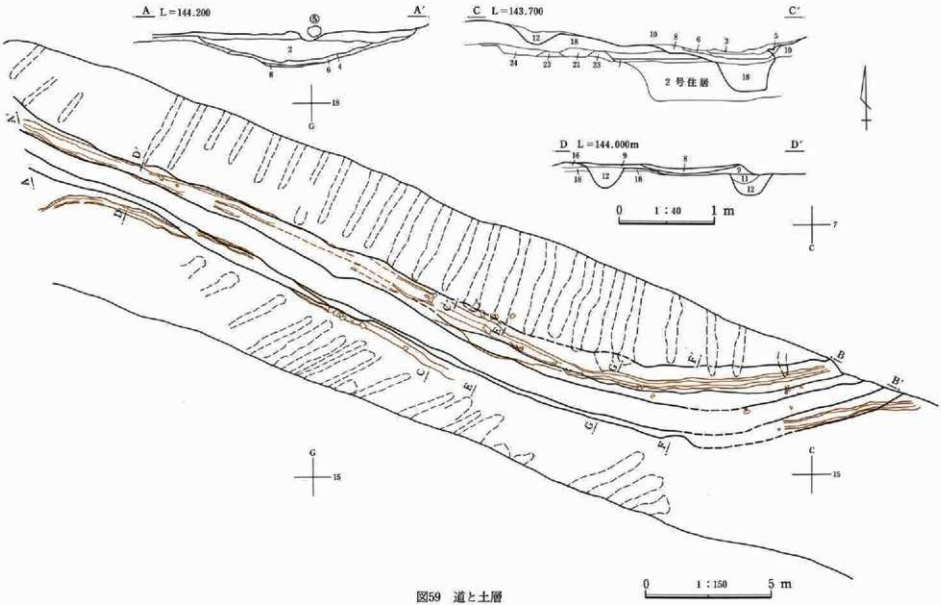

A L=144.200
A'
C L=143.700
C'
2 号住居
D L=144.000m
D'
0 1:40 1 m
0 1:150 5 m
A
A'
B
B'
C
D

図59 道と土層

う。道自体をそれとして作り直すことはしていない。硬化部分の幅が下位の道に比して狭いことは、使用された時間の短かさを示すものと見られるのではないか。

**FA直下の道**

平面的にはFA直上の道とほとんど重なる。FA下面を確認面とする。12層とAs-C混土が硬化した状態で認められる。硬化面の幅は80～100cm。硬化面の両側はしまりが弱く、やや高まっており、その外側に幅50～100cm、深さ15cmほどの側溝を持つ。この側溝が、FA下畠との境をなしている。

**As-C混土上の道**

As-C混土がやや窪んだ状態で、強く硬化した部分として認められる。幅150cmほどで、両側に側溝を持

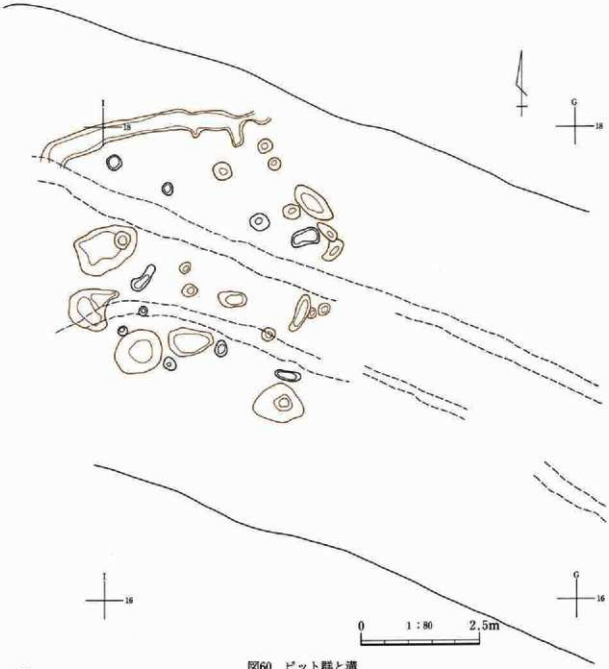



図60　ピット群と溝

つ。側溝は上端幅25～50cm、深さ10cmほどで11層にあたるAs-C混土に覆われている。重複住居上では側溝の確認ができない部分があるが、2・5号住居を切る。

### (3) ピット群・溝

発掘区西端近くに集中して、ピット状に、12層中の火山灰や砂を多く含む褐灰色土が落ち込む部分が認められた。また、この下層に当たるAs-C混土中でも、不定形のピット状落ち込みがこの部分に集中して認められる。直径30～100cmほどと規模は一定せず、形状も円形、楕円形などまちまちである。遺構として認めるに足る条件はそろえていないが、上層のピットに道に沿って並ぶ可能性が考えられるものもあり、周辺に土器片が認められるなど、何らかの人為が介在したことも考えられる。溝はAs-Cを多く含む黒色土で埋没し、東西に延びる。幅50cm、確認長は5mほどで、末端は緩やかに立ち上がりさらに両方向へ延びる様相を示す。

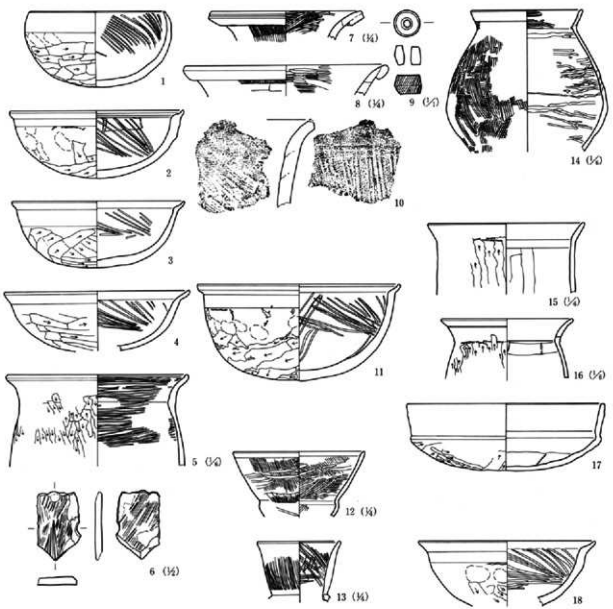



図61 畠・道・ピット・グリッド出土遺物①

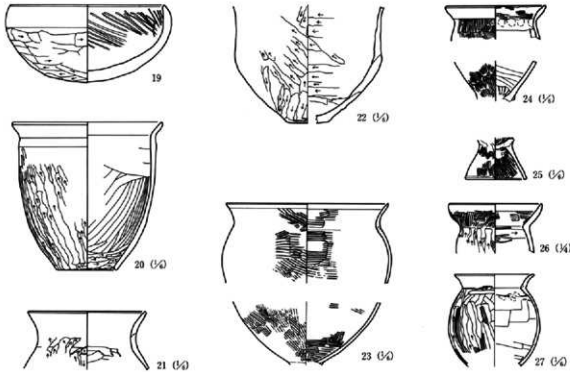



図62　畠・道・ピット・グリッド出土遺物②

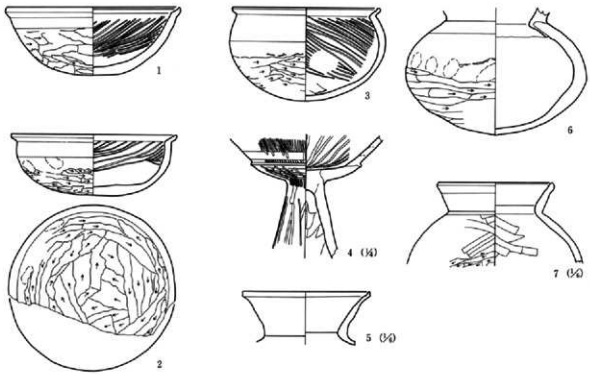



図63　4区試掘孔出土遺物

## （4） 住　居

### 1号住居

検出された住居の中では最も東に位置する。主軸方位N-66°-Eで、推定長軸長7m、短軸長6.8mを測る。北西隅から東壁南部を結ぶライン以南が調査区外になるため、全容を把握できないが、やや南北に長い隅丸方形の平面形が想定される。壁高は最大で75cmある。西壁部は急傾斜で立ち上がる。北壁は上縁手前60cm程から緩い曲線を描くように立ち上がり、上部で急傾斜になるが、地山との境界は明確ではなく、崩落、あるいは削剝されたものと思われる。北壁部を中心に住居周辺が高まっており、周堤の存在も想定されるが土層断面図においては明確にそれと判断できる構築面は検出されず、周堤の存在については担当者間で存否についての見解が分かれる。12層の洪水層及びAs-C混土層中に構築時の地表面が想定され、覆土は主にこれらの土層の再堆積土である。床面から10cm程の厚さでこの層が堆積するが、この上位にはFA降下時に流れ込んだものと見られる器物集積遺構の土器と、ブロック状のFAを混ずる同層が堆積し、その上にFA層が載る。FA降下時点では未だ埋没が完了していない状態である。

床面は西から東へごくわずかな傾斜を有するが、ほぼ平坦で、明確な硬化面はないが、炭化物の散布状況や土色などから比較的はっきりととらえられる。竈は東壁に対して45°近く斜行して作られている。東壁全体が検出されていないので確定できないが、傾きの状況からは東南隅に作られた可能性が高い。袖石、天井石は崩落しており、原形をとどめない。焼土、礫や遺物の存在により形状を推定できるにとどまる。壁外への張り出しは長80cm、袖部の長80cmで、袖部内側幅55cm、同外側幅100cm。床面で4つのピットを認めた。うちPit 1とPit 2が柱穴に相当するものと思われる。4本柱のうちの北部の2本に当たろう。Pit 1では炭化し、風化の激しい柱根が認められた。竈から土師器壺・甕、坏、床面から土師器壺・甕、甑、高坏、坏類、藺編み石などが出土

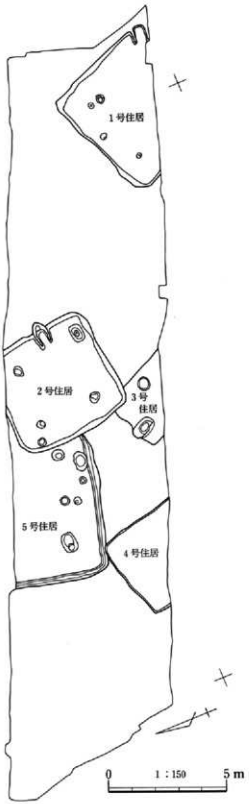
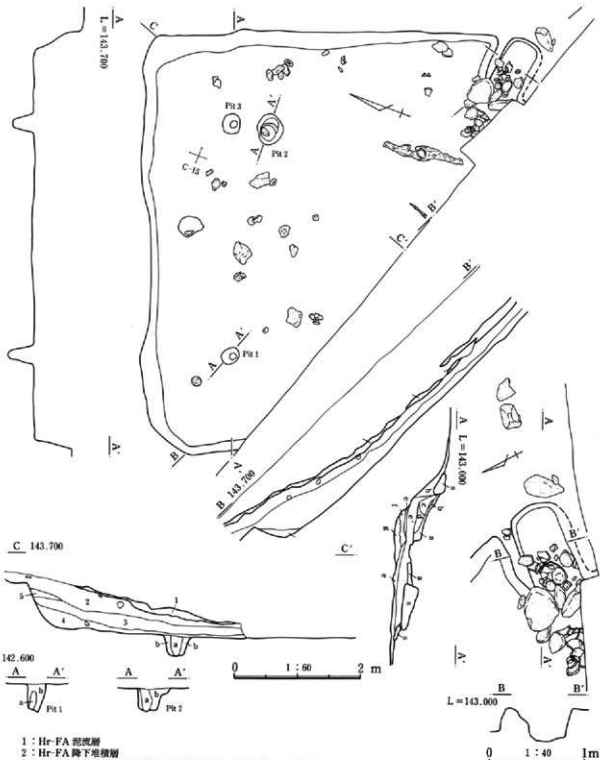



図64　住居の配置図




1：Hr-FA 混入層
2：Hr-FA 降下堆積層
3：As-C を含む粘性のある締まった黒色土。Hr-FA のブロックも入る
4：As-C を含む野色土。5 層より野みが強く、しまりはやや弱い
4'：As-C 及び洪水層を混入する灰野色土
5：As-C を少量含む野色土。洪水層を少量混入
5'：洪水層を主体とする暗灰色土。As-C を少量含む

柱穴部
a：粒子の細かい暗褐色土。粘性有り。柱痕部に相当か
b：シルトブロック混入の黄褐色土

竈部
a：黒色土に黄褐色粘質土ブロックを混ずる
b：上部は焼けて赤褐色になり、焼けの弱いところは黄褐色で締まっている
c：焼土、径 1cmほどのロームブロック、灰を混ずる柔らかい暗灰色土層
d：電構築のロームと見られる黄色の粘質土、固く締まっている
e：焼土ブロックに黒色土を混ずる
e'：焼土ブロックの両がやや少ない
f：厚い層状の焼土。この上面が使用面に相当
g：黒色土中に焼土ブロックを混ずる

図65　1号住居

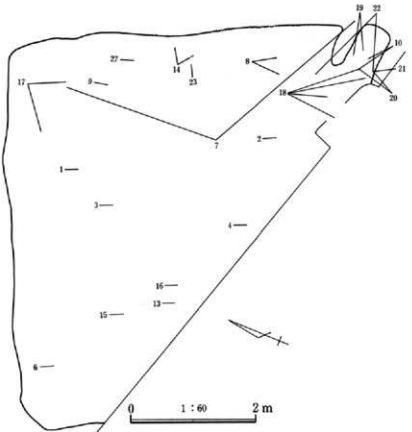



図66　1号住居の遺物出土位置

している。また、南壁際から桃核と思われる種子がまとまって出土した。住居の用材と思われる木片もある。覆土からは土師器甕、台付甕、坏、器台および石製模造品片が出土している。床面出土土器は5世紀末から6世紀初頭のものと思われる。覆土出土土器は器物集積遺構からの流れ込みのものと、より古い様相を示すものがある。

**2号住居**

主軸方位N-83°-Eで、長軸長5.8m、短軸長5.1mを測る。北壁西部が調査区外となり、西壁の北半は5号住居を切るためやや不明確であるが、隅丸方形の平面形を呈するものであろう。推定床面積は29.6m²ある。壁高は50cmほどで、急角度で立ち上がるが、上縁部は崩落している。As-C及びローム質のブロックを含む黒色土を掘り込む。覆土は同層の再堆積土及び12層の洪水層を含む黒色土で、炭化物、焼土粒を含む。東壁際では特に焼土が多い。覆土最上位はFA下畠の耕作土に当たるが、FA降下時点においてもやや窪んだ状態であったことが看取される。床面はほぼ水平だが、柱穴で囲まれた範囲内と北壁中央部付近は特に固く締まっている。北西隅部の床面には灰や焼土が濃密に見られ、5号住居の竈を破壊した痕跡かと考えられる。竈は東壁中央よりやや南よりに構築される。壁外に65cm、袖部の長85cmで、袖内側幅40cm、同外側幅80cm。袖部は崩れ、粘土天井は崩落しているが、袖石は残っている。煙道に沿って強い焼土層が見られる。柱穴は4本で、柱根を残すものはなかったが、深さ40～50cmと比較的深い。柱穴間の間隔は3～3.1mほどである。壁周溝は認められない。貯蔵穴は南壁東端近くにあり、上端の長95cm、幅62cmの隅丸長方形の平面形で、深さ60cm、底部中央に深さ10cmほどの円形の窪みがある。竈から土師器小型甕、甕、高坏、坏が出土している。坏は燃焼部のほぼ中央に、礫を下に正位で置かれている。床面からは土師器甕、高坏、坏が出土している。5

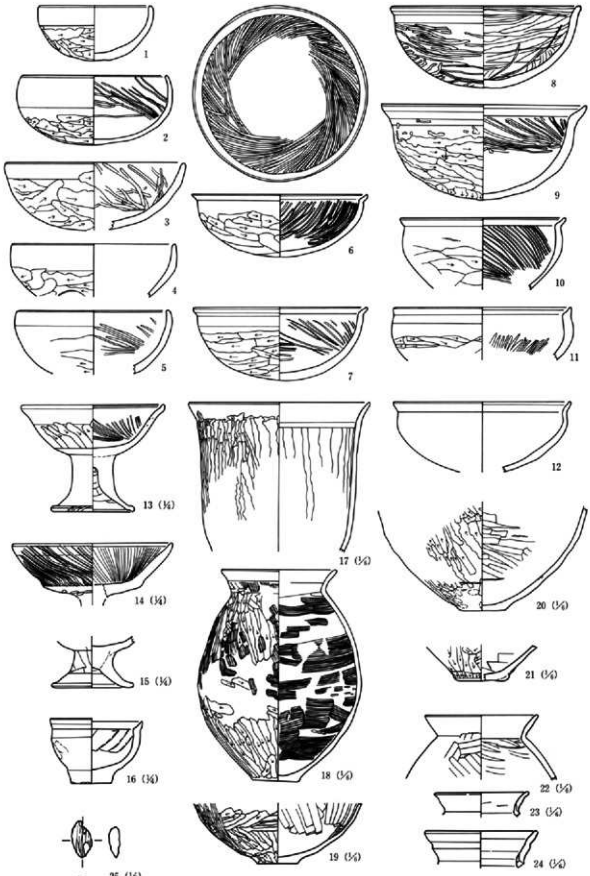

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13 (1/4)
14 (1/4)
15 (1/4)
16 (1/4)
17 (1/4)
18 (1/4)
19 (1/4)
20 (1/4)
21 (1/4)
22 (1/4)
23 (1/4)
24 (1/4)
25 (1/4)

図67　1号住居の遺物

世紀末葉の様相である。覆土からは土師器甕、高坏、坩、石製模造品片等が出土しているほか、古式土師器、弥生土器、縄文土器の破片も見られる。

### 3号住居

FA下畠の耕作によって破壊されており、規模・形状は不明。崩れた竈部とその周辺の床面、貯蔵穴のみが残存している。東北隅部を2号住居に切られる。As-C混土を10cmほど掘り込んでいることが認められるが、極めて緩やかな立ち上がりで、壁としては必ずしも明瞭ではない。覆土についても部分的な観察にとどまる。竈周辺では焼土、粘土を交えた、固く締まった層が最下部に、中位に焼土、炭化物を含むAs-C混土があり、その上位に12層を含むAs-C混土が載る。覆土下にあるAs-C混土面のうち、わずかに硬化し、平坦な部分を床面と判断した。竈は破壊が著しく、北西部に焼土、灰を伴う集石として確認された。袖石の残存と焼土、灰の分布などから見ると、北竈であった可能性が高い。貯蔵穴は上端径70cm、下端径58cm。ほぼ円形で、確認深は10cmである。竈の右手に当たることになるが、通有の位置からはややはずれる印象がある。柱穴・周溝

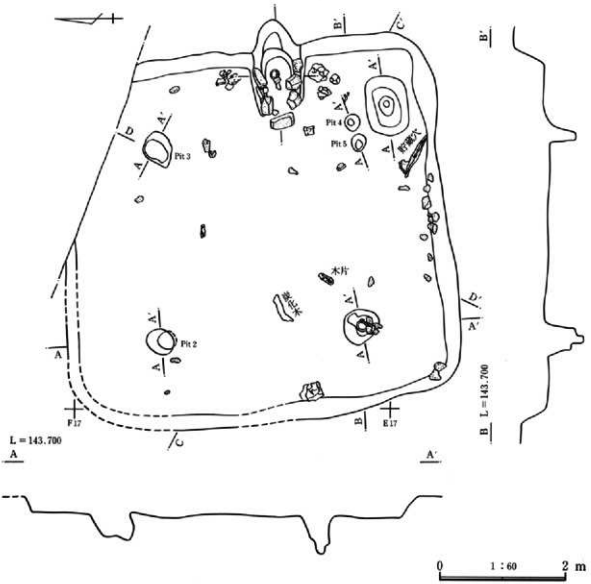
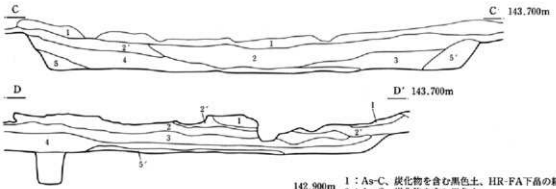
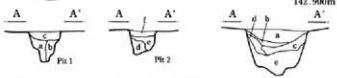



図68　2号住居




1：As-C、炭化物を含む黒色土、HR-FA下層の耕作土
2：As-C、炭化物を含む黒色土
　2′：2層に洪水層を含み砂質
3：洪水層、灰、焼土が入る締まった黒色土
4：洪水層が崩れて入る黒色土
5：焼土、炭火物、粘質土ブロック、As-Cを含む黒色土
　5′：5層に焼土が多く混入

a：As-C、焼土、炭化物を含む粘質の黒色土
b：As-Cを含むしまりのない黒色土
c：ロームブロックを含む黒色土
d：焼土、灰混入の黒灰色土
e：As-Cをわずかに含む黒褐色土
f：ロームブロックを含む締まった黄褐色土
g：シルト、As-Cを含む柔らかい暗褐色土
h：シルトブロック混入の締まった黄褐色土
i：シルトを含む暗褐色土

貯蔵穴
a：As-C、焼土、炭化物を含むやわらかい黒褐色土
b：洪水層混入のサラッとした黒灰色土
c：炭化物を含む滑らかな黒色土
d：As-Cを多量に含むやや締まった暗褐色土
e：ロームブロックを含む黄褐色土

図69　2号住居の土層

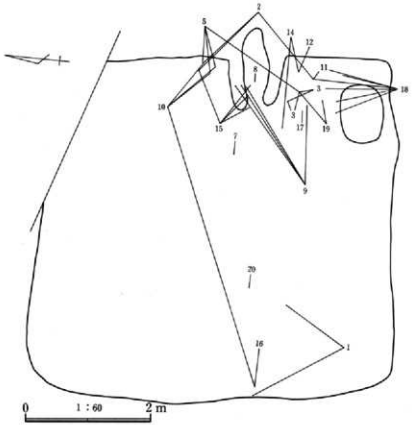



図70　2号住居の遺物出土位置

図71　2号住居の竈

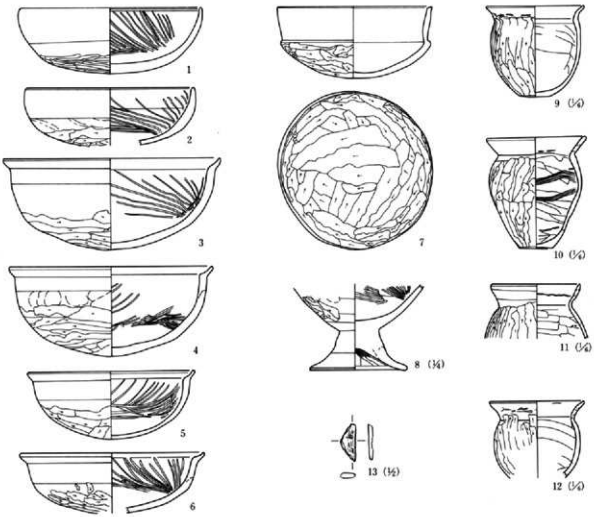



図72　2号住居の遺物①

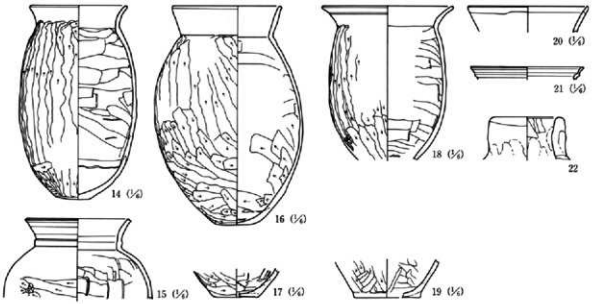
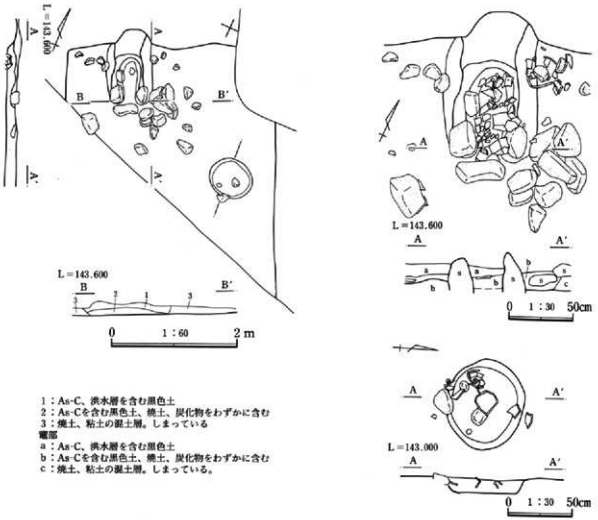



図73　2号住居の遺物②




1：As-C、洪水層を含む黒色土
2：As-Cを含む黒色土、焼土、炭化物をわずかに含む
3：焼土、粘土の混土層。しまっている
竈部
a：As-C、洪水層を含む黒色土
b：As-Cを含む黒色土、焼土、炭化物をわずかに含む
c：焼土、粘土の混土層。しまっている。

図74　3号住居と竈・貯蔵穴

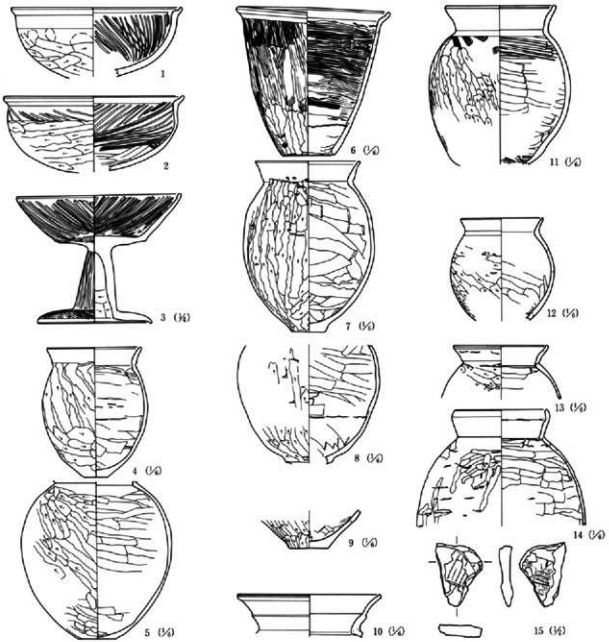



図75　3号住居の遺物

等は認められない。竈から土師器甕、坏、貯蔵穴から土師器高坏、床面からは土師器甕、甑、壺、坏などが出土している。5世紀末葉の様相を示す。覆土からは土師器甕、高坏、坏、坩、石製模造品片などが出土している。なお、この住居について、屋外炉あるいは平地式建物の痕跡とする見解もある。

### 4号住居

西壁北部から東壁南部より南西側が調査区外となるため、全容はうかがえない。北東隅部で5号住居を切る。竈が検出されていないため、主軸方向も確定できないが、東壁はN-18°-Wを示す。北壁長4.7m、東壁の確認長4.5mで、ほぼ方形あるいは南北にやや長い長方形の平面形を示すものであろう。確認された二つの

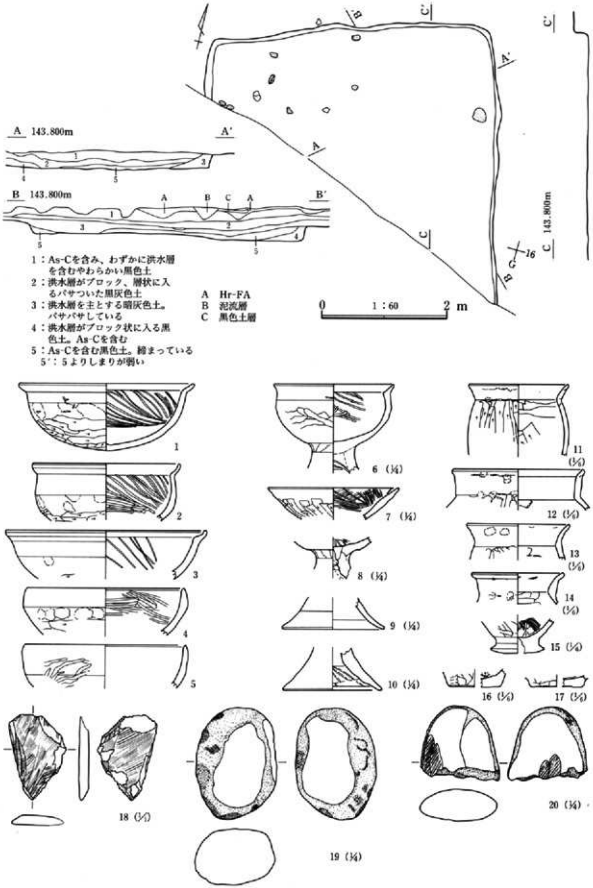
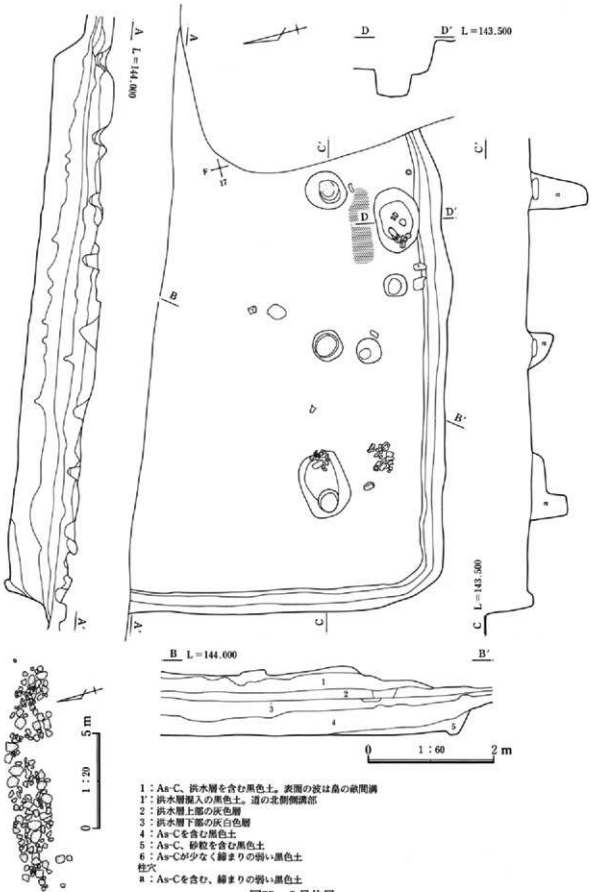

A 143.800m
A'
B 143.800m
B'
C 143.800m
C'
1：As-Cを含み、わずかに洪水層を含むやわらかい黒色土
2：洪水層がブロック、層状に入るパサついた黒灰色土
3：洪水層を主とする暗灰色土。パサパサしている
4：洪水層がブロック状に入る黒色土。As-Cを含む
5：As-Cを含む黒色土。締まっている
5'：5よりしまりが弱い
A Hr-FA
B 泥流層
C 黒色土層
0 1:60 2 m
1
2
3
4
5
6 (1/4)
7 (1/4)
8 (1/4)
9 (1/4)
10 (1/4)
11 (1/4)
12 (1/4)
13 (1/4)
14 (1/4)
15 (1/4)
16 (1/4)
17 (1/4)
18 (1/4)
19 (1/4)
20 (1/4)

図76　4号住居と遺物




1：As-C、洪水層を含む黒色土。炭面の波は畠の畝間溝
1'：洪水層混入の黒色土。道の北側側溝部
2：洪水層上部の灰色層
3：洪水層下部の灰白色層
4：As-Cを含む黒色土
5：As-C、砂粒を含む黒色土
6：As-Cが少なく締まりの弱い黒色土
柱穴
a：As-Cを含む、締まりの弱い黒色土

図77　5号住居

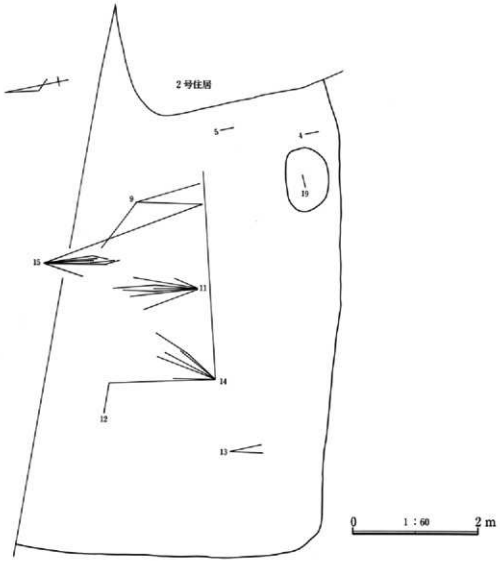



図78　5号住居の遺物出土位置

コーナーは丸みをあまり持たずに屈曲する。残存壁高は20cmほどで、比較的明瞭に壁を認めることができるが、北・西壁は崩落がやや大きく確認が困難である。住居の上位はFA下畠であるが、この耕作土下面では既にほとんど水平の堆積状況を示している。構築時から浅い掘り形であったものだろうか。12層上面が構築時の地表面と考えられ、覆土はAs-C混土と12層の砂質土が混じた土を主体とし、炭化物や焼土は含まれない。床はほぼ水平に作られるが、硬化面等は認められない。炭化物や焼土の分布も認められず、竈の位置を特定する手がかりに欠ける。柱穴、貯蔵穴も認められない。遺物は他の住居に比べて少ない。床面から土師器甕、坏、高坏等が出土し、覆土からは土師器甕、台付甕、甑、高坏、坏、石製模造品片のほか、弥生土器、縄文土器の細片も出土している。床面出土土器は5世紀末から6世紀初頭の様相を示す。覆土出土土師器にはこの時期のものと、古式土師器とが見られる。

**5号住居**

北半部が調査区外に当たり、東部が2号住居に切られるため、規模形状の詳細は把握できないが、南壁推定長は8mほどある。西壁の確認長は5mである。ほぼ方形あるいは南北にやや長い長方形の平面形であろ

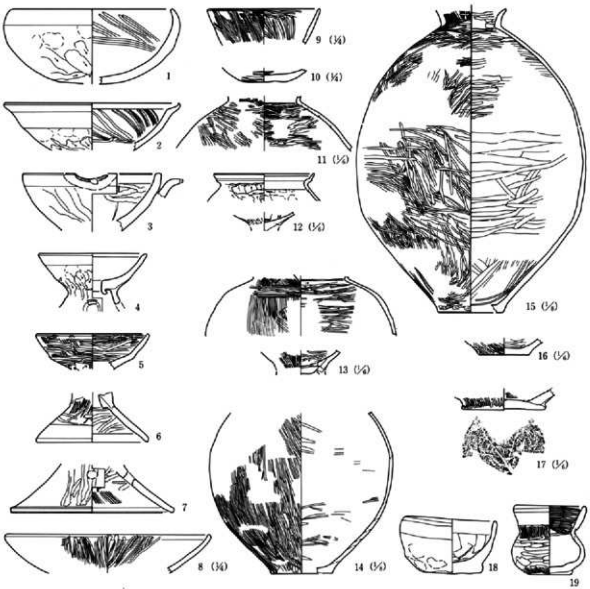



図79　5号住居の遺物

う。南壁は一部4号住居にも切られる。2号住居との重複部分に灰、焼土の集中部があり、これを竈の残存とすれば、主軸方位はほぼN-100°-Eを示す。壁は明瞭で、残存壁高も70cmある。壁下には上端幅30～40cm、深さ10cmの壁周溝がめぐる。覆土下層はAs-C混土を主体とするが、特に床面近くでは軽石の量が多い。上位は12層の洪水層で、これによって埋没が完了している。床面はAs-Cを含まない黒色土中にあり、ほぼ水平で、やや硬化した状態が認められた。柱穴は2本あり、Pit 1は径30cm、深さ50cm、Pit 2は径35cm、深さ70cmある。両柱穴のほぼ中間にやや小さく浅いピットが2基ある。貯蔵穴は南東隅部に作られ、長径100cm、短径70cmのややゆがんだ長円形である。床面から土師器器台、甕、貯蔵穴内から坩が出土している。本遺跡の住居の中では最も古い5世紀前半の様相を示す。覆土からは土師器甕、台付甕、甑、坏、高坏等が出土している。また、床面と同レベルで円礫を主とする集石が認められている。礫は径2～5cmほどで、長径120cm、短径25cmの細長い楕円形の範囲に集中する。直上、直下には遺構が認められない。床はこの周辺でわずかな盛り上がりを見せている。

# 4　器物集積遺構

## （1）　器物集積遺構の調査

A・B—14・15グリッドにかけて、多量の、土師器を中心とする遺物が集積されている。遺物が置かれている以外には、構築物としての遺構は検出されていない。祭祀的行為に関連する存在であると思われるが、必ずしも安定した位置づけがなされているとはいえないため、「器物集積遺構」あるいは「集積遺構」としておく。

集積遺構の調査は、工事工程の都合上、3次に分割して行われたが、集積遺構自体もこの調査区分にほぼ対応するように、大きな3つの集積群および、群間にある密度のやや粗な小群に分かれるかの状況で見出されている。第1次調査は西部を中心に行われ、図85のセクションCラインが東限となる。この時点では、図83において1群とした部分が集積遺構の中心と考えられ、さらに東へ延びることが予想された。第2次調査は、Cライン以東の調査で、2群及び5群の調査を行った。5群の存在によって、さらに北方向へ、土器群の広がりが延びるものと予想されることになった。第3次調査は、3群部分の調査であり、北東方向への土器群の広がりを追跡した。これは、安全対策用法面を切り込む形で発掘区を拡張するという、非常に危険で、かつ困難な調査となった。遺物の集中的出土が一応の収束を見せた時点では、既に安全限界を越えた状態にあり、一部の土器については取り上げのみを行って、位置及び標高の記録を断念せざるを得なかった。こうした状況のため、北東方向の終端を確実に把握するには至っていないが、3次にわたる調査によって、集積遺構の主体的な部分については調査がなされたものと判断した。なお、集積遺構の東南部にあたる2—3群間の一部は、安全対策工事に当たって掘削を受けている。

集積遺構は、多量の土器が積み上げられ、立体的な構造を有する。このため、調査にあたっては、各遺物の位置記録に重点を置いた。検出された遺物の平面図を作成し、底面の標高を計測した。2群及び3群については一部写真測量を行った。図81は、発掘調査時の出土遺物平面図を集成し、最上面からの見通し図として作製したものである。

集積遺構からの出土遺物は、土師器2469個体、須恵器5個体、石製模造品73点（破片含む）、白玉302点である。取上げ時に番号を付された遺物は2545点にのぼり、このうち2025点について、平面図上に位置の記録がなされている。これらの土器の取上げは、完形個体についてはその個体、破片については単体片を単位としているが、一括性の高いと考えられる複数個体を、まとめて取り上げたものや、周辺土器片を一括して取り上げたものもある。図84の遺物出土位置図及び図87に示した土器の接合関係図は、こうした取り上げ単位の記録をもとに抽出、作図している。

また、多くの土器が完形、あるいはこれに近い状態で出土しているため、個体としての位置を、取り上げ時の記録から定めることができた。以下に掲げる遺物出土位置のドットマップについては、図84・87を除いて、個体を単位とした図である。紙幅の都合によって縮尺は不同であるが、平面図外枠が図83中の枠に相当し、南北7m、東西10mの範囲を示している。縦の中央線がグリッドBライン、横線がグリッド15ラインにあたり、交点がB—15ポイントである。側面図は、東西または南北方向からの見通し図である。標高についての記録は取り上げ単位でなされているが、壺・甕などの中に入っているものの、および積み重なっているものの一部について、代表的な標高値をもって、それぞれの個体の標高としたものがある。また、標高につい

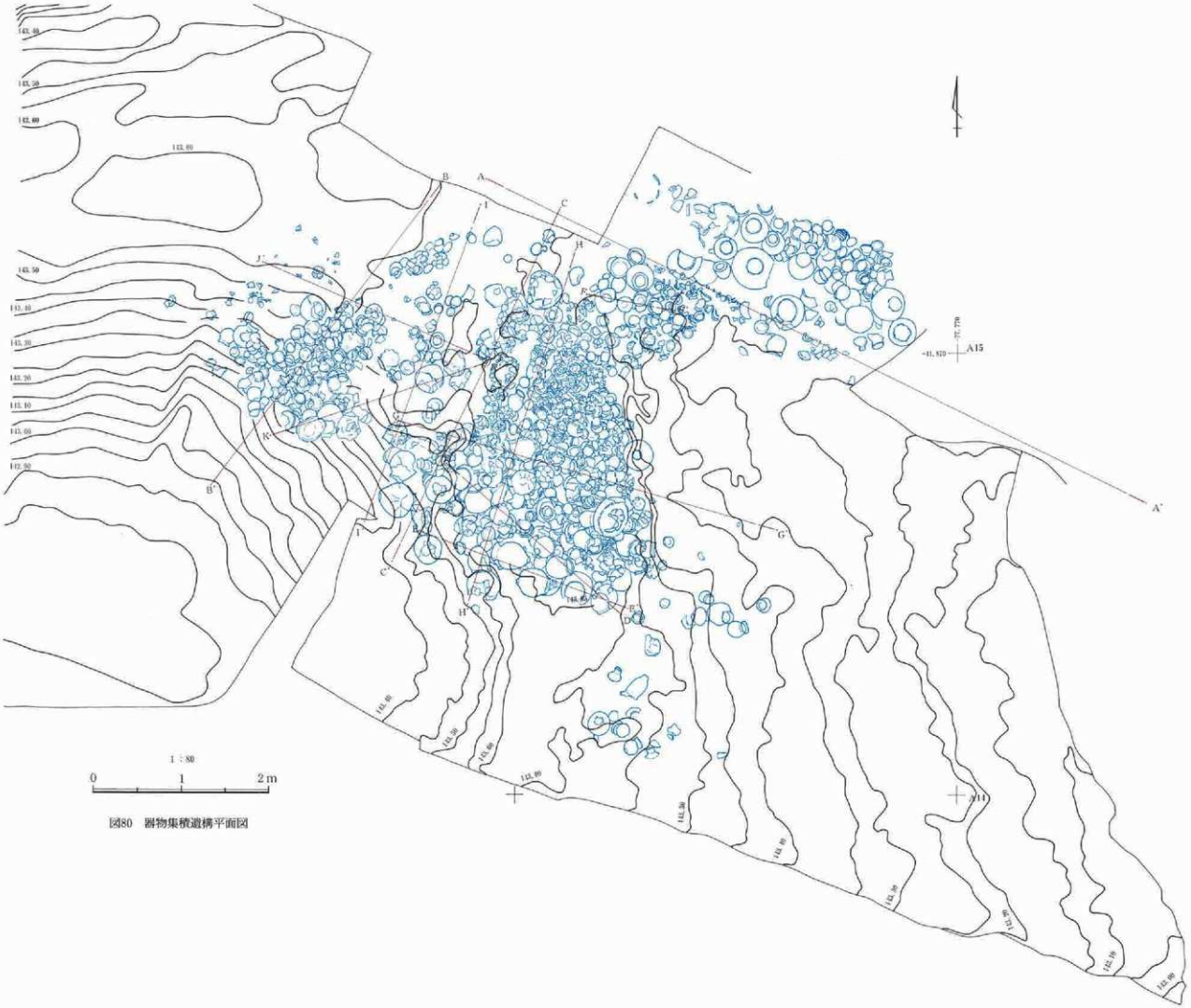



図80　器物集積遺構平面図

ての記録を欠くものが11個体あり、これについては平面位置のみを示している。このため平面図上の点数と見通し図上の点数が一致しない場合がある。個体としての位置を示すことを意図したため、個体単位で取り上げられたものについては、取り上げ時における位置をドットの位置としているが、複数の接合片をもつ個体については、その個体を構成する破片中の最大破片の取り上げ位置をもってドットの位置とし、これと接合する従属的な小破片の位置は示していない。この図中に示した個体数は1911個体である。従って、後段に実測図として図示した土器のうち、563点が位置についての情報を持たないことになる。このうち、位置情報が全くかけるものが22個体、１群に属するものが６個体、２群に属するものが71個体、５群に属するものが１個体あり、他の463個体は３群調査に当たって、危険回避のため、位置記録を断念したものに当たる。

### （２） 器物集積遺構の位置

集積された土器群が、何らかの構築物としての遺構に伴うものであるか否かについて、発掘調査時点でも特に注意を注いだ。しかし、火山灰直下という条件のもとで良好な状態で保存されたはずの地表面においても、ピット、溝などはなく、少量散在する河原石についても、積極的に構造を有するものとは認められなかった。図86のエレベーションＤラインに見られるように、一部が盛り上げられたように見られる部分もあるが、積極的に盛り土、あるいは壇等の構築を意図したものであると判断できるものではない。器物集積遺構は、

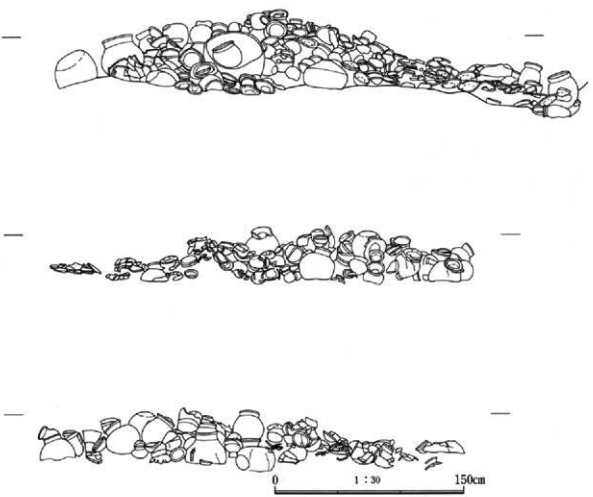



図81　２群の土器の重なり

土器の存在以外には明確な構築物としての遺構を持たない。

遺物の分布域を遺構の範囲として把握すると、グリッドBラインに沿って南北方向の、同じく15ラインからやや北東にむかって東西方向の広がりを持つ。東西10m、南北5m程の範囲を中心とし、さらに南東へ3mほど、点々と土器が散在する状態が見られる。平面的には変則的なT字状の分布域を示すことになる。3つの大きな集積群（西から1～3群とする）と、1－2群間、2－3群間のやや集積度の低い小群（それぞれ4・5群とする）の5つの集積群が看取される。南に散在する土器群は、後述するように泥流の営力によって移動したものとみられるため、集積群には区分しない。

1群は集積遺構の西部を占める。東西、南北ともに1.5mほどの範囲で、257個体の土器が認められた。2・3群に比すと、土器数が少なく、群としては小規模である。下位の壺・甕類にも転倒するものが多く、置かれた状況そのままを保ったような、正立した状態で出土するものは少ない。集積遺構の中では泥流の最上流側に当たるため、これによって攪乱された可能性もあるが、北端部近くの313がほぼ正立状態で、欠損も比較的少ないことを考えると、泥流到達前に、すでにある程度乱れた状況であったことが想定される。なお、こ

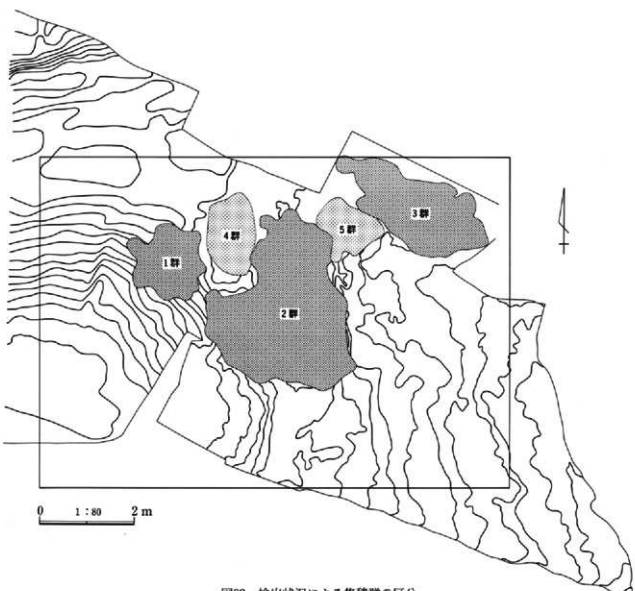



図82　検出状況による集積群の区分

の地点の土層断面では、FA以前の洪水層は認められず、旧地表面を直接FAが覆う。

2群は最大の集積群で、東西最大幅3m、南北最大幅4mを測る。南部が広がり、北部が4・5群に挟まれて狭くなった扇形の形状である。1333個体の土器が出土している。特に南部において壺・甕等が列状に並んでいることが注目された。

3群は発掘区北壁部に当たり、これに沿って、長3.5mほどの範囲を調査している。658個体の土器の出土を見ているが、位置記録を欠くものが多い。南西部では、2群と同様、壺や甕が列をなしている状況が観察される。

4群は1群と2群の境界に当たる。東西1m、南北1.8mほどの範囲を占める。他群に比すとごく散在的で、土器の出土個体数も52個体と少ない。5群は2群と3群の境界に当たるが、必ずしも明確に区分はできない。東西1.3m、南北1.5mほどの範囲から123個体の土器が出土している。

集積遺構の北西部には西から北東方向に、緩やかなカーブをもって道が延びている。東方には東畠部の畠が認められるが、これはFA降下時点では湿地的な様相で、耕作されていないと判断されるものである。集積遺構北西部は、この畠遺構の北東端の上にのる状態であり、この点からも畠が機能していなかったことがうかがえる。南西部には、1号住居が半ば埋没した状態の窪地がある。東へ下がる全体的な地形の流れに加え、住居窪地が西脇にあることにより、この集積遺構は相対的に尾根状に高まった地点に位置することになる。住居窪地の西には、東畠部・西畠部の耕地が広がる。東畠部の湿地的状況、及び4区以西における遺跡の非在を考えあわせると、居住域の位置を確認することができないが、この遺構が耕地を含んだ集落の縁辺近くに立地していると考えて良いのではないか。

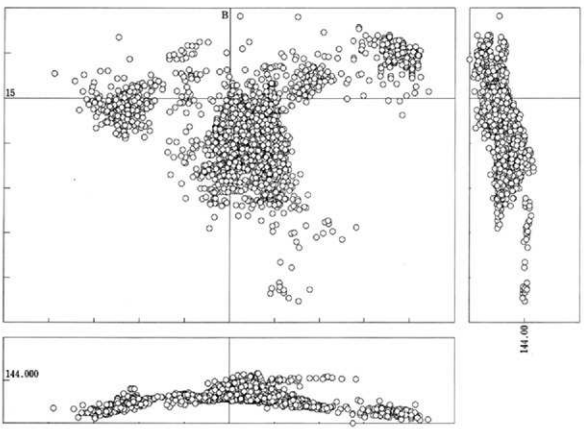



図83　遺物出土位置図

A（西）143.800m　　A′（東）

1：Hr-FA 泥流層（砂質層）
2：Hr-FA 泥流層（径2cm前後の軽石混入）
3：Hr-FA 泥流層（2層より大きな径の軽石混入）
4：Hr-FA 降下堆積層
4′：Hr-FA の一次堆積に近い層
5：洪水層
6：As-C を含む黒色土層。畠の耕土

B 143.800m　　B′

1：Hr-FA 泥流層（径1～3cmほどの軽石を含む）
2：Hr-FA 層。多量の土器を含む。降下した Hr-FA が傾斜に従って流下し堆積したものか。
　フォールユニットが明確ではなく、水性堆積を思わせるラミナ状の層が見られる。
3：Hr-FA 層。降下堆積層と思われる。この層上及び層中に土器が多量に認められ、1層及び
　2層に押し倒されたものとされる。

C 144.900　　C′

1：Hr-FA 泥流層（細かい軽石・砂の層）
　上層に厚さ1～2mmの灰層を伴う
2：Hr-FA 泥流層（細かく割れた軽石、径5～10cmの軽石の層）
　上層に厚さ1～2mmの灰層を伴う
3：Hr-FA 泥流層（軽石、礫が均一に混入する層）
　上層に厚さ1mmの灰層を伴う
4：Hr-FA 泥流層（径1～3cmの丸みを帯びた軽石の層）
5：Hr-FA 泥流層（径2～5cmの軽石を混入する砂層）
6：Hr-FA 泥流層（径4～5cmの軽石を主体とする層）
7：Hr-FA 泥流層（火山灰を主体とする層）
8：Hr-FA 泥流層（軽石、礫を混入する層）
9：Hr-FA 泥流層（径3～4cmの軽石を混入する層）
　上層に薄い灰層を伴う
10：Hr-FA 泥流層（粘性のある灰層）
11：Hr-FA 泥流層（砂層）
12：Hr-FA 泥流層（径2cmの軽石を多量に含む層）
13：Hr-FA 泥流層（径2～3cmの軽石を混入する層）
14：Hr-FA 降下堆積層
15：As-C を含む黒褐色土層

0　1：30　1.5m

図84　器物集積遺構の土層断面

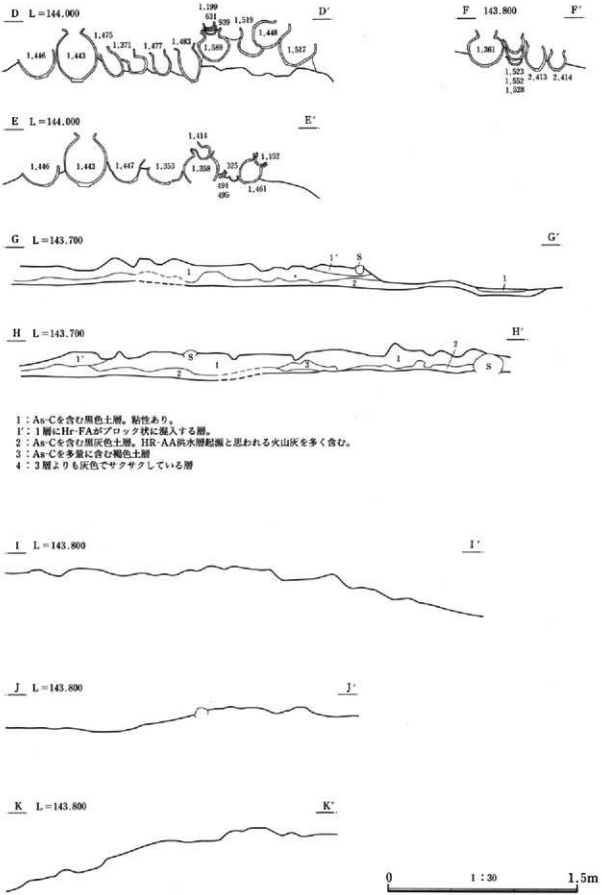



図85　遺物集積遺構下面の高低

### （3） 器物集積遺構の埋没過程

集積遺構は洪水層及びFA層・FA泥流層に覆われている。土器類を集積する行動の完了から、一連の洪水・降灰による埋没が始まるまでの間には幾分の時間が経過していたようである。集積された土器の内部に黒色土の堆積がみられるものがあることから、あまり短い時間ではなかったと思われるが、風雨にさらされて土器が著しく風化したり、集積された土器の山が大きく乱されるような状況ができるほどの長い時間ではないようだ。

埋没は洪水から始まっている。図84セクションCラインに示した、発掘区北壁東半部で認められる洪水堆積層がこれにあたる。上位にFA層を載せるが、この洪水が、Hr-FAの噴火に先行するものであるのか、噴火途上で、これに伴って生じたものであるのか、ユニットの同定ができず、判別できていない。厚さ5～6cmほどの粘質土の堆積として認められるこの洪水層は、集積遺構内の他の土層断面では確認されておらず、東方に中心があるものと考えられる。湿地化していた畠跡にあたる部分から波及したものだろう。集積遺構東部の土器の一部を埋没させているが、中心部には達していない。洪水層の上端標高は143.5mにまで及んでいる。

この洪水に引き続いて噴火に伴う最初の降灰があったものらしい。降灰は8～20cmほどにも及んでいるが、降灰後、短いながらもやや平穏な時間があったことが、先述した畠の様相からみて取れる。図84セクションBラインは、集積遺構西部の埋没状況であるが、住居窪地に火山灰が流れ込む過程で土器が転落し、FA中に土器が埋もれた状況が看取される。下位の灰層は1次堆積に近い様相を示し、上位は2次堆積の火山灰層である。

この後、泥流が繰り返しこの地を襲うことになる。泥流層には、軽石や砂を主体とする層、比較的大きな礫を含む層などが入りまじって堆積している。土層断面では下位にFA層があり、これを覆って軽石混入層、砂層及び粘質の灰層が堆積している。上層には比較的大きな礫を含む層があって、図84セクションCラインにみられる礫は、下層のFAに変形を及ぼしている。集積された土器のうち、上位の、外表にあったものは、この層に押されて東南へと移動したものと考えられる。計測された遺物のレベルから見ると、東南に点々と延びた一群の土器は、標高144mライン近くに集中し、以北の土器の最高位レベル、すなわち集積の頂部に相当する高度にある。

### （4） 遺物の出土状況

分厚い泥流層の堆積によって、重ねられた状態が明瞭に捉えられる土器、石製模造品や臼玉が入る土器など、泥流流下後の攪乱は全くないと言って良い状態で保存されている。一方、土器内に黒色土が堆積する例が認められるため、土器を集積する行為の終了から泥流の流下までに、ある程度の時間経過を考えなくてはならない。また、洪水・降灰・泥流の流下といった現象もそれぞれ、集積された土器に攪乱を及ぼしている。洪水・FA降下・泥流の流下によって、倒れ込み、あるいは住居窪地への転落するなど、洪水到達時の原位置を失ったと考えられる土器もある。なお、以下の文中における遺物についての番号は、基本的に後掲遺物実測図中の遺物番号を示すものである。

#### 出土状況の評価

図85セクションD・Eラインの南東端にあたる土器（1448・1517・1461）は、最初の洪水の圧力によって傾いたものであろうと考えられる。集積の西北辺、すなわち泥流の営力を直接受けたと考えられる方向に当

たる土器群は、南西辺に比して配列がやや乱れた印象がある。また、2群南部では集積の最上部に、比較的大きな壺・甕類が横転・反転した状態で認められる。こうした壺・甕は、集積された土器の最下位に当たることが多いものであり、かつ、泥流の上流側に当たるであろう2群北西部では他の部分より壺・甕の密度がやや低くなっている。また、接合関係の項で述べるとおり、東南部に点在する土器は洪水層の上に乗った状態にあると思われ、泥流の流下によって、既に堆積していた洪水層の上に押し流されたと考えられる。先述した、畠における土層のずれに見られるような、泥流の強い力を受けて、北西部の壺・甕類が巻き上げられるような形で移動したものと考えることもできる。北西部及び集積上位の土器については、洪水や泥流によって移動した可能性が高いものと考えられる。

一方、最下位にあたる土器群、特に壺・甕などの中には、しっかりと、地面に埋め込むように据えられ、土器取上げ後の地表面に凹型がくっきりと残される状態が認められるものがある。列状の配列を良好に示す部分も、特に2群で顕著に認められた。これらの土器は、当初に置かれたそのままの位置で埋没したものと思われる。また、多くの土器は重ねられた状態にあり、小型の土器が大型の土器と土器との隙間に、ぎっしりと詰め込まれたような状況もそのまま残されている。これらのありかたからは、洪水、泥流の営力が大きく働いたとの見方はできない。また、洪水層は集積の東部にのみ堆積しているが、先述の通りその上端標高は143.5mに達し、東半部にあった土器の多くは、泥流到達時点には既に洪水層下に埋没していたことになり、泥流の営力からは保護された可能性が高い。土器群は、少なくとも、東部においては、洪水到達前の段階から、下位部分では集積時の状態から、大きく動いていないものと考えて良いだろう。

### 土器の接合関係

土器総数2474個体のうち、完形及び完形に近い個体が1901個体（77%）を占める。2/3以上の残存を示す個体は2198個（89%）に至る。完形及び完形に近く復元された個体のうち、単一片または単一の取り上げ番号を持つ破片で個体を形成するものが1103個体(完形個体の58%)、2片または2つの取り上げ番号を持つ破片の接合で個体を形成するものが441個体（完形個体の23%）あり、この両者で完形個体の80%以上を占めて

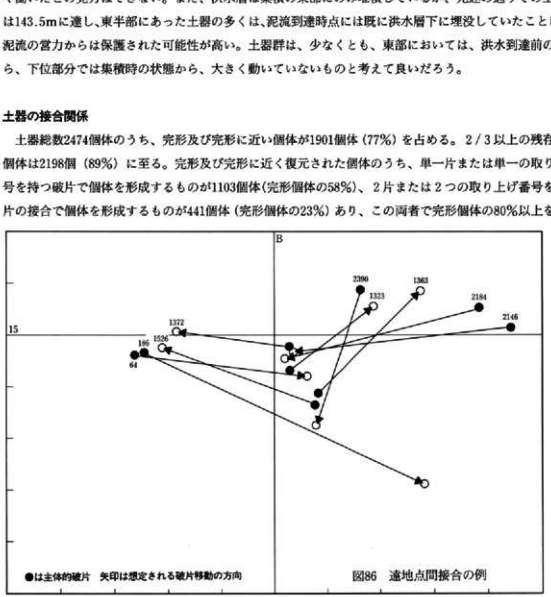



図86　遠地点間接合の例

いる。これらの土器の大部分は近接する地点で出土した破片と接合している。下層の土器は小片に割れていて、全体の復元ができない場合もあるが、接合残となった破片は、総量で収納用コンテナにわずか3箱程度に過ぎない。

こうした完形率の高さ、ごく近接する地点での接合率の高さ、及び次項で述べるように土器が重ねられた状態を保って出土していることからは、土器を故意に破砕する、あるいは破片を散布するといった行為は想定できない。また、先に集積された土器を踏みつぶしているような状況も見られない。

一方、比較的離れた地点で出土した土器片が接合して一個体をなす場合も認められる。隣りあう集積群はもとより、比較的離れた群に属する土器片が接合する例も、少数ではあるが認められる。図87に示したものは、比較的離れた地点から出土した破片が接合して個体を成した例である。接合片同士の位置関係は、東西に分かれるもの、南北に分かれるもの、多様である。集積行動の終了から、埋没までの間には、一定の時間が経過しているものと考えられる。その間に土器が破片化し、移動するような力が働いたのであろう。

このうち、186は、最も遠い地点の土器片が接合した事例である。これは泥流によって破片が移動したものと思われ、1群に主体的な破片があり、東南の、高い標高に転々と散らばる土器群中に接合破片がある。これと同じ、北西―南東方向の破片接合については、泥流による一定方向への移動の結果と見られる。

### 土器の重なり

各集積群中央部の土器は、間層をおかずに重なり合っているため、当然、多くの土器が上下を他の土器に挟まれた状態になる。壺・甕の上に、坏や坩がおかれるような積み重ねも見られる。また、壺・甕の中に坏類が入っているような例もある。発掘調査時に、重なり合うものとして記録されたグループは、300組余りにものぼっている。10点を超える重なりが記録されている例もある。図87～90では、こうしたグループのうち、平面図上で重なりかたが確認できるものを図示した。平面図の上が北を示し、1・2・4例を除いて、土器の重ねられた順に実測図を付した。1～4は甕の中に坏・高坏が入る例である。1・3は内斜口縁・内湾口縁坏が混在するが、2では須恵器模倣坏、4では内斜口縁坏のみが入る。5は甕の口縁上に坏が重ねておかれる例である。

6以下は坏類を中心とする例である。内斜口縁を有する坏類が目立つが、重ねやすい口縁形状に起因するものであろう。これに、内湾口縁坏、須恵器模倣坏、高坏などが加わる。17・21・24は最下位に高坏があり、18・22・23は高坏を挟む形で重ねられる。19・20では高坏が、23では坩が坏類の上に載る。4・18・22では臼玉が、21では石製模造品片が重なりあう土器の中から見いだされている。これらは、ひとまとめにスタックされたかのような状態で重なり合い、単に上下の位置にあるということにとどまらず、人為的に重ねられた、何らかの単位をなす土器グループとしてとらえられるだろう。

### 石製模造品・臼玉と土器

石製模造品や臼玉は出土位置を確認できない状態のものが多い。記録されたものの位置については、図110に示している。石製模造品のうち、形の整ったものは土器内には認められておらず、単独で出土する場合がほとんどである。土器内に入った状態で認められる例もあり、坏に伴う例が多いが、高坏や壺・甕類の中に認められた物もある。しかし一つの土器の中に入る数は少なく、多い例でも10個以下であって、連ねられた状態の玉や模造品が納められたものではないようである。また、上記の重なり合う土器の中間に石製模造品や臼玉が入る例は、この場所に土器を集積する以前に、土器内にこれらが入れられて、同時にこの場に運ば

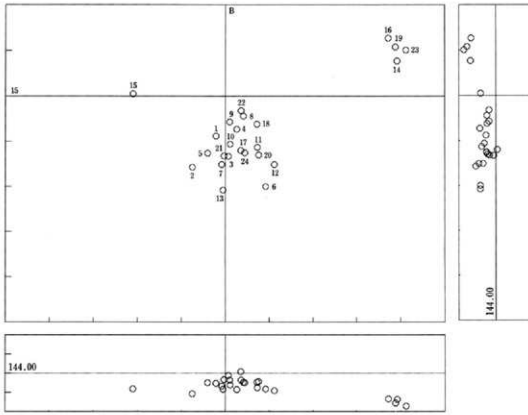



図87　重なり合う土器・グループの位置

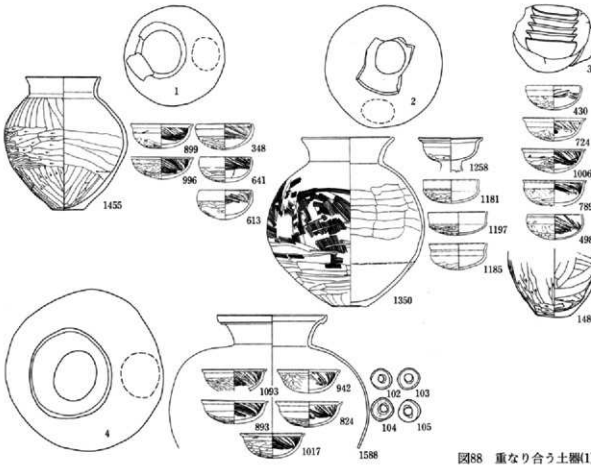



図88　重なり合う土器(1)

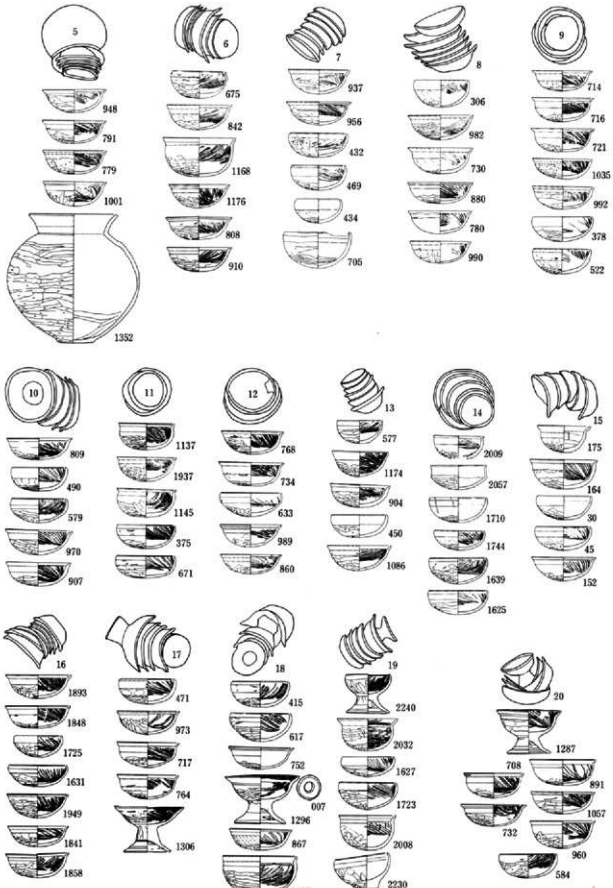



図89　重なり合う土器(2)

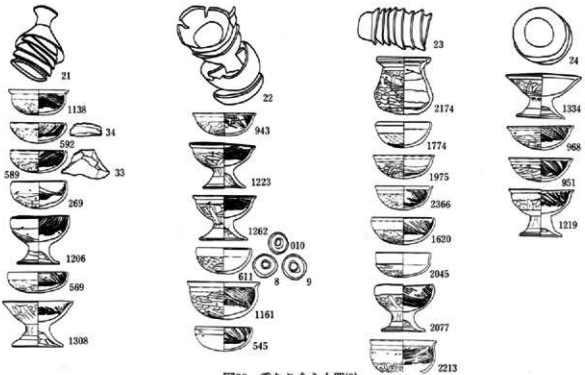



図90　重なり合う土器(3)

れたことを示す。

### （5） 遺物の概要と器種別出土状況

**概　要**　集積遺構からの出土遺物は、土師器、須恵器、石製模造品、白玉である。

土師器の主要器種は坏・高坏・甕・坩・壺・鉢である。坏／鉢及び壺／甕／鉢の間には画然と区分しがたい、中間的な形態を持つものがある。その他、小型土器・蓋・廻・甑・片口・手捏ね土器等が少量ある。須恵器は廻・坏蓋・甕がある。土器は１群257個体、２群1333個体、３群658個体、４群52個体、５群123個体、その他、所属群不明のもの22個体、東南に点在する土器で、集積群に区分しなかったもの29個体からなる。石製模造品は剣形品を主とし、斧・鎌・有孔円盤等がある。

土師器はすべて、鬼高Ⅰ期に区分されるものである。個体単位で見ると、比較的古い様相を帯びるもの、新しい様相を示すものがあるが、集積群を単位としてみると、両者が混在する。後段で坏E類とした須恵器を模倣した形態の坏が各群でかなり比率を異にし、1→2→3群の順に比率を急激に上げること、坏身を模した比較的大型のものが2・3群に見られることなど、各群の時間差を示唆する要素もあるが、群ごとに明確な型式差を抽出することは困難である。

以下、各器種ごとに出土状況を示す。個体としての出土位置をプロットした平面図及び南からの見通し図を、遺物分布図として示す。なお、位置記録がなく、所属群のみが把握できるものがあり、また、同一地点からの複数出土により、点が重なることがあるため、文中の個体数量と分布図中の点の数は必ずしも一致しない。

土師器の器種分類については、各器種間で中間的な形態を示すものがあり、一定基準による区分をなしえていないが、坏・高坏・坩・壺・甕・広口甕・鉢及びその他に分けた。

坏は口縁の形態によって、５形態に分類した。高坏は坏のそれぞれの形態を載せるものがあり、これによ

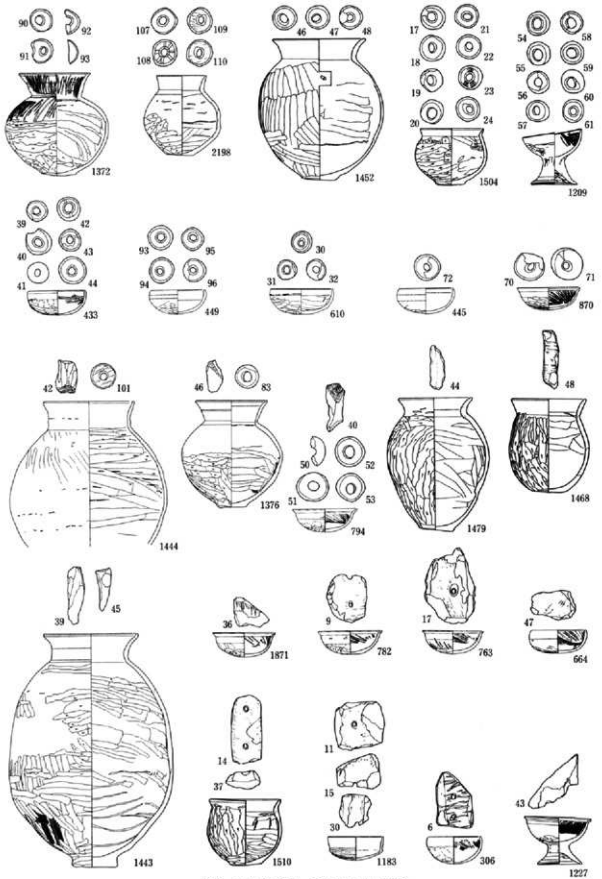



図91　石製模造品・臼玉と土器の供伴

り区分している。

壺と甕の区分については議論のあるところである。特にこの遺構においては、典型的な甕の形態をとったとしても煮沸具として使用された痕跡のあるものは皆無であり、機能と器形とを関連づけることもできない。中間的な形態を有するものについては、球胴に近いものを壺、長胴気味のものを甕、頸部のしまるものを壺、しまりの弱いものを甕、胴部の整形において横方向の削りが卓越するものを壺、縦方向が甕、磨きのあるものは壺、直口縁のものは壺としたが、最終的には主観的な判断を下さざるを得なかった。壺のうち、丸底、球胴のものを坩とした。

甕は器高が口径を大きく上回る通有の甕と、器高が低く、口径が大きい広口の甕とに二分される。鉢としたものには、広口甕の一部や大型の坏と区別しがたいものがある。口径が体部径を上回るもの、横方向の整形が卓越するもの、頸部のくびれが弱いもの、を鉢とした。

その他の土器としては、甑・甑、蓋、片口と、底部に高台状の突起を持つ、あるいは粗製であるなどの特徴を持つ坏様の一群、小型・手捏ね土器と須恵器がある。

**坏**　1768個体ある。小型品及び粗製のもの、高台状の突出部があるものは別に区分した。主要な集積群からの出土を見ると、1群に181個体、2群に945個体、3群に486個体が認められる。A：内湾口縁のもの、B：内斜口縁のもの、C：内斜口縁で口縁部が長く延びるもの、D：単純口縁のもの、E：須恵器模倣坏の5形態と、底部片で分類できないもの2個体がある。各類を通じて、坏内面に吸炭させた内黒のものが見られる。また、皮膜状の付着物があるもの、一部が強く焼化、変色したものもある。

A類は、1群に75個体、2群に450個体、3群に204個体など、計799個体がある。各群に多く認められ、顕著な分布傾向を抽出することはできない。多くは、口径10.5～13cm、器高4.5～6.5cmほどの大きさである。中に、口径が14cmを超え、あるいは器高が7cmを超える大型のものがある。形態では、ほとんど半球形を呈するもの、口縁が強く内湾するもの、やや扁平なものなどがある。整形面では内面に放射状の篦研磨を施すものが多い。B類は、1群に99個体、2群に464個体、3群に237個体など、計881個体あり、A類と同じく各群に多量に認められて、分布の偏りは見られない。口縁部や体部の形状には、かなり変化がある。また、比較的大型のものは、鉢の一部と区分しがたい。整形面ではA類と同様内面に放射状の篦研磨が施されるものが多い。A・B類で坏の95%、集積された全土器数の68%を占める。C類は1群に1個体、2群に2個体、3群に8個体ある。坏部がやや深めなものが多く、内面に篦研磨を施す。口縁部内面には、円周と平行する方向の篦研磨を施すものが多い。D類は1・2群に4個体、3群に1個体あり、3群に少ない傾向である。C類及び後述のE類とは逆の分布傾向を示している。形態的にはやや不安定で、口縁形状は内湾に近いもの、外反気味のもの、外反するものの3者がある。内面には、やはり放射状の篦研磨が施される。E類は1群2個体、2群25個体、3群34個体出土している。坏蓋を模倣した形態が主で、坏身を模した、比較的大型のものが2・3群に見られる。内面は撫で整形が基本であるが、180・181・1186の3点のみ放射状の篦研磨が施されている。C・E類は、類似した分布傾向を示し、比率の上では3群に大きく偏ることになる。

**高坏**　土師器261個体がある。他に小型品10個体があるが、これは別区分とした。主要な集積群からの出土を見ると、1群に25個体、2群に146個体、3群に67個体が認められる。坏部の形態により、A：坏A類を載せるもの、B：坏B類を載せるもの、C：坏C類を載せるもの、D：坏D類を載せるもの、E：坏E類を載せるもの、及び脚部片で区分できないものに分けられる。坏部、脚部の形状は個体間でかなりの差異がある

が、変化は漸移的であり、明確に区分できない。D類には坏部下底に稜や凸帯を有する一群が含まれ、2群に集中する。B・D類には粗製品が見られる。E類は坏部1点のみが出土している。坏部はE類をのぞいて内面に篦研磨を施すものが主体で、磨きを施さないものは少ない（A類3・B類9・C類0・D類8個体）。C類では円周方向に研磨を施すものが多く、2105・2116・2117では坏部の外面にも篦研磨を施す。D類では1299が坏部内外面、1301が坏部内面と脚部外面に篦研磨を有し、1300・1302・2396は坏部内面と外面全体に篦研磨を施す。脚部は、軸部が短く、裾はハ字状に開き、脚部内側の刳り込みが比較的浅い形態を基本とするが、軸部形状や脚部内側の形状に特徴的なものがある。A類の182・2079は中実の比較的長い筒状の軸部に小さく開く裾部を有する。粗製であるがB類の1279、D類の1304もこれに近い。D類の194・195・196・1300・1303・1305も中実の筒状軸であるが、裾部はやや大きく開く。1301・1302・2396など、中空の軸部を有するものもある。E類を除いて、坏部内面を内黒としたものがあり、特にC類ではほぼ半数が内黒の坏である。

A類は1群に2個体、2群に11個体、3群に4個体など、計18個体しか出土しておらず、坏におけるA類の占める比率とは、大きな差を見せる。B類は、1群に9個体、2群に66個体、3群に22個体など、計101個体で、高坏全体の39%を占め、主体的な形態となっている。C類は40個体あって、高坏全体の15%を占める。坏よりもC類の比率は高い。1群には認められず、2群に19個体、3群15個体、5群に6個体と、坏C類に近い分布傾向である。D類は87個体と高坏全体の33%を占め、坏におけるD類よりも高い比を示す。1群に12個体、2群に50個体、3群には位置の記録を欠くため、分布図には表示されないが、17個体ある。E類は3群からの出土である。1群では、ほぼ半数が内黒で、2・3群共にこれが3割以下であるのと差を見せている。

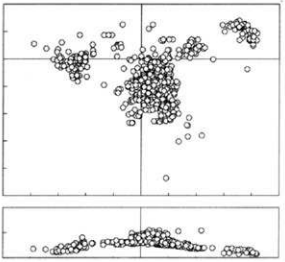


図92　坏A類の出土位置

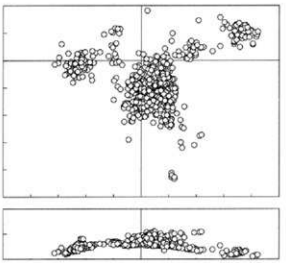


図93　坏B類の出土位置

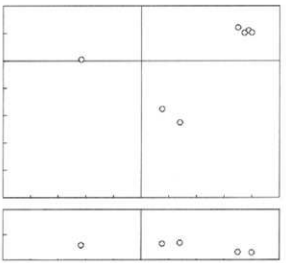


図94　坏C類の出土位置

**壺**　1群に8個体、2群に49個体、3群に22個体の計79個体ある。器高30cmを越える大型のものと、それ以下のものに区分される。最大径が胴上位にあるもの、胴中位にあるもの、やや下位にあるものがある。1349・1350・2145・2292が外面に刷毛調整を施す。2146・2293・2399は体部に穿孔が見られる。2146・2399は焼成後に小孔をうがっているが、2293は焼成前に比較的大きな孔を切り取っている。中型の壺は口縁から肩部にかけて篦研磨を施すものが多い。口縁内面の研磨は左上がりを示す。1386・1389・2446は頸部から肩部にかけて連続して研磨している。1363は肩の張った、広口の形態であるが、全面に磨きを施す。口縁は外反するものが多いが、209・1444・2152は、ほぼ直立する頸部から口縁がわずかに外反する。210・1448は口縁が直立する。口縁の中位に段を有するものも多い。2・3群では特に大型のものが集積群の外周部に目立つ。

**坩**　64個体ある。各集積群に認められ、1群に6個体、2群に41個体、3群に10個体ある。標準的な形態は、偏平な球形の胴部で丸底、頸部は括れ、直立気味のやや長い口縁が付く。胴部下半には基本的に横方向の、比較的丁寧な篦削りを行っている。口縁及び肩部に篦研磨を施す例が多いが、研磨の状態により、口縁内外面、外面肩部ともに篦研磨を施すもの、口縁内面の篦研磨を欠くもの、口縁外面の篦研磨を欠くもの、外面肩部のみに篦研磨を施すもの、篦研磨を施さないものを認めることができる。標準的な形態の坩における外面の篦研磨は、頸部の横撫でを挟んで、口縁部と肩部の二段階で施される。口縁外面はきれいに縦位の篦研磨が揃い、肩部は上方から見て反時計回りに巻き込むような方向での研磨が多い。例外的に、2175の肩部は横位（周方向）の篦研磨であり、215・1401・1409の肩部研磨は時計回りの方向を示す。216の

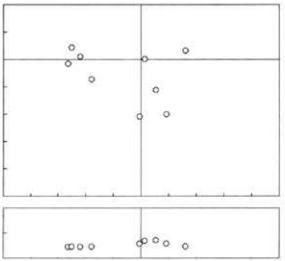


図95　坏D類の出土位置

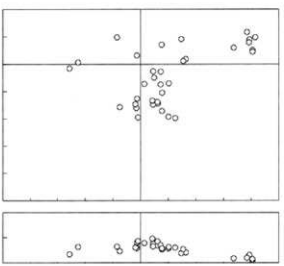


図96　坏E類の出土位置

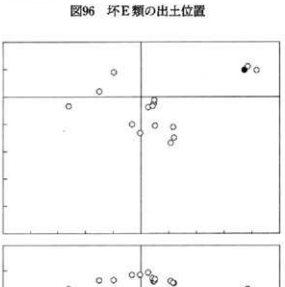


図97　高坏A・E類の出土位置

口縁外面の研磨は左上がり方向、1400はやや右上がりの傾向がある。口縁内面の研磨は基本的に左上がりで、坏に見られる右上がり方向の研磨はない。1403は平行に近く、2168は左上がりと平行の研磨が共に施される。なお、216は底部近くにも筆研磨が施される。筆研磨を施さないものも、肩部から胴上位にかけては横撫でが施されている。

1429・2405は外面全体に横位を基本とする筆研磨が施され、頸部から胴部への屈曲はやや弱くなっている。1437・1438はやや縦長の球胴で、1437は口縁内外面、外面肩部ともに筆研磨を施し、標準的な形態との共通性を示すが、1438では筆研磨が無く、さらに縦方向の筆削りで整形を行っている。

**甕**　土師器139個体と須恵器2個体がある。土師器は1群に13個体、2群78個体、3群31個体、須恵器は2個体とも2群からの出土である。土師器は器高が高い甕（94個体）と、器高が低く、口径の広い広口甕（45個体）とに分けられる。さらに、甕は、体部の丸みが目立つものと、長胴系のものとに分けられる。体部が丸みを持つ一群は、器高が30cmを越える大型のものと、20～30cm程度の中型のもの、20cm以下のものがある。大型のものは、2・3群に集中する。1群では中型との境界的な大きさのものがみられる。大型の壺と同様に、集積群の外周を形成する。最大径が胴上位にあるもの、中位にあるものが主体で、やや下位にあるものが少数ある。口縁は外反を基本とするが、直口のもの、段を有するものがある。胴部整形は基本的に縦方向の筆削りであるが、1448・1464など、直口のものでは円周方向の筆削りが見られる。1440・1441などでは縦方向の筆研磨が施される。

長胴系のものには大型に区分されるものはなく、中型以下の大きさに限られる。頸部がやや締まるものと、締まりの弱いものがある。胴部

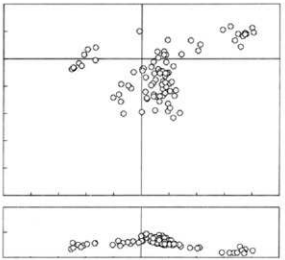


図98　高坏B類の出土位置

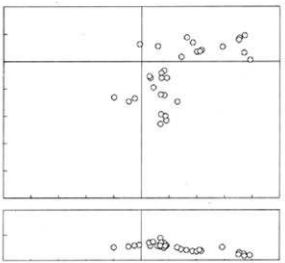


図99　高坏C類の出土位置

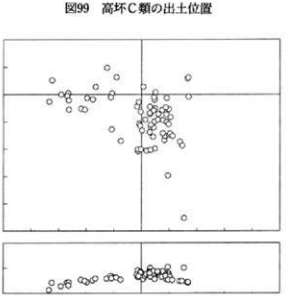


図100　高坏D類の出土位置

整形は縦方向の篦削りで、口縁は外反する。

広口甕は丸底のもの、平底のものがあり、最大径を胴中位に置くものが多く、短く外反する口縁を付す。器高17cmを越える比較的大きなものと、15cm以下のものがある。胴部の整形は、平底のものには縦方向、丸底のものには円周方向の篦削りが施される傾向が認められる。1503は、口縁の一部を切り取り、片口風に仕上げている。

**鉢**　75個体ある。1群に8個体、2群に41個体、3群には22個体ある。丸底のもの、平底のものがあり、前者は坏に、後者は甕に近いつくりである。広口甕と同じく、器高17cmを越える比較的大きなものと、15cm以下のものがある。大型のものは平底に限られ、2・3群に認められる。1517・1518・2207などがこれにあたるが、1群では、大型の広口甕228がこれに代わるものだろうか。これを小型にした形態が1520・1521・2209・2210などであるが、これらも1群にはない形態である。1519・2417は、2207などの口縁を、外反させずに、直立させた形状を示す。胴部の整形は、円周方向の篦削りを基本とするが、中に縦方向篦削りを施すものもある。丸底のものには、坏と同じく内面に放射状の篦研磨を施すものがある。脚付きが240・1550・2221の3点あり、1～3群に各1点ずつ含まれる。このうち240は、内面に放射状の篦研磨を施す。236は、小さな丸底から口縁が大きく開く形態、241は高台状の小さな脚が付く。2208は外形的には甑に近い。

**その他の土器**　甕が土師器2個体、須恵器2個体がある。土師器の1558は2群にあり、坩の胴上部に小穴を穿孔したもの、2299は4群にあり、やや小型の坩の胴中位に穿孔したものである。片口は、無頸の深い鉢状品を本体とし、その口縁の一端をつまみ出して口としたもので、

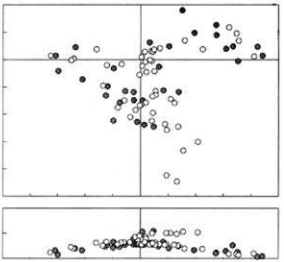


図101　壺の出土位置

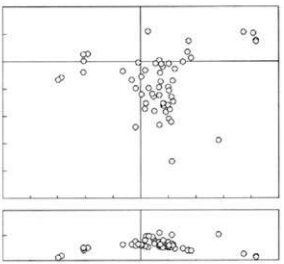


図102　坩の出土位置

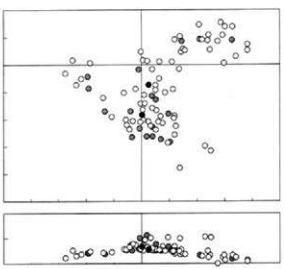


図103　甕の出土位置

底部には高台状の低い脚を付す。3群にある。須恵器の甕は2群・3群から各1点出土している。甑は、完形のものとしては、3群に小型品(2227)が認められたのみであったが、破片中に底部片が2個体分認められたので、小片であるが図示した。底部を欠く形態のものであるが、全体の形状は不明である。1群と3群にある。蓋は4個体ある。浅い坏状の体部に高台状の突出部をつまみとして付したもので、坏状部の内面には放射状の篦研磨を施す。つまみ部へは、体部から比較的長い単位で、篦による撫でつけを行っている。1群に3点、3群に1点認められた。

**台付坏**　坏・鉢の形態であるが、底部に高台状突起を付すものが11個体ある。坏A類に相当するもの3個体、B類に相当するもの2個体、D類に相当するもの3個体、坏B類を深くした形態の鉢形のもの3個体で、1群にB類相当品1個体、3群にA類相当品2個体と鉢形品1個体があり、他は2群にある。底部以外の成・整形は坏に準じるが、内面の篦研磨は246・1561・1564に認められるのみである。底部の突起は、D類相当の2284・1563及び鉢形品では明瞭であるが、A類・B類相当品では、一部撫でつけられるような形でつぶれている。

**粗製坏**　坏に、かなり形のゆがんだ、粗製のものがある。A類相当品6点、B類相当品2点がある。外面は篦削り後篦撫でを行い、口縁には横撫でを施す。また、247・2233では内面に篦研磨も施されるが、全体に粗雑である。1567は口唇に串状具を押しつけたような刻みが2か所、ほぼ対称の位置に付けられている。247が1群であるほかは、すべて2群からの出土である。

**小型土器**　坏・高坏・坩に、通常の大きさより、かなり小型の一群が認められる。坏A類19点、B類4点、E類かと思われるもの1点、高坏ではA類8点、E類2点、坩5点がある。坏は、器高5

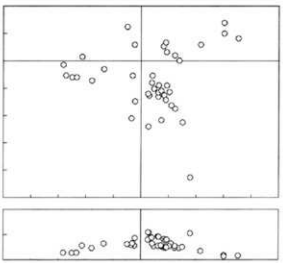


図104　広口壺の出土位置

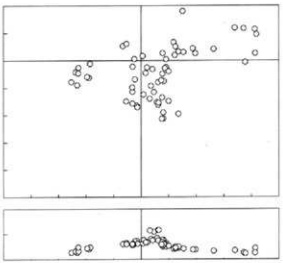


図105　鉢の出土位置

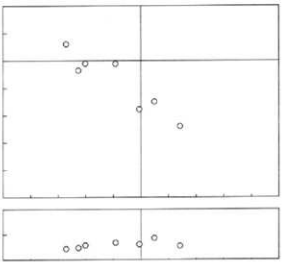


図106　甕・蓋・甑の出土位置

cm以下、口径10cm以下であるが、成・整形は通有の坏と変わらない。内面に放射状の篦研磨を施すものも多い。1580・2239は平底である。高坏は器高10cm以下で、特に小型の252は、脚部をひねり出すように作っており、手捏ね風ではあるが、坏部内面には放射状の篦研磨を施す。他は、通有の坏に近い成・整形でA類は放射状の篦研磨を施すものが多いが、左上がりの研磨は8個体中3個体で、4個体が右上がりの研磨である。1582は坏部内面の研磨を欠く。A類・E類共に高坏の中では数の少ない形態である点注意されよう。E類は2個体とも2群に属する。坩は1群に1点、3群に4点あり、2群には認められない。標準的な坩の形態とは異なり、やや扁平なもの、頸のしまりの弱いものなどがある。篦研磨を施すものは、短頸壺的な形態の256のみである。

**手捏ね土器**　5点を手捏ね土器とした。坏形であるが、全体を手指によって成形した、という意味での手捏ね土器はなく、いずれも篦を当てている。2群から出土している1585・1586は、ごく小型であるが丁寧な作りで、指頭痕をほとんど残さないミニチュアである。底部は高台状の突出を有する平底である。257・2246は、やや大きく、外面には指頭痕が残る。底部は高台状の突出を有する平底である。内面は篦撫でを施す。以上4点は、坏ではA類に当たる。2247はB類の坏を模したものかと思われる。平底で、外面には指頭痕が多い。1群で257が、3群で2246・2247が出土している。

**石製模造品・臼玉**　臼玉2点が蛇紋岩製であるほかは、すべて滑石を素材とする。石製模造品は73点あり、このうち小破片24点を除いた49点を図示した。器形を窺うことができるものは29点で、剣形品およびこれと想定されるものが22点と最も多く、他に勾玉形5点、斧形1点、単孔円盤1点である。他は器形の確認できない破片である。臼玉は径5～6㎜ほどのものが多く、8㎜を超える

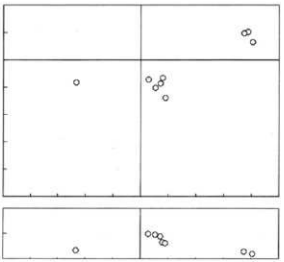


図107　台付坏の出土位置

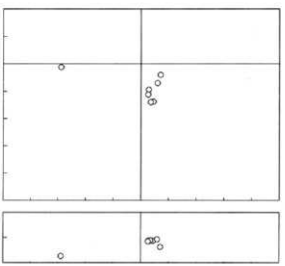


図108　粗製坏の出土位置

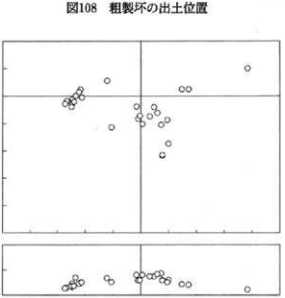


図109　小型土器の出土位置

ものが10点ある。側面は斜研磨で、上下２段階に分けて研磨するものが多い。穿孔の径は1.5～３㎜程で、片面から穿孔し直接貫通させるものが多く、両面穿孔と見られるものは196の１点のみである。側面は斜方向の研磨で、長方形の断面形を有するものが多いが、上下２段に研磨して、中央部にごく弱い稜を持ち、断面形ではやや胴が膨らむもの、台形あるいは家形を呈するものもある。石製模造品、白玉共に位置情報が欠け、帰属群も不明なものが多いため、分布状態に積極的な意味を認めることはためらわれる。

**集積群の器種構成と特徴**　１～３群について、土器全体を坏、高坏、壺・坩、甕・鉢、その他の５つの器種に大きく分類してみると、それぞれの器種が占める比に顕著な差は見られない。坏が70%とその大部分を占め、高坏が10%程度、壺・坩が５～６%、甕・鉢が８～９%となっている。

１～５群という集積群の区分は、土器群の平面的な「見かけ」上の分布をもって区分したものである。調査時点の違いや、土止め工事などによって、「見かけ」が形成された可能性もなしとはしない。しかし、前項で触れたとおり、主要な集積群においては、特に坏類から群ごとの特徴が抽出できる。A・B類については各群共通してそれぞれ40～50%台の比率を示す。他類は数的に少ないが、坏全体との比において、群ごとに差を見せる。C類は２群での比率が低く、３群に高い。D類は１群で高い比を示す。E類はD類と対照的に３群で高い比を示している。また、高坏では、１群にC類が欠け、３群で高い比を示し、D類では、坏D類と同様に１群で比較的高い比が示される。これらが、各集積群形成に当たってのどのような差を示すものであるのか、たとえば時期差を直接反映するものであるか否かについては、さらに検討を加えなくてはならないが、主要集積群の認識が、単なる見かけ上の区分にとどまるものではなく、有意であることが示されるものと解したい。

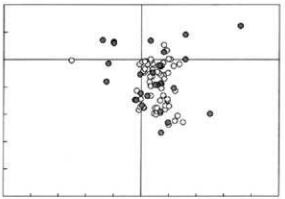


図110　石製模造品・白玉の出土位置

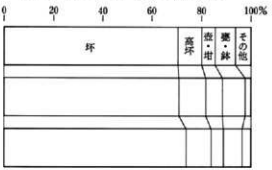



図111　各集積群の器種構成

図112　坏C類の群別量比

図113　坏D類の群別量比

図114　坏E類の群別量比

図115　高坏C類の群別量比

図116　高坏D類の群別量比

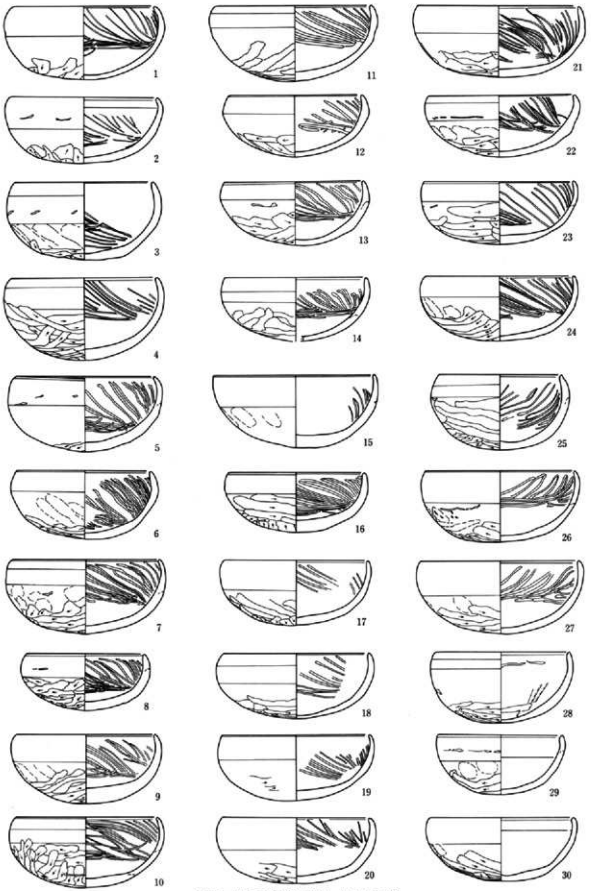



図117　器物集積遺構出土土器（1群）

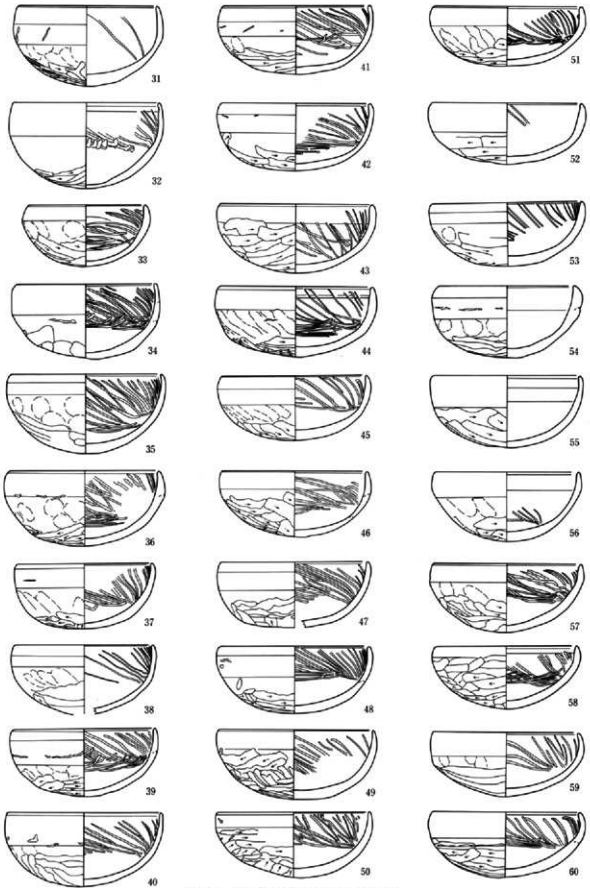



図118　器物集積遺構出土土器（1群）

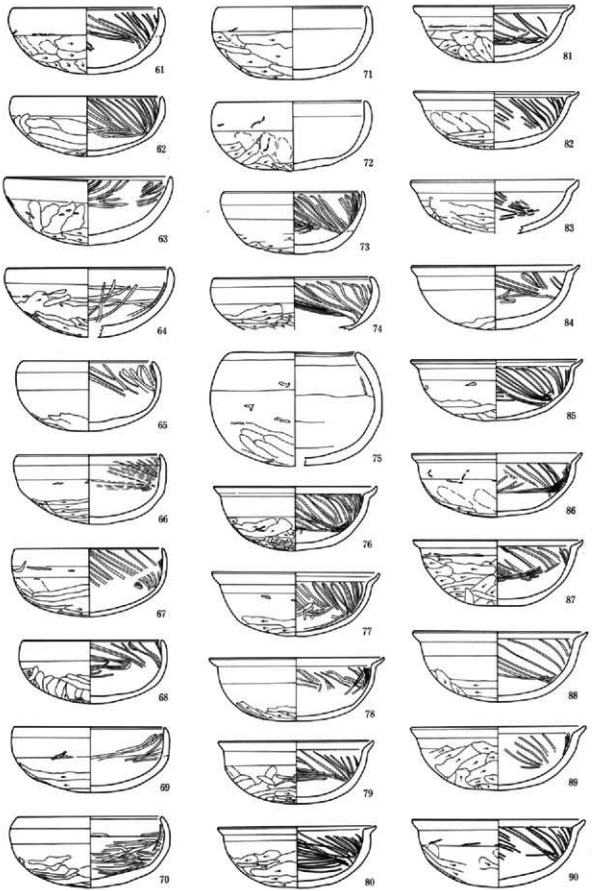



図119　器物集積遺構出土土器（1群）

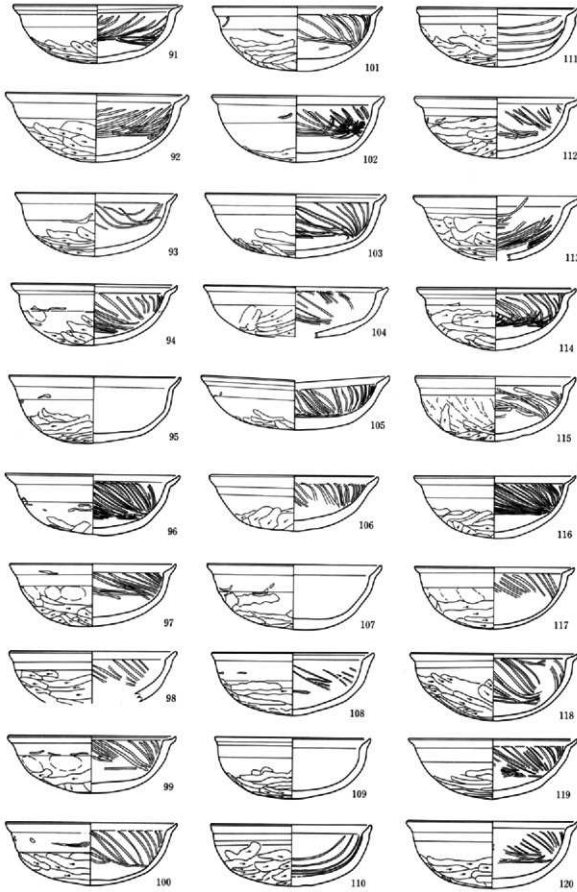



図120　器物集積遺構出土土器（1群）

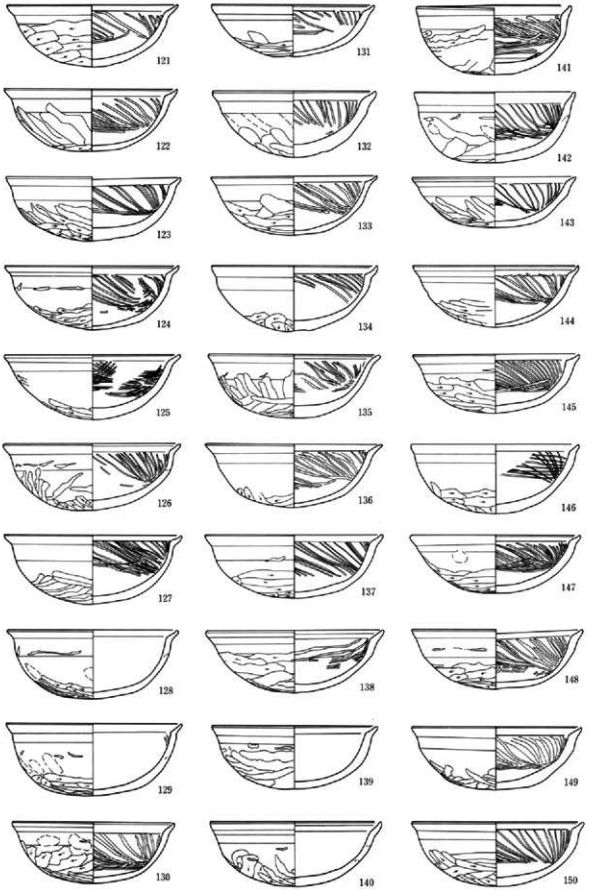



図121　器物集積遺構出土土器（1群）

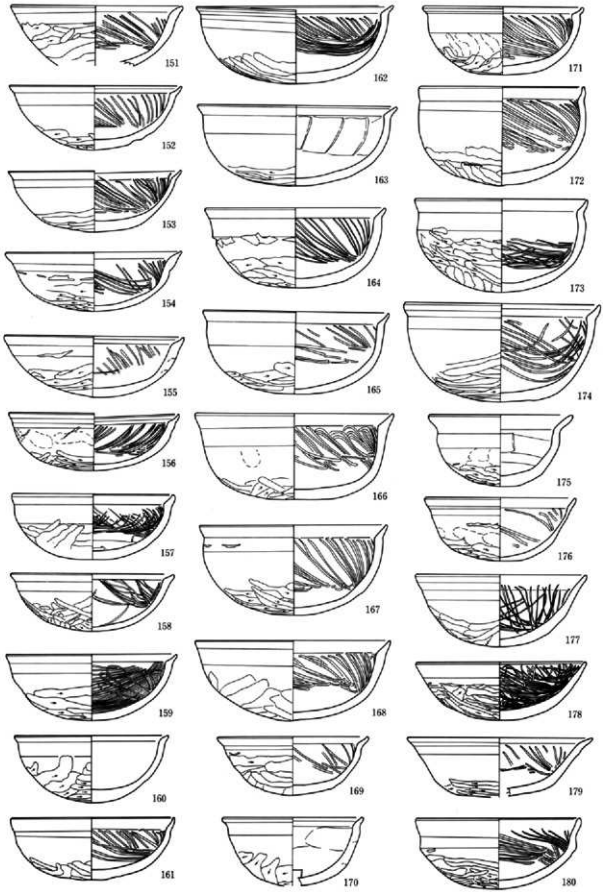



図122　器物集積遺構出土土器（1群）

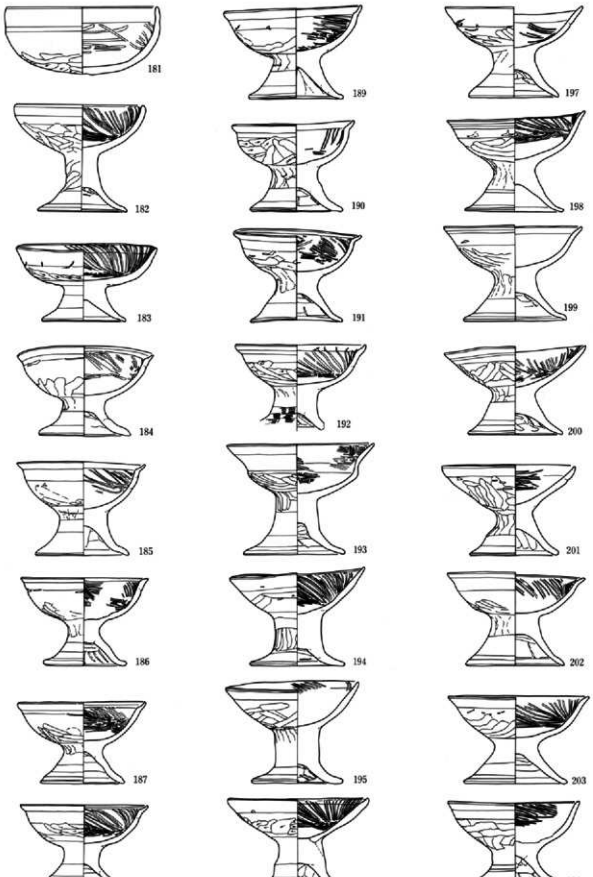



図123　器物集積遺構出土土器（1群）

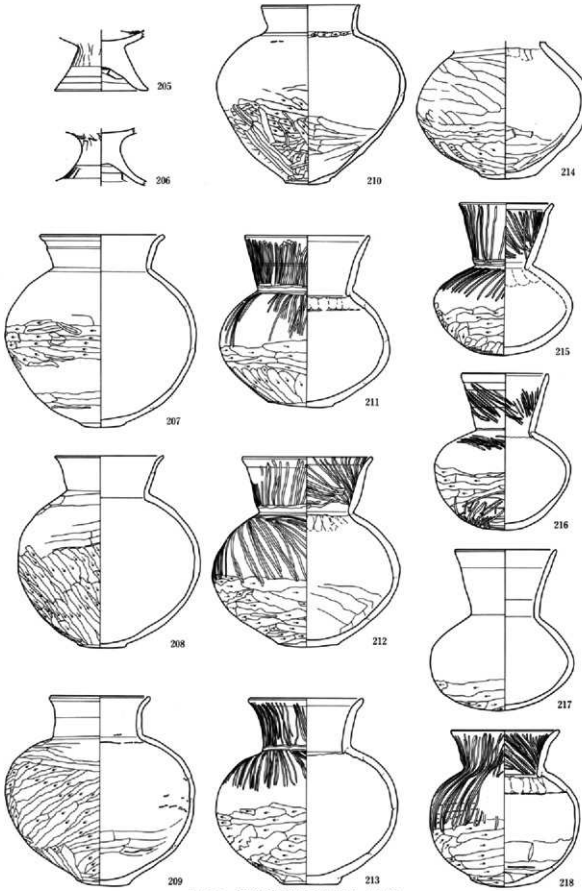



図124　器物集積遺構出土土器（1群）

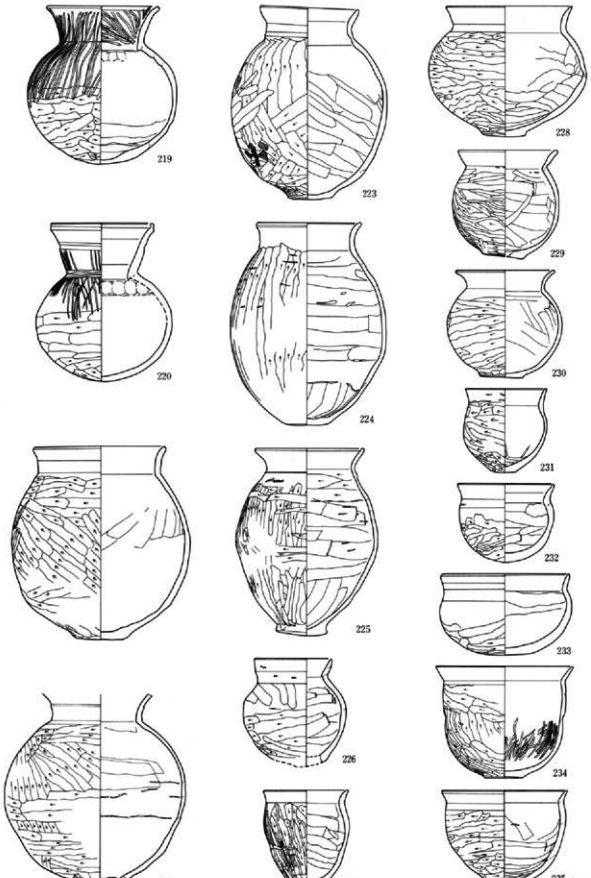



図125　器物集積遺構出土土器（1群）

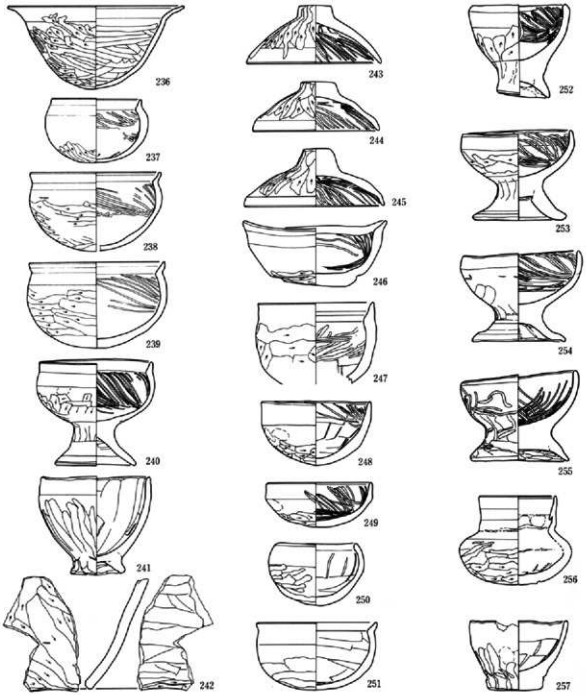



図126　遺物集積遺構出土土器（1群）

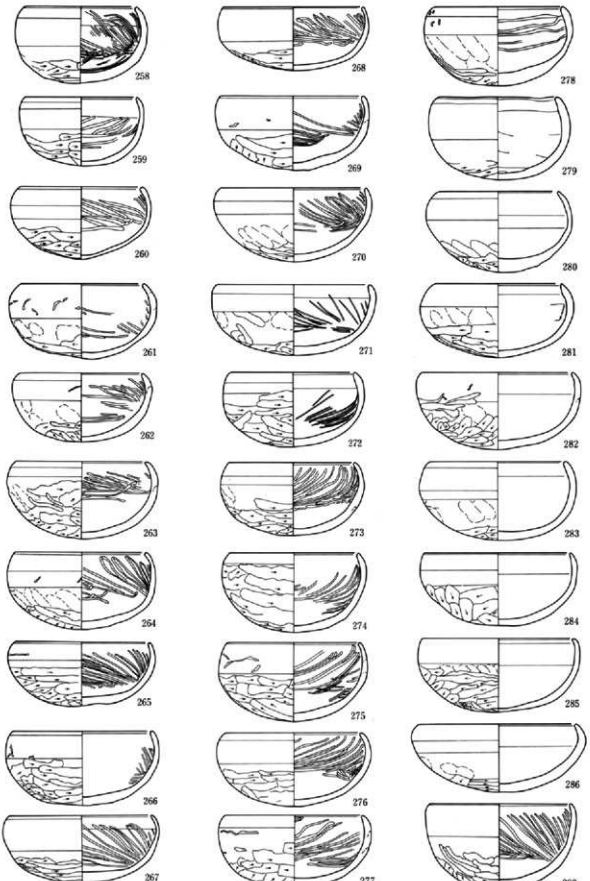



図127　器物集積遺構出土土器（２群）

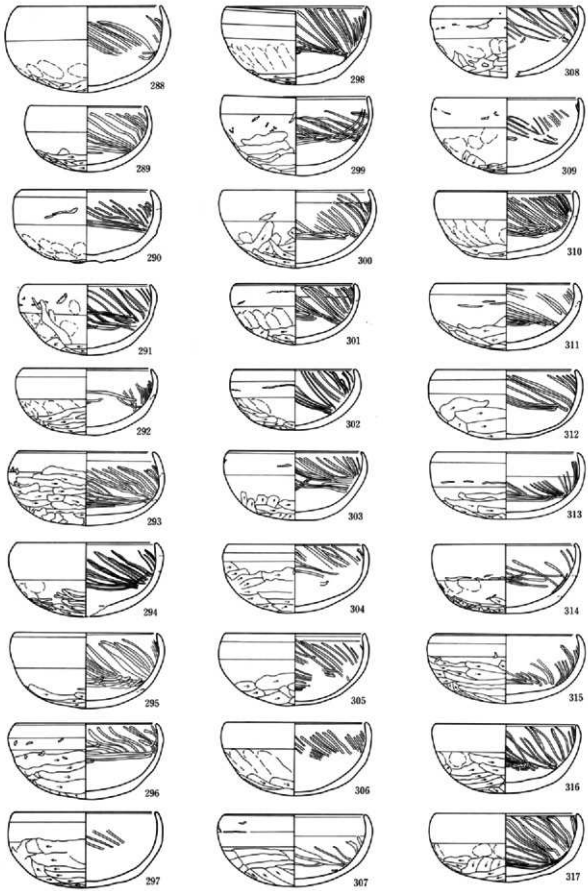



図128　器物集積遺構出土土器（２群）

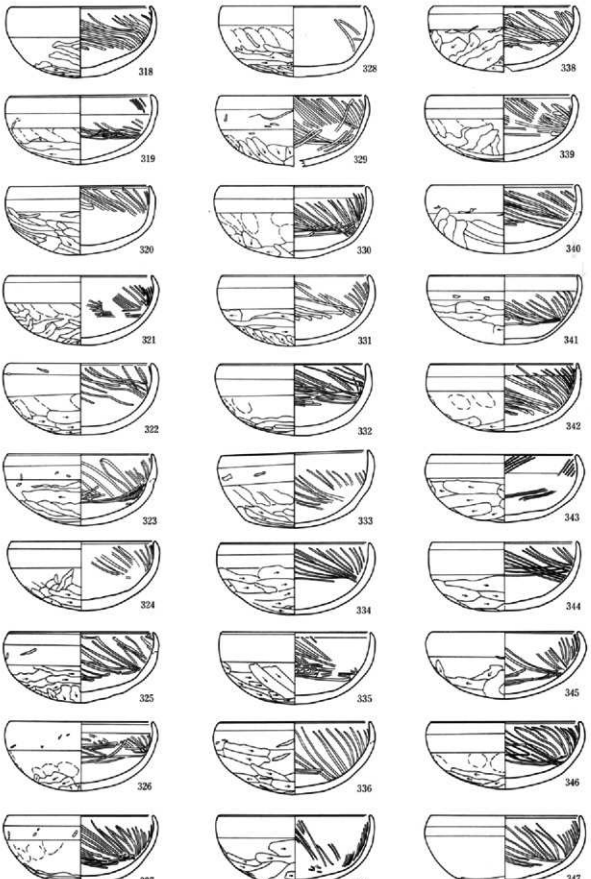



図129　器物集積遺構出土土器（2群）

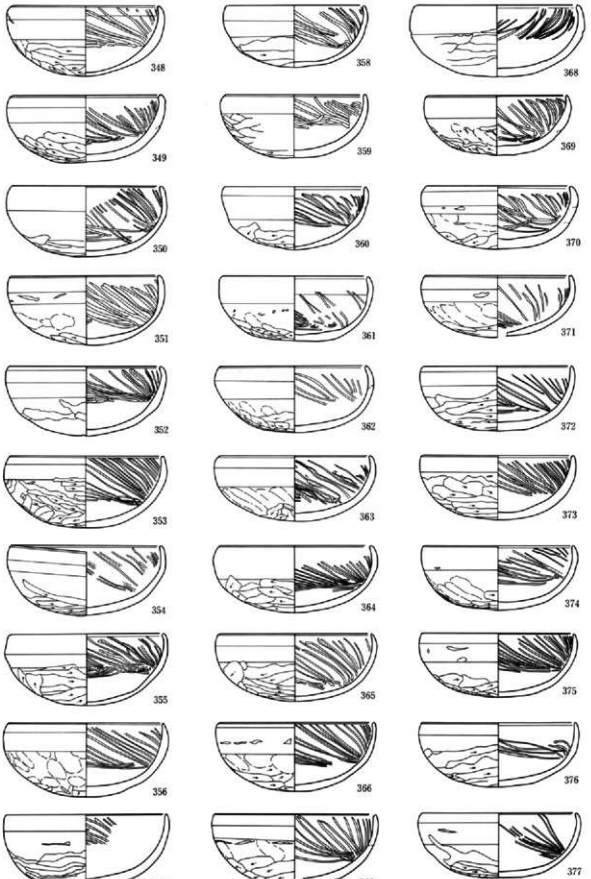



図130　器物集積遺構出土土器（2群）

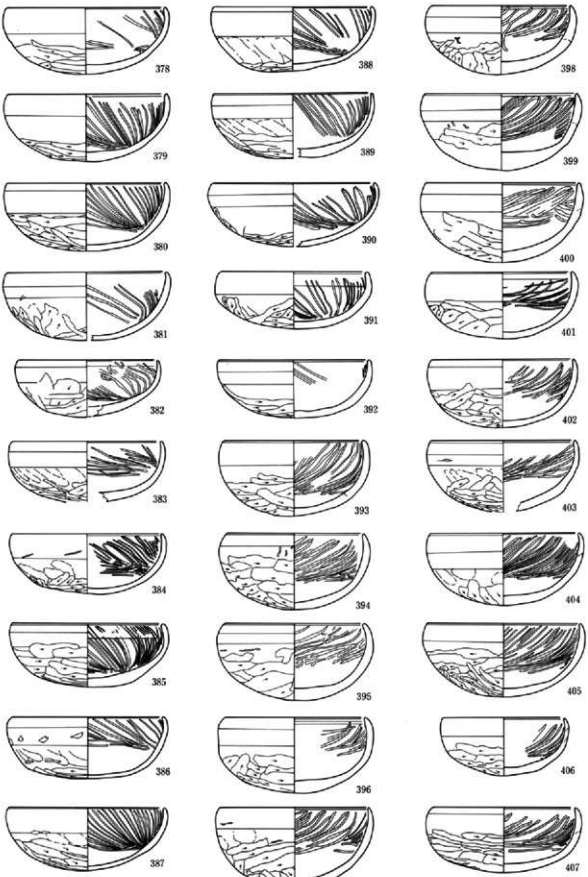



図131　器物集積遺構出土土器（2群）

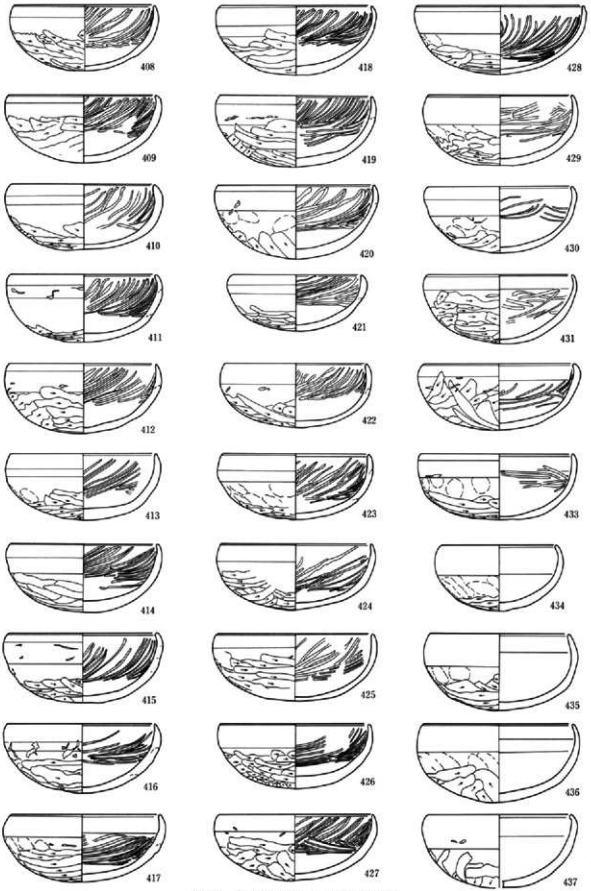



図132　器物集積遺構出土土器（2群）

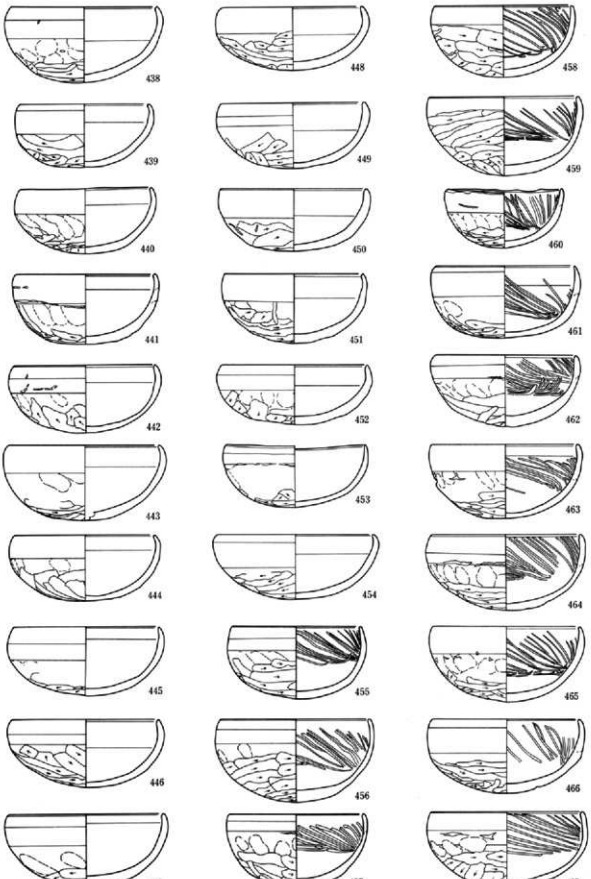



図133　器物集積遺構出土土器（２群）

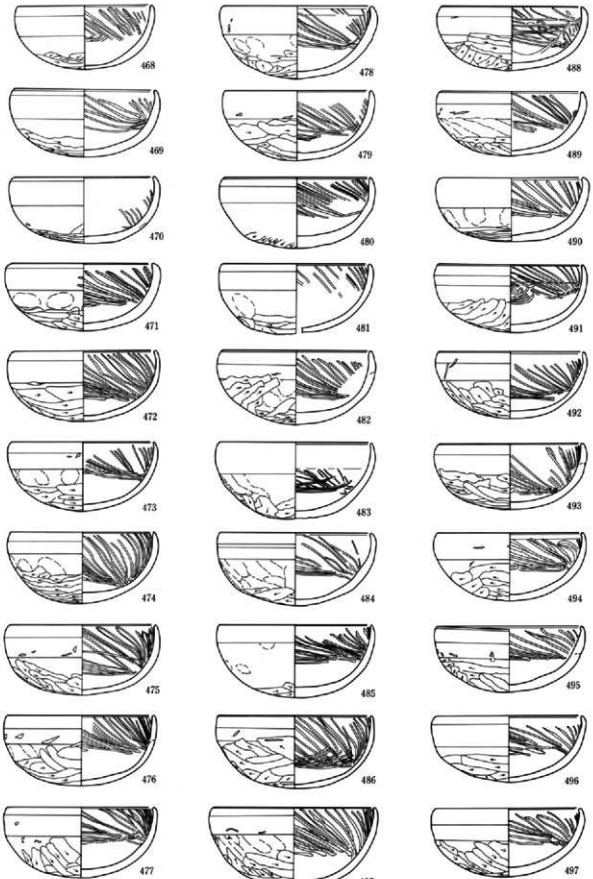



図134　器物集積遺構出土土器（2群）

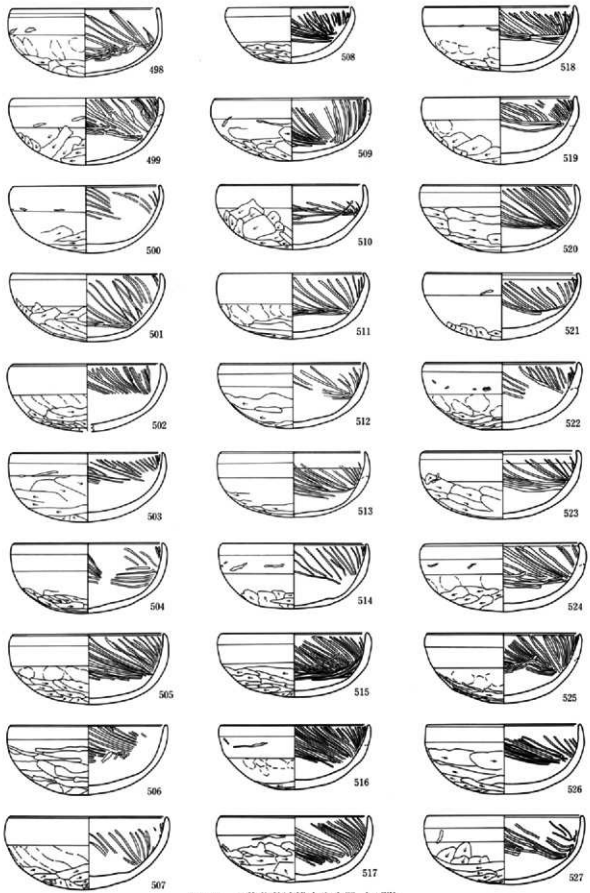



図135　器物集積遺構出土土器（２群）

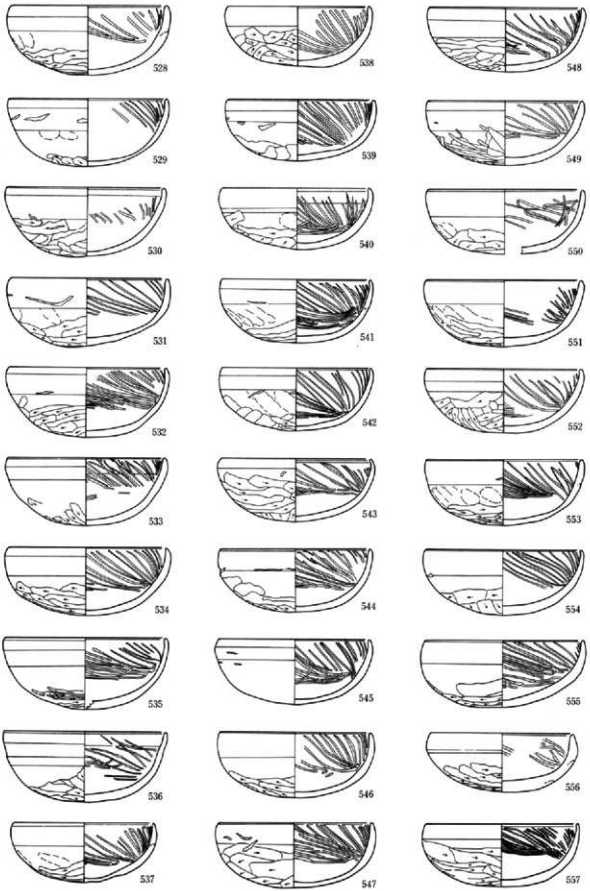



図136　器物集積遺構出土土器（２群）

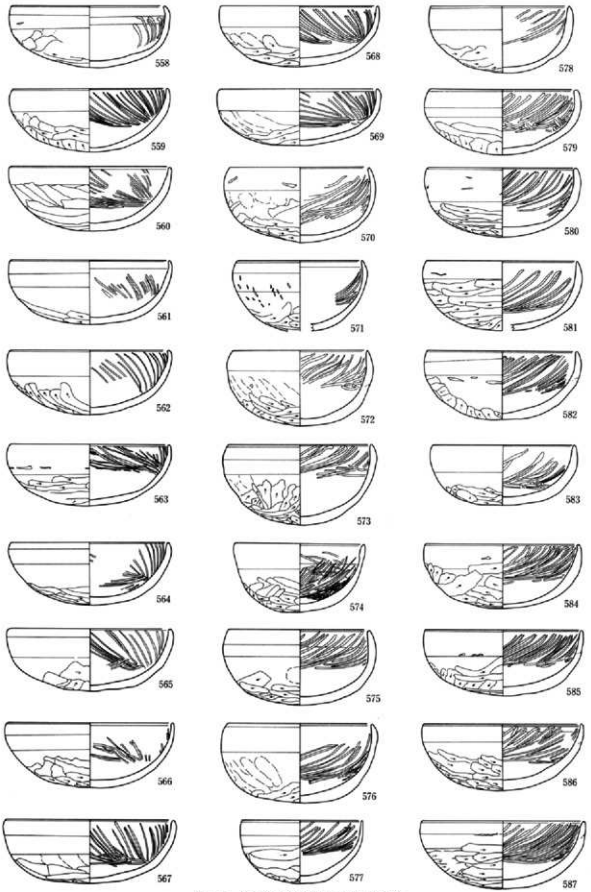



図137　器物集積遺構出土土器（２群）

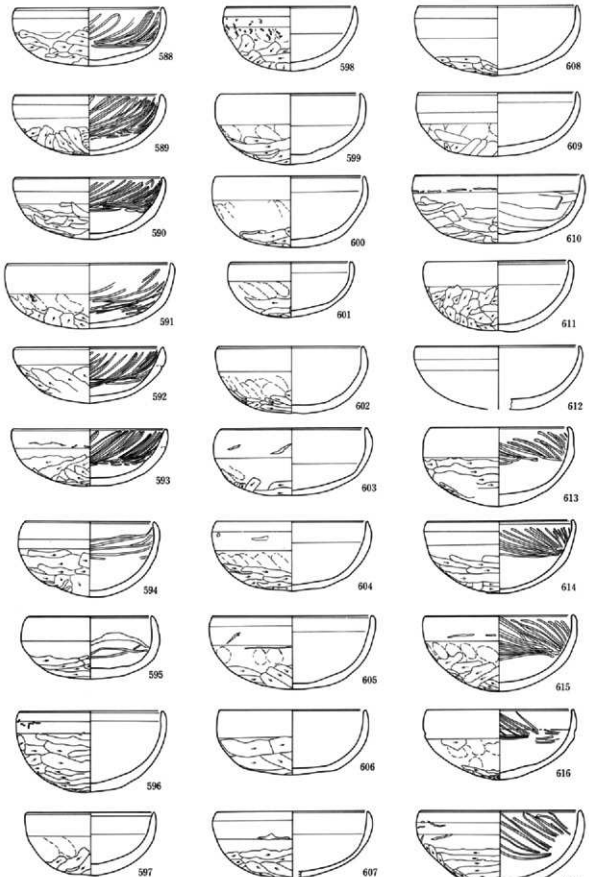



図138　器物集積遺構出土土器（2群）

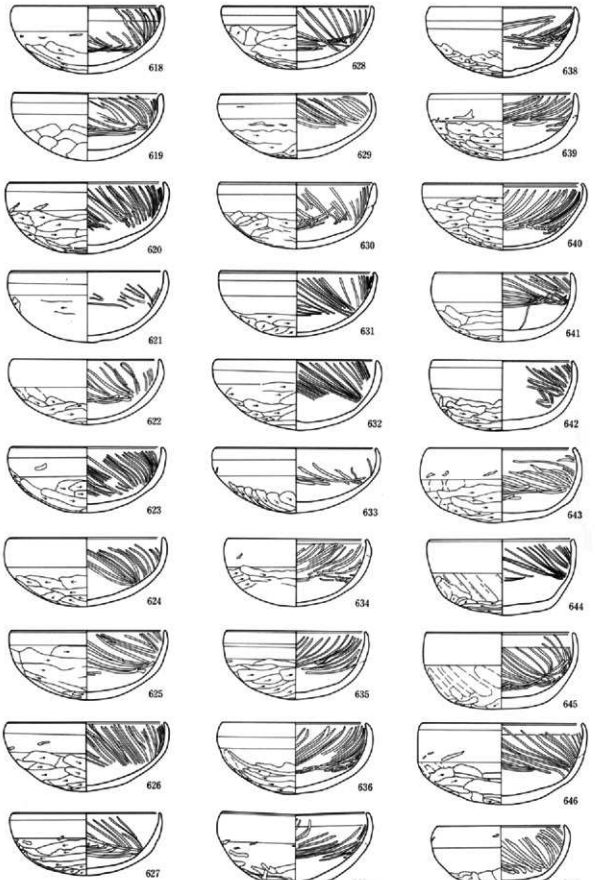



図139　器物集積遺構出土土器（2群）

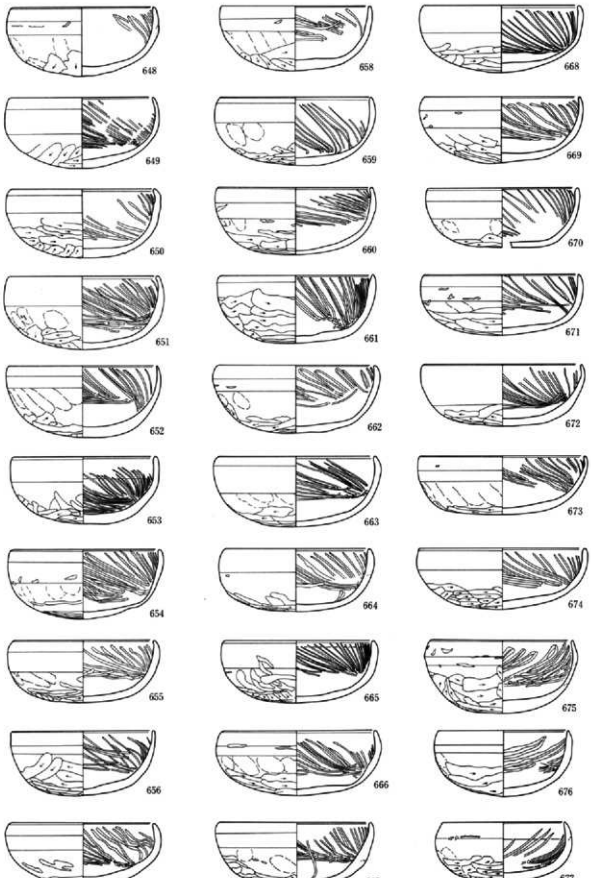



図140　器物集積遺構出土土器（2群）

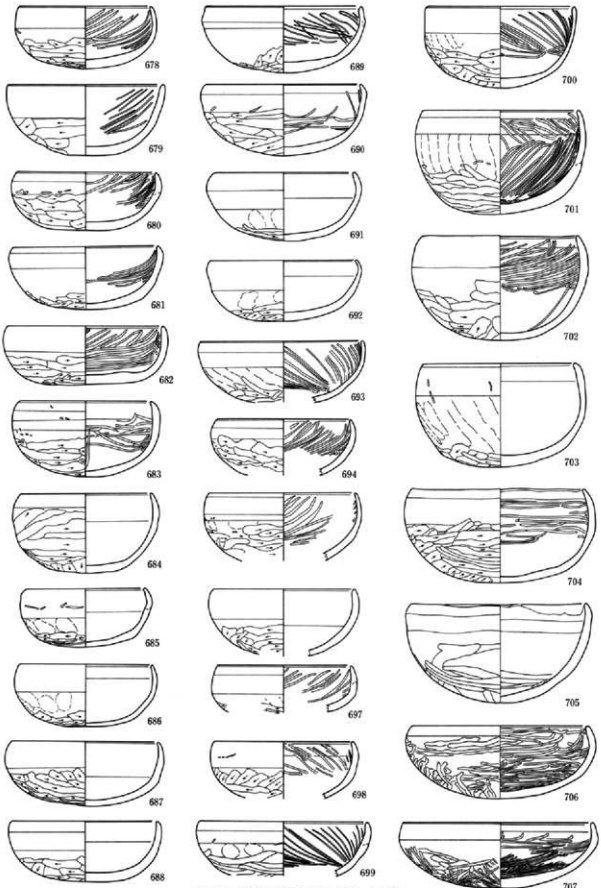



図141　器物集積遺構出土土器（２群）

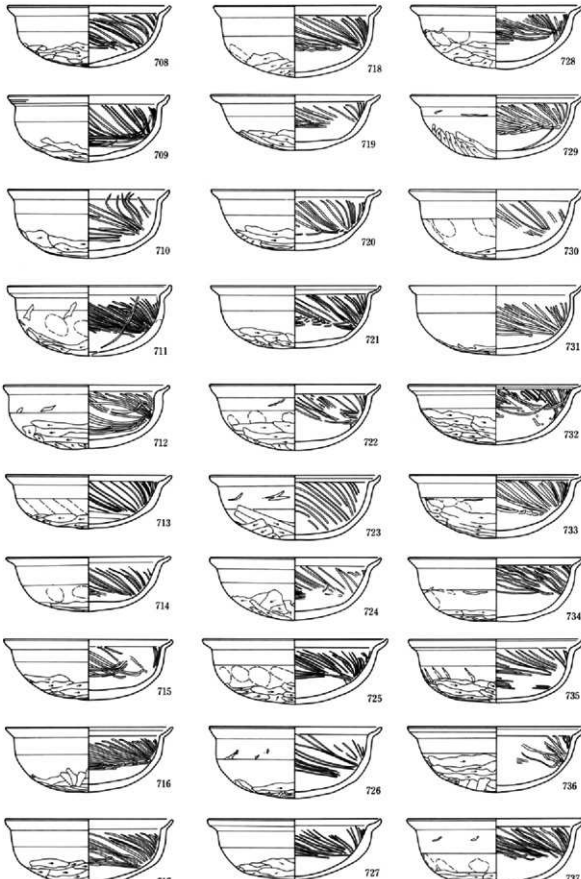



図142　器物集積遺構出土土器（2群）

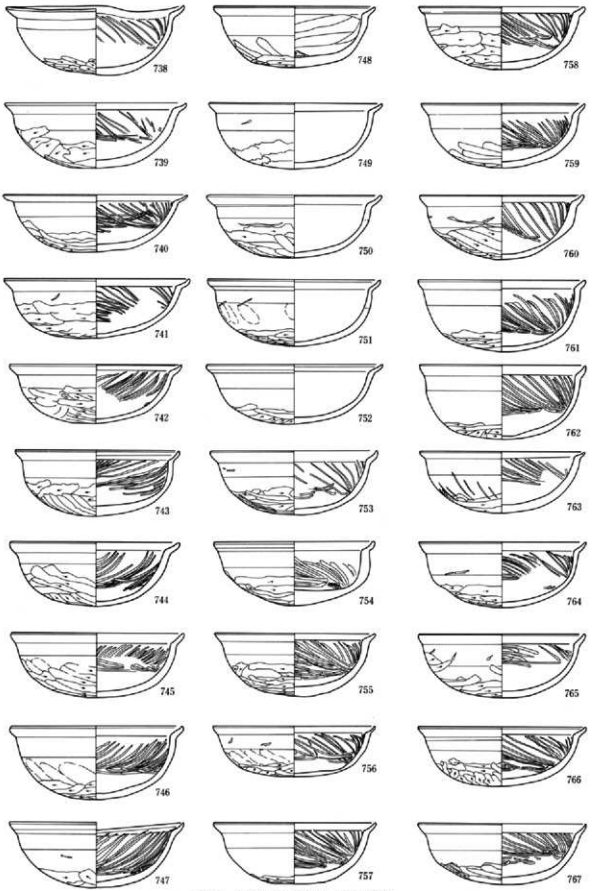



図143　器物集積遺構出土土器（２群）

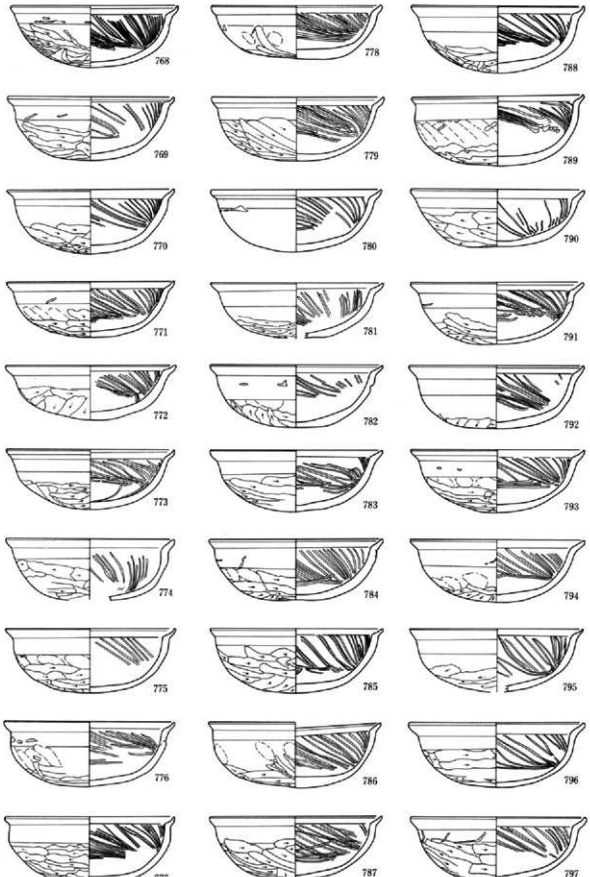



図144　器物集積遺構出土土器（2群）

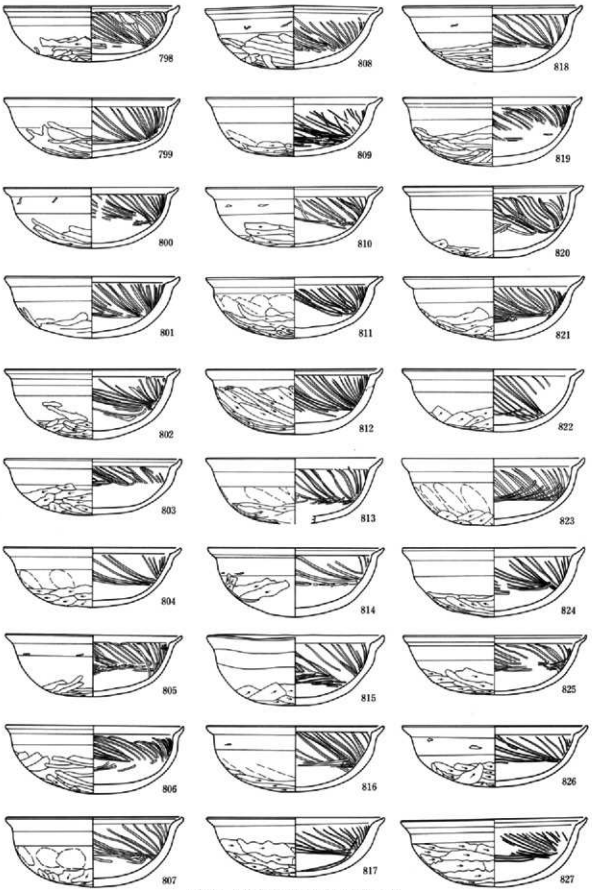



図145　器物集積遺構出土土器（2群）

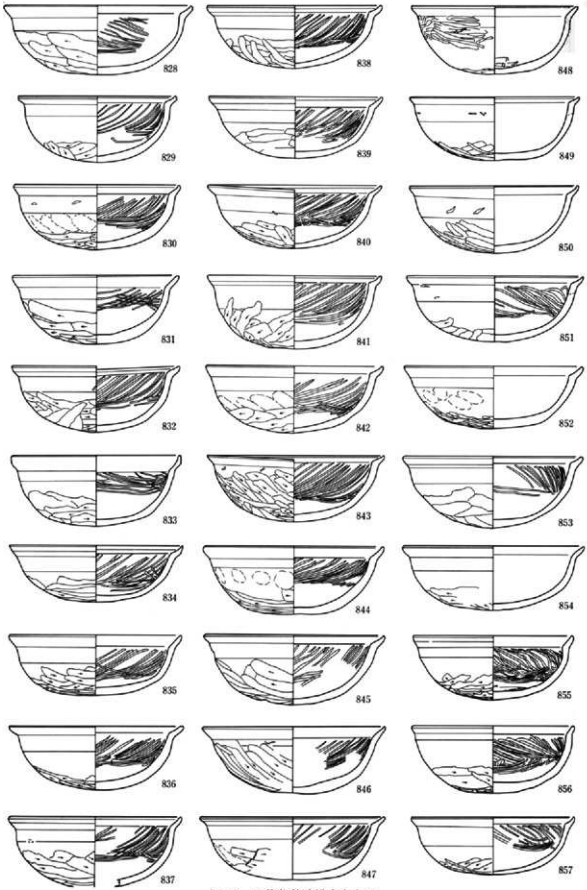



図146　器物集積遺構出土土器

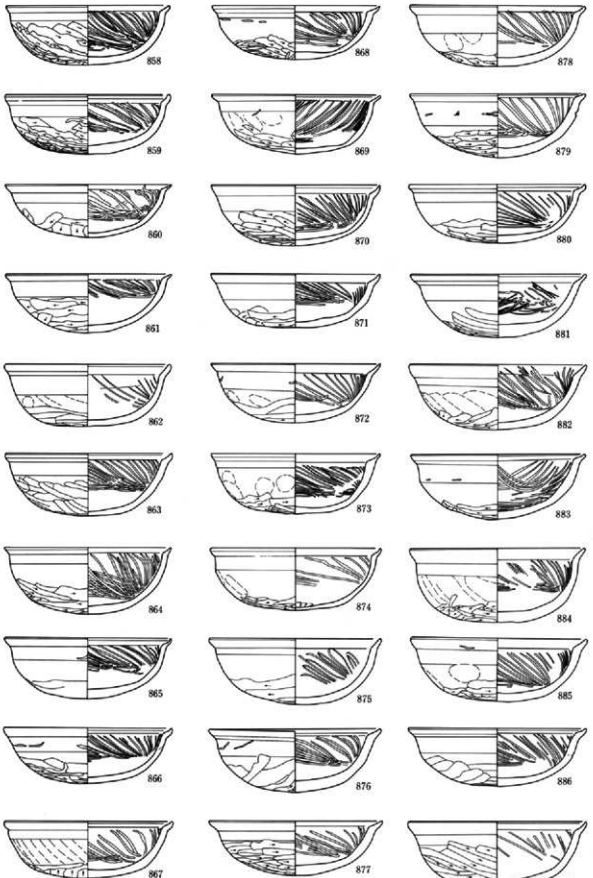



図147　器物集積遺構出土土器（２群）

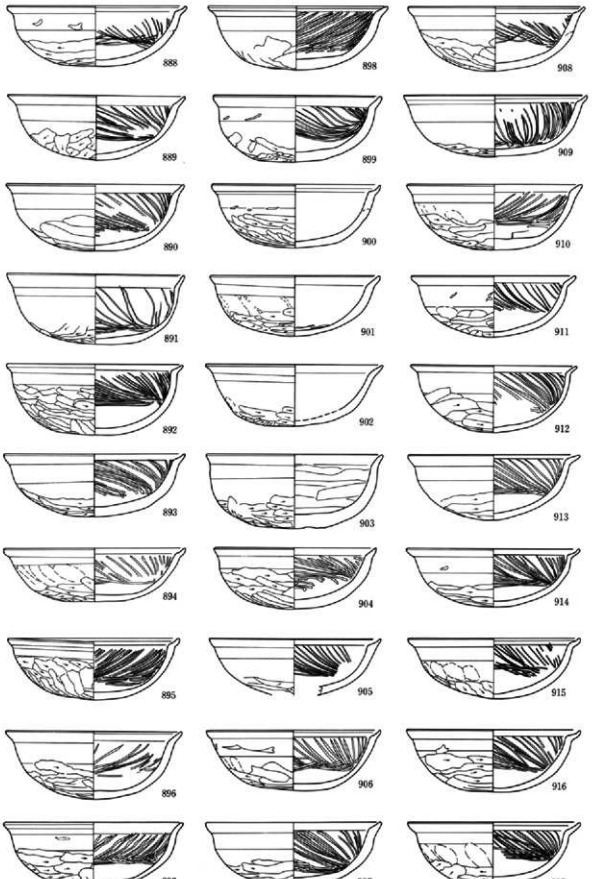



図148　層物集積遺構出土土器（2群）

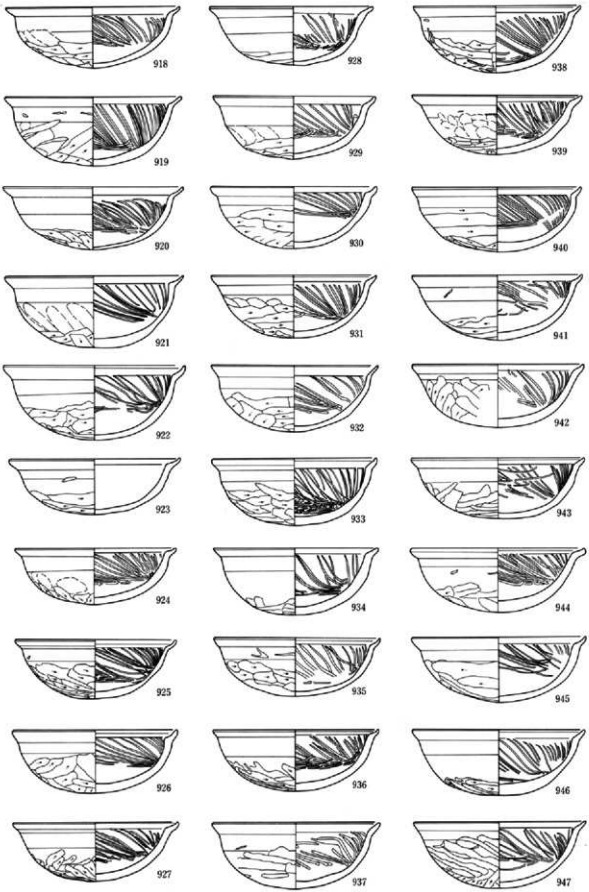



図149　器物集積遺構出土土器（２群）

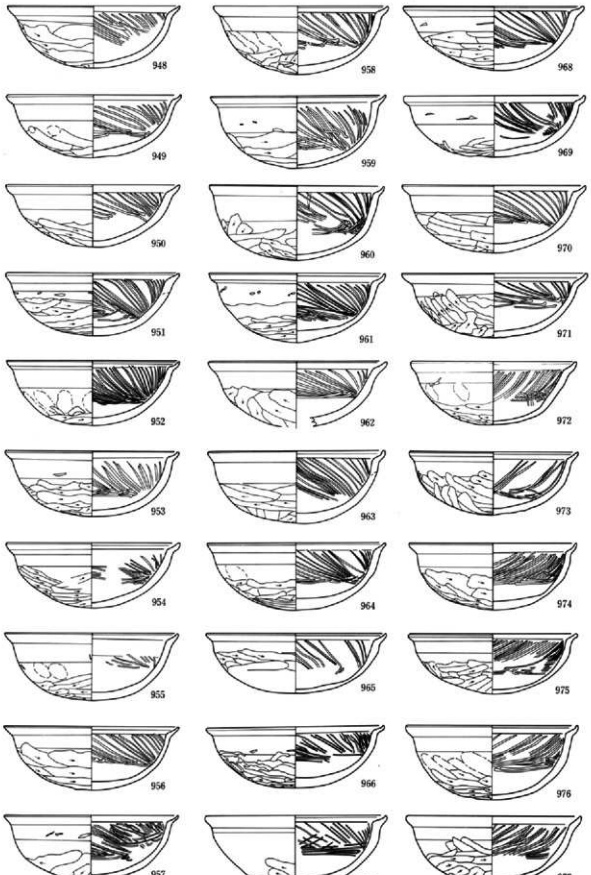



図150　器物集積遺構出土土器（2群）

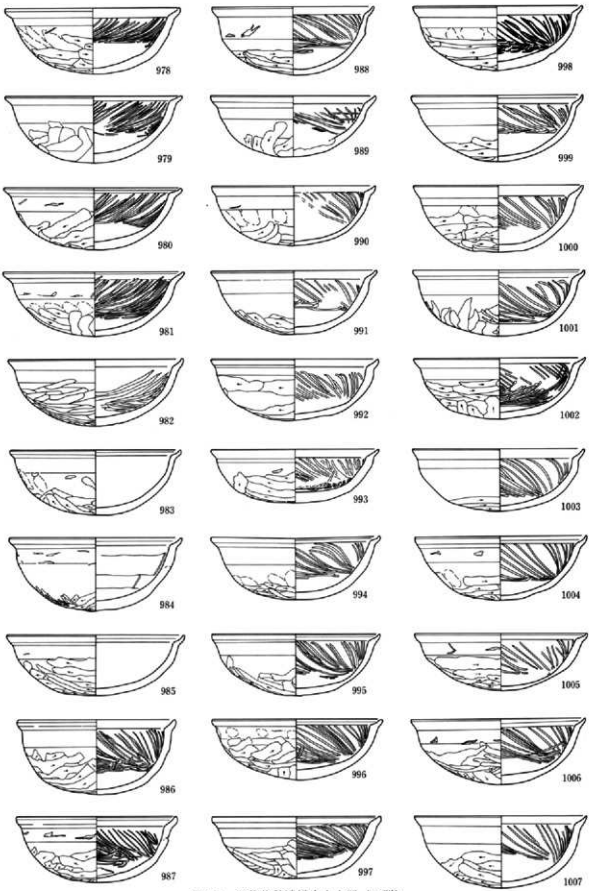



図151　器物集積遺構出土土器（２群）

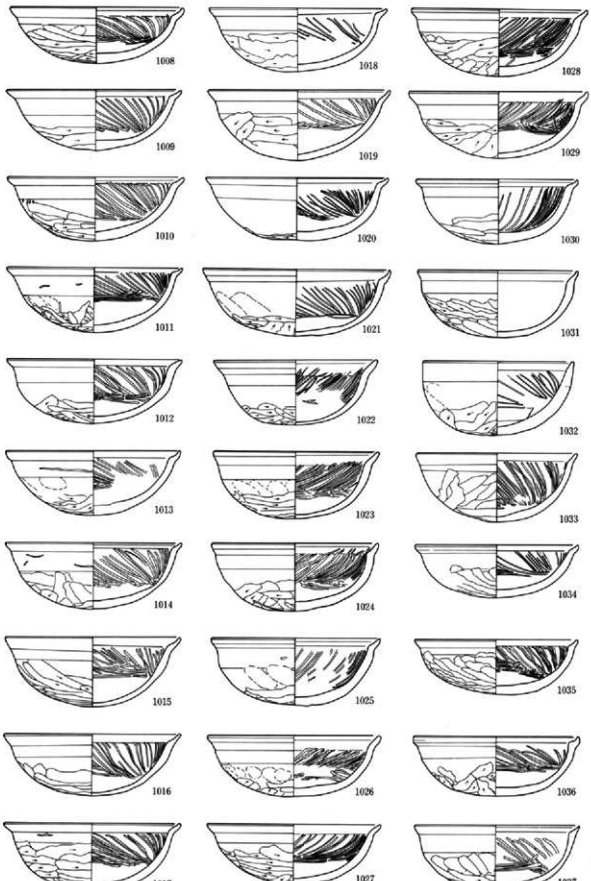



図152　器物集積遺構出土土器（2群）

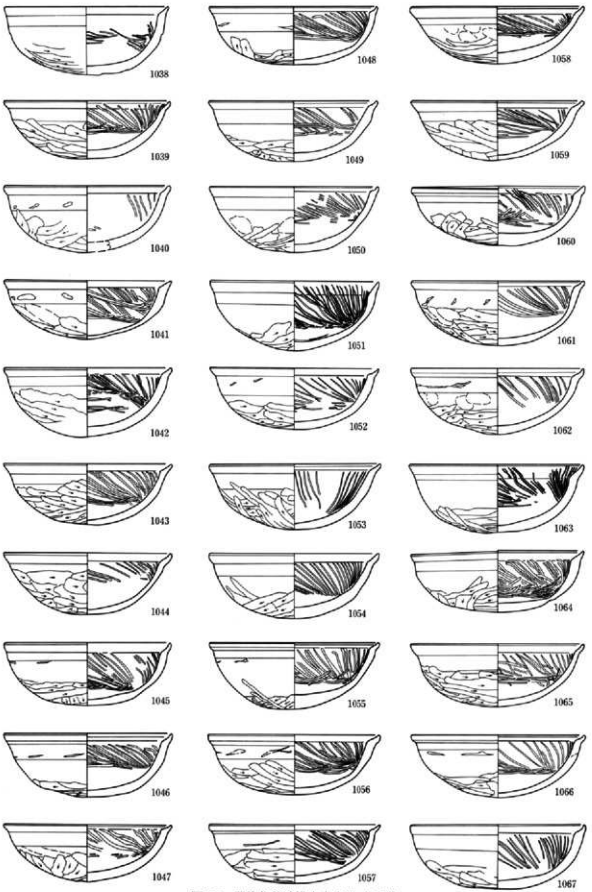



図153　器物集積遺構出土土器（２群）

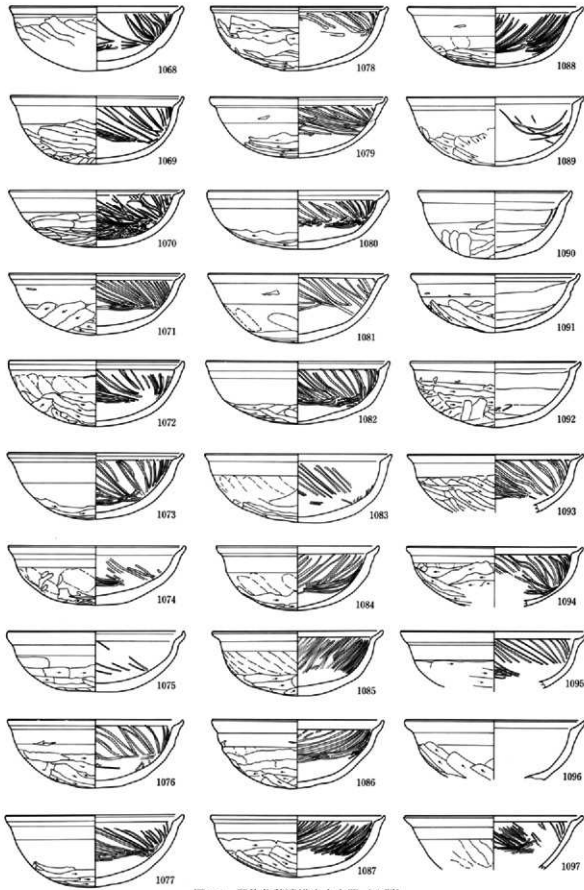



図154　廃物集積遺構出土土器（２群）

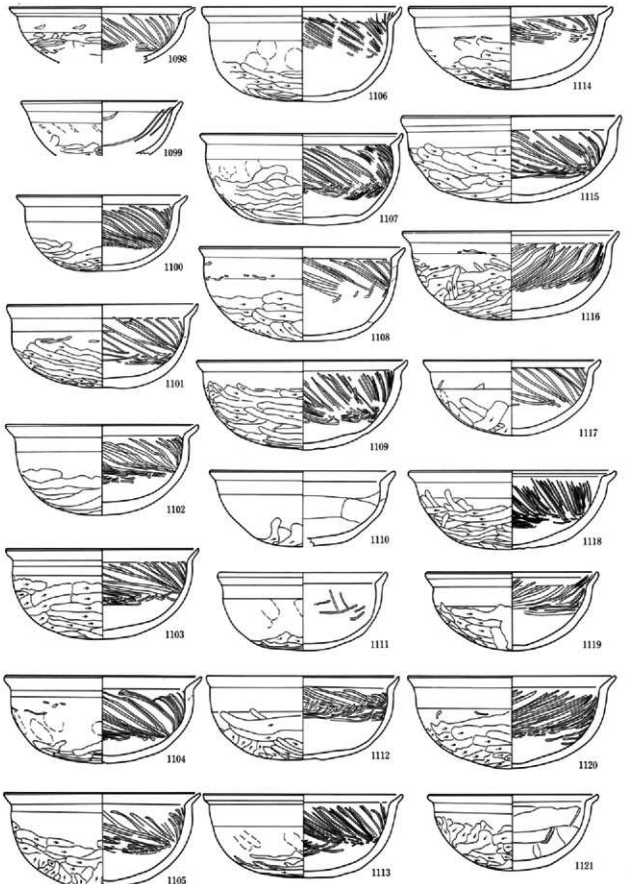



図155　器物集積遺構出土土器（２群）

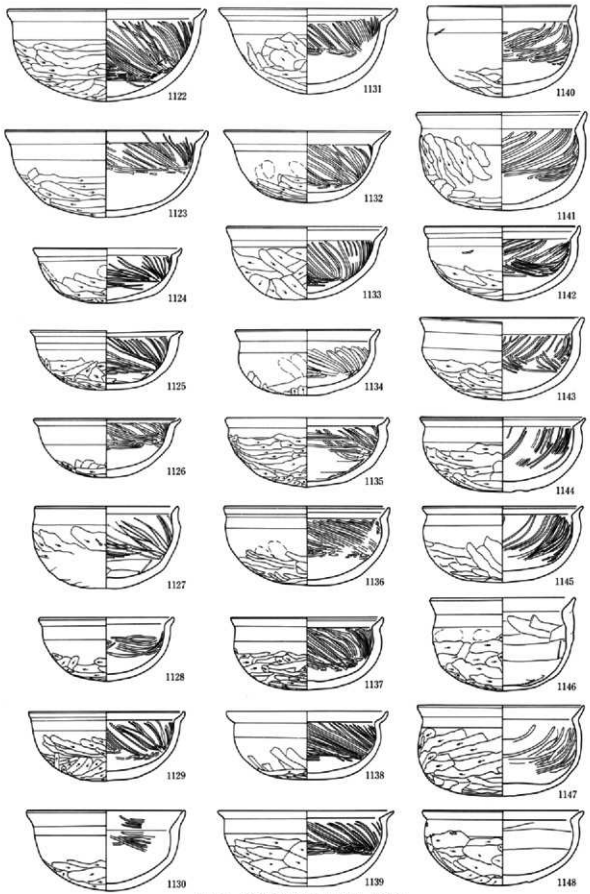



図156　廻物集積遺構出土土器（2群）

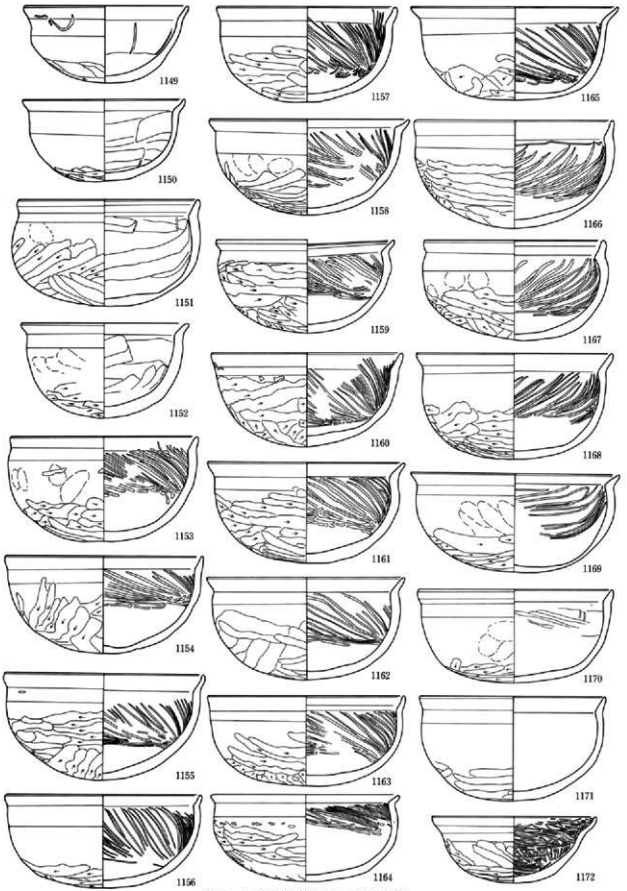



図157　器物集積遺構出土土器（２群）

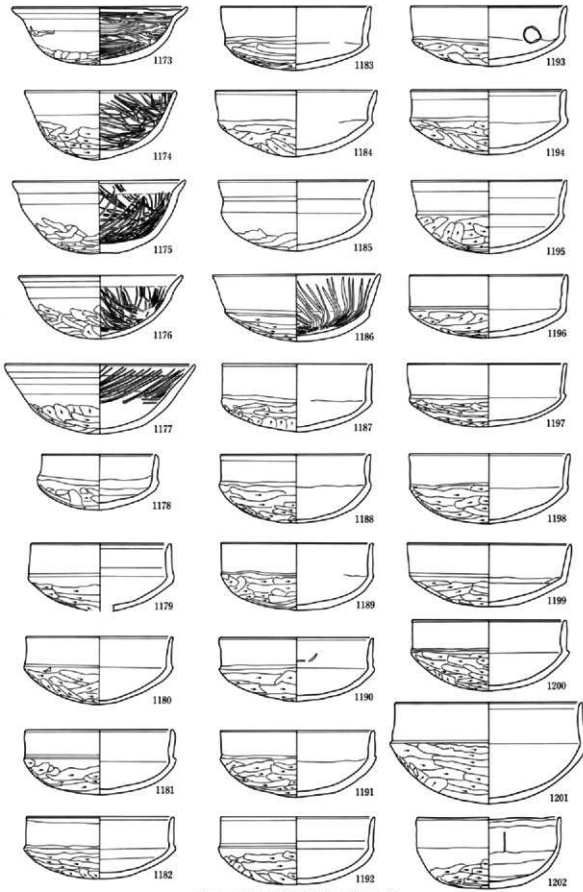



図158　溜物集積遺構出土土器（２群）

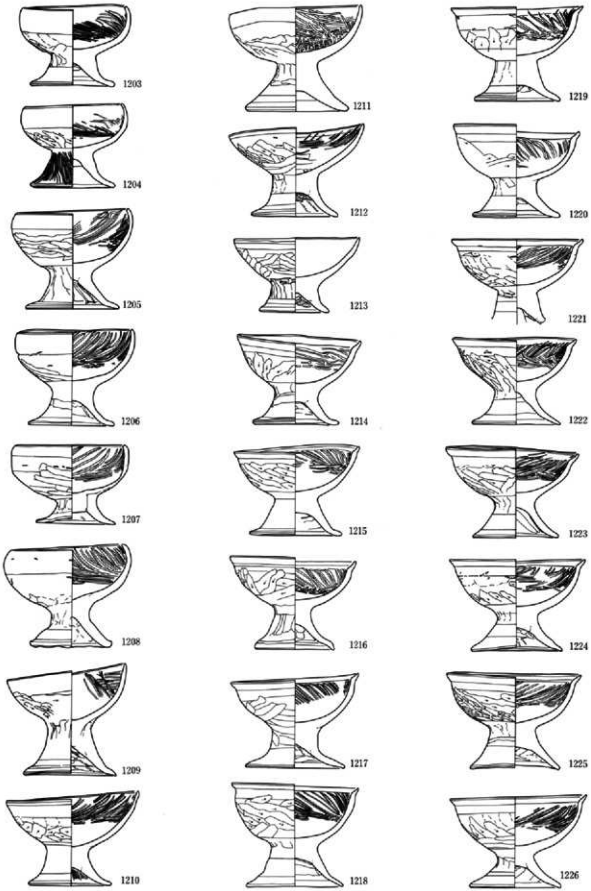
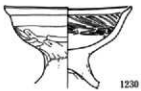



図159　器物集積遺構出土土器（２群）

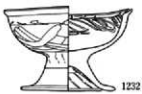
1227

1228

1229


1230

1231


1232

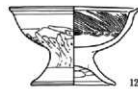
1233

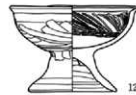
1234

1235

1236

1237


1238


1239

1240

1241

1242

1243

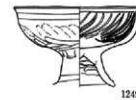
1244

1245

1246

1247

1248


1249

1250

図160　器物集積遺構出土土器（２群）

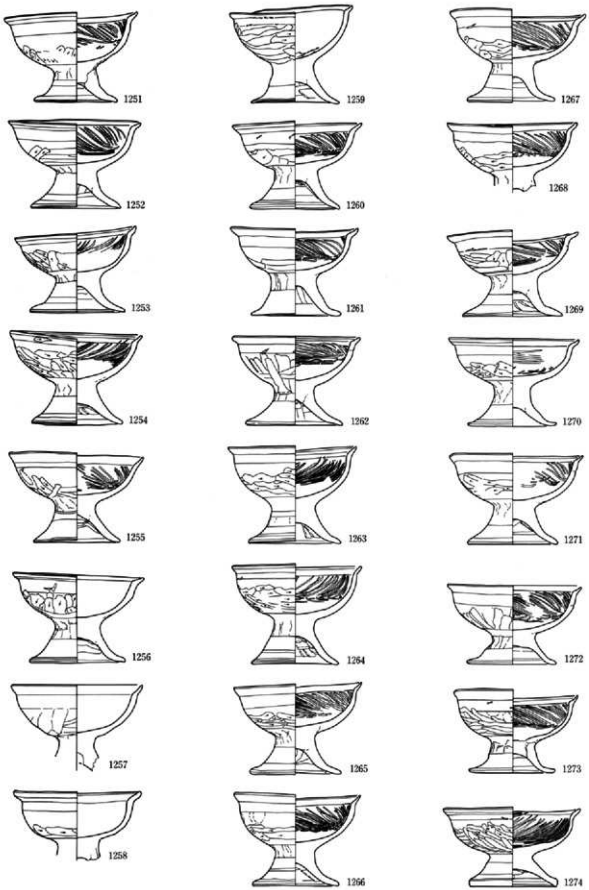



図161　器物集積遺構出土土器（２群）

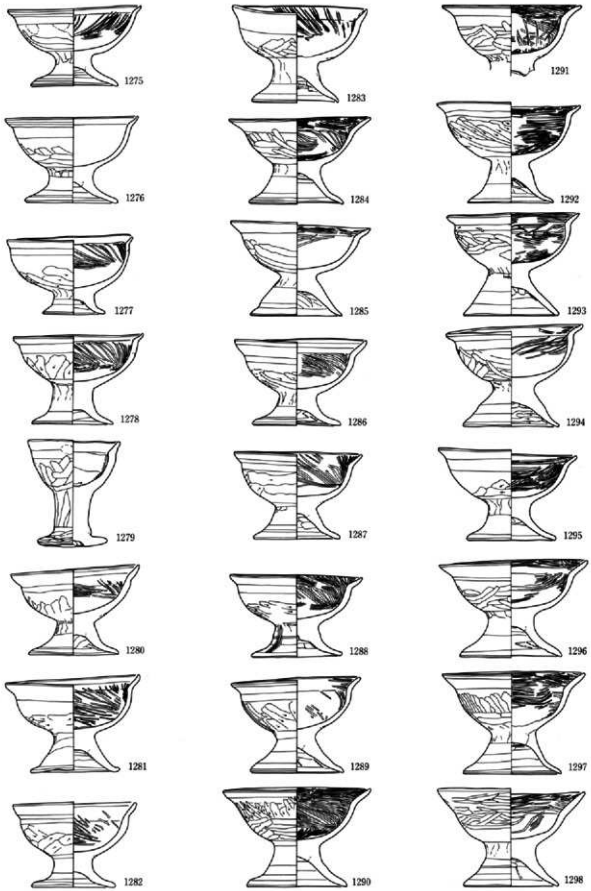



図162　器物集積遺構出土土器（２群）

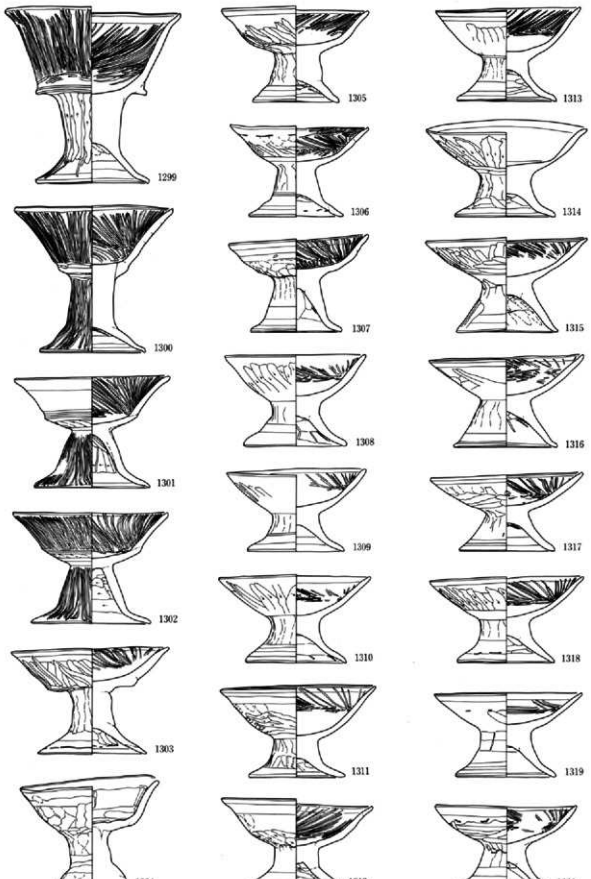



図163　器物集積遺構出土土器（２群）

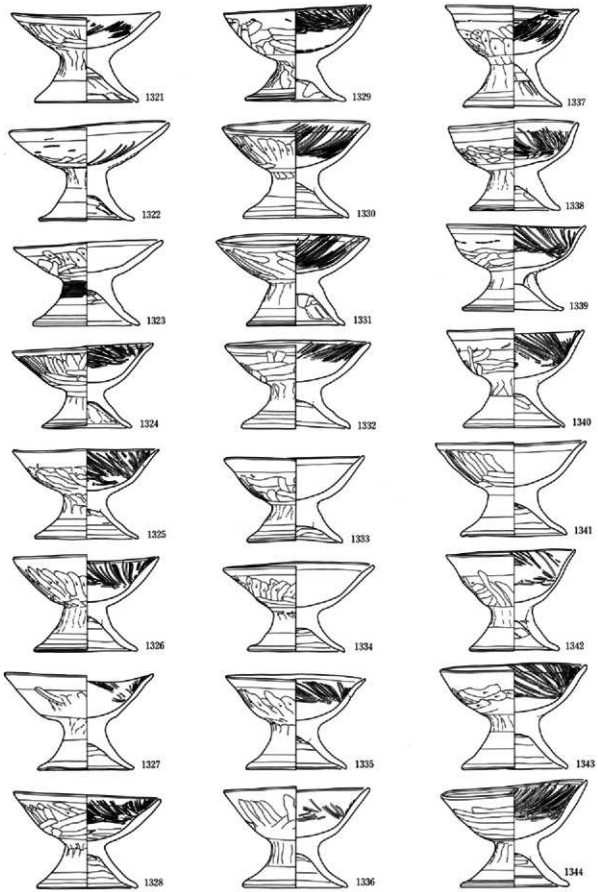



図164　器物集積遺構出土土器（2群）

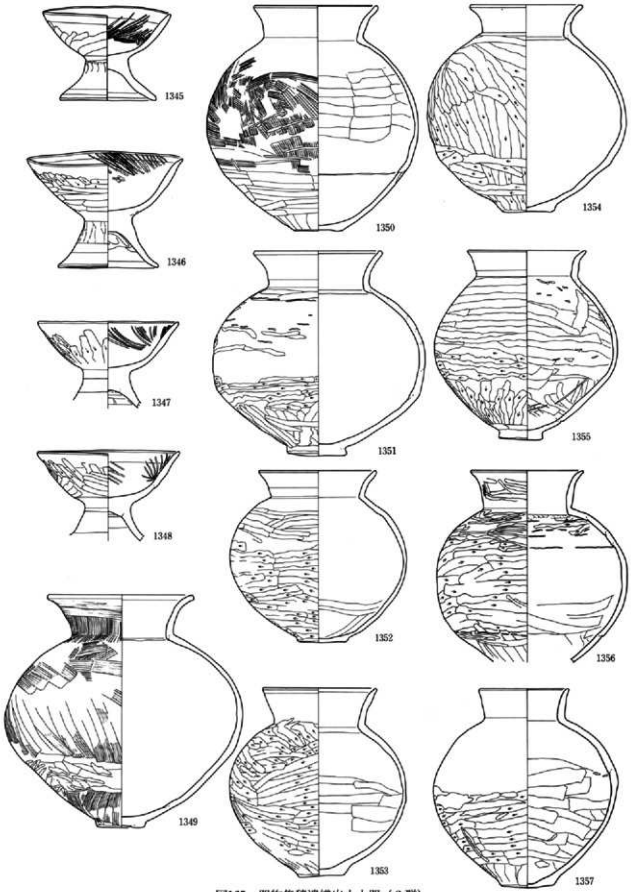



図165　器物集積遺構出土土器（２群）

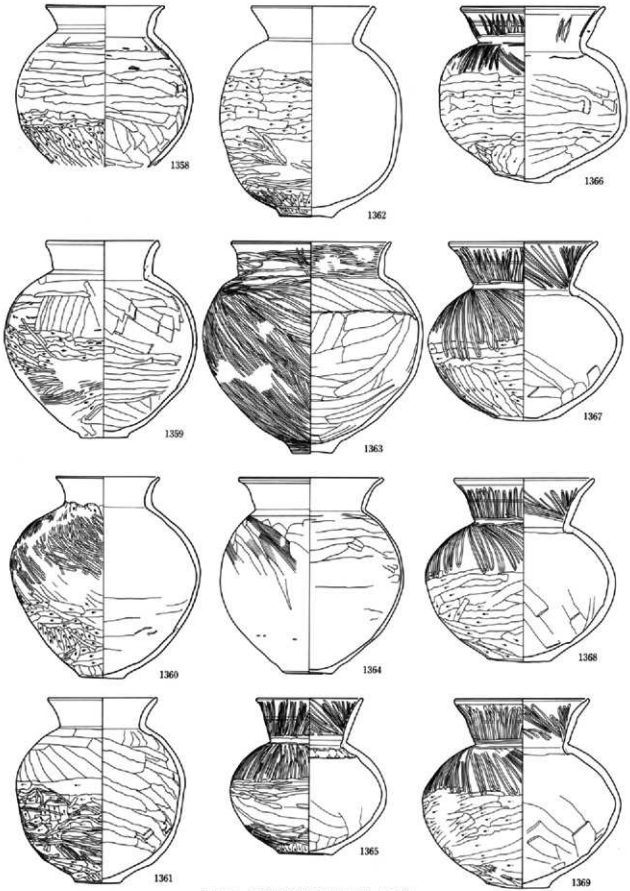



図166　器物集積遺構出土土器（2群）

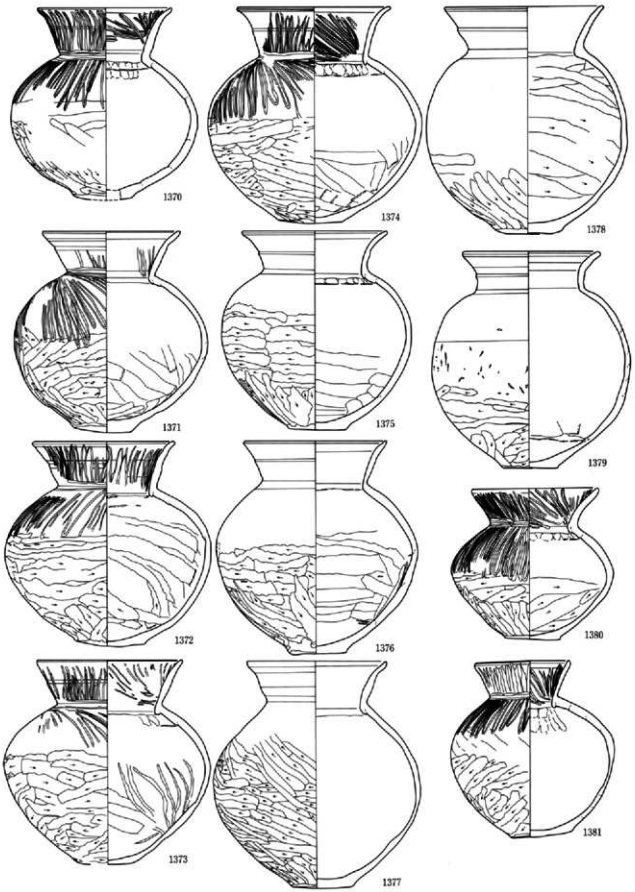



図167　器物集積遺構出土土器（２群）

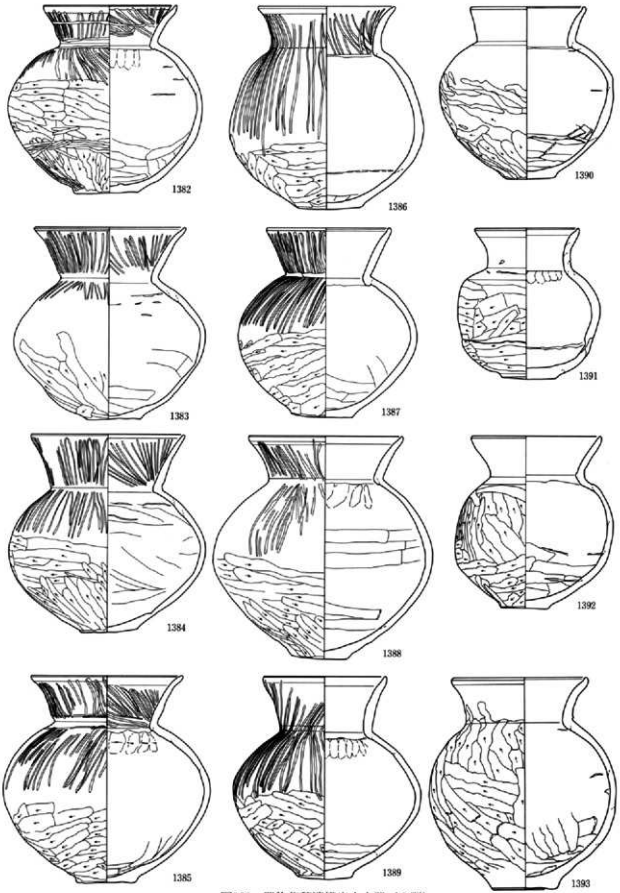



図168　廃物集積遺構出土土器（2群）

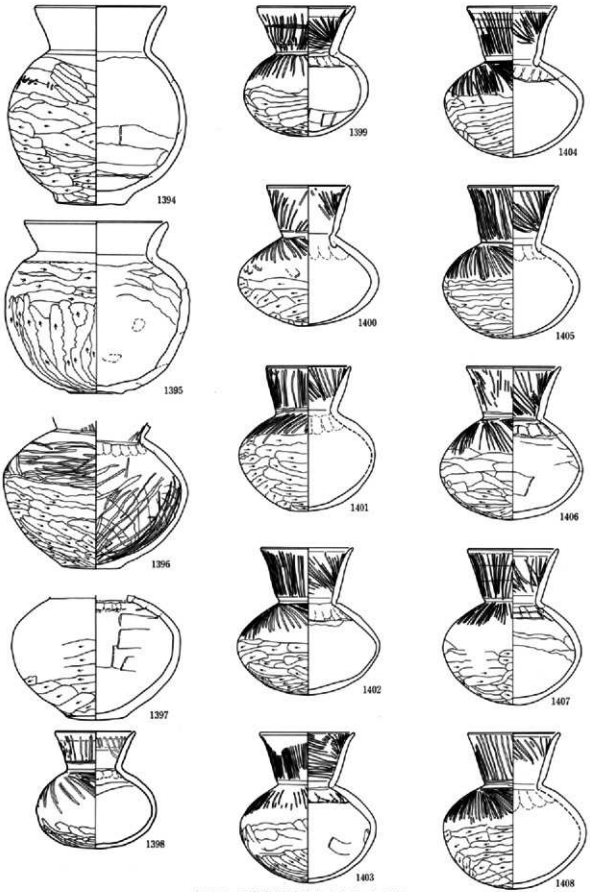



図169　器物集積遺構出土土器（２群）

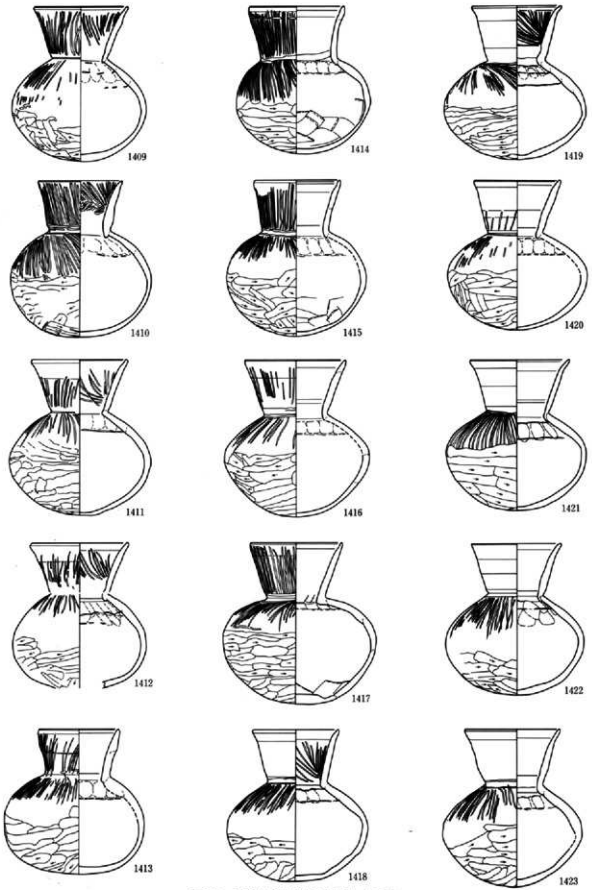



図170　器物集積遺構出土土器（２群）

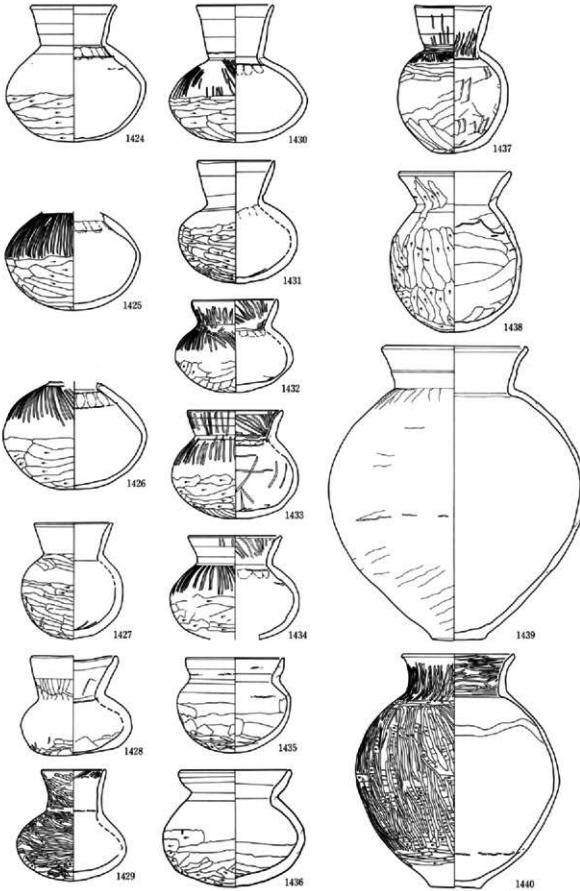



図171　器物集積遺構出土土器（２群）

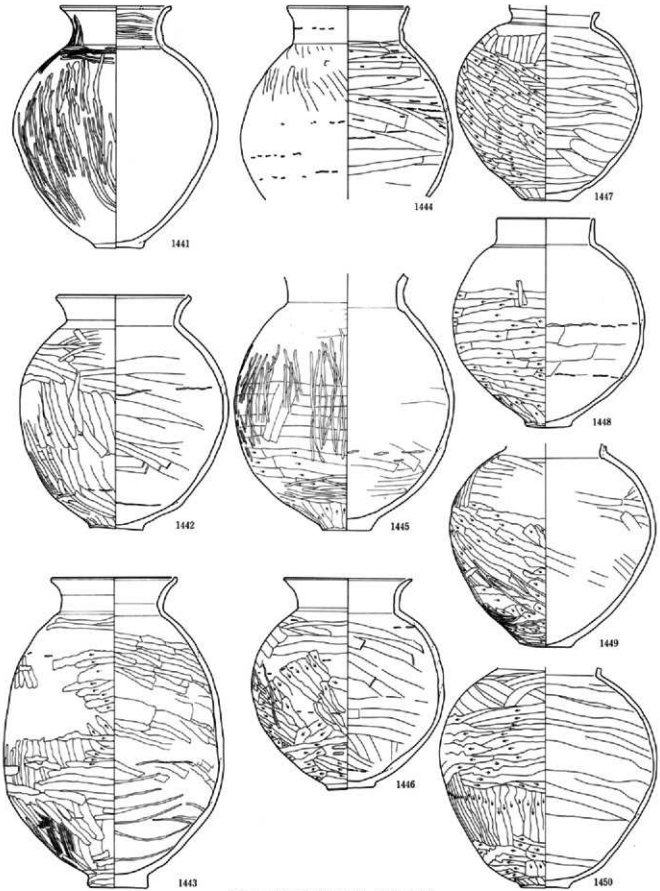



図172　器物集積遺構出土土器（２群）

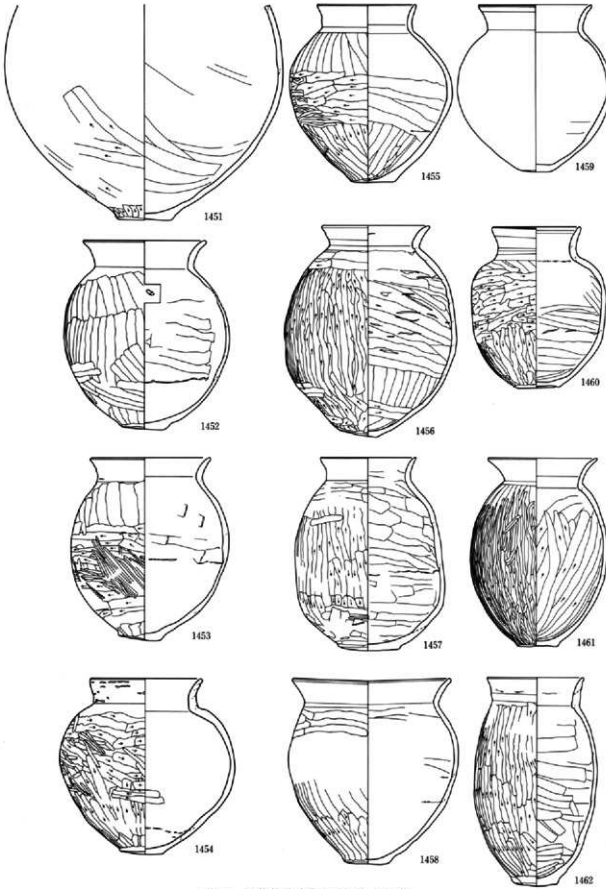



図173　器物集積遺構出土土器（2群）

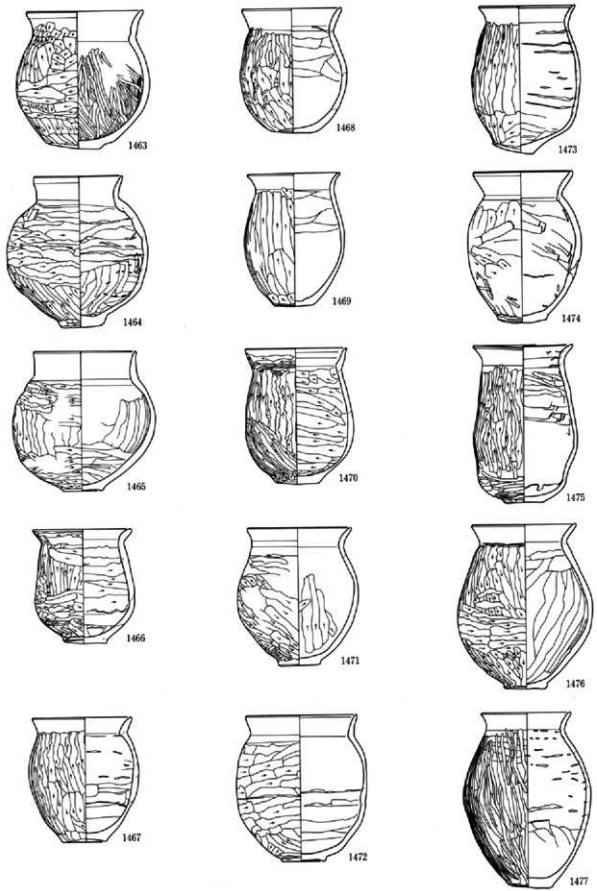
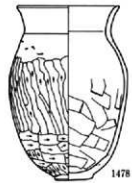
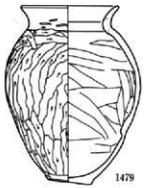
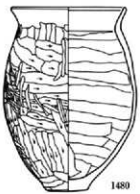
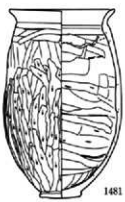


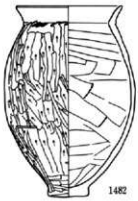

図174　器物集積遺構出土土器（２群）

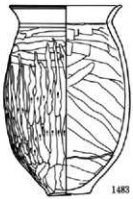


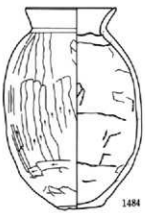



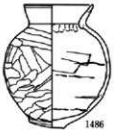



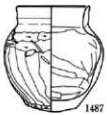



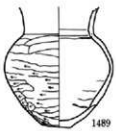



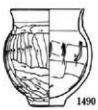







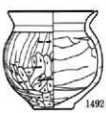



図175　器物集積遺構出土土器（２群）

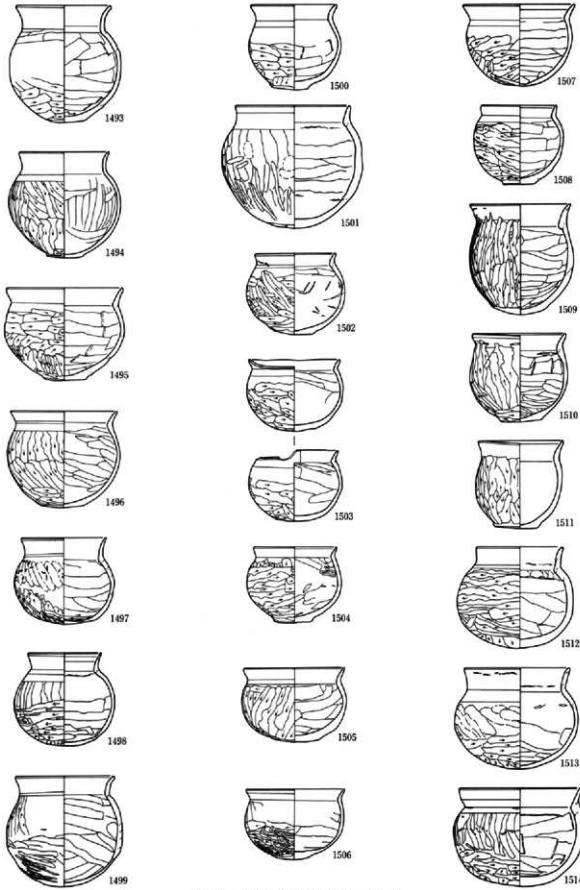



図176　器物集積遺構出土土器（２群）

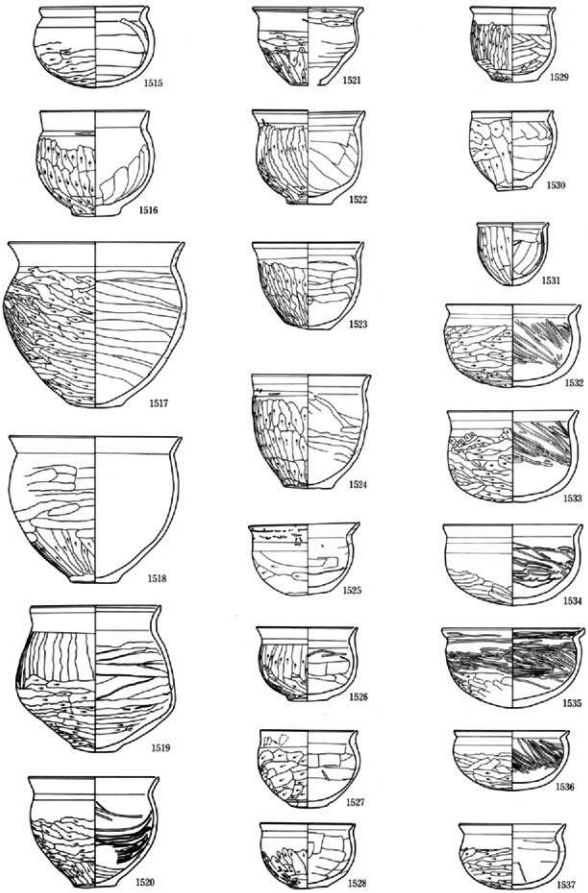



図177　器物集積遺構出土土器（2群）

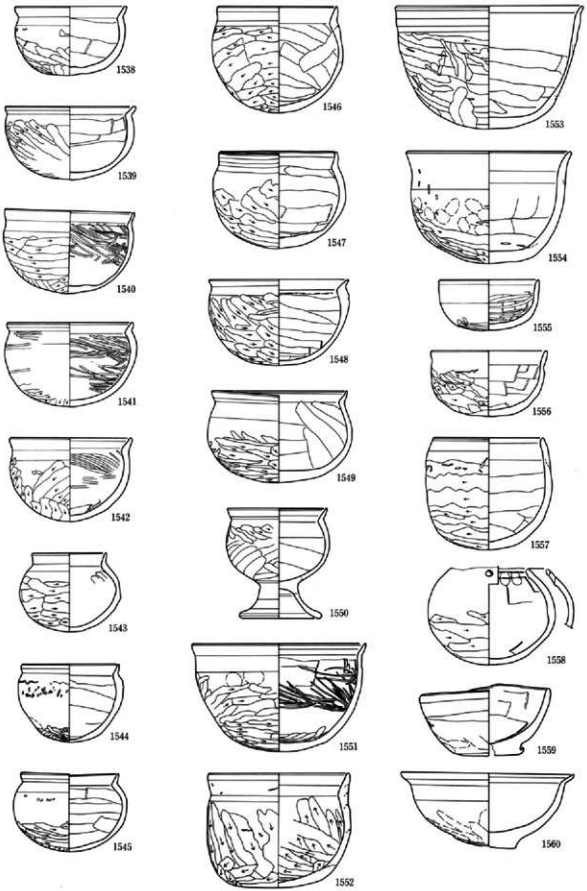



図178　器物集積遺構出土土器（２群）

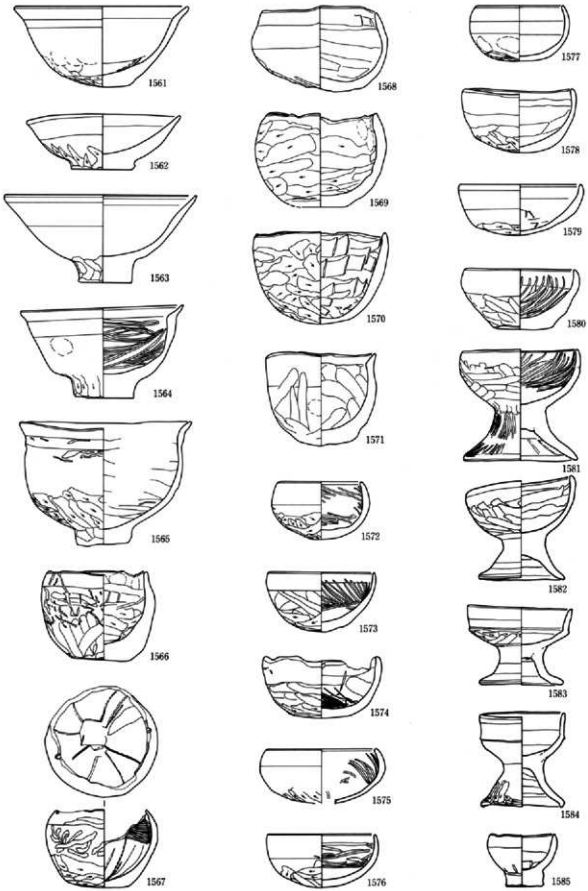



図179　器物集積遺構出土土器（２群）

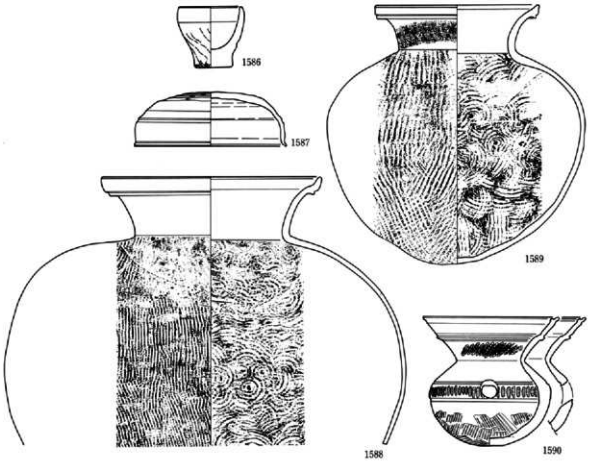



図180　器物集積遺構出土土器（2群）

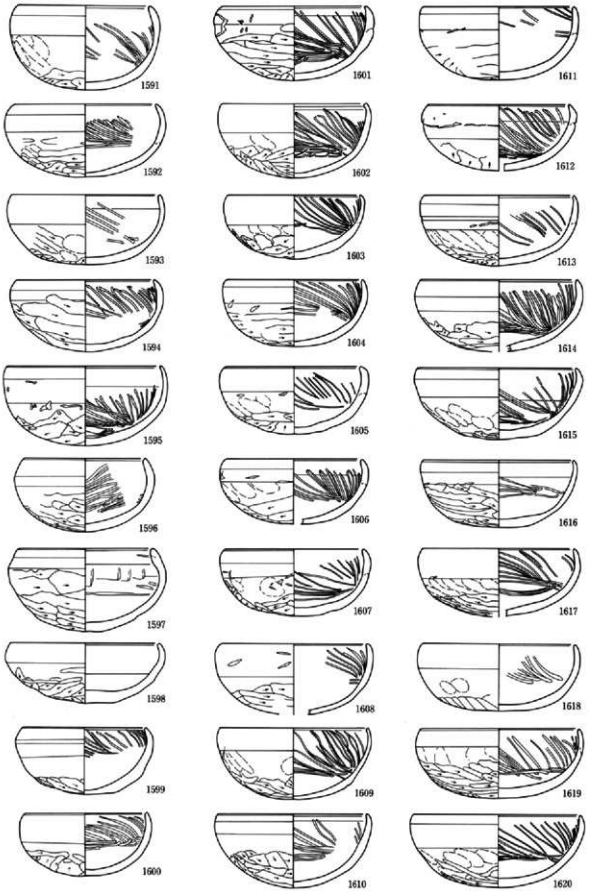



図181　器物集積遺構出土土器（３群）

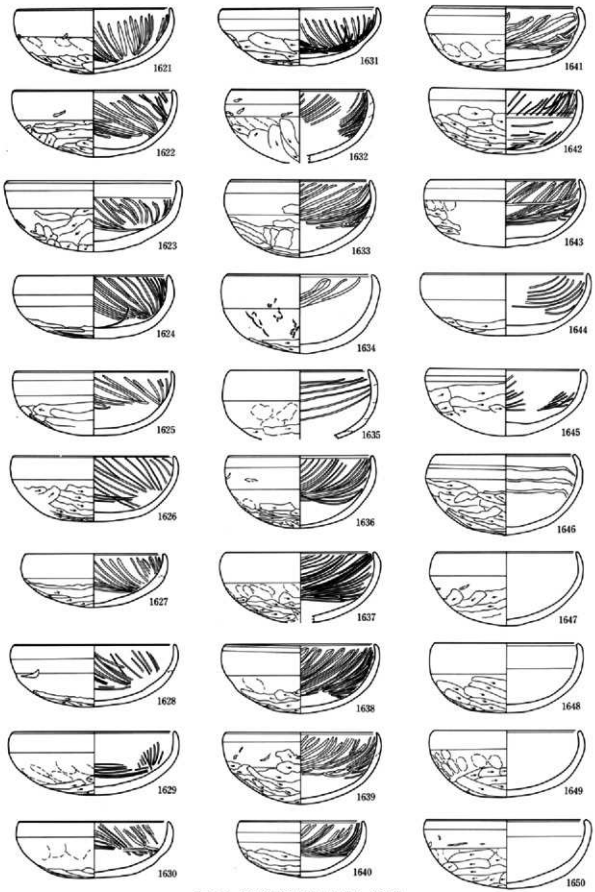



図182　器物集積遺構出土土器（3群）

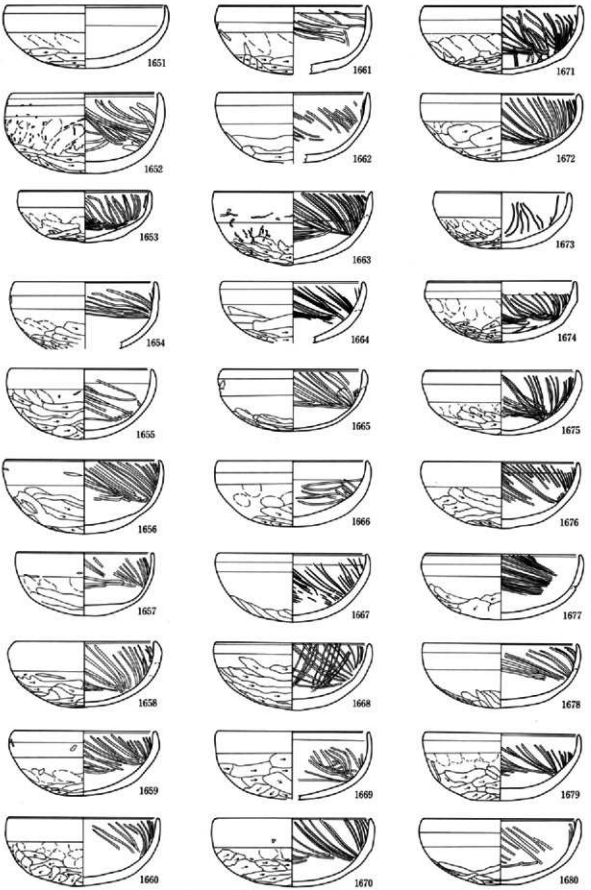



図183　器物集積遺構出土土器（3群）

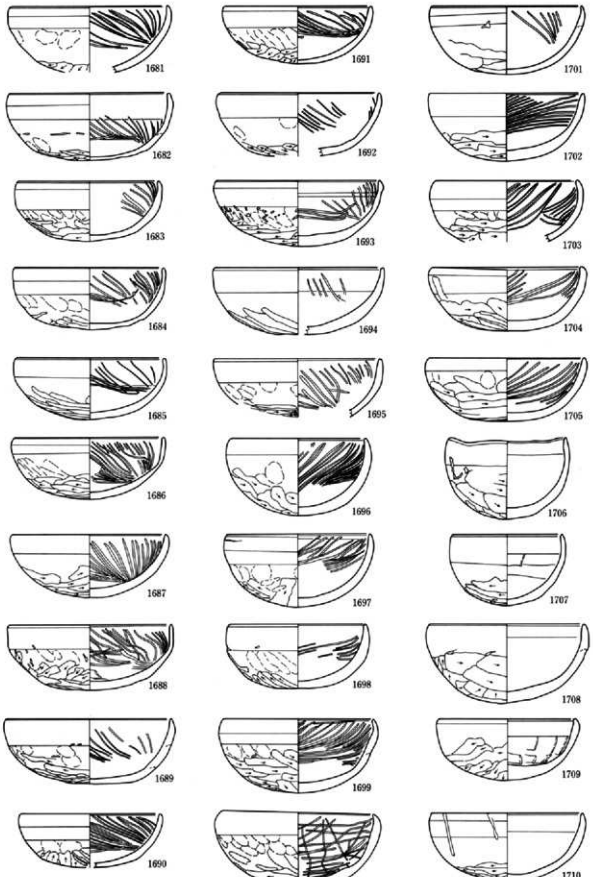



図184　器物集積遺構出土土器（3群）

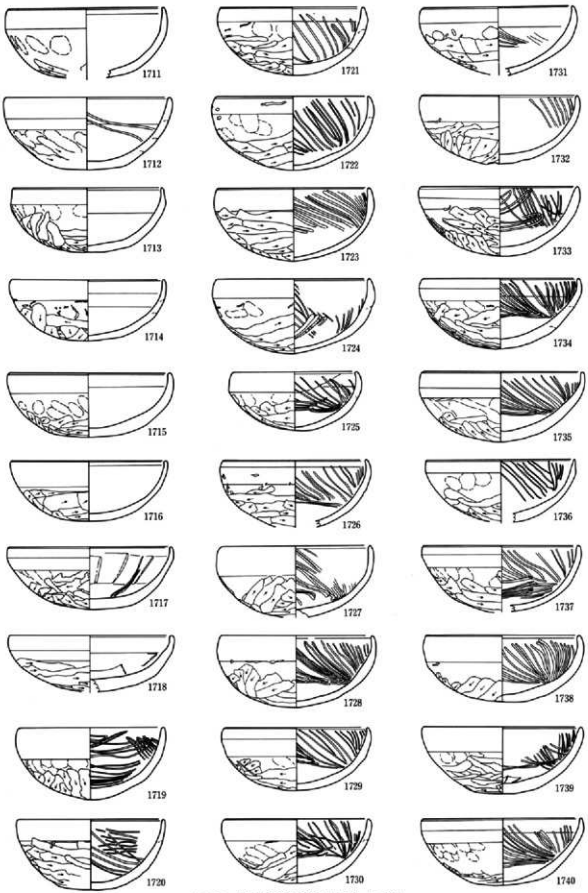



図185　器物集積遺構出土土器（3群）

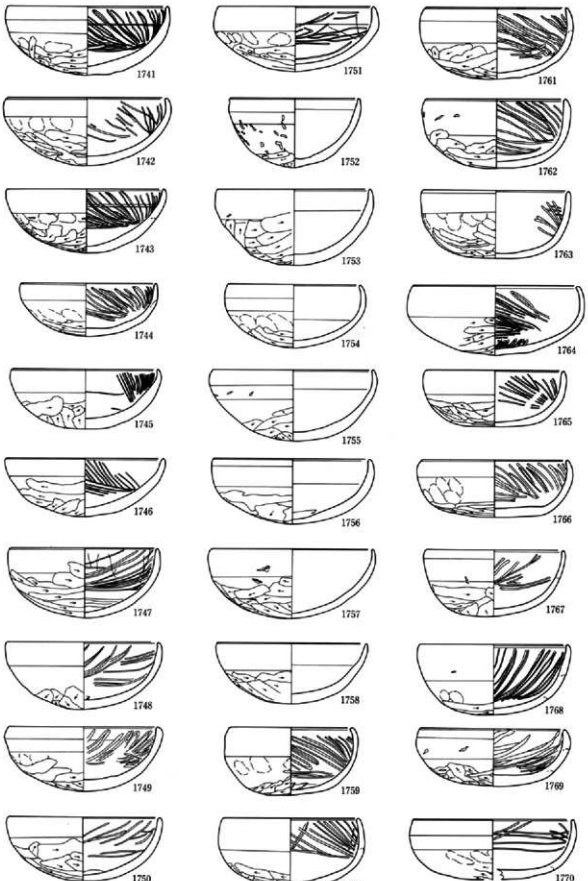



図186　器物集積遺構出土土器（3群）

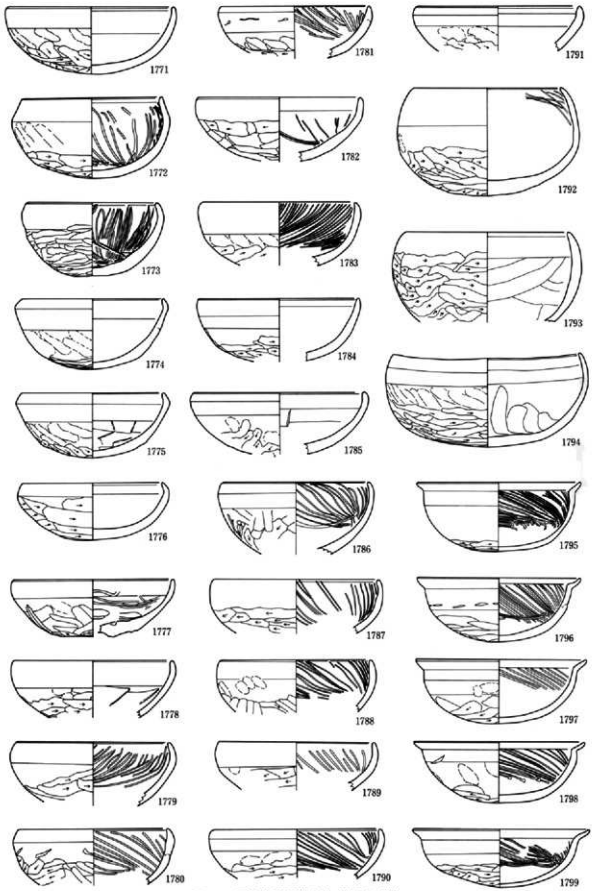



図187　器物集積遺構出土土器（３群）

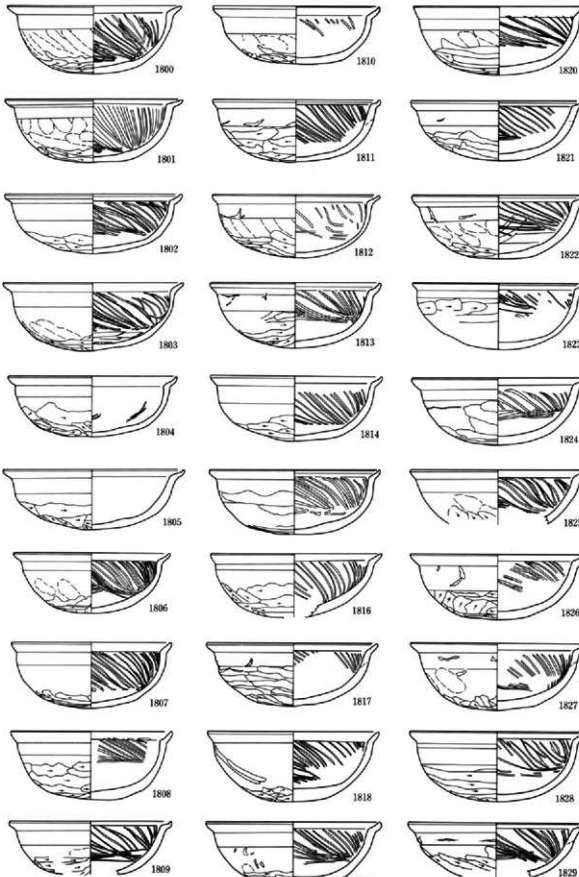



図188　器物集積遺構出土土器（3群）

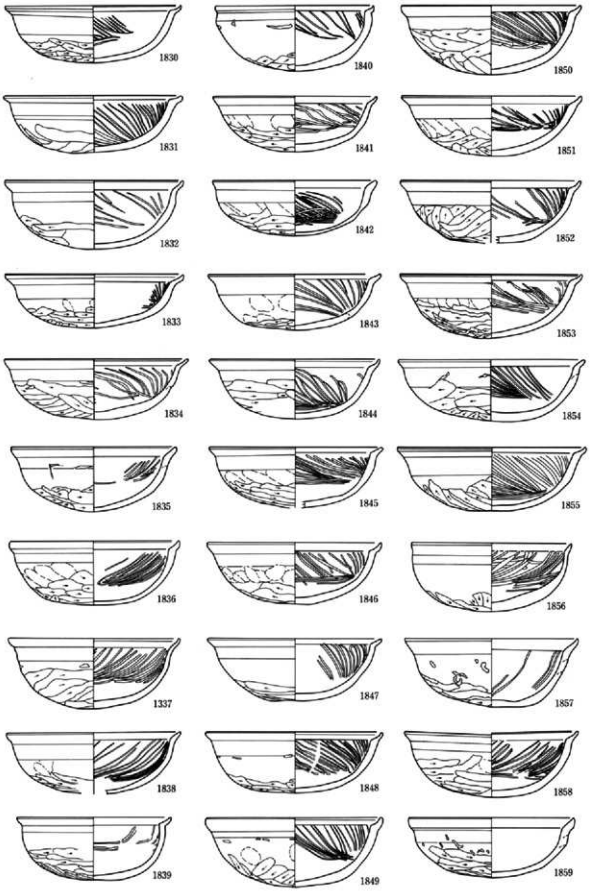



図189　器物集積遺構出土土器（3群）

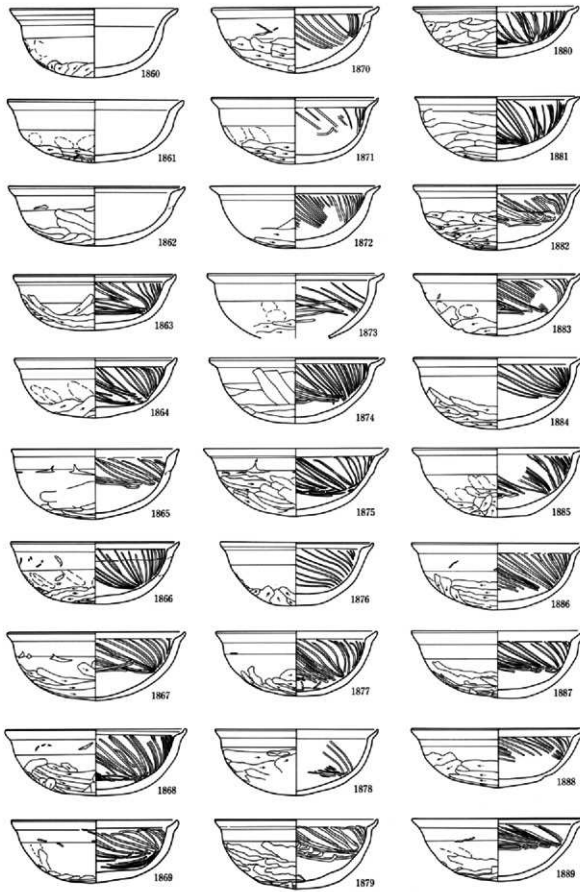



図190　器物集積遺構出土土器（3群）

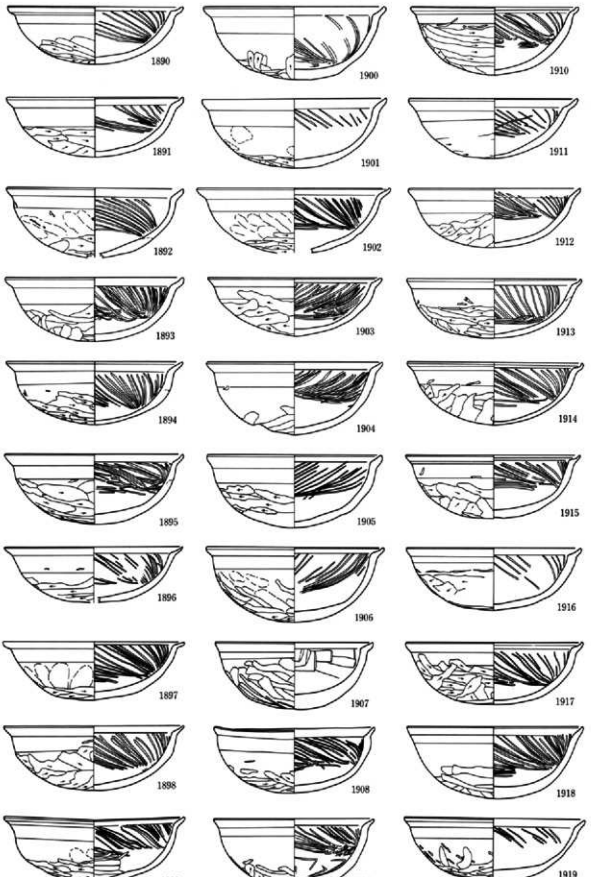



図191　溜物集積遺構出土土器（3群）

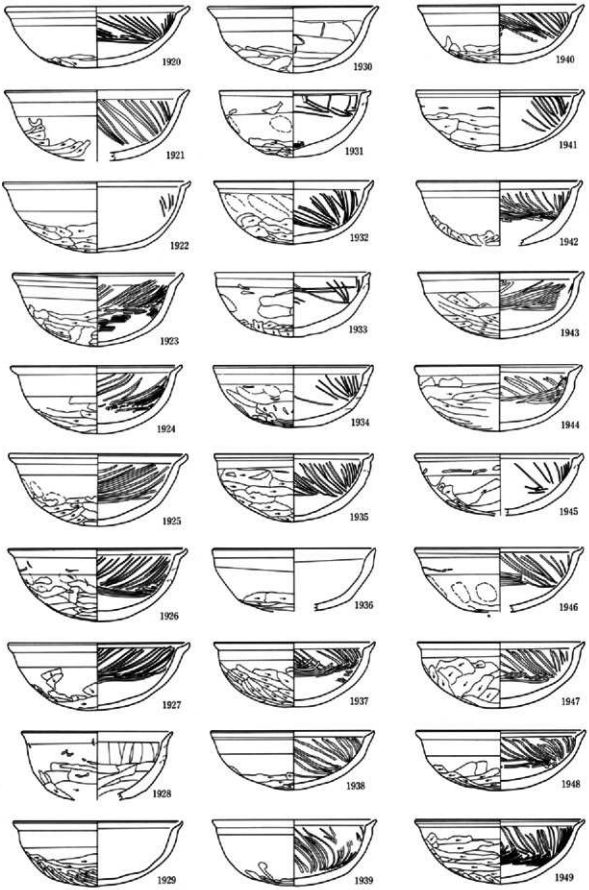



図192　器物集積遺構出土土器（3群）

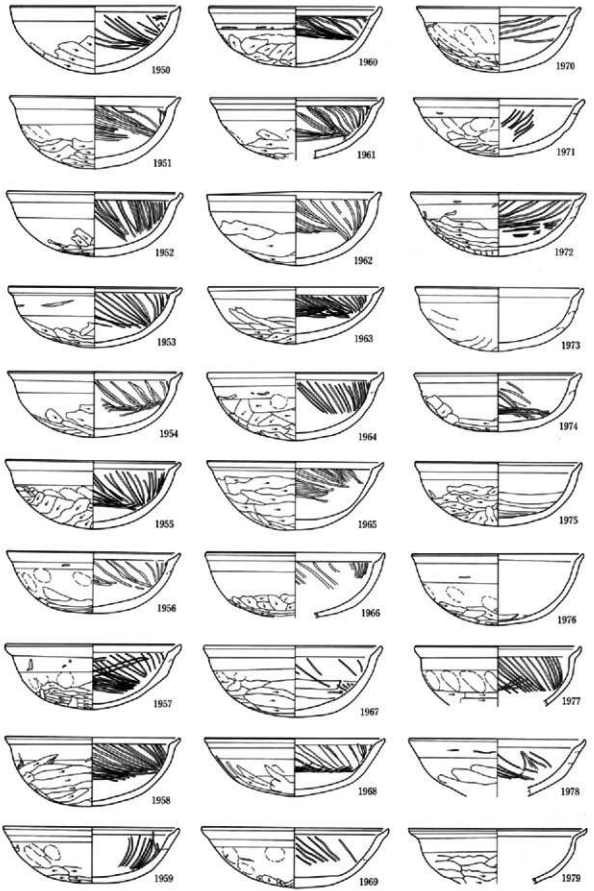



図193　器物集積遺構出土土器（3群）

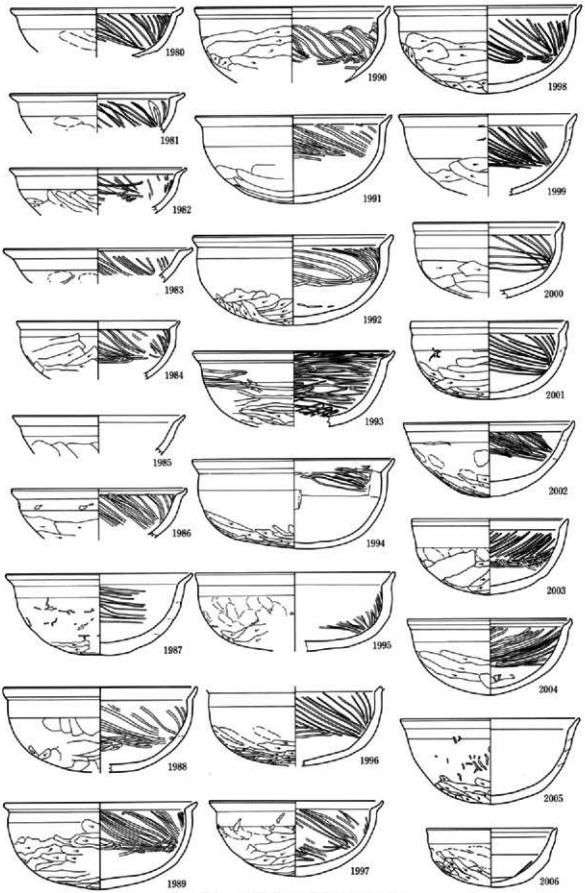



図194　層物集積遺構出土土器（3群）

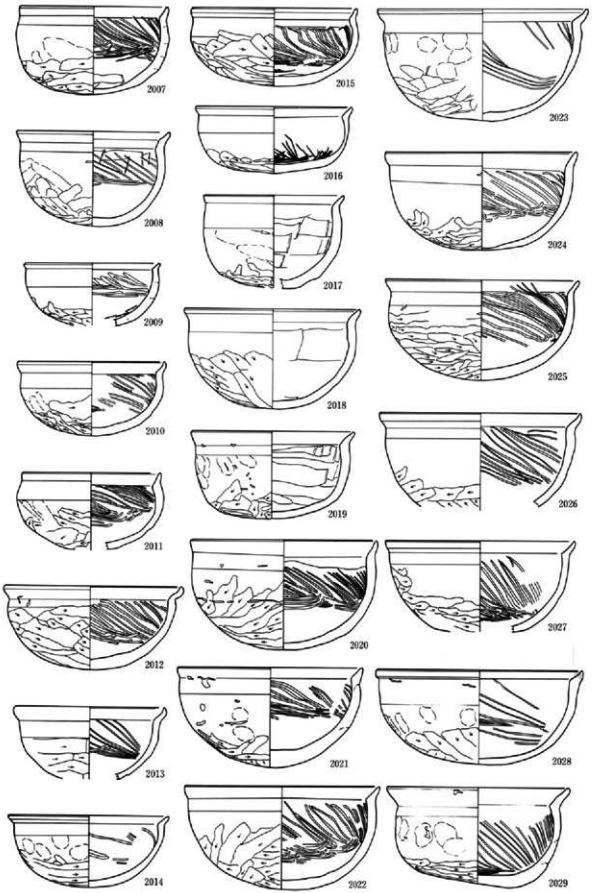



図195　器物集積遺構出土土器（3群）

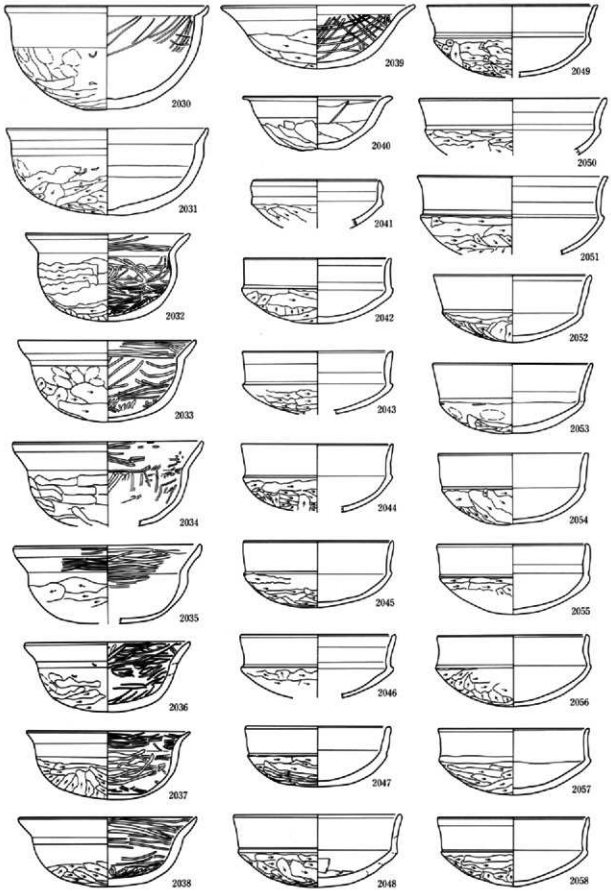



図196　器物集積遺構出土土器（3群）

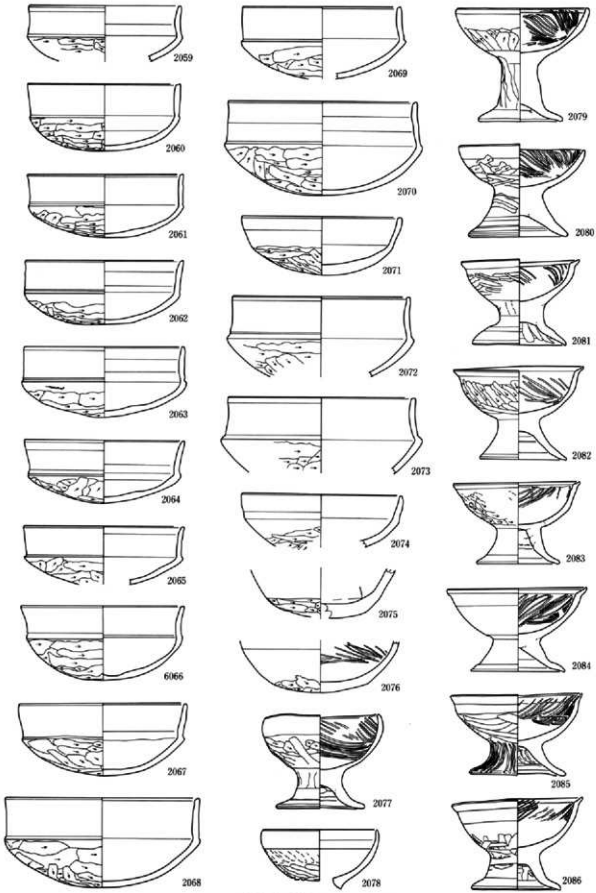



図197　器物集積遺構出土土器（3群）

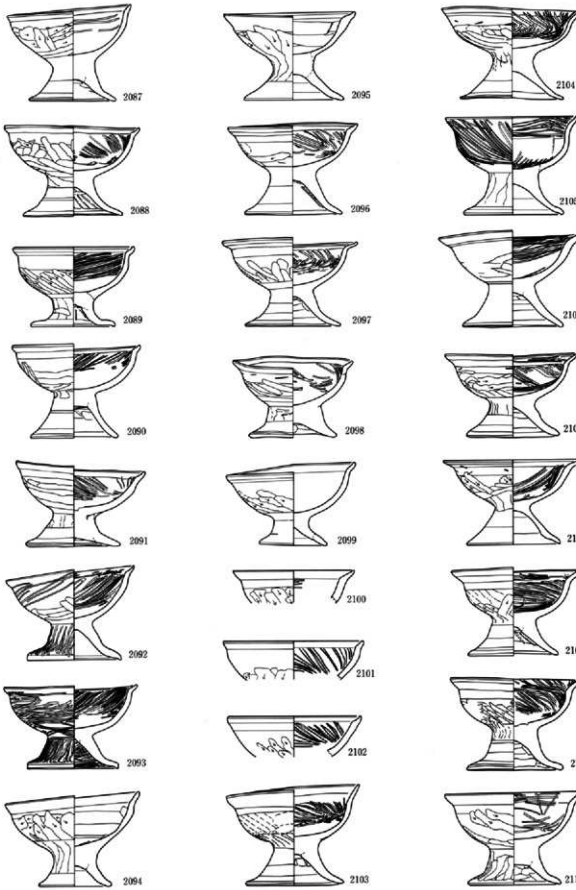



図198　器物集積遺構出土土器（3群）

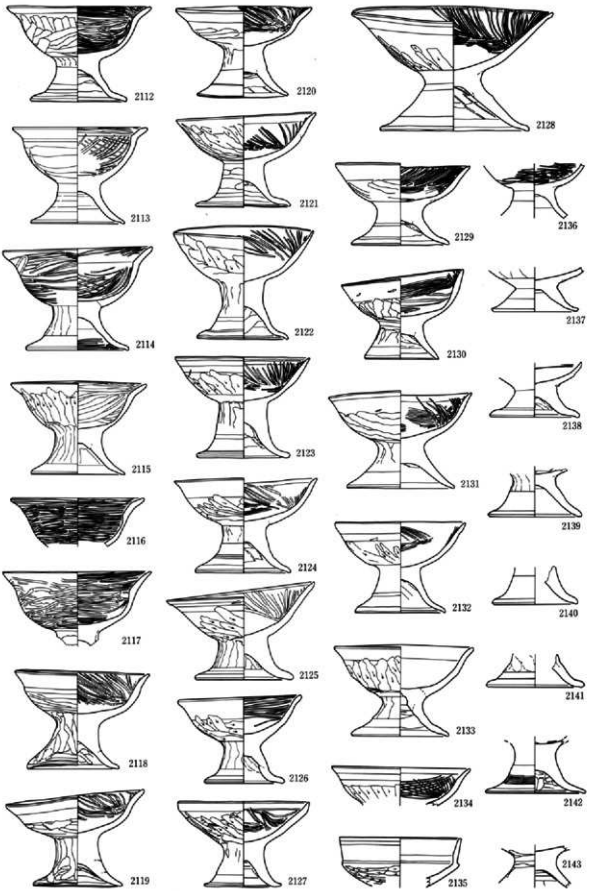
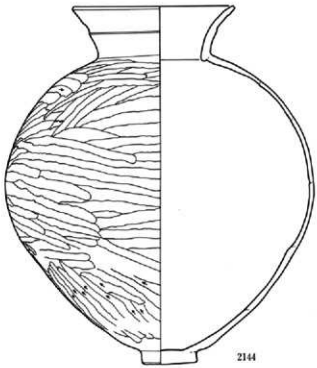
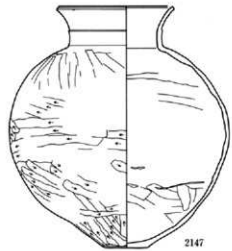
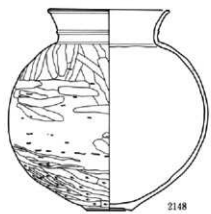
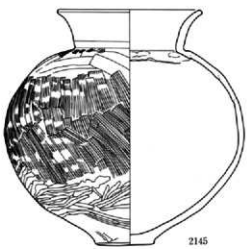



図199　器物集積遺構出土土器（3群）



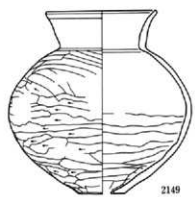



図200　遺物集積遺構出土土器（3群）

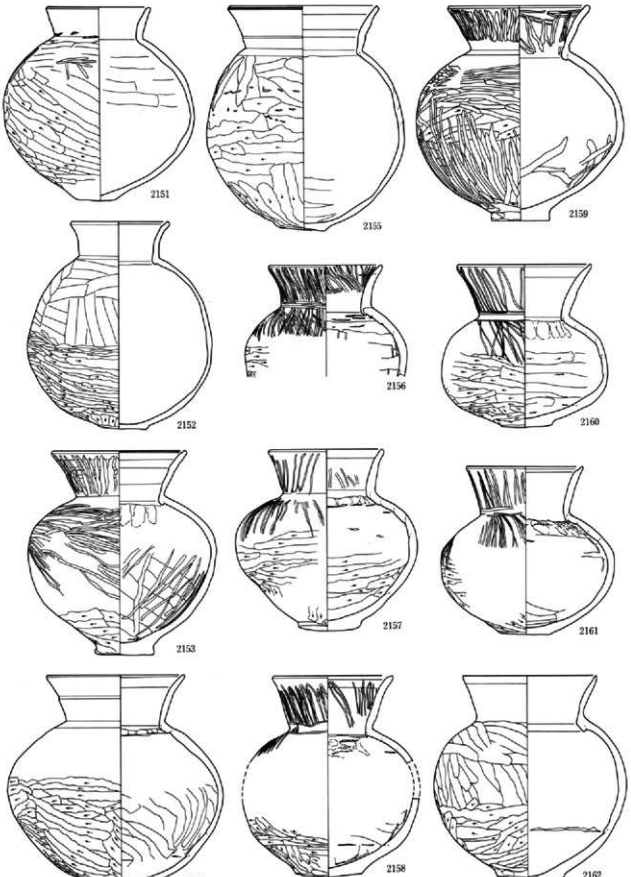



図201　器物集積遺構出土土器（3群）

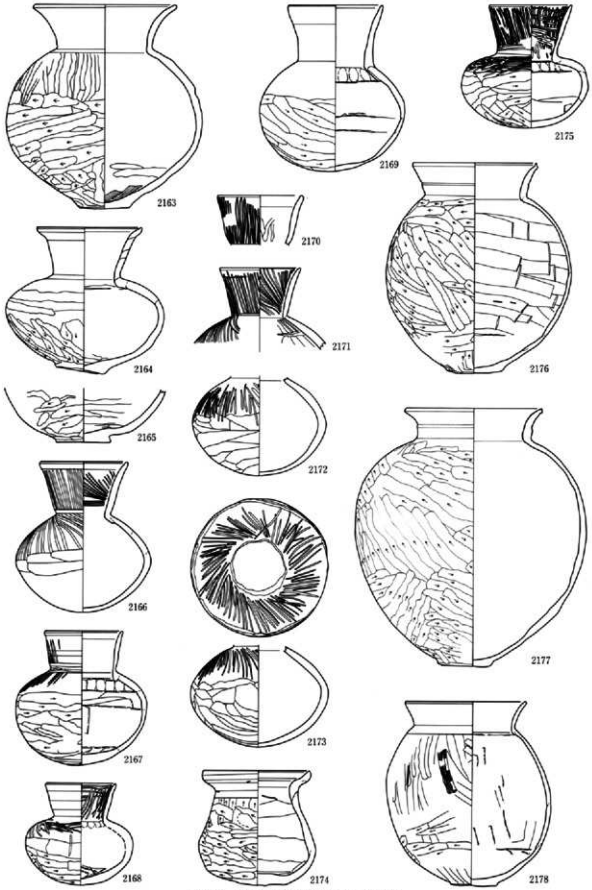



図202　器物集積遺構出土土器（3群）

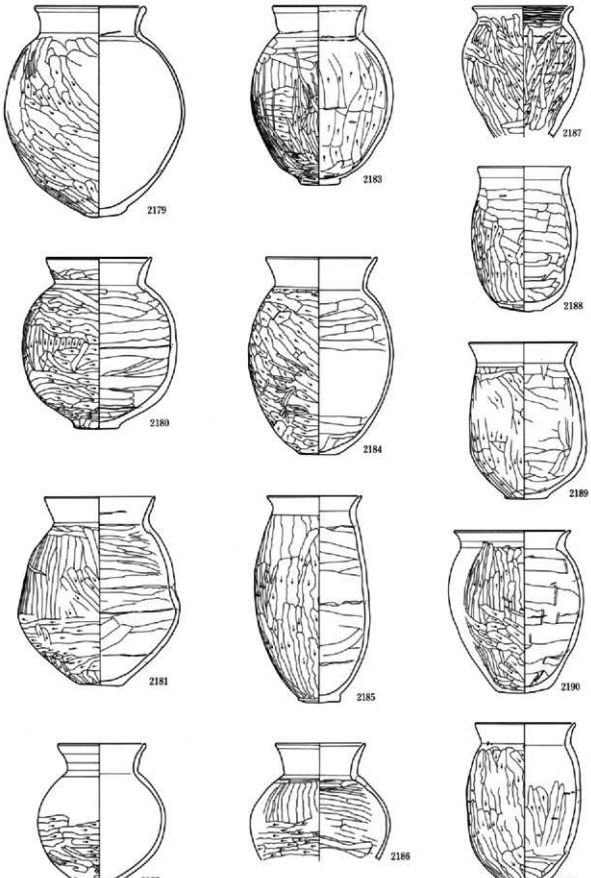



図203　器物集積遺構出土土器（3群）

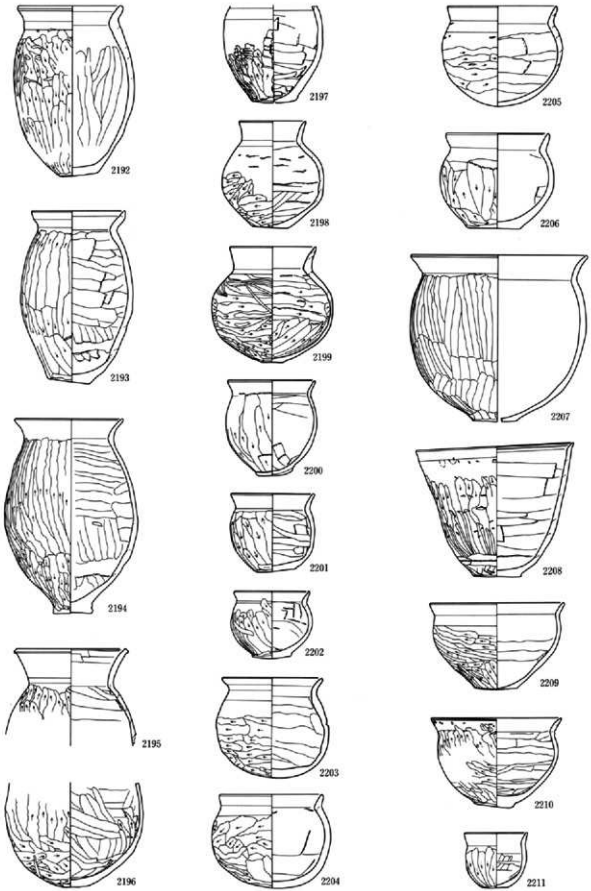



図204　器物集積遺構出土土器（3群）

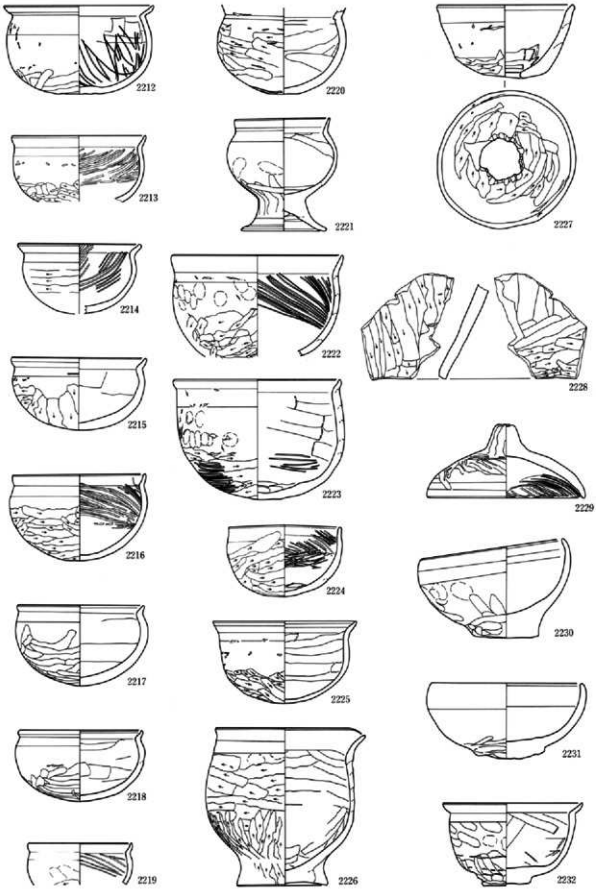



図205　器物集積遺構出土土器（3群）

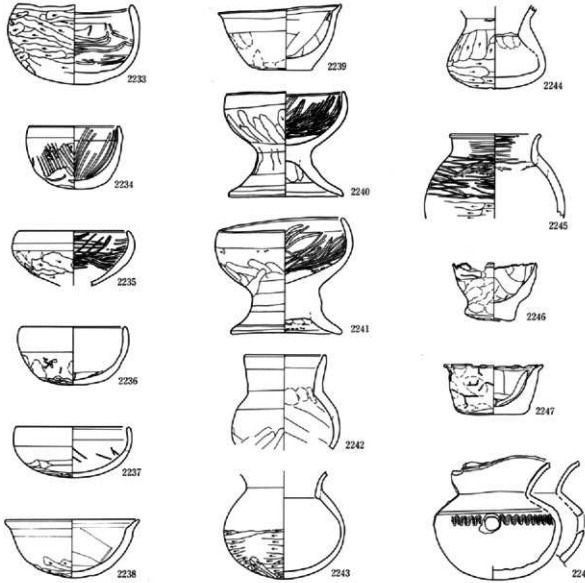



図206　器物集積遺構出土土器（3群）

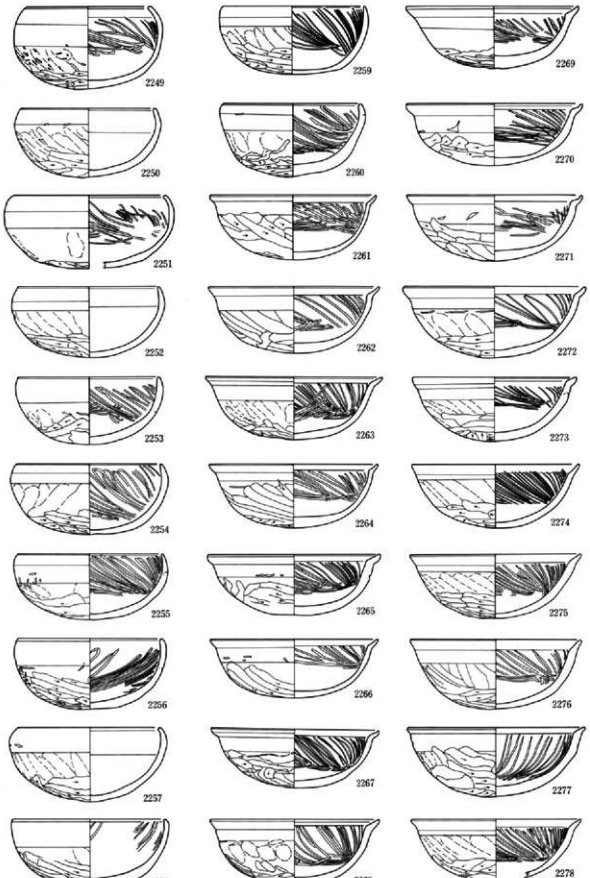



図207　器物集積遺構出土土器（4群）

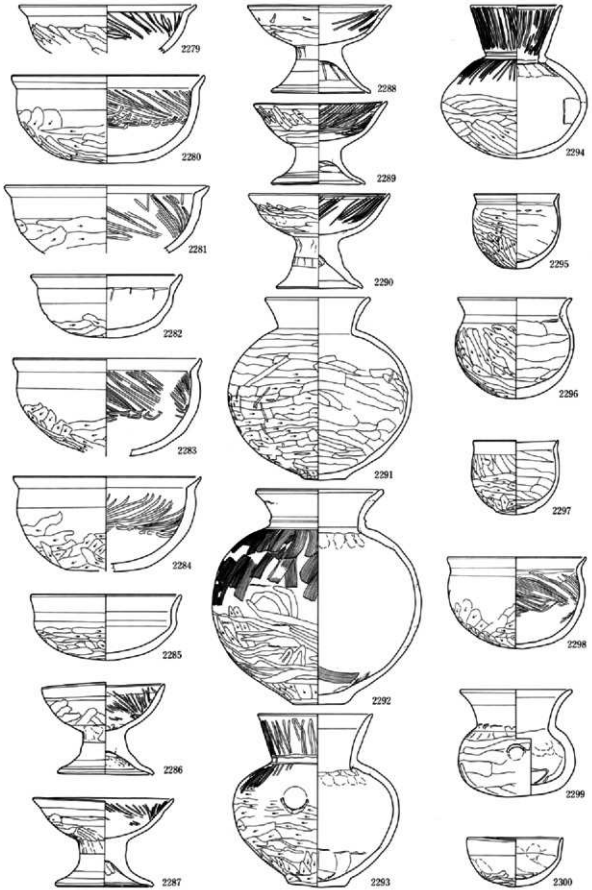



図208　器物集積遺構出土土器（４群）

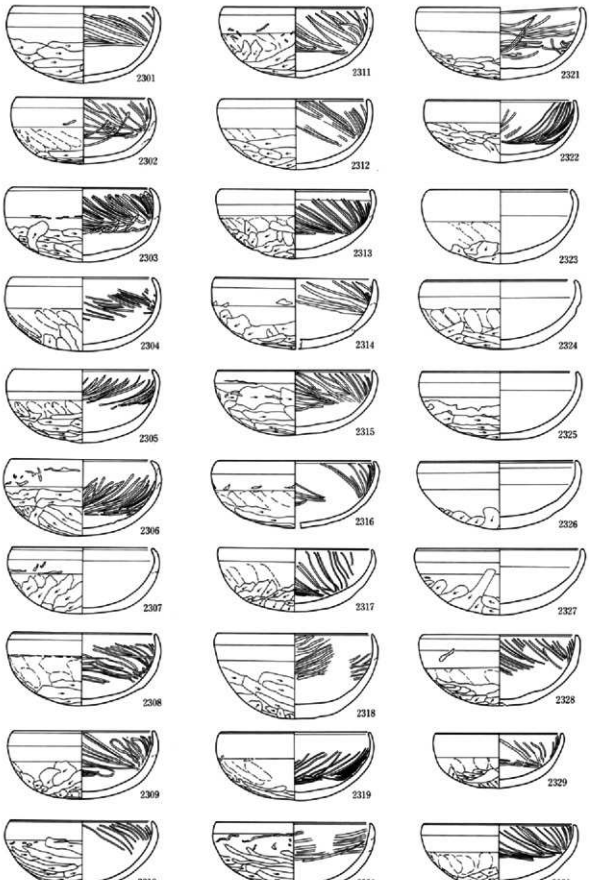



図209　器物集積遺構出土土器（5群）

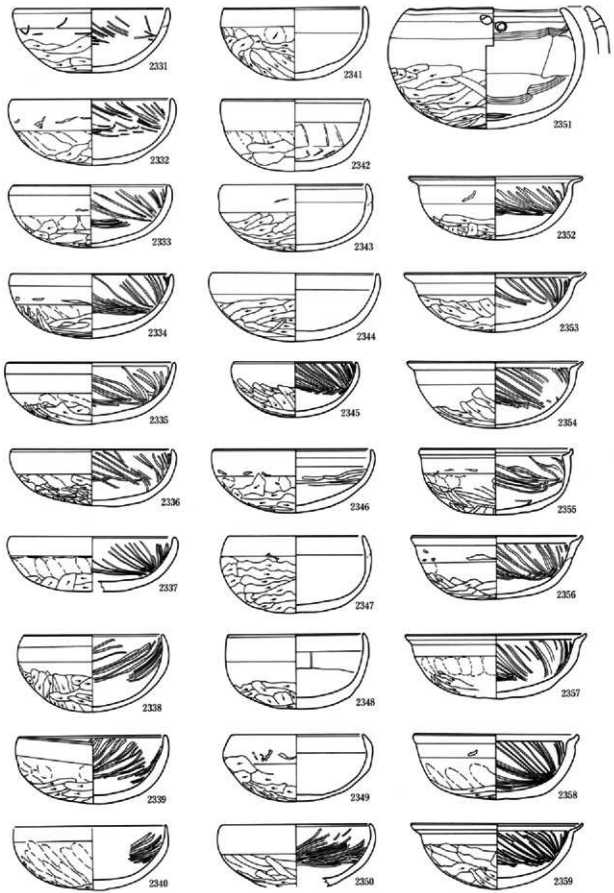



図210　器物集積遺構出土土器（5群）

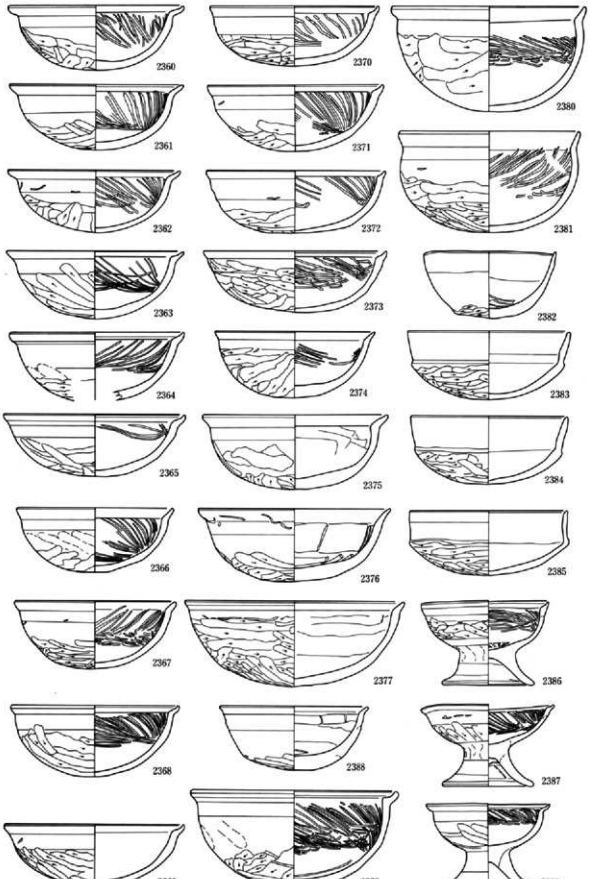



図211　器物集積遺構出土土器（５群）

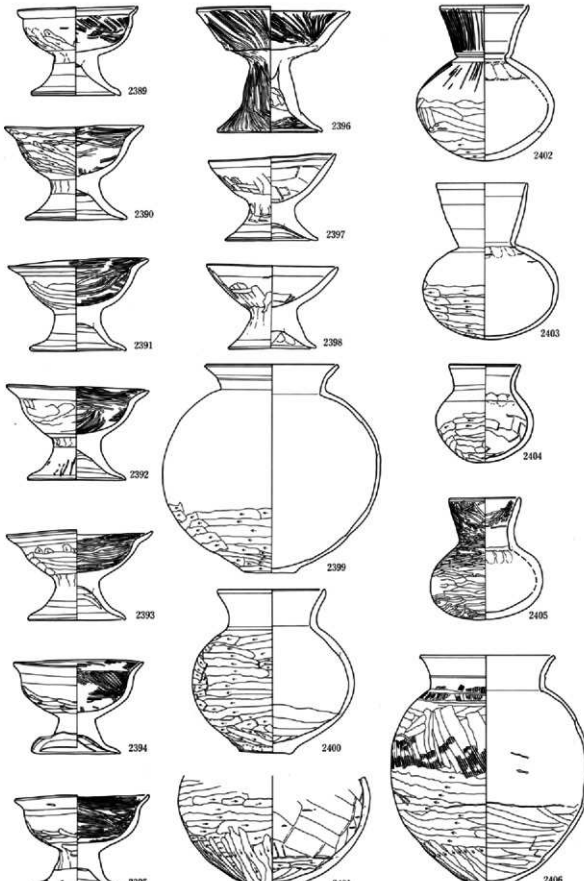



図212　器物集積遺構出土土器（5群）

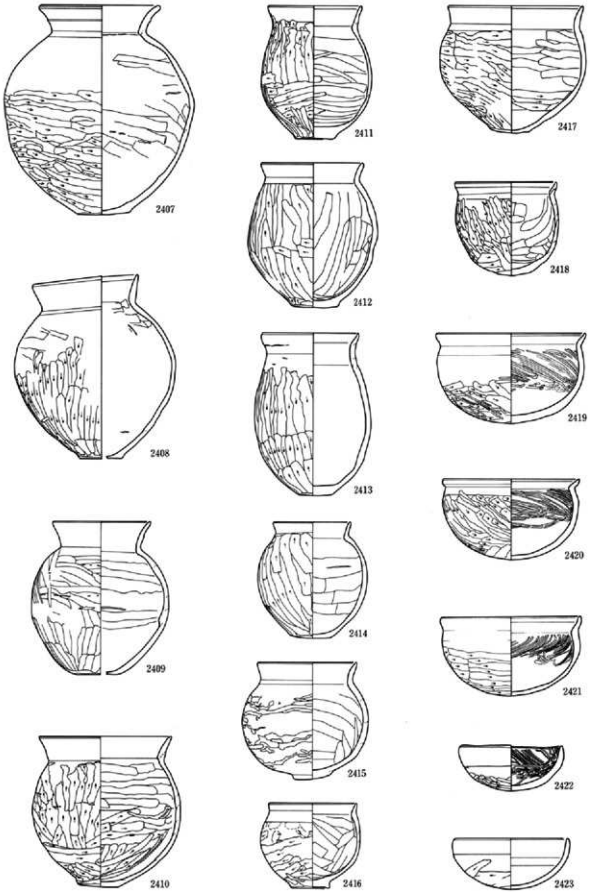



図213　器物集積遺構出土土器（５群）

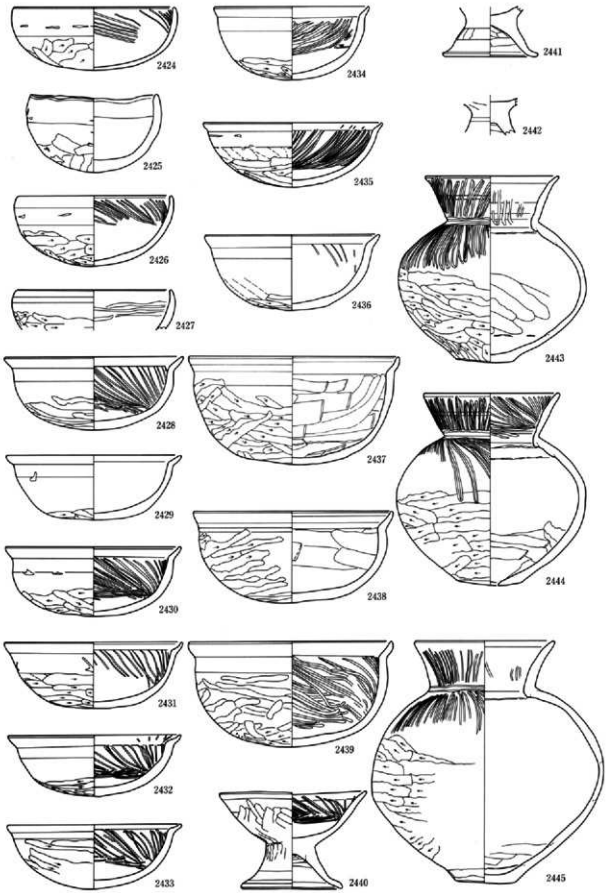



図214　器物集積遺構出土土器（東南部散在）

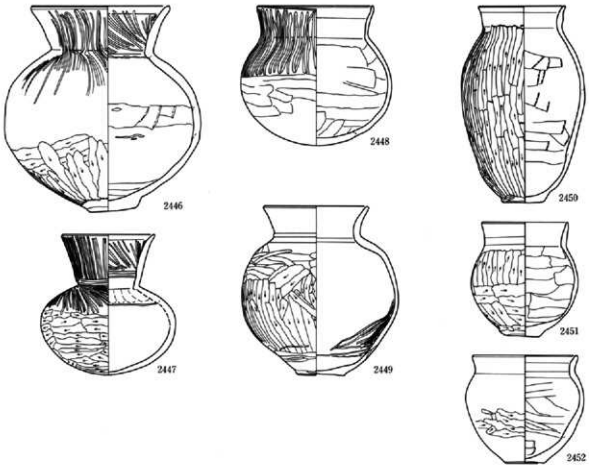



図215　器物集積遺構出土土器（東南部散在）

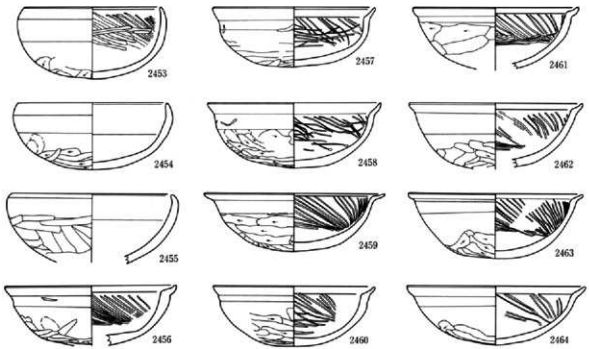



図216　器物集積遺構出土土器（所属群不明）

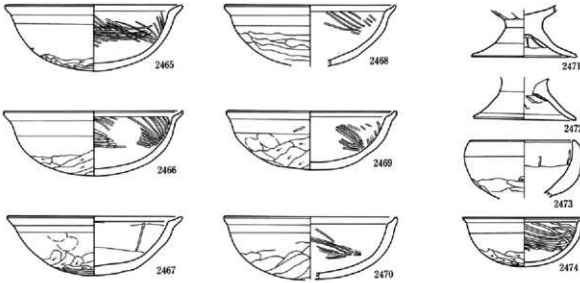



図217　器物集積遺構出土土器（所属群不明）

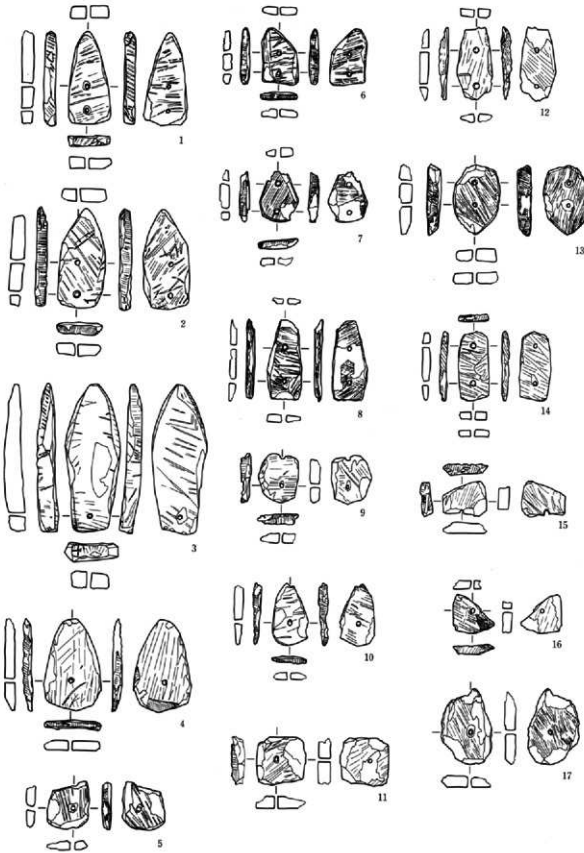



図218　層物集積遺構出土石製模造品

図219　器物集積遺構出土石製模造品

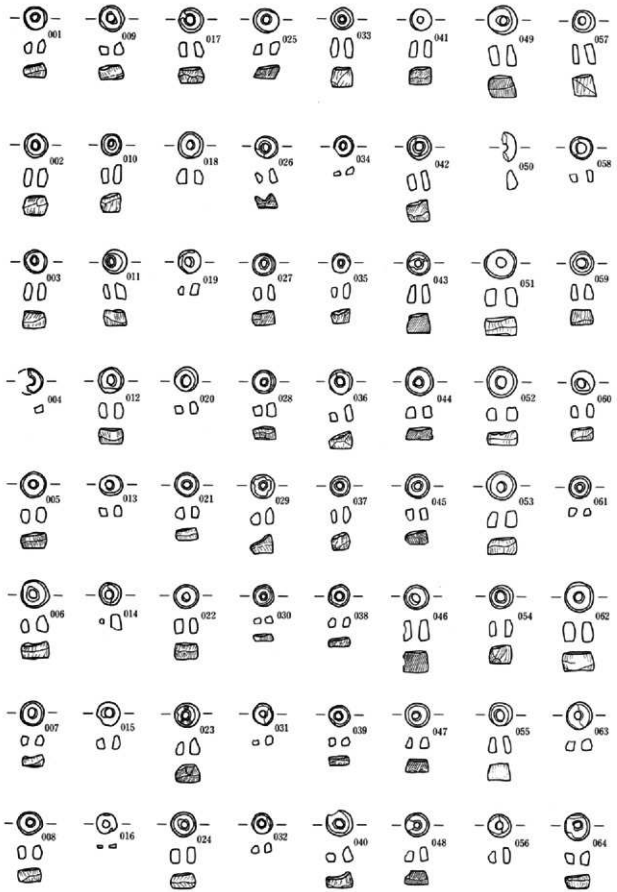



図220　器物集積遺構出土白玉

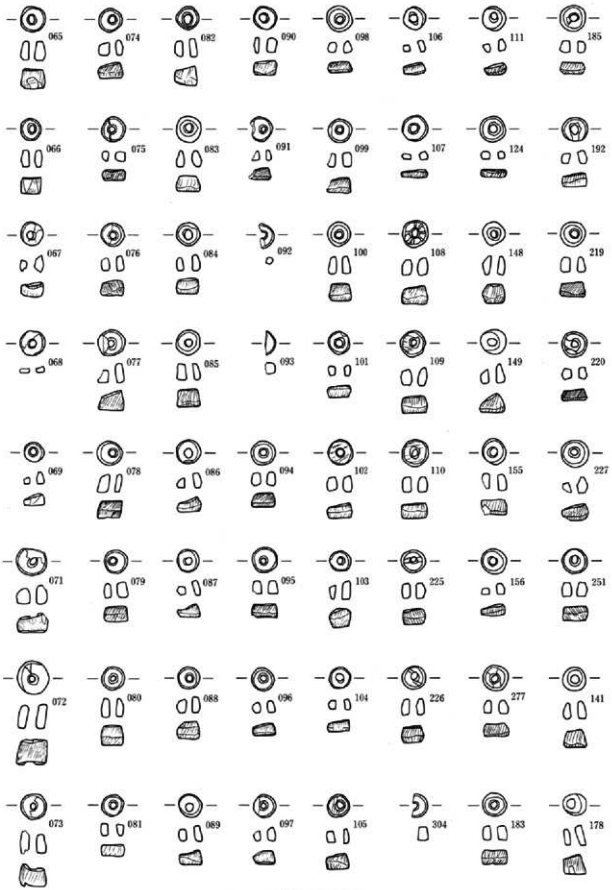



図221　器物集積遺構出土白玉

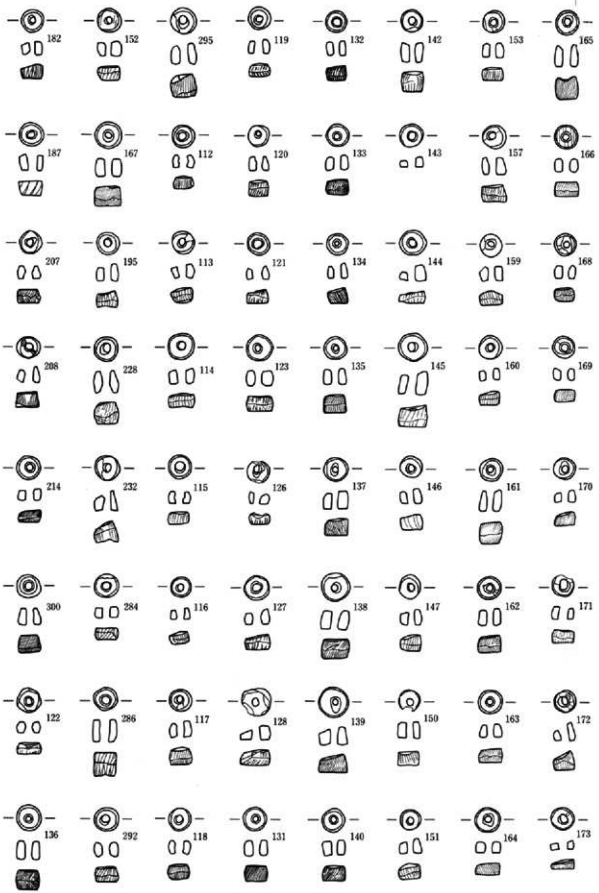



図222　器物集積遺構出土白玉

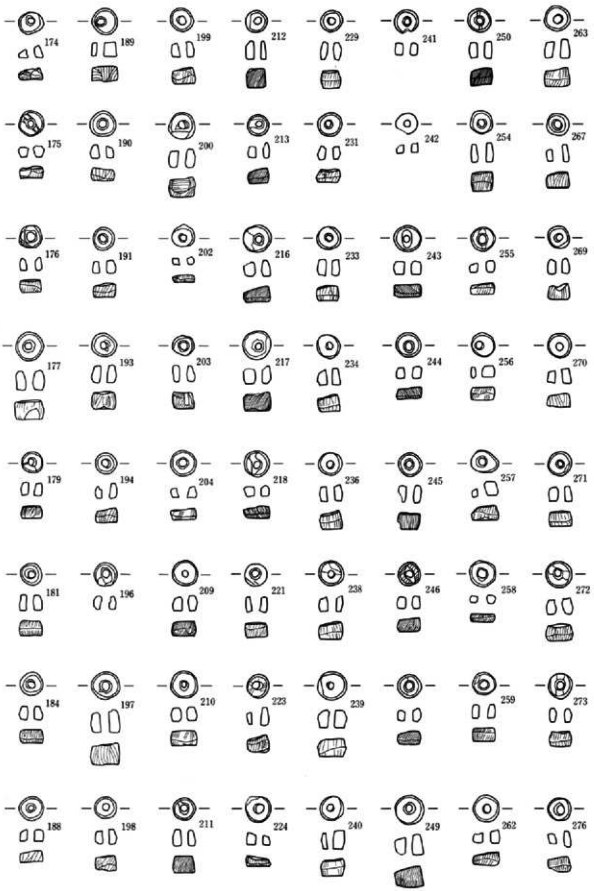



図223　器物集積遺構出土臼玉

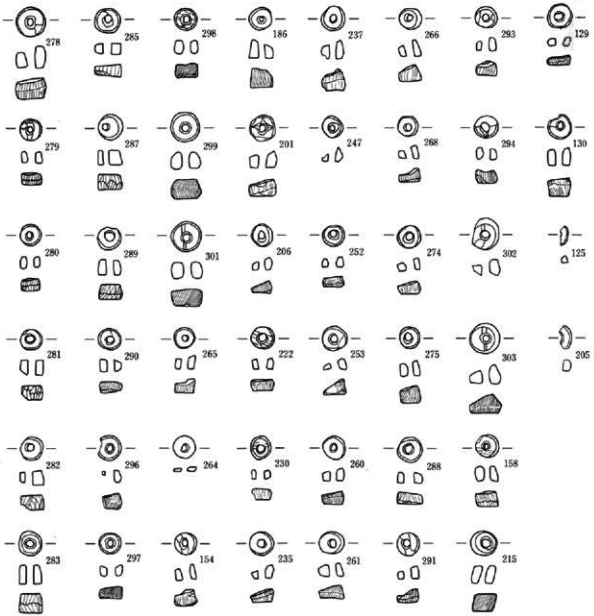



図224　器物集積遺構出土白玉

# Ⅲ 下芝上田屋遺跡

## 1　基本土層と調査の概要

下芝上田屋遺跡は、現在の地名では群馬郡箕郷町大字下芝字上田屋、大字上芝字西龍ノ宮、字東龍ノ宮にまたがる。下芝天神遺跡は、県道を挟んですぐ西側に当たる。主要な調査区が大字下芝字上田屋となるため、この地名を採って遺跡名に当てた。一連の調査対象地をその間に介在する道・水路によって、東から、1～3区に分けて調査を行った。1区が大字上芝字西龍ノ宮、2区が字東龍ノ宮、3区が大字下芝字上田屋にあたる。調査前の土地利用状況は、1区は宅地、2区及び3区東半は圃場整備された水田であり、3区西半は畠地及び宅地である。1－2区間は水路で限られ、2－3区の間には谷が入る。基本的には北が高く、南に向かって徐々に下がる地形であり、東西に走る調査区内では比高は大きくない。調査区西端は水路を挟んで榛名白川の崖線に至る。

調査区内の標準的な土層を、3区北壁部を例に示すと、

1：表土・耕作土層　層厚60～70cmの黒灰色土層

　上位は圃場整備時の客土を含む現在の耕作土、下位は圃場整備以前の耕作土に当たる

　下芝天神遺跡標準土層の1・2層に相当

2：As-Bの軽石粒を含む暗褐色土層　層厚15～20cm

　同じく3層に相当

3：As-B層　層厚15～20cm

　同じく4層に相当

　上位にAs-KKに相当すると思われる火山灰層が、部分的に認められる

4：黒色～暗褐色土層　層厚15～20cm

　同じく5層に相当

となり、4層の下に、下芝天神遺跡では6層として一括した、FP泥流層が厚く堆積する。後述する通り、

図225　下芝上田屋遺跡の調査区と周辺の地形

図226　下芝上田屋遺跡の調査区配置

本遺跡ではこの泥流層中で畠跡、水田跡が検出されており、泥流層がさらに細分されることになった。以下の5～11層はすべて、下芝天神遺跡の6層に相当するFP泥流層である。

5：砂礫層　層厚20～30cm

FPの噴火起源と考えられる、角閃石安山岩の軽石を多く含む

軽石は径5～10mm大、及び30～70mm台のものが多い

6：明黄橙褐色シルト質砂層　層厚5～10cm

7：灰黄褐色土層　層厚10～15cm　水田の耕作土と考えられる

8：砂礫層　層厚40～50cm　酸化鉄分が沈着する

9：黒灰褐色シルト質壌土層　層厚10～15cm　上面に厚さ5mmほどの薄い黒色土層がある

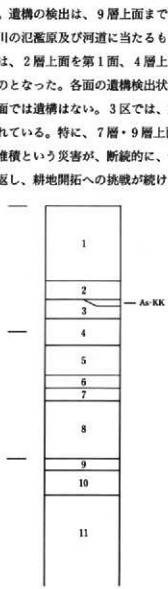
畠面に当たる

10：明黄橙色シルト質壌土層　層厚20～25cm

11：暗灰黄橙色シルト質壌土層

と続く。遺構の検出は、9層上面までであり、以下に遺構は認められない。なお、11層以下については、旧椋名白川の氾濫原及び河道に当たるものと判断されたため、調査を行っていない。

調査は、2層上面を第1面、4層上面を第2面、7層上面を第3面、9層上面を第4面とする、4面にわたるものとなった。各面の遺構検出状況をまとめると、1・2区では第1面で溝群が認められたが、それ以下の各面では遺構はない。3区では、第1面で溝群、耕作具痕、第2面で溝、第3面で水田、第4面で畠が検出されている。特に、7層・9層上面の水田・畠遺構は、先述のとおり、FP泥流中の遺構である。泥流の流下・堆積という災害が、断続的に、何回も繰り返されたこと、これに対して当時の人々によって、こちらも繰り返し、耕地開拓への挑戦が続けられたことが物語られている。




1：表土・耕作土層　黒灰色土　下芝天神遺跡標準土層の1・2層に相当。
2：暗褐色土　As-Bの軽石粒を含む　下芝天神遺跡標準土層の3層に相当。
3：As-B降下堆積層　下芝天神遺跡標準土層の4層に相当。上位にAs-Kkに相当すると思われる火山灰層が認められる部分がある。
4：黒色から暗褐色土層　下芝天神遺跡標準土層の5層に相当。
5：砂礫層　FPの噴火起源と考えられる角閃石安山岩の軽石を多く含む。下芝天神遺跡標準土層の6層相当層の一部。
6：明黄橙褐色シルト質砂層　下芝天神遺跡標準土層の6層相当層の一部。
7：灰黄褐色土層　下芝天神遺跡標準土層の6層相当層内にある。水田の耕作土と考えられる。
8：砂礫層　酸化鉄分が沈着している。下芝天神遺跡標準土層の6層相当層の一部。
9：黒灰褐色シルト質壌土層　下芝天神遺跡標準土層の6層相当層内にある。上面に厚さ5mmほどの黒色土層がある。畠耕作面に相当する。
10：灰黄橙色シルト質壌土層　下芝天神遺跡標準土層の6層相当層の一部。
11：暗灰黄橙色シルト質壌土層　下芝天神遺跡標準土層の6層相当層の一部。

図227　調査区内の標準土層

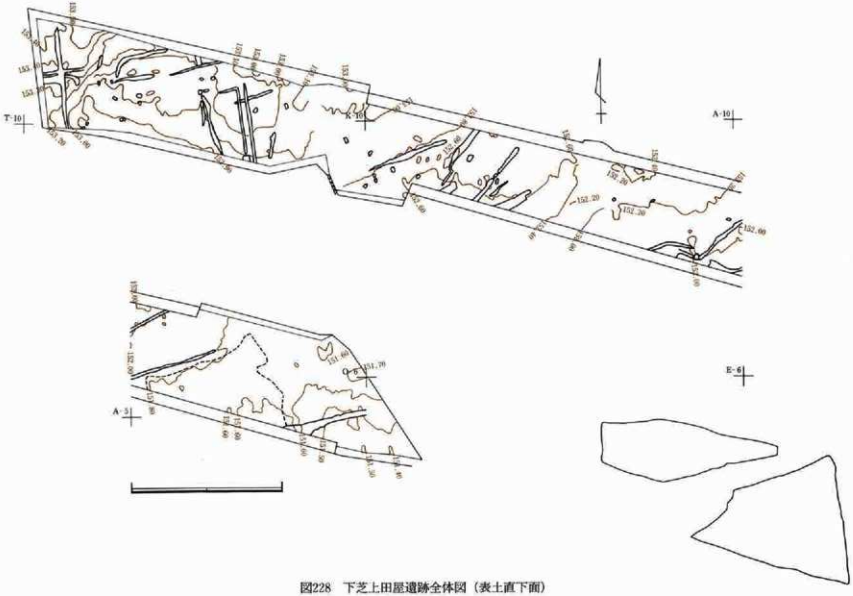



図228　下芝上田屋遺跡全体図（表土直下面）

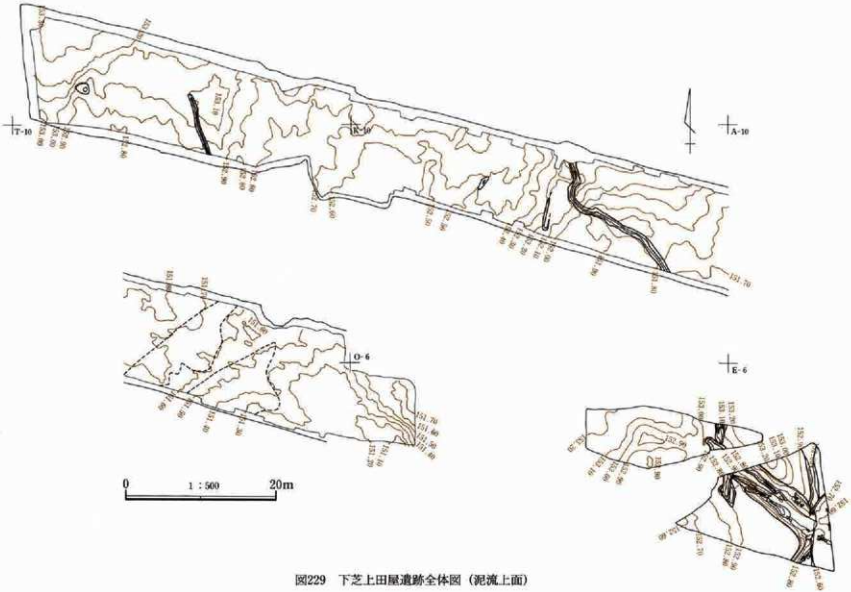



図229　下芝上田屋遺跡全体図（泥流上面）

## 2　1・2区の調査

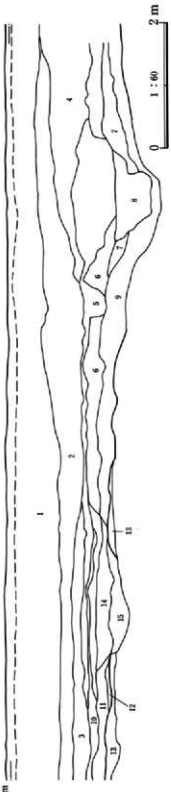



図230　2区溝群土層断面図

**概　要**　1区・2区の東端部に7条の溝が認められた。1区の東から1～5号溝、2区のものを6・7号溝とする。ともに断面形状は浅いU字形で、明確な掘り形をもたない。1区の溝は、南東部の谷状地形に切られる。出土遺物がないため、帰属時期を決することができないが、1号溝は、埋没後にAs-Bが堆積しており、上限を確定することはできる。他は、As-B層が耕作によって失われており、手がかりを得ることができない。2・3号溝では、東南端部に礫の集中が認められ、特に3号溝の東南端延長部では、谷状地形の中に礫の列が認められて、本来は石組みを伴う構造であった可能性が示唆され、この2条の道に挟まれた部分が道であったものと想定される。

**溝**

**1号溝**　ほぼ南北の走行で南に下る。南端は谷状地形に落ち込む。上端幅1.1m程度で、深さも10cmに満たない。西壁の肩は比較的明瞭な落ち込みを示すが、東部はなだらかに立ち上がり、確実な壁を捉えられない。北部ではごく浅くなり、形状が把握できない。暗褐色土で埋没し、その上位にAs-Bが載る。

**2号溝**　北西から南東への走行を有す。南東端は谷状地形に落ち込む。北西端は調査区域外に延びる。南東の、谷状地形への落ち込み部では、深さ10cmほどと浅いものの、比較的上端が明瞭で、幅1～1.5mほどである。角礫の集中が認められ、特に谷地形との接点部では、この溝をふさぐように礫が積み上げられたように見える。北西半部では、深さ20cm、幅2mほどとなるが、東壁側に不規則なテラス状部分が形成され、また、西側では細長い落ち込みが認められ

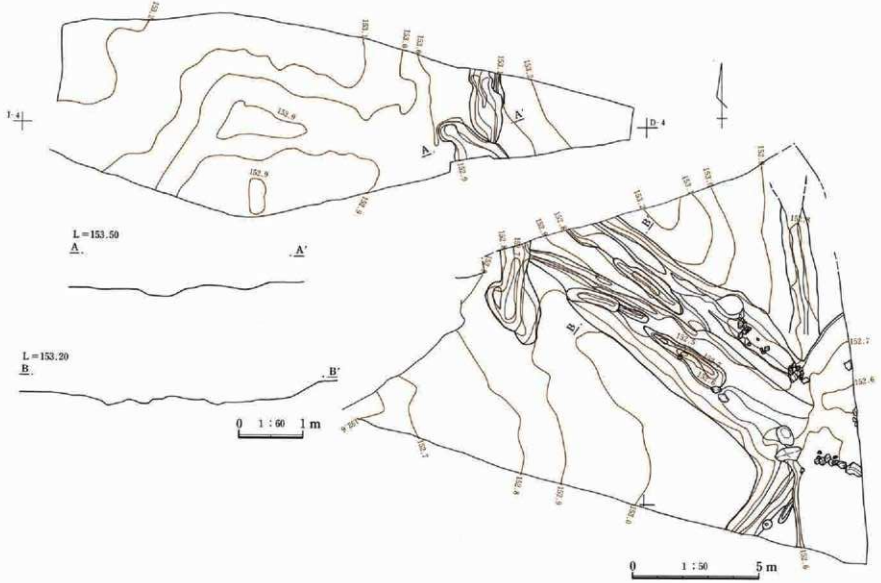



図231 1・2区 溝群